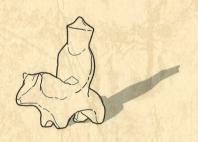
茨城県笠間市

宍 戸 城 跡

一道改良工事に伴う発掘調査報告書一



2011

笠間市教育委員会 有限会社勾玉工房 Mogi

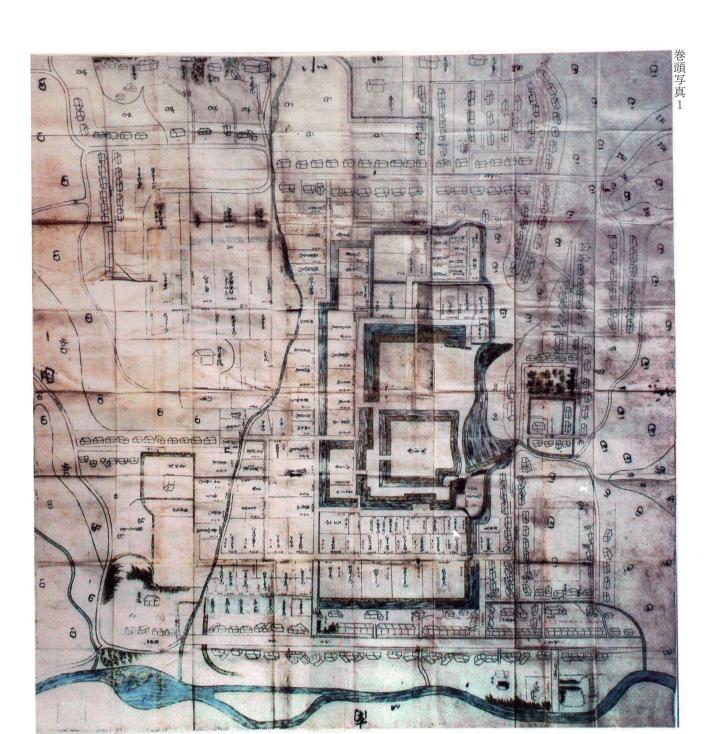
茨城県笠間市

宍 戸 城 跡

一道改良工事に伴う発掘調査報告書一

2011

笠間市教育委員会 有限会社勾玉工房 Mogi



『宍戸城絵図 (宍戸城下絵図)』 東北大学附属図書館所蔵



『常陸国茨城郡平町村』地籍図 (笠間市立友部図書館所蔵)



『常陸国茨城郡橋爪村』地籍図(同上)



調査区全景



2 区全景



宍戸城跡出土土器及び陶磁器類(1)



宍戸城跡出土土器及び陶磁器類 (2) (SD201)

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は道路改良事業に伴う宍戸城跡の発掘調査です。この調査の結果、外堀を挟んで武家屋敷主体の遺構と町屋に比定される遺構が検出されました。武家屋敷跡には整地面が存在し、角材を用いた掘立柱建物跡が確認され、町屋比定地では整地面が不明瞭で、丸材を用いた掘立柱建物跡が確認されました。また武家屋敷跡の整地面の下より堀を検出したことから築城期の様子がうかがえ、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 23 年 6 月

笠間市教育委員会教育長 飯 島 勇

例 言

- 1 本書は茨城県笠間市橋爪 71 番地 2 他に所在する宍戸城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は笠間市橋爪・平町地内における道改良工事に伴い、茨城県教育委員会・笠間市教育委員会の指導の下、 笠間市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が行った。
- 3 発掘調査の面積は 4657 ㎡で、調査期間は平成 22 年 10 月 18 日から平成 23 年 3 月 12 日まで実施した。
- 4 発掘調査の組織は以下の通りである。

発掘調査指導 茨城県文化財保護指導委員 川崎純徳

笠間市文化財保護審議会委員 能嶋清光

発掘調查事務局 笠間市教育委員会生涯学習課

調查主任

有限会社勾玉工房 Mogi 大越直樹

調査員

有限会社勾玉工房 Mogi 塩澤佑介

同

有限会社勾玉工房 Mogi 谷 旬

- 5 本書の編集は大越・塩澤が行った。執筆分担は、第1章を笠間市教育員会が、第2章第2節を塩澤、第5章第5~7節と第7章第2節第2・3項を谷、同第1・4項を鈴木 徹が、その他を大越が行った。また、『宍戸城絵図』の読み下しは高橋歩美が行った。
- 6 整理調査は平成23年3月15日から同年6月15日まで有限会社勾玉工房Mogiが実施した。なお、担当は以下の 通りである。

主任調査員 全体編集・遺構図面修正・遺構原稿 大越直樹

調査員 遺構写真撮影・編集 塩澤佑介

基礎整理(水洗い・注記・接合・分類等) 須賀澤一憲 篠原美代子 石津弘子 小川美由紀

遺物実測・拓本 大賀さつき 阿天坊弥生 鈴木 徹 根本時子

遺物観察表作成 谷旬 鈴木 徹

デジタルトレース 塩澤佑介 新屋隼人 岩崎美奈子 饗庭紀子 高橋歩美 森 優里絵

報告書制作 大賀 健 鈴木 徹 高橋歩美 森 優里絵

- 7 遺物の写真撮影は(有)カメラのスギハラに、木製品の科学分析(樹種同定)はパリノ・サーヴェイ株式会社に 依頼した。
- 8 本書に掲載した『宍戸城絵図 (宍戸城下絵図)』は笠間市立友部歴史民俗資料館所蔵写真を複製したものである。
- 9 発掘調査で得られた出土遺物及びその他の資料は、笠間市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査から整理調査に至るまで、次の諸氏・諸機関に御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

樫村宣行 土生朗治 (財) 茨城県教育財団 笠間市立笠間図書館 笠間市立友部図書館 笠間市立友部歴史民俗資料館 (株) 栄繕 芦田測量 (有) カメラのスギハラ (有) カワヒロ産業 (株) スカイサーベイ パリノ・サーヴェイ株式会社

11 調査参加者は下記に示す通りである。

吹野 昇 塩畑勝利 飯田 昭 佐藤利男 中村伊重 川又誠二 小坂部克己 山口致辰 枝川幸光 大山年明 横田忠利 斉藤幸一 正木信行 仲田 仙 八巻省三 鈴木 浩 海老沢 武 田中一穂 野村正子 鈴木とし江 長谷川とめ子 佐久間憲子 小堤静江 本田美津子 鶴井みどり 高柳悦子

凡例

- 1 本書第1図に用いた地形図は、国土地理院発行2万5千分の1『笠間』を使用した。
- 2 座標値は世界測地系第IX系を使用した。全体図、遺構図の方位は座標北を示し、高さの数値は標高を示している。
- 3 掲載した図面は以下の縮尺を用いた。

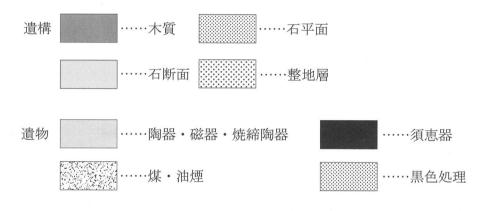
全体及び区分図 グリッド図 1/1000 1~5 区全体図 1/250

遺構図 溝 1/80、1 号堀 1/120、2 号堀 (全体図)・SD201 1/80、3・4 号堀平面 1/200・セクション 1/40、 その他 1/60

遺物図 銭貨 2/3、P779 出土土人形 1/2、その他 1/3

4 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。

- 5 遺物観察表の法量単位は cm、重量単位は g である。法量に付した() は復元値、<>は現存値を示す。 木製品観察表の法量単位は mm、<>は現存値を示す。
- 6 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。尚、木製品は概ね 1/6 で掲載してある。
- 7 本書に用いたスクリーントーンは以下を示す。



本文目次

序・例言・凡例・目次	第4節 2区 [第2面]62
第1章 調査に至る経緯	(1) SX (竪穴状遺構)(62)
カ1 早	(2) 堀(62)
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	(3) SD (溝)·····(64)
	(4) 2 区遺構外出土遺物(65)
	第5節 3区66
第 2 節 歴史的環境 1	(1) SB (掘立柱建物跡)·····(66)
第3章 調査の経過と調査の方法	(2) SE (井戸跡)·····(68)
第1節 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・3	(3) SA (柵列)·····(69)
第1 調 調	(4) 堀(69)
第3節 整理調査の方法	(5) SK (土坑)·····(71)
売 3 則 - 金 座 岬 直 の 力 仏 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	(6) ピット(72)
第4章 遺跡の概要と基本層序	(7) 3 区遺構外出土遺物(72)
第1節 遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	第6節 4区74
第 2 節 基本層序····································	(1) SB (掘立柱建物跡)(74)
分 2 即	(2) SE (井戸跡)·····(75)
第5章 検出された遺構と遺物	(3) SA (柵列)·····(76)
第1節 1区 [第1面]··································11	(4) ピット(77)
(1) SB(掘立柱建物跡) ······(11)	第7節 5区78
(1) SB (掘立任建初頭) (11) (2) SA (柵列) (13)	(1) SB (掘立柱建物跡)(78)
(3) 方形に巡らせた溝(14)	(2) SA (柵列)·····(78)
	(3) SE (井戸跡)·····(80)
(4) SE (井戸跡)······(14) (5) SK (土坑)······(20)	(4) SD (溝)·····(84)
(6) SD (溝)·······(21)	(5) SK (土坑)·····(89)
(7) ピット······(24)	(6) ピット(90)
第2節 1区 [第2面]27	
第2即 1 区 [第2面]······(27)	第6章 自然科学分析
(2) 1 区遺構外出土遺物 (34)	第1節 宍戸城跡出土木製品の樹種 91
第3節 2区 [第1面]39	
(1) SB (掘立柱建物跡)(39)	第7章 総括
(2) SA (柵列)······(47)	第1節 検出された遺構について 97
(3) SE (井戸跡)······(50)	第2節 検出された土器・陶磁類について 105
(4) SX (池)······(54)	
(4) SX (他)······(54)	写真図版・抄録
(6) 並ぶ石······(57)	
(-)	
(8) ピット・・・・・(58)	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡(2)	第 37 図	1 区ピット出土遺物 (2)(26)
第2図	グリッド配置図(4)	第 38 図	3・4 号堀全体図(28)
第3図	基本層序 (1)(8)	第 39 図	3 号堀セクション・・・・・・(29)
第4図	基本層序 (2)(9)	第 40 図	4 号堀セクション(30)
1区		第 41 図	3 号堀出土遺物 (1)(30)
第5図	1 区全体図(10)	第 42 図	3 号堀出土遺物 (2)(31)
第6図	調査区全体図(折図 1)	第 43 図	4 号堀出土遺物(33)
第7図	SB08·····(11)	第 44 図	1 区遺構外出土遺物 (1)(34)
第8図	SB09 · SA09·····(12)	第 45 図	1 区遺構外出土遺物 (2)(35)
第9図	SB10·····(12)	第 46 図	1 区遺構外出土遺物 (3)(36)
第 10 図	SA07·····(13)	2区	
第 11 図	SA08·····(14)	第 47 図	2 区全体図(40)
第 12 図	SA08 出土遺物······(14)	第 48 図	SB01 (1)(41)
第 13 図	方形に巡らせた溝(15)	第 49 図	SB01 (2)(42)
第 14 図	SE02·····(15)	第 50 図	SB01 出土遺物(43)
第 15 図	SE02 出土遺物······(16)	第 51 図	SB02 (1)(44)
第 16 図	SE07(16)	第 52 図	SB02 (2)(45)
第 17 図	SE07 出土遺物(16)	第 53 図	SB02 出土遺物 ·····(45)
第 18 図	SE08·····(17)	第 54 図	SB03(46)
第 19 図	SE08 出土遺物······(17)	第 55 図	SB03 出土遺物 ·····(46)
第 20 図	SE09 • SK654 • SK655 • • • • • • (18)	第 56 図	SB04·····(46)
第 21 図	SE09 出土遺物·····(18)	第 57 図	SA10(47)
第 22 図	SE10·····(19)	第 58 図	SA12·····(47)
第 23 図	SE10 出土遺物······(19)	第 59 図	SA12 出土遺物(48)
第 24 図	SE11·····(19)	第 60 図	SA13(49)
第 25 図	SE11 出土遺物 ·····(20)	第 61 図	SA13 出土遺物 ·····(49)
第 26 図	SK650 • SK653 • · · · · · (21)	第 62 図	SA14·····(49)
第 27 図	SK650 出土遺物 ·····(21)	第 63 図	SA14 出土遺物・・・・・(50)
第 28 図	SD101(21)	第 64 図	SE01(50)
第 29 図	SD101 出土遺物······(22)	第 65 図	SE01 出土遺物(51)
第 30 図	SD102·····(22)	第 66 図	SE05(51)
第 31 図	SD102 出土遺物·····(22)	第 67 図	SE06(52)
第 32 図	SD103·····(22)	第 68 図	SE06 出土遺物(52)
第 33 図	SD250 • 252·····(23)	第 69 図	SE16·····(52)
第 34 図	SD250 出土遺物 ·····(23)	第 70 図	SE16 出土遺物(52)
第 35 図	SD252 出土遺物(23)	第71図	SE17(53)
第 36 図	1 区ピット出土遺物 (1)(25)	第 72 図	SE18·····(53)

第 73 図	SX1·····(54)	4 区	
第 74 図	SX1 出土遺物·····(55)	第 108 図	SB11·····(74)
第 75 図	SK100(55)	第 109 図	SB11 出土遺物 ·····(74)
第 76 図	SK106(55)	第 110 図	SE19 · 20 · 21·····(75)
第 77 図	SK115(56)	第 111 図	SE20 出土遺物 ·····(76)
第 78 図	SK115 出土遺物 ·····(56)	第 112 図	SE21 出土遺物(76)
第 79 図	SK116(56)	第 113 図	SA03(76)
第 80 図	SK139(56)	第 114 図	4 区ピット······(77)
第 81 図	SK652·····(56)	第 115 図	P817 出土遺物······(77)
第 82 図	SK652 出土遺物·····(57)	5区	
第 83 図	並ぶ石(57)	第 116 図	5 区全体図(78)
第 84 図	SD001(58)	第 117 図	SB07 · SA05 · SA06·····(79)
第 85 図	SD001 出土遺物·····(58)	第 118 図	SA04·····(79)
第 86 図	2 区ピット出土遺物・・・・・・(60)	第 119 図	SB07 出土遺物 ·····(80)
第 87 図	SX2·····(62)	第 120 図	SA06 出土遺物(80)
第 88 図	2 号堀(63)	第 121 図	SE04 · SE15·····(81)
第 89 図	2 号堀出土遺物(63)	第 122 図	SE04 出土遺物 ·····(82)
第 90 図	SD251·····(64)	第 123 図	SE15 出土遺物······(83)
第 91 図	SD251 出土遺物(64)	第 124 図	SD201·····(84)
第 92 図	2 区遺構外出土遺物(65)	第 125 図	SD201 土橋部分拡大図 ·····(85)
3 区		第 126 図	SD201 出土遺物 (1)·····(85)
第 93 図	SB05 • SA16·····(66)	第 127 図	SD201 出土遺物 (2)(86)
第 94 図	3 区・4 区全体図(折図 2)	第 128 図	SD201 出土遺物 (3)······(87)
第 95 図	SB06 • SA15 • · · · · · · (67)	第 129 図	SK411 · SK412·····(89)
第 96 図	SE03(68)	第 130 図	SK411 出土遺物 ······(89)
第 97 図	SE03 出土遺物(68)	第 131 図	SK412 出土遺物 ·····(90)
第 98 図	SA01(69)	第 132 図	5 区遺構外出土遺物(90)
第 99 図	SA02(69)	自然科学	学分析
第 100 図	SA02 出土遺物(69)	第 133 図	木材 (1)(94)
第 101 図	1 号堀出土遺物(69)	第 134 図	木材 (2)(95)
第 102 図	1 号堀·····(70)	総括	
第 103 図	SK301 • 306·····(71)	第 135 図	宍戸城縄張り図(98)
第 104 図	SK301 出土遺物(71)	第 136 図	宍戸城武家屋敷想定図(103)
第 105 図	P826·····(72)	第 137 図	『宍戸城絵図 (宍戸城下絵図)』拡大図 (103)
第 106 図	3 区遺構外出土遺物 (1)(72)		
第 107 図	3 区遺構外出土遺物 (2)(73)		

挿表目次

第1表	宍戸城周辺の中近世遺跡(3)	第 36 表	SB04 ピット計測表······(46)
1区		第 37 表	SA10 ピット計測表······(47)
第2表	SB08 ピット計測表・・・・・(11)	第 38 表	SA12 ピット計測表······(47)
第3表	SB09 ピット計測表・・・・・(12)	第 39 表	SA12 出土遺物観察表(48)
第4表	SA09 ピット計測表・・・・・(12)	第 40 表	SA13 ピット計測表(49)
第5表	SB10 ピット計測表・・・・・(12)	第 41 表	SA13 出土遺物観察表(49)
第6表	SA07 ピット計測表·····(13)	第 42 表	SA14 ピット計測表(49)
第7表	SA08 ピット計測表·····(14)	第 43 表	SA14 出土遺物観察表(50)
第8表	SA08 出土遺物観察表(14)	第 44 表	SE01 出土遺物観察表(51)
第9表	SE02 出土遺物観察表(16)	第 45 表	SE06 出土遺物観察表(52)
第 10 表	SE07 出土遺物観察表(16)	第 46 表	SE16 出土遺物観察表(53)
第11表	SE08 出土遺物観察表(17)	第 47 表	SX1 出土遺物観察表(55)
第 12 表	SE09 出土遺物観察表(19)	第 48 表	SK115 出土遺物観察表(56)
第 13 表	SE10 出土遺物観察表(19)	第 49 表	SK652 出土遺物観察表 ·····(57)
第 14 表	SE11 出土遺物観察表(20)	第 50 表	SD001 出土遺物観察表(58)
第 15 表	SK650 出土遺物観察表(21)	第 51 表	2 区ピット計測一覧表 (1)(58)
第 16 表	SD101 出土遺物観察表(22)	第 52 表	2 区ピット計測一覧表 (2)(59)
第17表	SD102 出土遺物観察表·····(22)	第 53 表	2 区ピット計測一覧表 (3)(60)
第 18 表	SD250 出土遺物観察表·····(23)	第 54 表	2 区ピット出土遺物観察表(61)
第 19 表	SD252 出土遺物観察表·····(23)	第 55 表	2 号堀出土遺物観察表(64)
第 20 表	1 区ピット計測一覧表 (1)(24)	第 56 表	SD251 出土遺物観察表(65)
第 21 表	1 区ピット計測一覧表 (2)(25)	第 57 表	2 区遺構外出土遺物観察表 (1)(65)
第 22 表	1 区ピット出土遺物観察表・・・・・(26)	第 58 表	2 区遺構外出土遺物観察表 (2)(66)
第 23 表	3 号堀出土遺物観察表(32)	3 区	
第 24 表	4 号堀出土遺物観察表 (1)(33)	第 59 表	SB05 ピット計測表·····(67)
第 25 表	4 号堀出土遺物観察表 (2)(34)	第 60 表	SA16 ピット計測表·····(67)
第 26 表	1 区遺構外出土遺物観察表 (1)(36)	第61表	SB06 ピット計測表·····(67)
第 27 表	1 区遺構外出土遺物観察表 (2)(37)	第62表	SA15 ピット計測表·····(67)
第 28 表	1 区遺構外出土遺物観察表 (3)(38)	第 63 表	SE03 出土遺物観察表(68)
2区		第 64 表	SA01 ピット計測表·····(69)
第 29 表	SB01 ピット計測表·····(39)	第 65 表	SA02 ピット計測表(69)
第 30 表	SB01 出土遺物観察表 (1)(43)	第 66 表	SA02 出土遺物観察表(69)
第 31 表	SB01 出土遺物観察表 (2)(44)	第 67 表	1 号堀出土遺物観察表 (1)(69)
第 32 表	SB02 ピット計測表・・・・・(45)	第 68 表	1 号堀出土遺物観察表 (2)(70)
第 33 表	SB02 出土遺物観察表 ·····(45)	第 69 表	SK301 出土遺物観察表(72)
第 34 表	SB03 ピット計測表・・・・・(46)	第 70 表	3 区ピット計測表(72)
第 35 表	SB03 出土遺物観察表 ·····(46)	第 71 表	3 区遺構外出土遺物観察表(73)

4区		第 92 表	SK412 出土遺物観察表(90)
第 72 表	SB11 ピット計測表(74)	第 93 表	5 区ピット計測表・・・・・(90)
第 73 表	SB11 出土遺物観察表(74)	第 94 表	5 区遺構外出土遺物観察表(90)
第 74 表	SE20 出土遺物観察表(76)	自然科	学分析
第 75 表	SE21 出土遺物観察表(76)	第 95 表	樹種同定結果(92)
第 76 表	SA03 ピット計測表·····(76)	第 96 表	科学分析対象遺物計測表(93)
第77表	P817 出土遺物観察表·····(77)	総括	
第 78 表	4 区ピット計測表・・・・・(77)	第 97 表	地区ごとの土器・陶磁器類組成(105)
5区		第 98 表	武家地・町人地・SD201 ごとの土器・陶
第 79 表	SB07 ピット計測表·····(80)	磁器類組	成(106)
第80表	SA05 ピット計測表·····(80)	第 99 表	かわらけ分類(106)
第81表	SA06 ピット計測表·····(80)	第 100 表	
第82表	SA04 ピット計測表 ・・・・・・(8 0)	第 101 表	
第83表	SB07 出土遺物観察表(80)	第 102 表	
第84表	SA06 出土遺物観察表(80)	第 103 表	
第85表	SE04 出土遺物観察表 (1)(81)	第 104 表	
第86表	SE04 出土遺物観察表 (2)(83)	第 105 表	
第87表	SE15 出土遺物観察表(83)	第 106 表	
第88表	SD201 出土遺物観察表 (1)(87)	第 107 表	
第 89 表	SD201 出土遺物観察表 (2)(88)	第 108 表	
第 90 表	SD201 出土遺物観察表 (3)(89)	第 109 表	
第 91 表	SK411 出土遺物観察表 ·····(89)	第 110 表	· 木製品観察表 (3)·····(116)
	写真	真図版	
第1図版	夏(全景)	7 SE1	10 全景 E→
1 1	区空撮全景	8 SEI	11 全景 N→
第2図版	夏 (1 区)	第5図版	(1区)
1 1	区西側第1面全景 E→	1 SK6	653 全景 E→
2 方	形に巡らせた溝全景 S→	2 SK6	650 全景 E→
第3図胤	页 (1 区)	3 1	区西側第2面全景 E→
1 SB	08 全景 E→	4 3 5	号堀西端セクション W→
2 (1	こから)SA09・SB08・SB10 全景 E→	5 3 5	号堀中央セクション E→
第4図版	页 (1 区)	第6図版	夏 (1 区)
1 SE	02 全景 N→	1 3 5	号堀全景 W→
2 SE	02 セクション W→	2 3 •	4 号堀セクション SW →
3 SE	07 全景 N→	3 3 4	号堀東セクション E→
4 SE	08 全景 N→	4 4 +	号堀南端セクション N→
5 SE	09・SK654・SK655 検出状況 N →	5 4 +	号堀中央セクション N→

6 SE09・SK654・SK655 全景 W→

第7図版 (1区・2区)

- 1 4 号堀全景 N→
- 2 2 区中央空撮状況

第8図版(2区)

- 1 SB01 全景 E →
- 2 SB01 掘方全景 E→

第9図版(2区)

- 1 SB01P02 セクション N→
- 2 SB01P03 セクション W→
- 3 SB01 掘方西側セクション S→
- 4 SB01 掘方東側セクション S→
- 5 SB02 全景 S →

第10図版(2区)

- 1 SB02P09 セクション S→
- 2 SB02P11 セクション S→
- 3 SB02P04 石検出状況 S→
- 4 SB02P01 角材柱検出状況 S→
- 5 SB03 全景 N→

第11図版(2区)

- 1 SB03P1 セクション S→
- 2 SB03P5 セクション N \rightarrow
- 3 SB04 全景 N→
- 4 SB04P1 検出状況 S→
- 5 SB04P2 セクション N→

第12図版(2区)

- 1 SE01 全景 W→
- 2 SE01 セクション W→
- 3 SE01 掘方セクション W→
- 4 SE06 全景 S →
- 5 SE05 全景 E →

第13図版(2区)

- 1 SX1 全景 W→
- 2 SX1 $\forall D \Rightarrow D \Rightarrow$
- 3 SX1 栅検出状況 W→
- 4 SX1 遺物出土状況 N→
- 5 SX1 完堀全景 N→

第14図版(2区)

- 1 SK100 検出状況 W→
- 2 SK652 全景 N→

- 3 SD001 全景 N→
- 4 SD001 セクション S→
- 5 SX2·SA13 全景 N→

第15図版(2区)

- 1 SX2 セクション N→
- 2 SD251 全景 S →
- 3 2 号堀全景 S →
- 4 2号堀中央セクション S→
- 5 2 号堀南端セクション N→

第16図版(2区)

- 1 SE16 全景 S →
- 2 SE16 セクション S→
- 3 SE17 全景 S →
- 4 SE18 全景 N→
- 5 SE17 セクション SW →

第17図版 (3区)

- 1 3 区空撮全景
- 2 同南側全景 E→

第18図版(3区)

- 1 1 号堀北側全景 S→
- 2 1号堀南側全景 S→
- 3 (上から) SB06・05 全景 W→
- 4 SB05 全景 N→
- 5 (上から) SA01 · SA02 全景 E→
- 6 SE03 遺物出土状況 N→
- 7 SK301 遺物出土状況 S→
- 8 SK306 全景 S →

第19図版(4区)

- 1 4区全景 E→
- 2 SA03 全景 W→
- 3 SE19 全景 S →
- 4 SE20 全景 S →
- 5 SE21 全景 S →

第20図版(5区)

- 1 5 区北側全景 E→
- 2 5 区南側全景 E→

第 21 図版 (5 区)

- 1 SB07·SA05·SA06 全景 W→
- 2 SA04 全景 E→

第 22 図版(5 区)	P513 出土遺物
1 SE04 遺物検出状況 W→	P669 出土遺物
2 SK412 全景 W→	P672 出土遺物
3 SE15 全景 W→	P692 出土遺物
4 SK411 全景 W →	P796 出土遺物
5 SD201 全景 S →	3 号堀出土遺物
6 SD201 渡場近景 S →	第 27 図版(1 区)
7 SD201 全景 N→	3 号堀出土遺物
8 同遺物出土状況 N→	1 区遺構外出土遺物
第 23 図版(1 ~ 5 区)	第 28 図版(1 区・2 区)
1 調査区現況 (2区) ₩→	1 区遺構外出土遺物
2 安全対策	2区
3 重機掘削状況	SB01 出土遺物
4 遺構確認作業	SB02 出土遺物
5 作業風景	SA12 出土遺物
6 遺構掘り下げ状況	SE01 出土遺物
7 水中ポンプ使用状況	SB03 出土遺物
8 現地説明会	SA10 出土遺物
第 24 図版(1 ~ 5 区)	SA13 出土遺物
1 実測状況	SE16 出土遺物
2 空撮状況	SA14 出土遺物
3 終了確認状況	SE06 出土遺物
4 埋め戻し完了状況	第 29 図版(2 区)
5 発掘調査参加者	SX1 出土遺物
第 25 図版(1 区)	SK652 出土遺物
SA08 出土遺物	2 号堀出土遺物
SE02 出土遺物	SK115 出土遺物
SE07 出土遺物	SD001 出土遺物
SE08 出土遺物	P018 出土遺物
SE10 出土遺物	P022 出土遺物
SE09 出土遺物	P027 出土遺物
SE11 出土遺物	P046 出土遺物
SD101 出土遺物	P072 出土遺物
SD102 出土遺物	P082 出土遺物
SD250 出土遺物	P085 出土遺物
SD252 出土遺物	P109 出土遺物
SK605 出土遺物	P127 出土遺物
第 26 図版(1 区)	P141 出土遺物
P512 出土遺物	P142 出土遺物

P155 出土遺物

P212 出土遺物

P779 出土遺物

SD251 出土遺物

P201 出土遺物

第30図版(2区・3区)

2 区遺構外出土遺物

3区

SA02 出土遺物

SE03 出土遺物

SK301 出土遺物

1号掘出土遺物

3 区遺構外出土遺物

第31図版(4区・5区)

4区

SB11 出土遺物

SE20 出土遺物

SE21 出土遺物

P817 出土遺物

5区

SB07 出土遺物

SA06 出土遺物

SE04 出土遺物

第32図版(5区)

SE15 出土遺物

SK412 出土遺物

SK411 出土遺物

SD201 出土遺物

第33図版(5区)

SD201 出土遺物

第34図版(1区・2区)

1 区出土木製品

2 区出土木製品

第35図版(2区・5区)

2 区出土木製品

5 区出土木製品

第1章 調査に至る経緯

平成19年5月2日、笠間市都市建設部都市建設課は、笠間市教育委員会教育長に笠間市橋爪・平町地内に計画している合併市町村幹線道路緊急整備支援事業に伴う道路改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。開発予定地は、周知の遺跡「宍戸城跡」が所在することから、平成19年5月30日付けで試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査は、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏に依頼し、平成20年10月7日、平成21年10月20日に実施し、遺跡の所在を確認した。

笠間市都市建設部都市建設課は茨城県教育委員会教育長に対して、平成22年3月15日付けで文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と決定し、平成22年8月27日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札により有限会社勾玉工房 Mogi と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・笠間市都市建設部都市建設課・有限会社勾玉工房 Mogi は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成 22 年 9 月 16 日付けで文化財保護法第 92 条第 1 項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成 22 年 10 月 18 日から平成 23 年 3 月 12 日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

宍戸城跡の所在する笠間市は、平成18年3月に笠間市、西茨城郡友部町・岩間町が合併して成立したもので、水戸市に隣接する。茨城県のほぼ中央部に位置し、本遺跡はその東部の旧友部町域にある。

旧友部町周辺には、標高 $50 \sim 90 \text{ m}$ の友部丘陵があり、洪新世の海成砂礫層である友部層により形成されており、 上層には関東ローム層が覆っている。

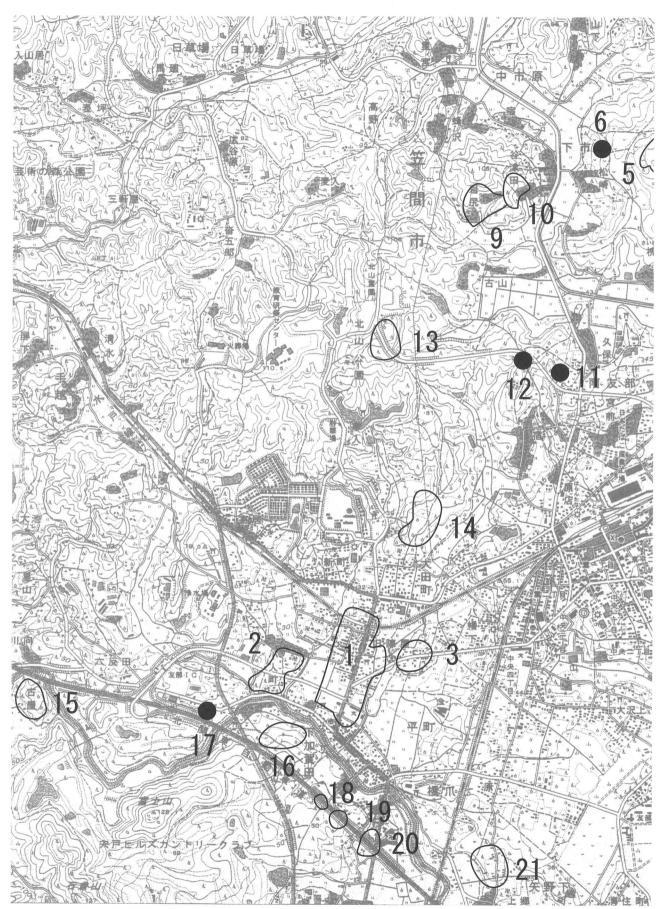
今回の調査対象域は、宍戸小学校の北側に隣接する標高 24.00 ~ 25.00 mの平地上(現況水田) に立地している。

第2節 歷史的環境

1203年(建仁3年)に、常陸国守護職八田知家四男、宍戸四郎左衛門尉家政が新善光寺跡に築城したのが始まりとされ、別名を山尾城という。1595年(文禄4年)、宍戸四郎義長は佐竹氏により真壁郡海老ケ島(筑西市・旧書からぐんをけっまち。 真壁郡明野町)に移封され、佐竹氏の拠点の一つとなる。

1600 年(慶長 5 年)の関ヶ原の合戦後の仕置きで、中立の立場をとった佐竹氏は、1602 年(慶長 7 年)幕府の命により出羽秋田へ移封され、代わって出羽土崎湊城主秋田城之介実季が宍戸 5 万石に入封し宍戸藩が成立する。こうして秋田氏により、宍戸に新しい城が築かれる。その後 1645 年、二代目藩主秋田俊季は陸奥三春に移封されて宍戸城は廃城破却、宍戸は幕府天領となる。1682 年(天和 2 年)、水戸の徳川光圀の弟松平頼雄が宍戸領のうち 1 万石を与えられた。天保後期には陣屋が設置され(友部町 1971)、1867 年(慶応 3 年)維新を迎える(『友部町史』他)。

宍戸城周辺に所在する中近世遺跡については次ページにまとめるところである(稲田 2006 他)。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(国土地理院 2万5千分の1 地形図 『笠間』に加筆)

第1表 宍戸城周辺の中近世遺跡

NO	 遺跡名			中世	近世		
MO		城館	経塚	その他	城館	塚	その他
1	宍戸城跡	0					
2	新善光寺跡(山尾館跡)	0					
3	古舘	0					
4	大日山古墳群					0	
5	香取・坂場遺跡						内耳土器
6	四十八塚						擂鉢
7	小原城跡	0					
8	五平古墳群	5				0	
9	市原城跡	0					
10	御城遺跡	0				445.00	
11	丹後塚古墳					0	
12	大塚古墳					0	
13	北山遺跡					0	
14	完全寺後遺跡			陶器表採			
15	上加賀田遺跡			包蔵地			
16	下加賀田遺跡			包蔵地			
17	富士台古墳群					0	
18	坂の上塚群					02	
19	古峯遺跡			溝・道			
20	古峯A遺跡			溝			溝
21	上郷遺跡	0		溝2			
22	南小泉遺跡	0					
23	佐藤氏館	0					
24	大古山古墳			水上交通			
25	住吉城跡	0					
26	万部塚		0				
27	千部塚		0				
28	湯先城跡		0				
29	割塚					0	
30	長兎路城跡	0					
31	久保塚群					O 5	土坑1・溝3
32	五万堀古道			道(東海道・東山道連絡)			
33	前原塚			塚		0	
34	仲丸遺跡			陶磁器片			寛永通宝
35	向原遺跡			墳丘墓・塚			
36	東原製鉄跡		,	製鉄炉3			

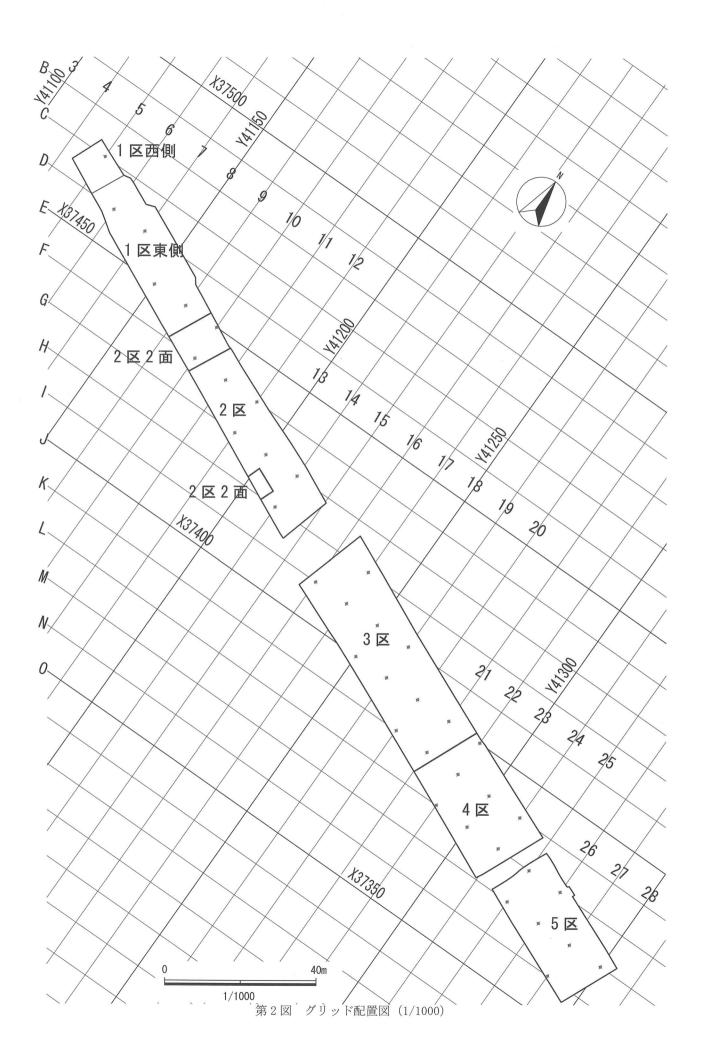
第3章 調査の経過と調査の方法

第1節 調査の経過

2010年10月

18日 調査開始。機材搬入、テント・トイレ設営。2区・3区北側・5区南側を対象に、重機による表土排土を開始する。

29日 2区遺構確認作業。テント・トイレ等の施設を対象に台風対策を行う。



2010年11月

- 1日 環境整備。台風一過の片付けと排水作業を行う。
- 2日 2区測量杭打設。遺構掘り下げを開始する。
- 11日 3区北側の遺構確認を行う。
- 12日 3区北側の測量杭打設。
- 16日 道路工事の都合上、市土木課の要請により1区西側調査の必要が生じ、同地区を対象とした重機による表土排土作業を追加する。
- 18日 同上表土排土作業を終了する。
- 19日 1区西側の遺構確認・遺構掘り下げ作業を行う。

2010年12月

- 9日 茨城県教育員会、笠間市教育員会立会いのもと1区西側・2区東側の終了確認を行う。
- 10日 笠間市教育員会立会いのもと10・11月期月例報告を行う。2区・3区北側・5区南側を対象に空撮を行う。
- 19日 現地説明会を行う。
- 23日 1区西側を対象に重機による間層除去作業を開始する。
- 25 日 間層除去作業を終了する。
- 7日 現地作業を休止する。
- 28日 年末年始休暇現場内安全点検巡回を開始する。

2011年1月

- 4日 年末年始休暇現場内安全点検巡回を開始する。
- 5日 現地作業を再開する。
- 6日 前回の空撮(第1回目)の一部を撮り直す。
- 12日 茨城県教育委員会及び笠間市教育委員会立会いのもと、1 区西側第2面、2 区、3 区北側、5 区南側の終了 確認を行う。
- 14日 1区西側の埋め戻しを終了する。
- 17日 1区東側・2区第2面・3区南側・4区・5区北側を対象に表土排土を開始する。
- 6日 同上調査区の遺構確認作業及び掘り下げ作業を開始する。

2011年2月

- 5日 同上表土排土作業を終了する。
- 8日 1区東側、2区第2面、3区南側、4区、5区北側を対象に空撮(第2回目)を行う。
- 9日 茨城県教育委員会、笠間市教育委員会立会いのもと、1 区東側、2 区第2 面、3 区南側、4 区、5 区北側を対象とした調査終了確認を行う。
- 14日 同上調査区を対象に埋め戻し作業を開始する。

2011年3月

- 3日 3区南側1号堀の2箇所に、橋脚跡の有無確認のためサブトレンチを入れ調査する。
- 4日 作業器材、テント・トイレなどの施設及び器材を撤収する。
- 5日 1区東側3号堀の幅を確認するためサブトレンチを入れ調査する。
- 11 日 東日本大震災
- 12日 埋め戻しを終了。安全対策防塵ネットを撤去し、現地における全工程を完了する。

第2節 発掘調査の方法

現地での発掘調査は、笠間市教育委員会の試掘調査結果を受け、同市教育委員会指導の下、平成 22 年 10 月 18 日から平成 23 年 3 月 12 日まで行った。

遺構確認面は、築城に伴う整地面とそれ以前の地山面の2面が存在することが想定された。このため表土を重機で掘削、遺構確認及び遺構掘り下げを人力で行った。また、調査対象地の現況は水田であり、湧水対策として表土除去後、調査区壁際沿いに排水路を設け、適宜水中ポンプを使用して場外に排出することにした。なお、遺跡調査終了後、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会立会いの下、終了確認を行い、調査区を重機で埋め現況復元した。

グリッドの設定は、調査対象区域を 10 m 方眼網で覆い、世界測地系第IX 系 X = 37,410、 Y = 41,080 を起点として「A1」と呼称し、南に向かってアルファベットを、東に向かってアラビア数字を付し、また 10 m グリッド内部を 4 分割して西から東に、上段を a、b、下段を c 、d と小文字アルファベットを付し「A1-a」と呼称することにした。 遺構実測図は 1/20 縮尺を基本とし、適宜 1/10、1/40、光波測量を併用した。 遺構写真は、35 mmモノクロ、同カラー・リバーサル、 6×7 判カラー・リバーサル、及びデジタルカメラを使用した。

第3節 整理調査の方法

(1) 遺物整理

各遺物は出土地点別に全量を水洗し、乾燥後に注記を実施した。注記は細片および木製品については実施せず、その他については全量に実施した。各遺物は種類別に分類して一覧表を作成し、遺物に新規番号を付した。これに従って実測・拓本を実施し、Illustrator CS2によって図版を作成した。染付・鉄絵遺物については写真と実測図を合成した。

(2) 写真撮影・保存処理

遺物写真撮影は、デジタル写真ニコン D80 を用いて撮影し、Photoshop CS2 により切り出しを行った。遺物については素地・釉薬、ならびに胎土の色調を重視し、カラーデータとして掲載した。

木製品については漆器・曲物底板・容器蓋について実測を行い、その他の杭・柱・木片等は、写真撮影のみで実測は行っていない。木製品は洗浄後に BAQ-1 溶液(吉田生物研究所)に浸し、ビニールでパッキングを行った。

(3) 遺構整理

遺構図は地区別の台帳を作成後に遺構ごとに修正を実施し、修正が完了したものより Illustrator CS2 でデジタルトレースを実施し、AI データを作成した。また、写真については Photoshop CS2 によりトリミングを行い、各地区別に遺跡航空写真・個別遺構・遺構断面・遺物出土状況の順に掲載した。

(4) 編集および原稿作成

遺構原稿はWordを用いて各地区ごとに作成した。また表はExcelで作成している。編集はInDesign CS4を用いて 初校原稿までを作成し、校正後に印刷屋に入稿した。

第4章 遺跡の概要と基本層序

第1節 遺跡の概要

今回の調査箇所は、前述の通り城郭の南東端部に位置しており、『宍戸城絵図(宍戸城下絵図)』にも見えるが、武家屋敷の一部分から町屋ならびに田と記された地区に至るもので、調査対象区域は第6図に示すように東西266mある。

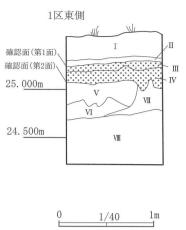
遺跡の様相はほぼ中央部に位置する 1 号堀を境に東西で様相を著しく変える。1 号堀の西側では築城期の整地面が残存し、武家屋敷と考えられる遺構が良好な状態で遺存していた。ところが、東側は現代の耕作により遺構の上面は著しく掘削を受け、整地面は検出されなかった。調査区に当てはめるならば武家屋敷が $1\sim3$ 区、町屋比定地が $4\cdot5$ 区、5 区の一部分が水田となっている。

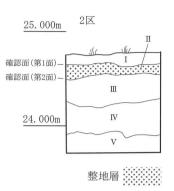
第2節 基本層序

武家屋敷のある 1・2 区には整地面が存在し、遺構確認面は、その上面と下面の 2 面で構成される。第 1 面を構成する整地層上面の標高は、1 区西端で 24.800 m、1 区東側で 25.200 m、2 区で 24.550 mとなっており、1 区の東側が最も高く、東西になだらかに低くなる。

城郭構築時の整地層は、まず1区西側の I 層(暗褐色土)、次に東側のⅢ層(にぶい橙色土)~IV層(黒色土)、また2区のⅡ層(褐色土)が該当する。整地層は1区東側の4号堀付近で20㎝以上あり最も厚くなっている。第2面を構成する整地層下面は地山直上でもある。1区西側ではⅡ層(黒色土)上面、1区東側ではV層(オリーブ灰色土)上面、2区ではⅢ層(黒色土)上面が該当する。標高は、1区西端で24.700m、1区東側で25.000m、2区で24.450mを測る。2区から東に12m進んだところに1号堀があり、そこから3区となる。町屋比定地の4・5区では、整地層は存在せず、地山直上が遺構確認面となっている。3区のⅢ層(オリーブ灰色土)、4区のⅡ層(極暗褐色土)、5区のⅡ層(黒色土)が該当する。標高は、3区で24.200m、4区で23.850m、5区で24.000mを測り、最も低い4区に向かって東西がわずかに窪みつつ概ね平坦となっている。

なお調査区内には、涸沼川の南東に並走する自然流路跡が存在し、遺跡の地山を形成する。具体的には $1\cdot 2$ 区の 第 2 面以下の層位、 $3\sim 5$ 区の遺構確認面以下の層位が該当する。





1 区西側層序

1 区東側層序

I層 黒色土 7.5YR2/1 (表土)

II層 黒褐色土 7.5 YR3/1 粘性強 しまり中 VI層 (黒色土) と酸化鉄 (ϕ 2 mm) ブロック・粒子少

Ⅲ層 にぶい橙色土 2.5YR6/3 粘性中 しまり強 黄色 粒子中(整地層)

IV層 黒色土 7.5 YR2/1 粘性中 しまり強 酸化鉄粒子 ϕ (整地層)

V層 オリーブ灰色土 7.5Y5/2 粘性強 しまり中 黒色 土ブロック (ϕ 20 \sim 50 mm) 多

VI層 黒色土 7.5YR2/1 粘性強 しまり中 酸化鉄粒子多 VII層 暗赤褐色土 2.5YR3/6 粘性中 しまり強 酸化粒 多 (酸化が著しいローム管土)

VⅢ層 黒色土7.5YR2/1 粘性強 しまり中 酸化鉄粒子多

2 区層序

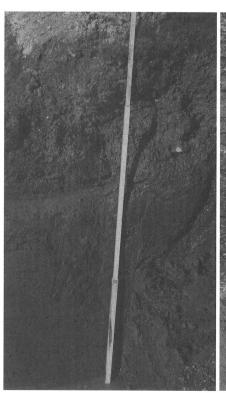
I 層 極暗褐色土 7.5YR2/3 (表土)

Ⅱ層 褐色土7.5YR4/4 粘性・しまり中 酸化鉄 粒多(整地層)

Ⅲ層 黒色土 7.5YR2/1 粘性・しまり強 酸化鉄・ 炭化粒少

IV層 黒色土 7.5 YR1.7/1 粘性・しまり中 酸化 鉄粒少 炭化粒中

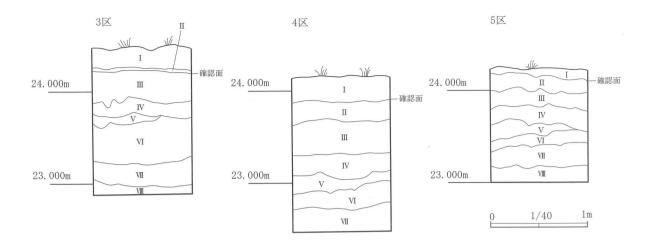
V層 オリーブ灰色土 7.5Y5/2 粘性・しまり強 酸化鉄粒少







第3図 基本層序(1)



3 区層序

I 層 黒色土 7.5YR2/1 (表土) II層 褐色土 7.5YR4/4 粘性なし しまり強 酸

化鉄少(砂質) Ⅲ層 オリーブ灰色土 7.5Y5/2 粘性なし しまり

強 酸化鉄少 (上面が遺構確認面となる) IV層 褐色土 7.5Y4/4 粘性・しまり強 酸化鉄少

V層 褐灰色土 粘性強 しまり弱 VI層 オリーブ灰色土 7.5Y5/2 粘性・しまり強

酸化鉄少

VII層 オリーブ灰色土 粘性強・しまり強 (還元色) Ⅷ層 灰色土 砂質

4 区層序

I 層 黒色土 7.5YR3/4 (表土)

Ⅱ層 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性・しまり中 酸 化鉄中

Ⅲ層 明黄褐色土 7.8YR6/8 粘性中 しまり強 酸化鉄多 (上面が遺構確認面となる)

IV層 橙色土 7.5Y6/6 粘性・しまり強 酸化鉄

V層 灰オリーブ色土 7.5Y6/2 粘性中 しまり 強 酸化鉄少

VI層 灰オリーブ色土 7.5Y6/2 粘性・しまり強 酸化鉄少

VII層 灰色土 7.5Y6/1 粘性中・しまり強

5 区層序

I層 暗褐色土 7.5YR3/4 (表土)

Ⅱ層 黒色土 7.5YR2/1 粘性・しまり強 酸化鉄少 (上面が遺構確認面となる)

Ⅲ層 灰オリーブ色土 7.5Y5/2 粘性・しまり強 黒 色土 (IV層) ブロック (φ5mm) 中

IV層 黒色土 7.5YR2/1 粘性・しまり強 酸化鉄粒

V層 灰オリーブ色土 7.5Y5/2 粘性なし しまり強 灰色土 (VII層) ブロック (φ5mm) 少 (砂質)

VI層 黒色 (黒墨) ± 7.5YR.7/1 粘性・しまり強

VII層 灰色土 7.5Y6/1 粘性なし・しまり強 灰色土 (Ⅷ層) ブロック (φ2~5mm) 少

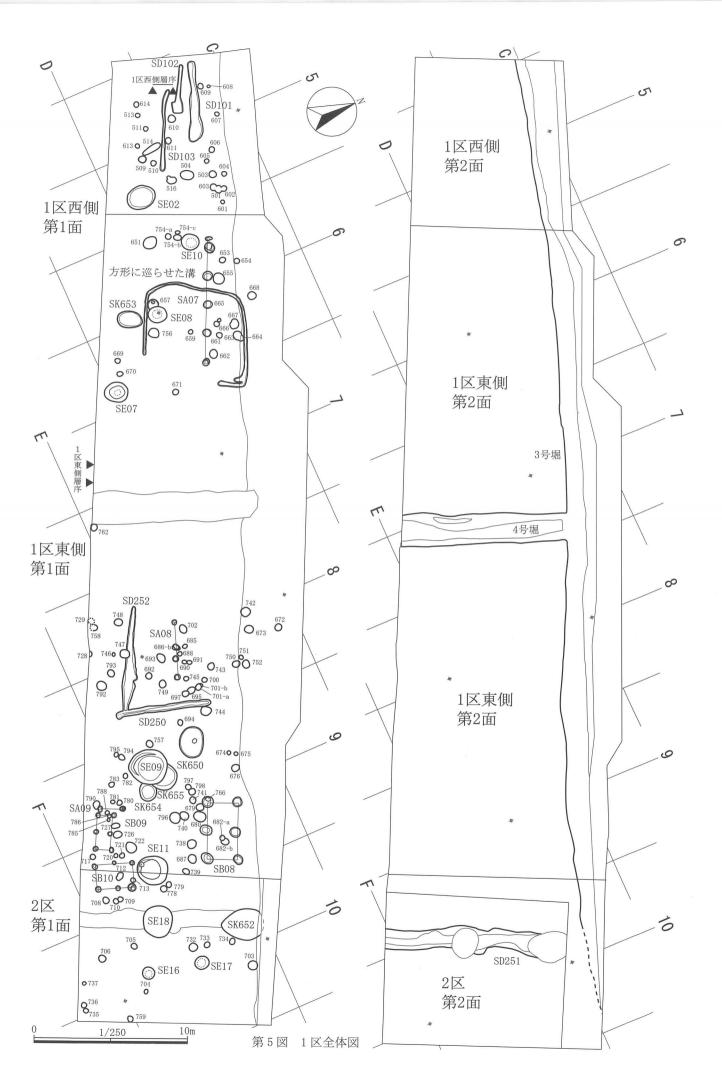
VⅢ層 灰色土 7.5Y6/1 粘性・しまり強 酸化鉄粒少

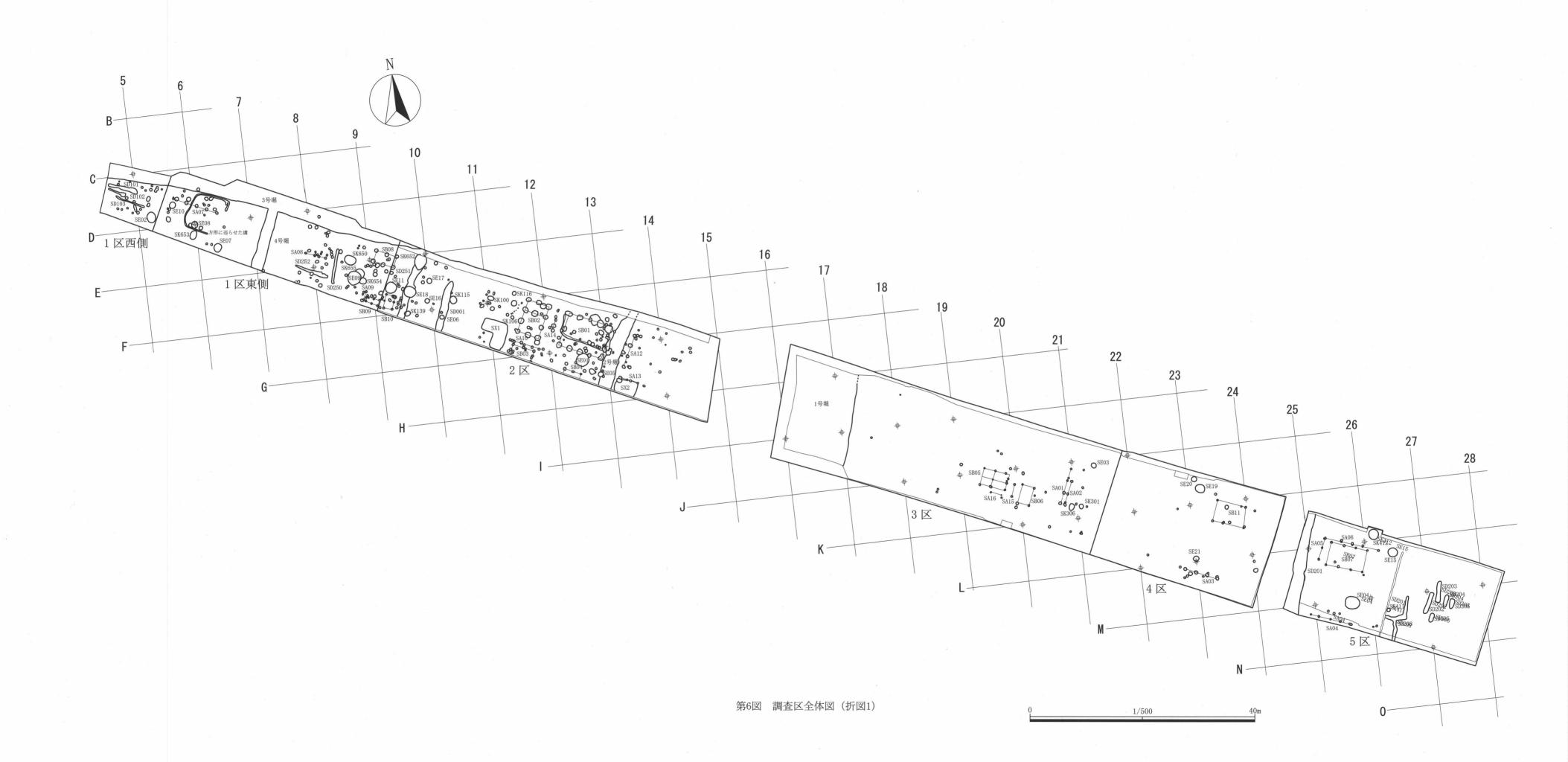






第4図 基本層序(2)





第5章 検出された遺構と遺物

第1節 1区 [第1面]

1 区は $2\cdot 3$ 区とともに『宍戸城絵図(宍戸城下絵図)』から武家屋敷の存在が想定されていた。遺構構築時期は、整地面を挟んだ上面の 1 面と下面の 2 面に大別される。 $3\cdot 4$ 号堀及び SD251 が第 2 面の遺構で、それ以外が第 1 面の遺構となる。第 1 面で検出された遺構は、掘立柱建物跡 2 棟(SB08・09)、柵列 3 条(SA07 \sim 09)、方形に巡らせた溝、井戸跡 6 基(SE02・07・08・09・10・11)、土坑 4 基(SK650・653 \sim 655)、溝 5 条(SD250・252・101 \sim 103)である。出土遺物については掲載遺物及び巻末の出土遺物集計表(第 $103\sim 107$ 表)を参照されたい(以下同じ)。

(1) SB (掘立柱建物跡)

SB08 (第7図 第3図版 第2表)

①位置・重複: D9-c、E9-a に位置する。P6 は P677 に切られる。

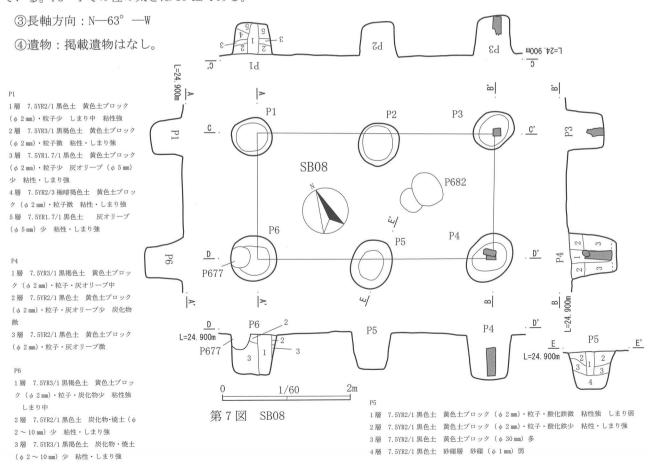
②形状・規模:2間1面。妻側の東西は1.95 mである。桁行北はP1・2間及びP2・3間で1.88 m、全体で、3.76 mである。南も同様にP4・5間及びP5・6で1.88 m、全体で3.76 mである。

桁行・妻側ともに柱間は 1.45 mである。

柱の痕跡は P1・3・4・5・6 にあり、木質は P3・4 で検出されている。 裏込めは P1・4・5・6 で確認され、P1 が $2\sim5$ 層で極暗褐色土~黒色土、P4 で $2\cdot3$ 層で黒褐色・黒色土、P6 で $2\cdot3$ 層で黒褐色土~黒色土となっている。P3・4 での柱の太さは 13 cmである。

第2表 SB08 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P730	61	58	48	24. 25	
P2	P683	67	66	53	24. 31	
Р3	P684	65	53	58	24. 22	木質残存
P4	P731	83	64	71	24. 19	木質残存
P5	P681	78	64	58	24. 19	
P6	P678	72	69	64	24. 17	



SB09 (第8図 第3図版 第3表)

①位置・重複: E8-d、E9-c に位置する。

②形状・規模・覆土:2間1面。桁行は1.14 m、全体で2.28 m。妻側は0.95 mである。柱の痕跡は検出されておらず、単層または2層からなる堆積を示し、柱材・木質の痕跡は検出されていない。

③長軸方向: N-62°-W

④施設:付帯する遺構として SA09 が存在し、妻側に平行して並ぶ。

⑤遺物:なし。

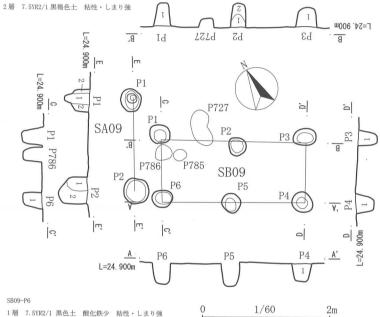
SA09-P1

1層 7.5YR2/1 黒色土 酸化鉄少 粘性強 しまり中

2層 7.5YR3/1 黒褐色土 酸化鉄少 粘性・しまり強

SA09-P2

1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性強 しまり中



L=24. 900m _I _ <u>C</u> . L=24. 900m · P2 **P713** B B, 0 D, P2 B, SB10 P713 O^{P6} 2 E B3 Р3 (-P6 P4 P5 A' P4 10 D m006 0 C Р5 P4 L=24. Α L=24. 900m 1/60 2m

SB10

第9図

第3表 SB09ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P1	P787	33	30	36	24. 40
P2	P725	29	29	37	24. 36
Р3	P719	36	30	29	24. 44
P4	P718	34	31	28	24. 30
P5	P724	31	30	37	24. 42
P6	P784	33	29	43	24. 35

第4表 SA09 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P791	36	32	56	24. 25	
P2	P789	40	40	52	24. 29	

1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性・しまり強

SB09-P2

1 層 7.5 YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ $2 \sim 10$ mm)・粒子・灰オリーブブロック (ϕ 2 mm) ϕ 粘性強 しまり中

2 層 7.5 YR3/1 黒褐色土 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・灰オリーブブロック (ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり中 SB09-P3

1 層 7.5 YR3/1 黒褐色土 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 ∞ 10 mm)・ 粒子・灰オリーブブロック (ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり中 SB09-P4

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黒色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・灰オリーブブロック(ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり中

第5表 SB10 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P1	P721	38	27	30	24. 47
P2	P714	53	48	18	24. 62
Р3	P711	30	28	41	24. 62
P4	P707	34	34	39	24. 41
P5	P716	37	31	41	24. 41
P6	P715	23	22	24	24. 47

P2

第8図 SB09·SA09

1 層 7.5YR3/1 黒褐色士 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・酸化鉄少 灰オリーブ 色土ブロック(ϕ 2 mm) 少 粘性・しまり強

Р3

 $1\, m$ 7.5YR2/1 黒色土 黄色土プロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・酸化鉄少 灰オリーブ色 土プロック(ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり中

2層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土プロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・酸化鉄少 灰オリーブ色土プロック(ϕ 2 mm) 少 粘性・しまり強

P4

1層 7.5YR1.7/1黒色土 黄色土ブロック (φ2~20mm)・粒子中 粘性強 しまり中

2 層 7.5 YR1.7/1 黒色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 20 mm)・粒子少 粘性強 しまり中

P5

2層 7.5YR3/1 黒褐色土 黒色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・灰オリーブブロック(ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり

P6

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黒色土 黄色土ブロック(ϕ 2 ~ 10 mm)・粒子・灰オリーブブロック(ϕ 2 mm) 少 粘性強 しまり中

P713

1 層 7.5 YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック(ϕ $2 \sim 10$ mm)・粒子・酸化鉄少 灰オリーブ色土ブロック(ϕ 2 mm) 少 粘性・しまり強

SB10 (第9図 第3図版 第5表)

①位置・重複:2区にプランがかかる。E9-cに位置する。

②形状・規模・覆土: 2 間 1 面。 妻側が 1.58 m。 桁行が東西で異なり、東は P2・3 間で 1.05 m、 P3・4 間で 1.35 m、全体で 2.40 m。 西は P5・6 と 6・1 の間で 1.20 m、全体で 2.40 mとなっている。柱の痕跡のあるピットは P3 であるが、木質は検出されていない。 P3 の裏込めの覆土は第 2 層が相当し、黒褐色土となっている。

③長軸方向: N-20°-E

④遺物:なし。

(2) SA (柵列)

SA09 (第8図 第3図版 第4表)

①位置・重複:SB09の西、妻側に付帯する。E8-dに位置する。

②形状・規模・覆土:柱穴2基で構成される。柱間は1.44 m。杭の痕跡はP1、P2に存在し、P2からは木質が検出されており、丸材である。P1の裏込めは黒褐色土である。P2の裏込めは褐色土である。

③走向方位: N-27° -W

④遺物:なし。

SA07 (第10図 第6表)

①位置・重複: C5-d、C6-c に位置する。方形に巡らせた溝と重複するが新旧関係は不明である。

②形状・規模・覆土: P1・2間の距離は、0.48 m、P2・3間、3・4間、4・5間の距離は1.86 m、P5・6間の距離は1.92 mとなっている。P2・3・5からは木質が検出されており、このうちP3・5は角柱である。P3の裏込めは黒褐色土である。

第6表 SA07 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P761	24	16	48	24. 43	
P2	P652	64	48	45	24. 49	木質、根石残存
Р3	P753	60	56	64	24. 39	木質残存
P4	P656	52	48	61	24. 37	
P5	P660	48	44	68	24. 26	木質残存
P6	P755	44	40	56	24. 38	

③走向方位: N—65° —W
④遺物: なし。

P2
P3
P4
P5
P6
A

L=24.900m
P1
P2
P3
P3
P4
P5
P6
A

第 10 図 SA07

SA08 (第11·12 図 第25 図版 第7·8 表)

①位置・重複: D7-d、D8-c に位置する。P686-b と重複し、これを切っている。

②形状・規模・覆土: $P1 \sim 3$ 、3 基のピットからなり、ほぼ東西に並ぶ。 $P1 \cdot 2$ 間が 1.62 m、 $P2 \cdot 3$ 間が 1.98 mとなっている。規模は径 $24 \sim 40$ cmの平面円形または楕円形で深さ $32 \sim 49$ cmを測る。また、3 基のピットのうち、P2 底部には木質(丸材)が残存する。P2 の裏込めは黄色土ブロック・粒子を少量に含む黒色土である。また P1 と P3 の覆土は黒褐色土~黒色土の 2 層からなり、人為堆積を示すものである。

③走向方位:N-70°-W

④遺物:以下に図および観察表 を示した。

第7表 SA08ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P699	24	24	42	24. 41	
P2	P686-a	32	28	32	24. 58	木質残存
Р3	P698	40	36	49	24. 41	

P702	SA08 P2 P688 P689	P3	. <u>A'</u>
E=25. 000m P1 第 11 図 SA08	P686-b P2 P689 0 1/60	P3 2m	<u>A'</u>

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~5 mm)・粒子多 粘性・ しまり中

2層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2~5 mm)・粒子少 粘性・ しまり中

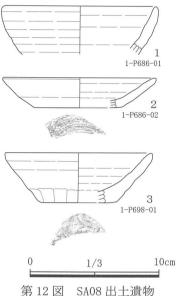
P2

1層 7.5YR2/1 黒色土 木端多 粘性強 しまり弱

2層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子少 粘性強 しまり弱

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~5 mm)・粒子 多 粘性・しまり中

2 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ2~5 mm)・粒子少 粘性・しまり中



第8表 SA08 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E- P686— 括	かわらけ	A類中 皿	(11.8)	1_1	<3.5>	20. 4	体部は丸み強い。	ロクロ整形。	良好	内外面 7.5YR7/1明 褐灰色	褐色雲母微粒 子若干含む。 器肉7.5YR7/4	口縁部 の1/4	,
2	1E- P686— 括	かわらけ	B類中 皿	(11.8)	(7. 0)	<2.3>	24. 9	平らな底部から30 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 無調整。	良好	内外面 7.5YR2/2黒 褐色	白色雲母微粒 子若干含む。 器肉7.5YR6/4	全体の 1/6	
3	1E- P698— 括	かわらけ	B類中皿	(11. 2)	(5. 6)	<3.8>	56. 3	45度ほどの角度で 立ち上がるが、歪 みが強い。	ロクロ整形。切り 離し不明。体下端 手持ちヘラ削り調 整。			白色・雲母微 粒子含む。	全体の 1/2	二次被熱で黒色 化

(3) 方形に巡らせた溝 (第13図 第2図版)

①位置・重複: C5-d、C6-c・d、D5-b、D6-a に位置する。SA07、SE08、P667・664・663・661・662・665・666・ 659・756・657と重複するが新旧は不明である。

②形状・規模・覆土:南北 7.80 m×東西 6.15 m、溝幅 $12\sim24$ cm、深さ $2\sim7$ cmで概ね 5 cm前後。底部標高は 24.90 m前後を測り、平面方形に巡りつつ東辺で途切れる。覆土は褐灰色砂礫単層をなしている。

③長軸方向:N-35°-E

④遺物:なし。

(4) SE (井戸跡)

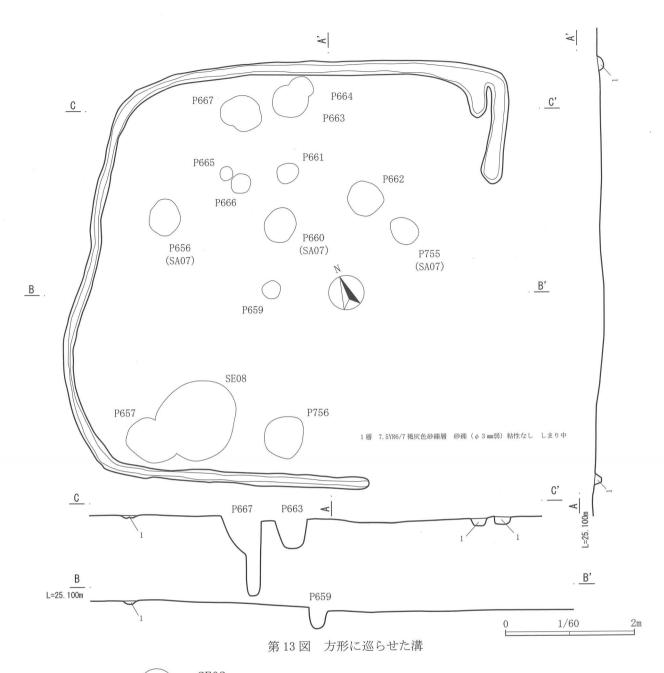
SE02 (第14·15 図 第4 図版 第9表)

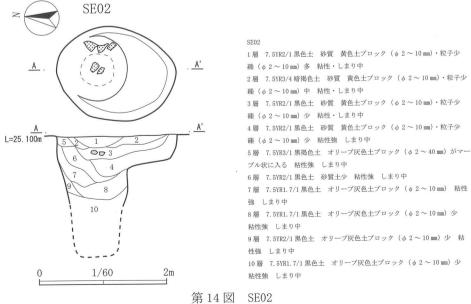
①位置: C5-c に位置する。

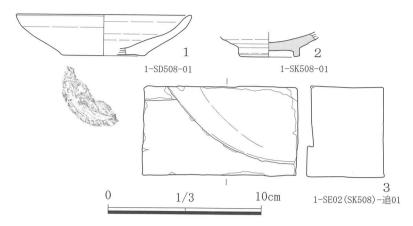
②形状・規模・覆土:規模は1.90 m×1.51 mの平面楕円形で深さ1.90 mを測る。また、南側を0.45 m下がっ たところに幅の広いテラスが存在し、地山暗緑灰色土層(1 区VIII層)下の地山砂礫層を底部としている。覆土は、 オリーブ灰色土から黒色土に至る $1\sim 10$ 層を確認している。このうち上層である 3 層(黒色土)からは ϕ $150\sim$ 200 mmの礫が複数検出されていた。

③長軸方向: N-6°-W

④遺物:以下に図および観察表を示した。



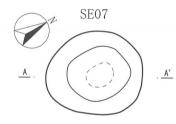




第 15 図 SE02 出土遺物

第9表 SE02 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1W- SD508	かわらけ	B類中皿	(11. 2)	(5. 2)	2. 75	21. 1	やや突出気味の底部 から30度角で直線的 に立ち上がり、口縁 部で分厚くなり、内 湾気味となる。			全面 7.5YR8/3浅 黄橙色	石英大粒・ 白色粒子や や多い。 雲母若干 含む。		vm · J
2	1W- SK508	陶器	腰錆茶碗	_	3. 8	<1.6>	20. 1	低いい字高台。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	外面10YR4/4 褐色の錆 釉、内面 5Y8/3淡黄色 の灰釉に貫 入あり。	白色粒子含 む。密。	底部 2/3	瀬戸産19世紀前 半
3	1⊠ SK508 (SE02)	土製品	煉瓦	縦10.1	横5.9	厚4.8	547.6	長方形の表面に円形 の一部が描かれ、飾 り煉瓦の一種ヵ。	型押し。円形部分ナデ調整。	良好	全体 2.5YR4/6明 赤褐色	白色粒子や や多い。	完存	19世紀末以降



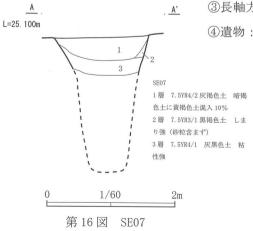
SE07 (第 16 · 17 図 第 4 · 25 図版 第 10 表)

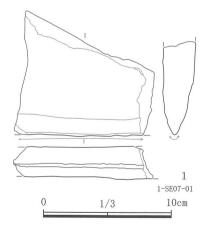
①位置: D6-a・c に位置する。

②形状・規模・覆土:1.53 m×1.34 mの平面円形で、漏斗状に深さ2.12 m掘り下げた地山砂礫層で底部に至る素掘りの井戸である。覆土は灰褐色~黒褐色土の4層を確認した。上面から約1 m下がったところで湧水点がある。

③長軸方向:N─29° —E

④遺物:以下に石製品1点を示した。

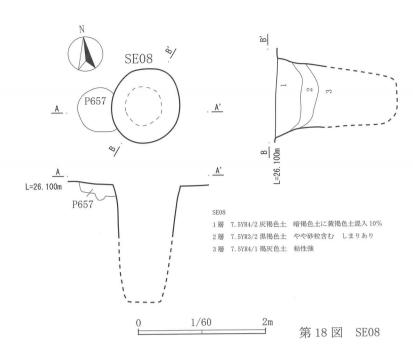




第 17 図 SE07 出土遺物

第 10 表 SE07 出十遺物観察表

		ово. Н	T-757 17	A PAPE VICTOR	1									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E-7ゴ ウSE— 括	石製品	磨石	縦 (9.9)	横 (10. 4)	_	_	包丁形を呈する大 型石器の破片。	表裏面は粗い敲打面カ。	_	全面N4/0灰 色	_	_	下端が使用面。磨滅が著しい。



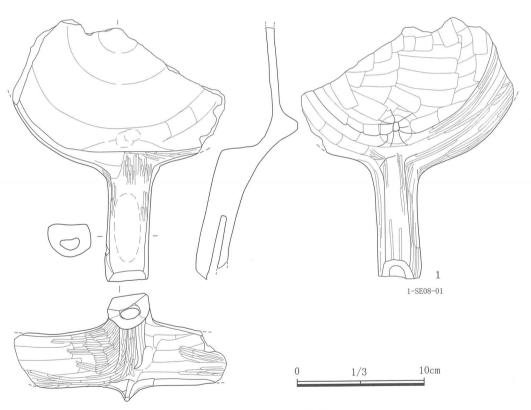
SE08 (第18·19 図 第4·25 図版 第11表)

① 位置・重複: C5-d・C6-c・D5-b・D6-a に位置する。円形ピット P657 を切っている。

②形状・規模・覆土:1.26 m×1.05 mの平面楕円形で、深さ1.90 m。覆土 は灰褐色土~黒褐色土の3層の堆積を確 認している。

③長軸方向: N-35°-E

④出土遺物:以下に図および観察表を 示した。



第 19 図 SE08 出土遺物

第 11 表 SE08 出土遺物観察表

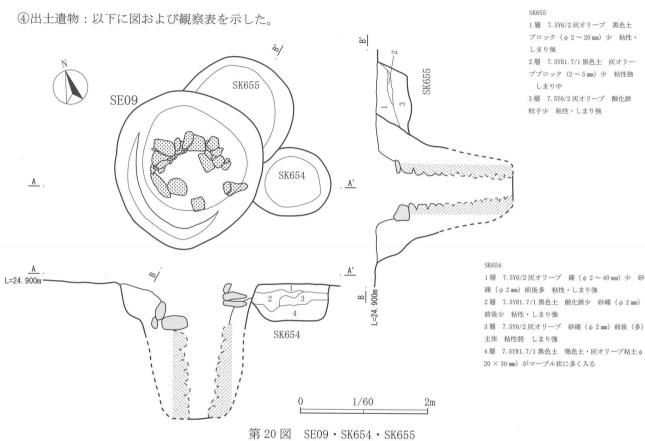
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E- SE8No1	土師質土器	十能	縦 (20.4)	横 (16.5)	8.2	363. 1	平らな底部に乳頭 状足貼付、単位不 明。長さ9cm、幅 3.5cmの把手が付 く。	ロクロ整形。内面 にロクロを目あり。 外底面へラガギ、足 と把手は手はねと 形。体下端にミガ キ痕明瞭。	良好	内外面 2.5Y3/1黒 褐色	白色粒子・ 雲母微粒子 多く含む。	全体の 1/6	把手中央部に使 用中のへこみあ り。

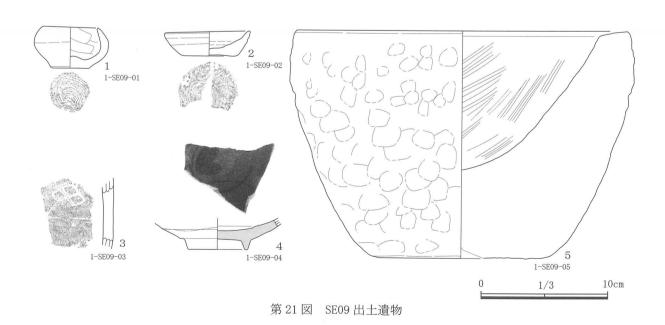
SE09 (第 20 · 21 図 第 4 · 25 図版 第 12 表)

①位置・重複: E8-b に位置する。SK654・655 を切る。

②形状・規模・覆土: $2.30 \text{ m} \times 2.20 \text{ m}$ の平面楕円形で深さ 2.00 mのところが底部となり砂礫層であった。西側を 50 cm下がったところに狭いテラスが存在する。最上層には積石を崩したと考えれる ϕ $200 \sim 500 \text{mm}$ の礫が、テラスあたりの深さまで密に埋まっており、これを取り除くと積石が遺存していた。積石には花崗岩、形質頁岩、安山岩があり、自然石と割石を併用している。

③長軸方向:N-45°-E





第12表 SE09 出土遺物観察表

11 12	- 1	DLOO HI-	11/5 1/4	1207112	-									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E-93* ウSE- 括	かわらけ	小壺	4. 4	2. 9	3. 1	41.8	突出気味の底部に 算盤状の体部が付 く。無頸壺。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 無調整。	優良	全面5 YR7/6明橙 色	白色粒子若 干含む。骨 針含む。	全体の 3/4	
2	1E-9ゴ ウSE一 括	かわらけ	C類小	6. 5	4. 1	1.9	34. 4	ややくぼんだ底部 から60度以上の角 度で直線的に立ち 上がる。	ロクロ水挽き成 形。左回転糸切り 離し後、体下端へ ラケズリ。	優良	全面 7.5YR7/6橙 色	白色・褐色 粒子やや多 く含む。	全体の 2/3	
3	1E-9ゴ ウSE- 括	土師質土 器	印花文 火鉢		-	<5. 6>	29.8	角型の一部ヵ。		良好	全面 2.5YR5/6明 赤褐色	雲母粒子多く含む。	破片	割り菱形印花文
4	1E-9ゴ ウSE- 括	陶器	ш	_	(4. 6)	<2.3>	35. 2	内反り気味の高台 から緩やかに開 く。比較的大形。	削り出し高台。体 下端回転ヘラ削 り。	優良	内面 10YR4/1褐 灰色釉	白色粒子含 む。器肉 5YR4/8赤褐 色	底部 1/2	見込みに植物文 鉄絵 唐津産17世紀前 半
5	1E-9 ³ ウSE井 戸枠	石製品	捏鉢	(26. 0)	(11. 2)	16. 5	3600	平らな底部から70度分り、口縁部は垂直とか	単一角で直線的に立ち上が なる。	-	全面N5/0灰 色	_	全体の 1/4	安山岩質ヵ

SE10

SE10 (第 22 · 23 図 第 4 · 25 図版 第 13 表)

①位置: C5-d に位置する。

②形状・規模: $1.16 \text{ m} \times 1.08 \text{ m}$ の平面円形で、深 21.58 mのところで、地山砂礫層をなした底部に至っている素掘りの井戸である。

③長軸方向:N-28°-E

④出土遺物:以下に図および観察表を示した。



A . A'
L=25. 100m

1 SE10
1 層 7. 5YR2/1 黒色土 粘性・しまり強
2 層 7. 5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック(φ
2~10 mm)・粒子中 粘性・しまり中
3 層 7. 5YR1. 7/1 黒色土 黄色土ブロック(φ
2~10 mm)・粒子主体 粘性・しまり強
4 層 2. 5Y3/3 暗オリーブ褐色土 砂礫φ1~
5 mm主体 粘性・しまり弱

第 22 図 SE10

第13表 SE10 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E-10 ¬* †SE	かわらけ	B類中皿		(6.0)	<1.9>	31. 5	平らな底部から40 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。調整 は摩耗のため不 明。	やや良	全面 7.5YR6/6橙 色	白色大粒あ り。雲母若 干含む。		二次被熱のため 一部10YR6/2灰 黄色

SE11 (第 24 · 25 図 第 4 · 25 図版 第 14 表)

①位置:プラン東側は2区になる。E9-a・cに位置する。

②形状・規模: $2.04 \text{ m} \times 1.92 \text{ m}$ の平面円形をした素掘り井戸で、確認面から底部までの深さは1.86 mを測る。湧水は深さ0.70 m。

③長軸方向:N-58°-E

④出土遺物:以下に図および観察表を示した。

SE11

1 層 7.5 YR4/3 褐色土 黒褐色土 (¢ 2 ~ 10 mm)・オリーブ色土 (¢ 2 ~ = 20 mm) がマーブル状に入る 粘性・しまり強

2層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック(φ 2 ~ 10 mm)・粒子少 オリーブ灰色土ブロック(φ 2 ~ 20 mm)少 粘性・しまり強

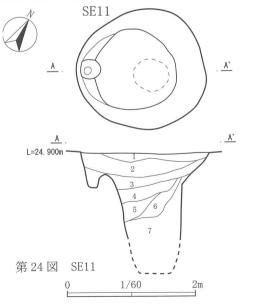
3層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子少 オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 20 mm)中 粘性・しまり強

4層 7.5%2 灰オリーブ 砂礫 (ϕ 2 \sim 10 mm) 中 オリーブ灰色土ブロック (ϕ 2 \sim 20 mm)・黒色土 (ϕ 2 \sim 40 mm) がマーブル状に入る

5層 7.5YR2/1 黒色土 砂礫(ϕ 2 \sim 10 mm)多 オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 20 mm)少

6層 7.5YR2/1 黒色土 砂礫(ϕ 2 \sim 10 mm)中 オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 20 mm)中

7層 7.5YR2/1 黒色土 砂礫(ϕ 2 \sim 10 mm)多 オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 20 mm)多





第 25 図 SE11 出十遺物

第14表 SE11 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E-11 ゴウSE 一括	かわらけ	A類豆 皿	6. 0	3. 4	1.6	25. 3	丸みのある底部から45度角で立ち上がり、体部中間で 丸みを帯びる。	ロクロ水挽き成 形。右回転糸切り 離し後、無調整。 見込みにナデ痕明 瞭。	良好	内外面 10YR8/2灰 白色	雲母若干 含む。器肉 10YR6/4に ぶい黄橙色	口縁一部欠損	J
2	1E-11 コ゛ウSE 一括	土師質土器	鉢	(28. 5)		<5. 1>	83. 1	やや丸みのある大 型の鉢。	回転台使用力。	良好	内外面 7.5YR2/2黒 褐色	白色大粒多 く含む。雲母 若干含む。 器肉7.5YR4/6 褐色	一种片	表面剥離顕著

(5) SK (土坑)

SK650 (第 26 · 27 図 第 5 · 25 図版 第 15 表)

①位置・重複: D8-d、E8-b に位置する。遺構中央で円形ピット P799 に切られている。

②形状・規模・覆土: 200 cm× 156 cmの楕円形で、深さ 15 cmを測る。覆土は単層の黒色土である。

③長軸方向: N-60°-W

④出土遺物:覆土中から底部にかけて遺物がややまとまって出土しいる。以下に図および観察表を示した。

SK653 (第26図 第5図版)

①位置: D5-b、D6-a に位置する。

②形状・規模・覆土: $222 \text{ cm} \times 109 \text{ cm}$ 、深さ 36 cm。 覆土は黒色土が 3 層あり、中央に向かって緩やかにたわむレンズ状堆積を示しており、人為か自然によるものか判断がつかない。 礫は $1 \cdot 2 \text{ 層で多量に混入している}$ 。

③長軸方向: N-35°-E

④出土遺物:掲載遺物はなし。

SK654 (第20図 第4図版)

①位置・重複: E8-b に位置する。SE09·SK655 に切られる。

②形状・規模・覆土: 120 cm× 105 cmの平面円形で、深さ 155 cm。 覆土は、オリーブ灰色土・黒色土が互層をなした平行堆積である。

③長軸方向:N-74°-W

④出土遺物:なし。

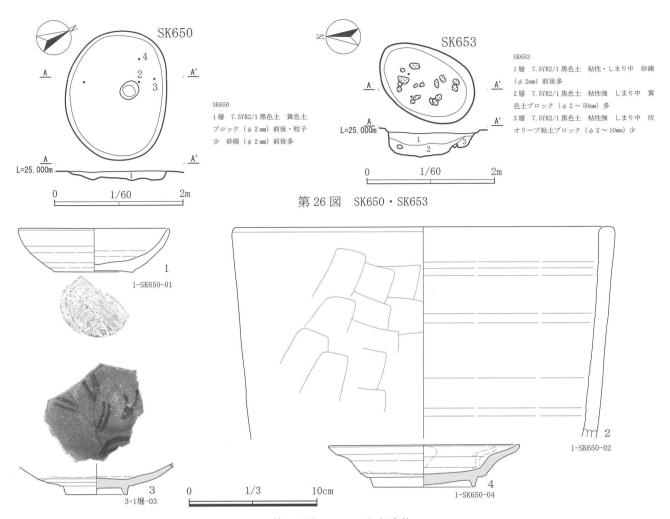
SK655 (第20図 第4図版)

①位置・重複: E8-b に位置し、SK654 を切り、SE09 に切られる。

②形状・規模・覆土: 165 cm×現状で 93 cm、深さ 52 cm。覆土は、上・下の灰オリーブ色土が黒色土を挟んだ層からなっている。

③長軸方向:不明

④出土遺物:掲載遺物はなし。



第 27 図 SK650 出土遺物

第 15 表 SK650 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E- SK650 一括	かわらけ	A類中 皿	(11.8)	6. 0	3. 4	49.5	わずかに突出した 底部から丸みを 持って緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 無調整。	優良	全面5YR6/6 橙色	白色粒子・ 雲母を若干 含む。骨針 含む。	全体の 1/3	
2	1E- SK650 No3	瓦質土器	火鉢· 焜炉	(29. 6)	_	<16. 4>	606. 5	径30cmを超える土 管状を呈す。窓は 確認できない。	内面に布目が残り、桶造りの可能 性あり。	やや良	外面 7.5YR5/3に ぶい灰褐色 内面黒色	白色粒子を やや多く含む。	口縁部 の1/4	v
3	1E- SK650 No2	陶器	向付	_	4.8	<2.4>	61.6	小形の高台が付き、10度角で大きく開く。	ロクロ整形。削り 出し高台。鬼板化 粧し、その上に釉 をツケガケする。	優良	外面 7.5YR4/3褐 色内面 2.5GY5/1オ リーブ灰色 の透明釉	白色微粒子 若干含む。 器肉N5/0灰 色	底部のみ	植物文鉄絵 (10YR3/1黒褐 色) 唐津産
4	1E- SK650 No1·4	陶器	黄瀬戸折緑皿	15. 0	8. 0	3. 2	243. 4	内傾気味の高台か ら水平に開き体下 端で40度角で立ち 上がり、さらに幅 広の折縁へと開 く。	ロクロ整形。削り出し高台。表面に暗緑灰色(10GY4/1)の緑釉胆礬。	優良	内外面 5Y8/3淡黄 色の黄瀬戸 釉露胎 5Y8/1灰白 色	黒色微粒子 若干含む。	ほぼ完 存	畳付磨滅 美濃産17世紀 カ

(6) SD(溝)

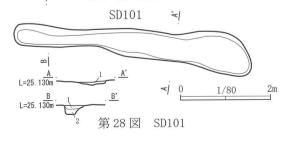
SD101 (第 28 · 29 図 第 25 図版 第 16 表)

①位置: C4-b、C5-2a に位置する。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土:幅 $0.48 \sim 0.88$ m、深さ $0.15 \sim 0.20$ m を測る。底部の標高は東側で 24.83 m、西側で 24.78 mをなしているが水流の痕跡はない。断面形状は鍋底状をなし、覆土は黒色土 2 層である。③走向方向: $N-65^{\circ}$ -W ④遺物:覆土中からかわらけ・瓦質土器の破片が出土している。

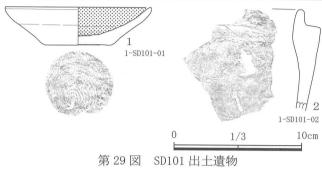
1層 7.5YR1.7/1黒色土 黄色土ブロック (62~10 mm)・ 粒子少 粘性・しまり中

2 層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土プロック (ϕ 2 \sim 10 mm) ・ 粒子中 粘性・しまり中



第 16 表 SD101 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1W- 101SD No2	かわらけ	B類中 皿	(11.3)	(5. 2)	3. 0	84. 2	平らな底部から30度 角で直線的に開き、 口縁部でやや丸みを 持って、分厚くな る。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、下端 無調整。		外面 7.5YR5/3に ぶい褐色内 面煤黒	白色粒子や や多く雲母 微粒子若 干含む。	全体の 1/3	灯明油皿に転 用、内面黒色 処理。口縁部 に灯心油痕。
2	1W- SD101- 1	瓦質土器	火消壺カ		_	<7.7>	88. 2	上かり、日俗は同さ 19mmの受け郊をつく	輪積み成形カ。最終 調整は外面縦、内面 横ミガキ。	良好	内外面とも N3/0黒灰色	白色粒子若 干含む。器 肉5GY6/1オ リーブ灰色	口縁部破片	平面丸形、深鉢 形か。青森県浪 岡城出土遺物に 類例あり。



SD102 (第30·31 図 第25 図版 第17 表)

①位置: C4-b に位置する。遺構東端を浅い方形の攪 乱に切られている。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土:幅は0.22~0.38 m、深さは 18 cm前後である。底部標高は東側で 25.00 m、西側で 24.95 mであるが、水流の痕跡はない。 覆土は黒色土の 単層である。③走向方向: N─65° ─W

④遺物:以下に図および観察表を示した。



第 17 表 SD102 出土遺物網察表

男1	1	SDIOZ IT	上思	勿能宗	10									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1.	1E- SD102	かわらけ	A類中 皿	_	(4.8)	<2.3>	24. 6	やや突出気味の底部 から35度角で緩やか に立ち上がる。	ロクロ整形。回転不明。体部上半にロクロ目顕著。	良好	内外面とも 7.5YR7/2明 褐灰色	雲母微粒子 やや多い。 精良。	底部 1/3	
2	1E- SD102	陶器	茶入	_	(5. 1)	<2.3>	18. 5	平らな底部から60度 角ほどで緩やかにた ちあがる。	ロクロ整形。切り離し不明。回転へラ削りで調整。	優良	内外面 7.5YR3/1黒 褐色の鉄 釉。外面底 部7.5YR6/4 にぶい褐色 の錆釉。	長石大粒若 干。精良。 器肉 7.5YR7/1灰 白色	底部 1/3	漆接ぎ痕あり。 瀬戸・美濃産17 世紀
3	1E - SD102	石製品	砥石	縦3.05	横3.45	厚1.0	14. 9	使用面は両面で、厚さげ砥と思われる。	さと幅からみて、提	_	両面とも 10YR7/2黄橙 色	_	約半分	凝灰岩

SD103 (第32図)

①位置:C4-b・d、C5-cに位置する。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土:幅は 0.16 \sim 0.32 m、深さ 0.12 m。底部標高は東側で 24.92 m、西側で 24.99 mであるが 水の流れた痕跡はない。覆土は黒色土の単層である。

③走向方向:N-65°-W

④遺物:なし。

SD250 (第 33 · 34 図 第 25 図版 第 18 表)

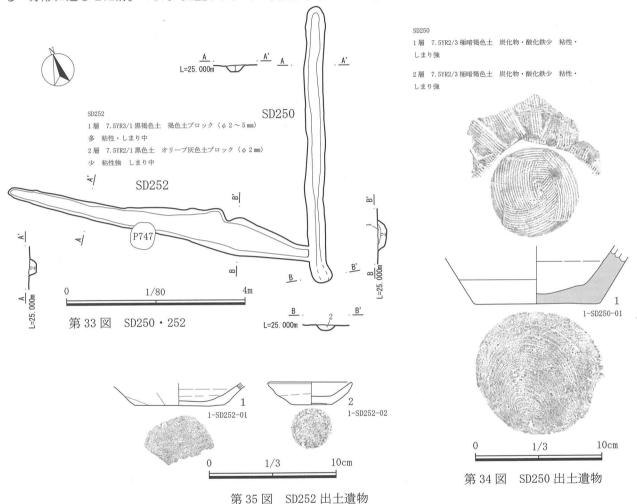
①位置・重複: D8-c、E8-a に位置する。SD252 と重複するが土層色調に差異はなく時期差は認められなかった。

②形状・規模・覆土:幅は3.35~4.62 mで南北方向に走向する。深さは0.27~0.37 mを測り、底部の標高は北 が24.31 m、南が24.29 mとなりほぼ平坦である。断面形状は皿形に立ち上がる。覆土は極暗褐色土の単層からなる。

③走行方向: N-17° -W

④出土遺物:以下に図および観察表を示した。

⑤備考:隣接するSD252は、本遺構の南端からL字に屈曲して西に走向するため、形状から、同じ調査区に存在す る「方形に巡らせた溝」のような施設であった可能性も考えられる。



第 18	注記	SD250 上 種類	出土遺生	物観察 口径	表	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
	1E - SD250 - NO1	陶器	擂鉢	—	10.0		206.2	平らな底部から60度 ほどの角度で直線的 に立ち上がる。内面	ロクロ整形。左回転 糸切り離し無調整、 体部下端回転へラ削		内外面とも 7.5R3/2暗紫	褐色微粒子 若干含む。	底部の	瀬戸・美濃産大 窯第4段階末

される。

第 19 表 SD252 出土遺物観察表

77	0 1	DDZ0Z L	47-78-1	N PULL	121									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1E- 252SD Bセク ション	かわらけ	B類中 皿	_	(7. 1)	<1.8>	23. 3		ロクロ整形。手擦れ のため調整不明。	優良	全面 7.5YR7/6黄 橙色	白色・雲母 微粒子やや 多い。	底部 1/3	
2	1E — SD252 N o. 1	かわらけ	A類豆 皿	6. 5	3. 1	1.7	36. 4	突出した底部から20 度角で開き、中間で 丸みを増して、口唇 にいたる。	右回転糸切り離し	優良	全面5YR7/6 橙色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。 骨針含む。	完存	e

SD252 (第 33 · 35 図 第 25 図版 第 19 表)

①位置・重複: D7-d、E7-b、E8-a に位置する。円形ピット P747 と重複しこれに切られる。

②形状・規模・覆土: 断面形状は皿状。幅は $0.22\sim0.87\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.05\sim0.21\,\mathrm{m}$ 、底部の標高は西が $24.75\,\mathrm{m}$ 、東が $24.75\,\mathrm{m}$ となり、ほぼ平坦となっている。断面形状は皿形に立ち上がる。覆土は黒褐色土〜黒色土の 2 層からなる。

③走行方向:N-62°-W ④出土遺物:前頁に図および観察表を示した。

(7) ピット (第36・37図 第26図版 第20~22表)

検出されたピット群は掘立柱建物として組めたもの、柵列と判断されるものなどは同一遺構として捉えた。その他のピットの平面図は全体図に掲載した。尚、断面図は割愛した。各ピットの計測値は以下に示した。

第20表 1区ピット計測一覧表(1)

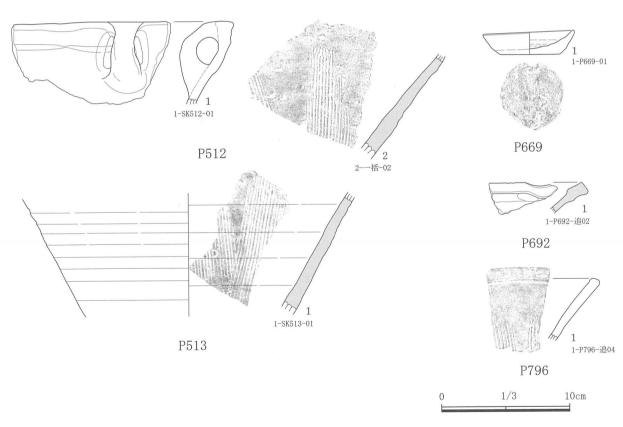
				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
1区西側 第1面	P501	C5-a	40	36	24	円形	根石残存
	P503	C5-a	44	44	12	円形	
	P504	C5-a	84	64	78	楕円形	
	P509	C4-d	48	36	24	楕円形	
	P510	С5-с	28	28	30	楕円形	
	P511	C4-d	28	28	48	円形	
	P512	C4-b	48	48	12	円形	遺物検出 根石残存
	P513	C4-d	28	24	42	円形	
	P514	C4-d	124	44	6	楕円形	
	P516	С5-с	60	40	18	楕円形	根石残存
	P601	C5-b	24	20	16	楕円形	
	P602	C5-a	40	32	25	円形	根石残存
	P603	C5-a	44	36	27	楕円形	根石残存
	P604	C5-a	36	32	30	円形	木質、根石残存
	P605	C5-a	28	24	34	円形	
	P606	C5-a	36	32	39	楕円形	
	P607	C4-b	28	24	24	円形	
	P608	C4-b	24	16	18	楕円形	
	P609	C4-b	40	36	33	円形	
	P610	С5-с	40	32	26	楕円形	
	P611	С5-с	36	28	35	楕円形	根石残存
	P613	C4-d	28	20	26	楕円形	
	P614	C4-d	32	28	29	楕円形	
1区東側 第1面	P651	C5-d	96	80	78	楕円形	
	P653	С5-ь	44	44	41	円形	
	P654	С5-ь	32	32	32	円形	根石残存
	P655	C5-d	80	68	51	楕円形	
	P657	D5-b	68	68	37	円形	
	P659	С6-с	36	28	28	楕円形	根石残存
	P661	С6-с	28	24	13	円形	根石残存
	P662	С6-с	60	54	54	楕円形	
	P663	С6-с	44	40	56	円形	木質残存 P664を切る
	P664	С6-с	40	24	33	楕円形	P663に切られる
	P665	С6-с	32	32	28	円形	根石残存
	P666	С6-с	32	32	50	円形	木質残存
	P667-a	С6-с	68	52	58	楕円形	
	P667-b	С6-с	42	36	18	楕円形	

				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
区東側 第1面	P668	C6-a	52	44		楕円形	
,,,-,	P669	D6-a	28	28	31	円形	
	P670	D6-a	24	16	63	楕円形	
	P671	D6-b	36	28	38	楕円形	
	P672	D8-a	40	36	29	円形	根石残存
	P673	D8-a	56	48	29	楕円形	根石残存
	P674	D8-d	32	28	16	円形	
	P675	D8-d	28	24	26	円形	
	P676	D8-d	52	40	19	楕円形	
	P679	E9-a	44	44	24	円形	
	P680	Е9-а	80	72	14	楕円形	
	P682-a	Е9-а	52	44	38	楕円形	P682-bを切る
	P682-b	E9-a	36	28	29	楕円形	P682-aに切られる
	P685	D8-c	28	24	53	円形	
	P686-b	D8-c	36	24	32	楕円形	P686-aに切られる
	P687	E9-a	52	48	46	円形	
	P688	D8-c	30	24	41	円形	
	P690	D8-c	24	12	24	楕円形	
	P691	D8-c	28	16	25	楕円形	
	P692	D8-c	32	32	98	円形	
	P693	D8-c	60	44	57	楕円形	
	P694	D8-c	32	20	46	楕円形	
	P695	D8-c	48	40	29	楕円形	P695に切られる
	P697	D8-c	48	48	32	円形	根石残存 P695を切る
	P700	D8-c	32	24	50	楕円形	`
	P701-a	D8-c	42	36	65	円形	P701-bを切る
	P701-b	D8-c	30	24	62	円形	P701-aに切られる
	P717	Е9-с	36	32	37	円形	
	P720	Е9-с	28	28	26	円形	
	P722	Е9-с	64	52	30	楕円形	根石残存
	P726	E8-d	52	44	43	楕円形	
	P727	E8-d	56	40	40	楕円形	
	P728	E7-b	36	36	25	円形	
	P729	E7−b	48	44	71	円形	木質残存
	P738	E9-a	56	56	34	円形	
	P739	E9-a	48	36	70	楕円形	
	P740	E9-a	64	52	33	楕円形	

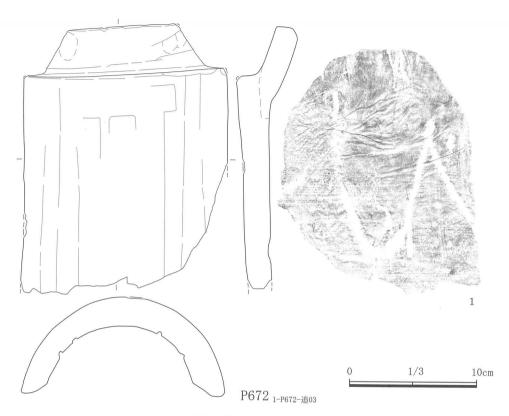
第21表 1区ピット計測一覧表(2)

				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
1区東側 第1面	P741	Е8-ь	40	32	54	楕円形	
	P742	D8-a	32	28	31	円形	
	P743	D8-c	32	32	40	円形	
	P744	D8-c	32	32	30	円形	
	P745	D8-c	28	28	29	円形	V
	P746	Е7-ь	24	46	41	楕円形	
	P747	E7-b	64	60	53	円形	SD252を切る
	P748	E7-b	52	40	45	楕円形	
	P749	D8-c	11	40	9	楕円形	根石残存
	P750	D8-a	52	40	7	楕円形	根石残存
	P751	D8-a	28	20	34	楕円形	
	P752	D8-a	48	44	41	円形	木質残存
	P754-a	C5-d	36	28	9	楕円形	
	P754-b	C5-d	48	36	30	楕円形	
	Р754-с	C5-d	30	18	11	楕円形	
	P756-a	D6-a	68	64	15	円形	
	P756-b	D6-a	28	28	10	円形	
	P757	E8-b	40	32	32	楕円形	
	P758	E7-b	80	48	75	楕円形	木質残存
	P762	D7-с	60	48	56	楕円形	

				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
I区東側 第1面	P778	Е9-а · с	40	36	28	円形	
	P779	E9-a	32	28	28	円形	
	P780	E8-d	32	28	55	楕円形	
	P781	E8-d	28	20	32	楕円形	
	P782	E8-b	32	24	46	楕円形	
	P783	E8-d	40	32	42	楕円形	
	P784	E8-d	32	24	43	楕円形	
	P785	E8-d	20	16	33	円形	
	P786	E8-d	24	20	36	円形	
	P788	E8-d	24	24	36	円形	木質残存
	P789	E8-d	40	40	52	円形	
	P790	E8-d	56	36	30	楕円形	
	P792	E8-a	56	52	37	円形	
	P793	E8-a	44	40	70	円形	
	P794	E8-b	36	28	56	楕円形	
	P795	E8-b	32	24	46	楕円形	木質残存
	P796	E9-a	68	52	37	楕円形	
	P797	E8-b	32	24	22	楕円形	
	P798	E8-b	44	40	56	円形	



第36図 1区ピット出土遺物(1)



第 37 図 1 区ピット出土遺物 (2)

第22表 1区ピット出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
P512 1	1W- SK512 No1	土師質土器	内耳鍋	_	_	<6.4>	160. 5	口縁に向かって60度 角で立ち上がる。深 めの鍋で、把手は1 個1対部分が残る。	回転台使用カ。	良好	内面2.5Y4/1 暗黄灰色外 面煤黒	白色粒子多 く含む。器 肉N2/0黒色	口縁部破片	VIII 7
P512 2	1W- SK512	陶器	擂鉢			<9.1>	119. 6	ほぼ45度角で直線的 に開く。	回転台使用。体部下 端回転へラ削り調 整。16本1単位の櫛 目。	優良	内外面 7.5R3/1暗紫 灰色の鉄釉	白色大粒や や多い。器 肉5YR8/1灰 白色	体部破片	内面使用摩滅。 瀬戸・美濃産
P513 1	1W- SK513 一括	陶器	擂鉢	_	2.	<9.6>	75. 8	ほぼ45度に直線的に 立ち上がる。	回転台使用。15本以 上1単位の櫛目。	良好	内外面 2.5YR3/2暗 紫褐色の鉄 釉	白色粒子含 む。器肉 5YR8/1灰白 色	体部破片	瀬戸・美濃産
P669 1	1E- P669— 括	かわらけ	C類小 皿	<7.1>	4.8	1.7	47. 1	やや窪んだ底部から 60度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。左回転糸切り離し後、無調整。	良好	内外面 7.5YR7/4に ぶい灰橙色	白色粒子・ 雲母若干含 む。器肉 10YR8/1灰白 色	全体の 3/4	
P672 1	1区 P672N0 1	瓦	丸瓦	縦 (21. 2)	横15.9	厚7.5	1279.6	半球形、寸胴型で重 ね部分に4cmの玉縁 が付く。	桶巻き技法。内面に 布目と抜き取り縄 (吊り紐)痕。	良好	全体N5/0灰 色	やや粗い。	半分	玉縁式
P692 1	1E- P692	陶器	擂鉢	_	_	<2.4>	17. 3	ほぼ45度角で開く。 口唇に指頭による片 口あり。	回転台使用。		内外面 7.5YR5/1褐 灰色の鉄釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉 7.5YR8/1 灰白色	口縁部破片	
P796 1	1E- P796	瓦質土器	擂鉢	_	_	<4.8>	38. 7	40度角で反り返るよ うに開く。	回転台使用。7本以 上1単位の櫛目。		内外面N2/0 黒色	白色黒色粒 子やや多 い。骨針ヵ。	口縁部破片	

第2節 1区 「第2面]

(1) 堀

3号堀 (第38・39・41・42図 第5・6・26図版 第23表)

①位置・重複:調査区北壁に寄った B4-d、C4-b、B5-c、C5-a・b、C6-a・b・c・d、C7-a・c・d、D7-a・b、D8-c、D8-a・b・c・d、D9-a・c・d、D9-b、E10-b、E10-aに位置する。4号堀と重複するが、Cセクションに示されるように層位には明確な切り合い関係は認められず、4層の層位がなだらかに3層へ向かって落ちていく形状から、同一時期の遺構と判断される。堀は東西に走行するのが判るが、調査区内において、底部及び北側の立ち上がりを検出することができなかった。また遺構上面を整地層が覆っていたところが特筆されるところである。

②形状・規模・覆土: 断面はステップをもつ。断面形は現形状から箱薬研であると推定される。最大幅は現状で 5.76 m、確認面からの深さは現状で 1.69 m、標高 23.09 mである。

覆土は地点によって若干の違いはあるが、C・Fセクションのように、人為堆積の様相が強い形状を示す地点がある。

③走行方向:N-62°-W

④出土遺物:纏まった資料の出土がある。以下に図および観察表を掲載した。

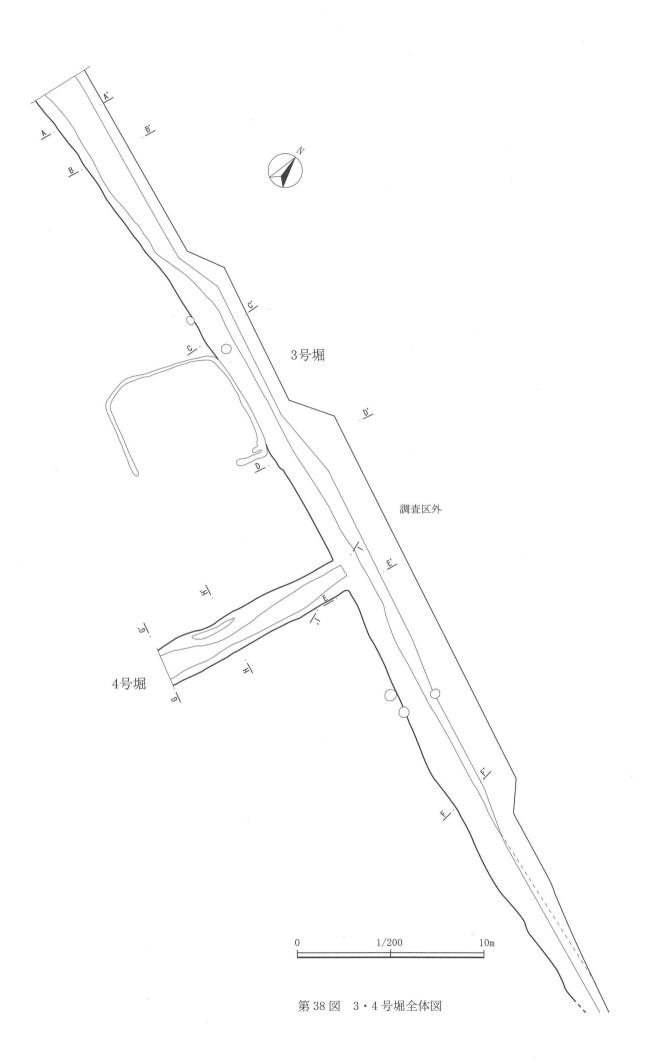
4 号堀 (第 38・40・43 図 第 6・27 図版 第 24・25 表)

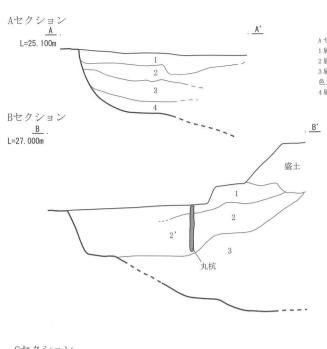
①位置・重複:1区の西に寄った C7-c、D6-d、 $D7-a \cdot c$ に位置し、3号堀から直行し分岐する形状で、調査区外である南端へ向かい3号堀に合流する。調査区南端の壁で、 $II \cdot III$ 層の2層からなる整地層が遺構上面を覆っていたことが確認できた。

②形状・規模・覆土:幅 $1.76 \text{ m} \sim 2.16 \text{ m}$ 、深さ $0.29 \sim 0.50 \text{ m}$ を測る。底部の標高は南端で 24.33 m、北端で 24.44 mを測り、南に向かって緩やかに傾斜している。覆土は自然堆積の様相を呈しており、南壁である 6 セクションでは一度 $4 \sim 5$ 層が埋まったところを再度掘り込んだ形跡がみられる。

③走行方向:N-31°-E

④出土遺物:纏まった資料の出土がある。以下に図および観察表を掲載した。





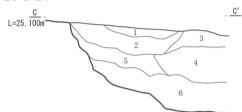
Aセクション

- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 黒色土・黒墨土・褐色土ブロック (φ2~10 mm)・粒子少 粘性・しまり中
- 2 層 7.5YR3/4 暗褐色土 黒色土・黒墨土・褐色土ブロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子多
- 3層 7.5YR2/1 黒色土 黒色土・黒墨土・褐色土ブロック (φ2~10 mm)・粒子少 褐色土・オリーブ灰 色土ブロック (φ2~10 mm) 多
- 4層 7.5YR2/1 黒色土 褐色土・オリーブ灰色土ブロック (φ2~10 mm) 少

Rセカション

- 1層 7.5YR4/1 褐灰 暗褐色砂質土
- 2層 7.5YR2/2 黒褐 黒色土・暗黄色塊混入
- 2' 層 7.5YR2/1 黒黒色土・暗黄色があまり見られない
- 3 層 7 5VR4/1 掲灰 暗青灰色砂質(やや) 十単一層

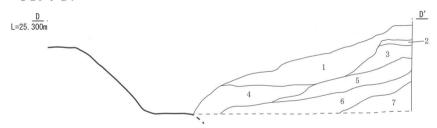
Cセクション



Cセクション

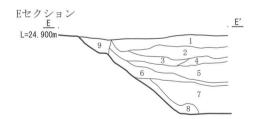
- 1 層 7.5 YR2/3 極暗褐色土 粘性・しまり強 灰色土・黒色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)少
- 2層 2.5YR4/3 オリーブ褐色土 粘性強 しまり中 灰色土ブロック (φ 2 ~ 20 mm) 多
- 3 層 7. 5 YR2/3 極暗褐色土 粘性強 しまり中 灰色土・オリーブ褐色土・黒色土ブロック(ϕ 2 \sim 20mm)
- 4 \overline{B} 7.5 $\overline{B$
- 6層7.5YR1.7/1 黒色土 粘性強 しまり中 灰色土 (φ2~20 mm) 少

Dセクション



Dセクション

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 酸化鉄多 粘性中 しまり弱 2層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ2~5 mm)・
- 粒子多 粘性・しまり中
- 3 層 7.5YR3/4 暗褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 50 mm)・粒子多 粘性・しまり中
- 4層 7.5YR1.7/1 黒色土 オリーブ灰色土ブロック(o 2 mm) 少 粘性強 しまり中
- 5 層 7.5YR1.7/1 黒色土 オリーブ灰色土ブロック (φ 2~20 mm) 多 粘性強 しまり中
- 6 層 7.5YR1.7/1 黒色土 オリーブ灰色土ブロック(φ 2~20 mm) 少 粘性強 しまり中
- 7層 7.5YR1.7/1 黒色土 オリーブ灰色土ブロック(φ 2~20 mm) 少 粘性強 しまり中

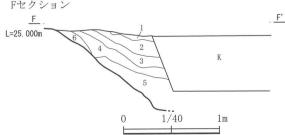


Eセクション

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~10 mm)・粒子少 炭化物少 酸化鉄少 粘性・しまり強
- 2 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 黄色土プロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子中 酸化鉄中 粘性・しまり強
- 3層 7.5YR2/1 黒色土 粘性・しまり強
- 4個 7.5FX2/3 極暗褐色土 黄色土ブロック(φ 2 ~ 10 mm)・粒子多 酸化鉄多 5層 7.5FX2/3 極暗褐色土 炭化物少 オリーブ色ブロック(φ 2 ~ 20 mm)マーブル状に多 粘性・しまり強 6層 7.5FX1.7/1 黒色土 オリーブ色ブロック(φ 2 ~ 20 mm)マーブル状に中 粘性強 しまり弱
- 7層 7.5YR2/1 黒色土 オリーブ色ブロック (φ2 ~ 20 mm) マーブル状に少 粘性・しまり強 8層 7.5YR2/1 黒色土 オリーブ色ブロック (φ2 ~ 20 mm) マーブル状に中 粘性強 しまり弱

9 層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子少 炭化部 (ϕ 2 mm) 少 粘性・しまり強

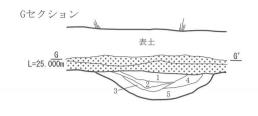
Fセクション

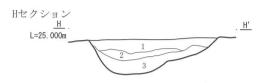


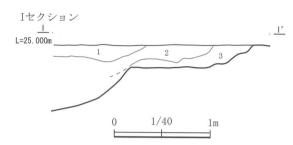
- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 炭化物・灰からなる厚さ30mmのブロックが層状に入る 黄 色土ブロック (φ 2 mm) 少 粘性・しまり強

- 6層 7.5Y4/3暗オリーブ 黄色土・オリーブ色土 (φ2~10mm) 多 粘性・しまり強

第39図 3号堀セクション







Cヤカション

- 1 層 7.5 kg/1 黒色土 黄色土プロック (ϕ 2 \sim 30 mm)・粒子少 酸化鉄・炭化物少砂礫 (ϕ 1 \sim 2 mm) 少 粘性・しまり強
- 2 層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~30 mm)・粒子中 酸化鉄・炭化物少砂礫 (φ1~2 mm) 中 粘性中 しまり強
- 3 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ2~30 mm)・粒子多 礫 (φ1~2 mm) 少 粘性・しまり強
- 4層 7.5YR2/1黒色土 酸化鉄・炭化物少 砂礫 (φ1~2 mm) 少 粘性・しまり強
- $5\, \rm \overline{m}$ 7.5 kg/l 黒褐色土 酸化鉄・炭化物中 砂礫 (ϕ 1 \sim 2 mm) 中 粘性中 しまり 強

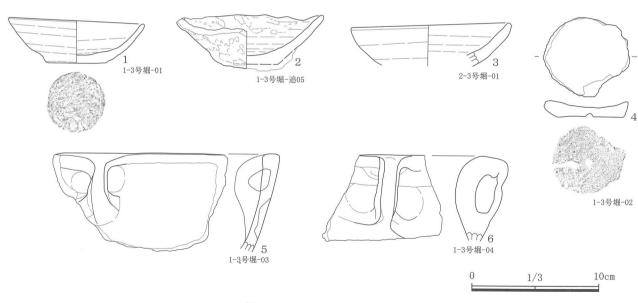
Hセクション

- $1\,\rm m$ 7. 5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・砂砾少 粘性・しまり ϕ
- 2層 7.5YR2/3極暗褐色土 砂礫 (φ1~2mm) 主体 粘性弱 しまり強
- 3 層 7.5 YR2/1 黒色土 酸化鉄多 砂礫(ϕ 1 \sim 2 mm)多 褐色土プロック(ϕ 2 \sim 10 mm)多 粘性中 しまり強

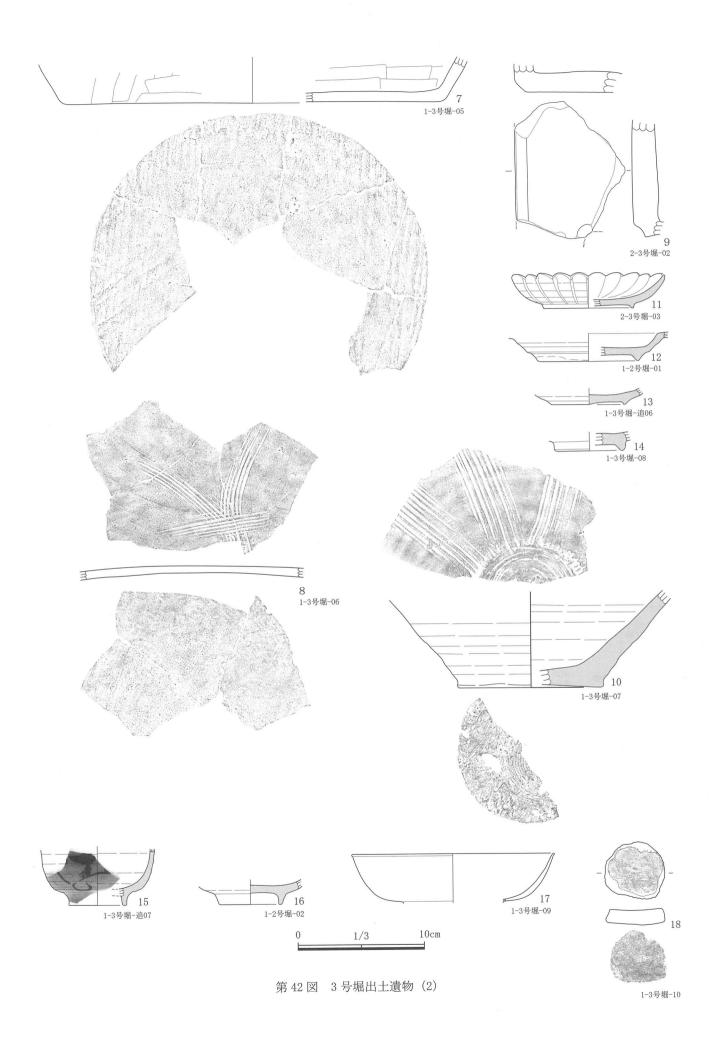
Iセクション

- 1層 7.5YR2/3極暗褐色土酸化鉄微 粘性・しまり強
- 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 酸化鉄少 粘性・しまり強
- 3 層 7.5 YR2/1 黒色土 酸化鉄多 砂礫(ϕ 1 \sim 2 mm)多 褐色土プロック(ϕ 2 \sim 10 mm)多 粘性中 しまり強

第 40 図 4 号堀セクション

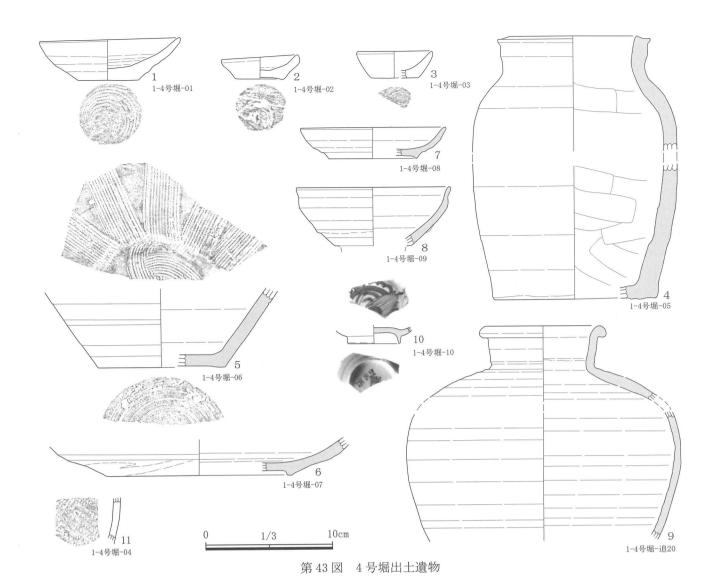


第 41 図 3 号堀出土遺物 (1)



第23表 3号堀出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1-3コ゛ウ ホリNo7	かわらけ	A類中 皿	10.6	4.8	3. 4	113. 1	突出した底部から碗 状に立ち上がり、口 縁でやや薄い。全体 に歪みあり。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、底部 のみ一方向手持ちへ ラ削り。	良好	全面5YR6/4 にぶい橙色	特に長石大 粒を多く含 む。雲母若 干含む。	完存	
2	3コ゛ウホリ	かわらけ	B類中 皿	(12. 0)	5. 1	3.8	133. 4	平らな底部から40度 角で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。回転不明。	やや不良	内外面 10YR5/2灰黄 褐色	白色粒子若 干含む。	ほぼ完存	内外面に漆付 着
3	2-3=* ウ おJ 下層	かわらけ	A類中 皿	12. 3		<3. 1>	113. 3	体部は下半で45度角で直線的に開き、上半は丸みを持って立ち上がる。	ロクロ整形。	良好	内外面 5YR6/6橙色 外一部 5YR5/2灰褐 色	雲母若干含 む。器肉 7.5YR6/1褐 灰色	底部を 除き完 存	
4	1E-#J3 ゴウ上 層一括	かわらけ	Ш	縫6.4	横6.8	厚1.3	46. 7	突出気味の底部。底 部周辺打ち欠き、底 面中央付近に盲孔あ り。	ロクロ整形。摩耗により、切り離し痕跡なし。	やや良	全面5YR6/3 にぶい橙色	長石大粒多 く、雲母微 粒子若干含 む。	底部のみ	加工円盤
5	1E-3=* ウホリNo1	土師質土 器	内耳鍋		_	<7.8>	167. 6	胴部は70度の角度の まま口縁部にいた る。口唇は平滑であ る。小さめの耳は一 つだけ残る。	回転台使用して整 形。耳の取り付けの 指頭圧痕残る。	良好	内外面 7.5YR2/3極 暗褐色で、 外面に煤付 着。	特に長石粒 を多く含 む。骨針含 む。器肉 5YR7/6明橙 色	口縁部 1/8	外面全体に煤付着
6	1E-3コ゚ ウホリー 括	土師質土 器	内耳鍋	_	_	<6.7>	93. 3	胴部は75度の角度の まま口縁部にいた る。耳は一つだけ残 る。	回転台使用して整 形。耳の取り付けの 指頭圧痕残る。	良好	全面 2.5YR6/6明 橙色	特に長石粒を多く含む。	耳部分	外面全体に煤付着
7	1E-3コ [*] ウホリ No3・4 コ [*] ウホリ No6他	瓦質土器	焙烙		30. 0	<3.5>	625. 7	平滑な底部より65度 ほどの角度で、直線 的に立ち上がる。	粘土紐巻き上げ整形 か。底部は他方向か らのヘラナデ。	良好	内外面 7.5YR3/3暗 褐色	長石大粒目 立って多 い。骨針含 む。器肉黒 色	底部 1/2	
8	1E-3コ゛ ウホリ No3・ホリ 4コ゛ウ No6	瓦質土器	焙烙	_	_	<0.75>	188. 5	やや上げ底気味。	粘土板叩き締め整形 か。内面に5本1単 位の櫛目3条が中央 で交差する。	優良	内外面 7.5YR3/3暗 褐色	長石大粒目 立って多 い。骨針含 む。器肉黒 色	底部破 片	
9	2-3=* ウ ポリ下層	瓦質土器	箱火鉢			<10.9>	219.8	底部の脚付の部分のみ。	下端の面取りへラ削り調整。	良好	内外面N3/0 暗灰色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。 器肉N6/0 灰色	底部破 片	
10	1E-3コ゛ ウホリNo5	陶器	擂鉢	_	(11. 5)	<7.4>	495.8	わずかに突出する底 部から全体として45 度に直線的に立ち上 がる。	回転台使用。左回転 糸切り離し無調整、 体下端削りなし。11 本1単位の櫛目が全 体に8条施される。	優良	特に外面は 7.5R3/2暗赤 褐色の錆 釉。内面・器 肉は5YR8/1 灰白色	褐色微粒子 若干含む。 精良。	底部 1/2	二次被熱 瀬戸・美濃産大 窯期ヵ
11	2-3ゴウ ホリ下層	陶器	志野菊皿	(12. 0)	(7. 1)	2. 75	29. 4	低い高台から25度角 で丸みを持って立ち 上がる。	ロクロ整形。削り出 し高台。花弁は丸ノ ミ削りで表現。	優良	内外面 2.5Y8/1灰白 色の透明釉	黒色粒子多 い。器肉も 同じ。	全体の 6/1	器面全体に柚子 肌 美濃産17世紀前 半
12	1W-2コ゜ ウホリ	陶器	志野折 縁皿	_	(7.9)	<2.2>	26. 7	直立する高台から緩 やかに体部に移行 し、口縁部で外反す る。	ロクロ整形、削り出し高台。	良好	内外面 7.5YR8/2乳 白色の志野 釉(貫入や や)	黒色微粒子 やや多い。 器肉N8/0灰 白色	底部 1/4	美濃産大窯第4 段階16世紀末葉
13	1E-3ポリ	陶器	丸皿		5. 9	<1.2>	54. 7	内反りの高台から灰 谷開く。	ロクロ整形。削り出 し高台。全面施釉。 高台内輪トチ痕。	優良	内外面N8/0 灰白色、見 込み10GY6/1 緑灰色の灰 釉	緻密。器肉 10YR7/2黄 橙色	底部の み	二次被熱 瀬戸・美濃産大 窯第4段階16世 紀末葉
14	1-3ゴウ ホリ一括	陶器	反り皿 カ		(5. 2)	<1.4>	22. 1	高台は内反りV字形 を呈す。	ロクロ整形。削り出 し高台。内面重ね焼 き高台痕あり。	優良	外面5YR7/1 明灰色の灰 釉	黒色微粒子 若干含む。 精良器肉 5YR7/2明褐 灰色	高台 1/3	二次被熱 17世紀中葉ヵ
15	1E-3ポリ	陶器	志野織 部丸碗		(4.5)	<4. 4>	26.8	高めの高台から半筒 状に立ち上がる。	ロクロ整形。削り出 し高台。	良好	全体N5/0灰 色の長石釉	黒色微粒子 若干。	体部~ 高台破 片	外面に蔓草文鉄 絵(7.5YR3/2黒複 色) 美濃産17世紀前 葉
16	1W-02 コ゛ウホリ	陶器	茶碗	_	(4. 9)	<1.95>	36. 2	内反り気味の高台から、緩やかに立ち上がる。比較的大形。	ロクロ整形。貼付高台。	優良	内外面 10YR8/1灰白 色の長石釉	黒色微粒子 若干含む。 精良器肉 N8/0灰白色	底部 1/2	美濃産17世紀初 頭ヵ
17	1-3ゴウ ホリNO4	木製品	漆椀	(16. 0)		<3. 75>	_	丸みの強い腰部から値 部は小さく玉縁状にな 程ヵ。		_	内外面 10R6/4赤色 の全面赤漆 塗り	酸化のため 2.5YR3/4暗 赤褐色を呈 する。	口縁~ 体部 1/3	
18	1E-3z [*] ウホリ上 面一括	瓦	平瓦	縦4.5	横4.9	厚 1.15	28. 5	厚さ1.1cmと薄く、ほ	とんど平ら。	良好	内外面N3/0 暗灰色	長石粒やや 多い。器肉 N8/1灰色	破片	加工円盤の可能性あり。



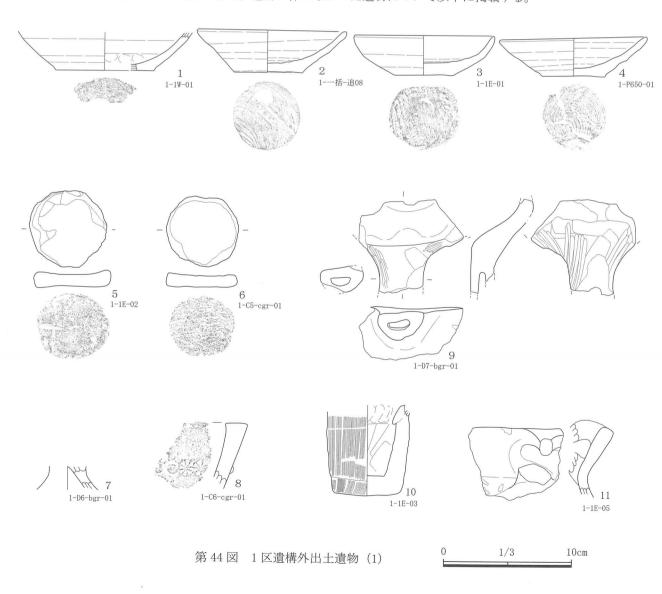
第24表 4号堀出土遺物観察表(1)

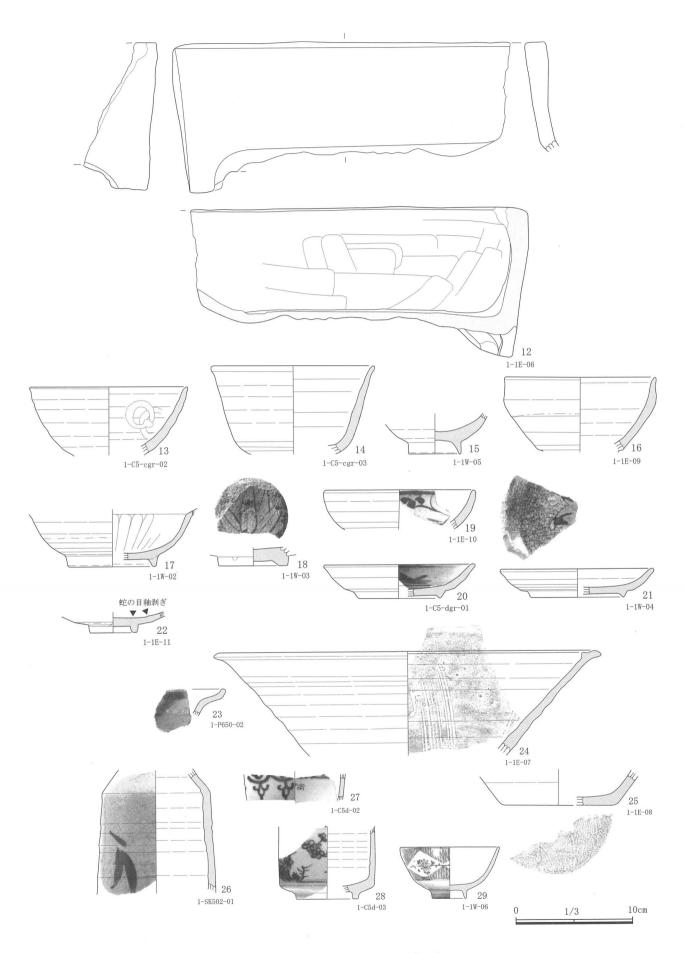
		4 方畑口							and and a state of the	Table - DS	A am	0/5 1	reto de reto	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	1佣考
1	1E-4コ゛ ウホリNo5	かわらけ	B類中 皿	11.0	4. 7	3. 1	151.6	底部は殆ど平らで、 体部は30度の角度で 直線的に立ち上が る。	ロクロ整形。右回転 糸切り離し後、体下 端無調整。内面に指 頭ナデみられる。	良好	全面 7.5YR6/4に ぶい橙色	長石・石英 粒、雲母微 粒子若干含 む。	ほぼ完 存	
2	1E-4ゴ ウホリー 括	かわらけ	A類豆 皿	5. 9	3.8	1.7	43. 7	体下端で45度で立ち 上がり、上半で丸く なる。	ロクロ整形。右回転 糸切り離し後、体下 端まで指頭ナデ。	良好	全面5YR7/8 橙色	長石大粒や や多い。雲 母若干含む。	完存	
3	1E-43° ウホリー 括	かわらけ	C類豆 皿	(5. 8)	3. 6	2. 05	10.8	平らな底部から60度 の角度で一気に立ち 上がる。	ロクロ水挽き成形。 調整不明。	良好	全面5YR6/4 にぶい橙色	含有物なく、緻密。	全体の 1/4	
4	1E-4ゴ ウホリー 括	焼締陶器	壺	12. 0	(12. 7)	<20. 2>	648. 4	直立する口縁部の口唇に窪みあり。緩やかに肩が張り、大きめの底部にいたる。	回転台使用。粘土紐 巻き上げ、全体にナ デ調整。	良好	内外面焼き 締め5YR3/4 赤褐色。灰 釉 (2.5Y6/6)	長石粒子多 い。器肉 5YR7/1	全体の 1/2	常滑産12型式16 世紀後半以降
5	1E-ホリ4 コ゛ウNo4	陶器	擂鉢	_	(9.9)	<6.05>	228. 3	平らな底部から、ほぼ45度に直線的に立ち上がる。	回転台使用。回転糸 切り離し後、底部〜 体半は回転へラ削 り。内面に13本1単 位の櫛目が10条ほど。	優良	内外面とも 7.5R3/2暗紫 褐色の鉄釉	褐色微粒子 若干含む。 精良。器肉 5YR8/1灰白 色	下半部 1/2	瀬戸・美濃産17 世紀
6	1E-4ゴ ウホリー 括	陶器	大鉢	2-	(16. 8)	<2.9>	53. 4	底部は輪条に削り、 30度弱の角度で立ち 上がり、中央付近か ら緩やかに丸みを持 つ。	ロクロ整形。削り込み高台。		内外面とも 7.5Y6/3オ リーブ黄色 の灰釉	黒色微粒子 若干含む。 密、器肉	底部破片	瀬戸・美濃産17 世紀初頭ヵ
7	1E-4ゴ ウホリー 括	陶器	志野丸皿	(11. 1)	(6. 9)	⟨2. 4⟩	20.3	高台との境に平面を 設け、腰部分に鎬が ある。深皿。	ロクロ整形。削り出し高台。	良好	内外面とも 10Y8/1灰白 色の長石 釉、貫入あり。	黒色微粒子 若干。やや 密、器肉	全体の 1/4	瀬戸・美濃産17 世紀初頭

第25表 4号堀出土遺物観察表(2)

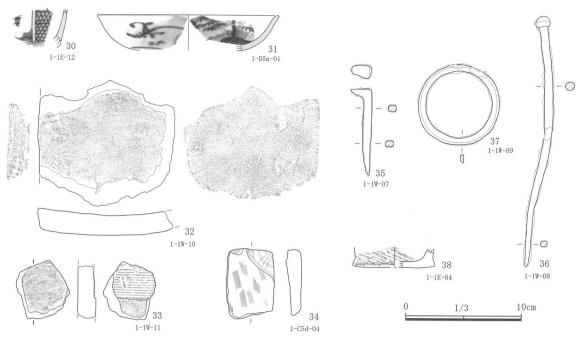
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
8	1E-42° ウホリ N07+ 括	陶器	天目茶碗	(11.8)	_	<4. 5>	51.1	穏やかな鼈口までは 40度ほどの角度で直 線的に立ち上がり、 口縁部は垂直に、口 唇で外反する。浅い 器形。	ロクロ整形。たっぷ りとした釉は、外面 下端のみ露胎。	優良	内外面とも 5YR3/2暗赤 褐色の鉄釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉5YR8/2 灰白色	体部 1/3	内面一部に灰被 りの青変。 瀬戸・美濃産17 世紀
9	1E-4コ* ウホリー 括	陶器	茶壺	(9. 0)	·	<16.6>	152. 6	球形に近い胴部から 頸部が垂直に立ち上 がる。口唇は玉縁を 呈す。頸部に圏線2 条。耳部は確認でき ない。	ロクロ整形。	優良	外面 2.5YR6/3に ぶい黄色の 灰釉が斑に 掛る。	白色粒子や や多い。器 肉5YR3/1紫 褐色	口縁部破片等	唐津産か16世紀 末葉~17世紀前 葉ヵ
10	1E-4ゴ ウホリー 括	磁器	青花碗	_	(4. 0)	<1.3>	12. 1	高台は鋭く薄く、底 部は平坦である。体 下端に丸みがみられ る。	ロクロ整形。削り出 し輪高台内外全面施 釉。高台下面のみ釉 剥ぎする。	優良	内外面とも 5Y8/1白色の 釉。	黒色微粒子 若干含む。 緻密。	底部 1/2	呉須 (明群青 色) の染付。見 込み宝尽くし文 カ、底部外面に 角福 (隷書体) 中国景徳鎮窯系
11	1E-4ゴ ウホリー 括	弥生土器	箑	_	_	<3.6>	13. 4	胴部中位。	全面細縄文。	良好	内面 7.5YR5/1褐 灰色、外面 被熱のため 黒斑。	長石微粒子 若干含む。 緻密、器肉	破片	後期北関東系

(2) 1 区遺構外出土遺物 (第 44 \sim 46 図 第 27・28 図版 第 26 \sim 28 表) 本地区において検出された遺物のうち、遺構に伴わなかった遺物について以下に掲載する。





第45図 1区遺構外出土遺物(2)



第46図 1区遺構外出土遺物 (3)

第26表 1区遺構外出土遺物観察表 (1)

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	1WNO5	土師質土器	大坏	口径	(7.8)	<2.9>	27. 3	突出した底部から浅 く広がり体下端から 碗状に立ち上がる。 内面底部に指頭痕が 残り、薄くなる。	ロクロ整形。切り離 し後、手持ちヘラ削 り、体部下端無調 整。	やや不良	内外面 5YR4/2暗灰 褐色	長石・雲母若干含む。	底部 1/5	
2	1W-No4	かわらけ	B類中皿	11. 4	5. 4	3. 4	125. 1	平らな底部から40度 角で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。静止糸 切り後、無調整。	良好	全体 7.5YR7/2明 灰褐色で、 一部赤変	雲母微粒子 若干含む。	完存	
3	1E	かわらけ	A類中 皿	10.8	4. 7	3. 1	97. 6	わずかに突出する底 部から全体として45 度に丸みを持って立 ち上がる。	ロクロ整形。糸切り離し後、一方向手持ちへラ削り。内底面にロクロ目明瞭。	良好	全面5YR6/6 褐橙色	長石・雲母 粒子若干含 む。	全体の 1/2	
4	1E- P650No 4	かわらけ	B類中皿	11.6	5. 0	2. 9	142. 5	突出した底部から30 度角で直線的に立ち 上がる。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、無調 整。	優良	全面 7.5YR6/6橙 色	雲母微粒子 若干含む。 精良。	ほぼ完存	
5	1E	かわらけ	中皿	縦5.9	横7.05	厚さ 1.2	55. 9	平らな底部。底部周辺打ち欠き。	ロクロ整形。切り離 し後、一方向の手持 ちヘラケズリ。	やや不良	全面5YR5/2 灰褐色	長石・雲母 粒子若干含 む。	底部のみ	加工円盤
6	1W-C5- C	かわらけ	中皿	縦5.4	横5.6	厚さ 1.1	30. 3	中央でやや窪んだ底 部。底部周辺打ち欠 き。	ロクロ整形。糸切り 離し後、無調整。敷 物痕あり。	優良	内外面 10YR8/2灰白 色	石英・黒色 粒子・雲母 若干含む。	底部のみ	加工円盤
7	1E-D6- b 一括	かわらけ	小皿	_	_	<1.8>	18.8	接合部〜脚部の資料。脚はラッパ状に開くものヵ。	ロクロ整形。底部の観察できず。	良好	全面 7.5YR6/8橙 色	長石大粒多 く、軟質。	脚部 1/3	
8	1E-C6- c 一括	土師質土 器	箱火鉢	_	_	<5. 2>	34. 1	70度で、直線的に立 ち上がり、口唇部分 は平坦となる。	板造りヵ。口唇から 3.5cm下に直径13mm の8弁の印花文と浮 珠文の組み合わせ。	不自		長石粒多 い。器肉 N4/0灰黒色	口縁部破片	
9	1E-D7 - b 一 括	土師質土 器	十能	縦 (7.4)	横 (8. 2)	<4. 0>		体部に丸みあるわず か5cm弱の深さで、 3.5cm幅の把手が付く。	手捏ね整形ヵ。内面 に指頭痕が連続的に 残る。	良好	10R2/1赤黒 色	長石・石 英・雲母粒 子を含む。 器肉 7.5YR5/6明 褐色	把手付近破片	
10	1E一括	土師質土 器	焼塩壺	-	5. 2	<7.0>	154. 9	底はわずかに丸く、 円筒状を呈す。	手捏ね整形。外口縁 部横ナデ。			砂粒・長石 粒多く含 む。	全体の 2/3	,

第27表 1区遺構外出土遺物観察表(2)

为 4	7 表	1 区遺	再クト山	上退书	が既然	10 (4	2)							775 - 64
番号	注記 1E一括	種類 瓦質土器	器種 内耳鍋	口径	底径	器高 <5.7>	重量 71.7	器形の特徴 直立する胴部から60 度ほど直線的に外反 する。内口縁部に把 手が1つつく。	整形の特徴 整形不明。ところど ころに指頭圧痕残 る。	<u>焼成</u> 良好	色調 内外面 5YR4/1暗褐 灰色	胎土 雲母微粒子 やや多い。 器肉5YR7/2 明褐灰色 で、芯は灰 黒色	残存度 口縁部 破片	備考
12	1E	瓦質土器	箱火鉢			<11.6>	754. 1	四足の付く、深さ 7.5cmほどの火鉢の 一側面。表面には凹 凸なし。	割れ方から、側板と 底部を組み合わせて いるようだ。足は整 形後に付け足してい る。	良好	内外面5Y4/2 オリーブ黒 色	長石粒・雲 母微粒子・ 白色針状物 質を含む。 器肉黒色	一側面 のみ	
13	1W-C5- C	陶器	志野鉄	(12. 3)	_	<5. 3>	61. 2	ロ唇でわずかに外反 する井戸茶碗形	ロクロ整形。	良好	内外面 2.5Y8/2灰白 色の長石釉 たっぷり。	黒色・赤色 粒子若干含 む。器肉		内面に輪連鎖の 鉄絵(2.5YR3/3階 赤褐色) 美濃産17世紀
14	1W-C5- C	陶器	端反碗	(12.6)	_	<6.8>	99. 1	ロ唇でわずかに外反 する深い井戸茶碗形	ロクロ整形。	優良	内外面 10GY7/2明緑 灰色の灰釉	黒色・長石 粒やや多 い。	口縁部 1/4	瀬戸・美濃産
15	1W	陶器	丸碗		4. 0	<3. 15>	81. 7	高さのある直線的な 高台に典型的な丸い 体部が続く。	ロクロ整形。厚みの ある削り出し高台。 全面施釉、畳付拭取 り。重ね焼きのアル ミナ粒残る。	優良	内外全面 2.5Y7/4浅黄 色の灰釉	狭雑物なく 肌理細か い。器肉 2.5Y8/2灰 白色	下半部	畳付釉拭き取り 唐津産呉器手ヵ
16	1E	陶器	天目茶碗	(11.8)	_	<5.8>	34. 6	直立に近い口縁部から1.8cm下に柔らかい鼈口がみられる。	ロクロ整形。体下半は丁寧な回転へラ削り。高台は削り出し。	優良	内面・外上 半5YR4/3に ぶい赤褐色 の鉄釉	長石・石 英・黒色微 粒子を含 む。器肉 10YR8/1灰 白色	体部破片	瀬戸・美濃産17 世紀前半
17	1W+ SK502	陶器	総織部折縁鉢	_	(6.7)	<4.5>	24.7	高台からすぐに、碗 状に広がり、口縁で やや幅広く折れる。 内面は一面に連弁状 に丸ノミで削られ る。	ロクロ整形。貼り付け高台はU字を呈し、体下端に強いロクロ痕を残す。	良好	内面及び外 上半分 7.5GY4/1暗 緑灰色の緑 釉外下半分 5Y6/1灰色の 灰釉	褐色・黒色 微粒子若干 含む。器肉 7.5Y8/2灰 白色、肌理 細かい。	体部~ 底部 1/5	畳付使用摩滅著 しい。二次被款 美濃産
18	1W	陶器	志野鉄		5. 4	<1.4>	36. 1	幅広の削り出し高台のみ。	ロクロ整形。	良好	内面 7.5YR8/3浅 黄橙色、外 面7.5YR8/1 灰白色の長 石釉	長石微粒子 若干含む。	底部	内面笹の葉文鋭 絵(7.5YR4/1) 美濃産
19	1E	陶器	志野鉄	(12.7)		<3. 05>	10.6	比較的深い皿で、お そらく削り出し高台 であろう。	ロクロ整形。	優良	内外面 2.5Y8/1灰白 色の長石釉	黒色微粒子 を含む。器 肉乳白色	口縁部	内面圏線+草文 鉄絵(10YR3/3) 美濃産17世紀前 半
20	1E-C5- d一括	陶器	志野鉄	(11.2)	(6. 5)	<2.6>	35. 4	小形の高台がつき、 体部に鋭い調整痕に よる稜が2段残る。	ロクロ整形。浅い削り出し高台。体部回転へラ削り2段あり。	良好	内外面 2.5Y8/1灰白 色の長石釉 がたっぷ り。	褐色微粒子 若干含む。	全体の 1/5	内面に圏線+専 文鉄絵(2.5YR4 赤褐色) 瀬戸・美濃産1 世紀前半
21	1 W	陶器	鉄絵皿	(11.9)	(7. 2)	2. 2	31.3	浅い高台に体下端は 平らとなり、30度ほどの角度で立ち上が り、中間で丸みを帯び、口縁でさらに開 く。	低い削り出し高台。 内外面にトチン痕各	良好	内外面 2.5GY5/1オ リーブ灰色 の長石釉。 貫入あり。 (7.5YR4/3)	石英粒子や や多い。器 肉5Y4/1黒 灰色	全体の 1/4	内面蘭竹文鉄約 (7.5YR4/3褐色 二次被熱 美濃産17世紀前 半
22	1E	磁器	銅緑釉 蛇の目 釉剥ぎ 皿	_	<3.7>	<1.6>	22. 2	削り出し高台。体下 端は平らに開く。	ロクロ整形。体下端は丁寧な放射状ヘラ削り。高台露胎。内面蛇の目釉剥ぎ。	優良	内面10G5/1 緑釉、外面 灰釉素地 2.5Y7/1灰色	非常に堅緻。器肉は薄い。	底部破片	二次被熱 唐津産17世紀後 半(1650~169 年代)
23	1E- P650	陶器	黄瀬戸鉢	-	_	<2. 2>	9. 1	口唇を摘みあげる。	ロクロ整形。内面緑 釉(10GY3/1)流し。	良好	内外面 2.5Y8/2灰白 色の黄瀬戸 釉	密。器肉 2.5Y8/1白 色	口縁部破片	瀬戸・美濃産1 世紀中葉
24	1E	陶器	擂鉢	(31. 7)		<8.7>	126.8	ほぼ45度に直線的に 立ち上がり、口唇内 部に折り返し突帯が 巡る。	ロクロ整形。胴中央 に明瞭なロクロ目あ り。10本1単位の櫛 目で、全面で6条ほ ど擂り目。	良好	内外面 7.5R3/2暗紫 褐色の鉄釉	黒色微粒子 を含み、器 肉2.5YR7/2 明赤灰色	口縁部破片	瀬戸・美濃産 窯第4段階16世 紀末葉
25	1E一括	陶器	擂鉢		(9. 7)	<3.0>	77.3	平らな底部から、ほぼ45度に直線的に立ち上がる。		良好	外底面 7.5R3/2暗紫 褐色の鉄釉 内面 7.5YR8/2灰 白色	黒色微粒子 を含み、器 肉乳灰白色	底部 1/6	内面擂り目磨 滅。 瀬戸・美濃産ラ 窯期

第28表 1区遺構外出土遺物観察表(3)

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	: /
26	1W- SK502	陶器	志野鉄 絵徳利	_		<10.4>	156.3	下膨れの胴部に、緩 やかにすばまる肩部 が残る。		優良	世嗣 外面5Y8/3淡 黄色の志野 釉に貫入あ り。	馬上 黒色微粒子 含む。器肉 5Y8/2灰白 色	胴部破片	胴部に植物文鉄
27	1-EC5- d一括	磁器	染付碗	_		<2.5>	8. 7	体部が垂直に近く半 筒形となる。	ロクロ整形ヵ。	優良	内外面N8/0 灰白色の透 明釉	精良。器肉白色	体部破片	呉須(群青色) で内面四方襷文ヵ 肥前系18世紀中 葉~19世紀初頭ヵ
28	1-EC5- d一括	磁器	染付筒 形碗		(5. 3)	<6. 2>	36.8	高台から平らに伸び て体中央がわずかに 丸みを持つ筒形。	ロクロ整形。削り出 し高台面に砂目わず か残る。全面施釉、 畳付釉拭取り。	優良	内外面 5GY8/1淡青 白色の透明 釉	精良。黒色 粒子若干含 む。	体部 1/5	呉須(群青色) で梅文 肥前系17世紀前 葉(1610~1630 年代)
29	1W一括	磁器	染付小碗	8. 4	2.9	4. 4	70. 7	垂直に立ち上がる高 台に典型的な半球形 の体部。	高台に重ね焼きの砂 目が残る、左右対称 となる。	優良	内外面N8/1 灰白色	わずかな灰 白色 (N8/0)	全体の 3/4	外面5単位の摺 り絵。 瀬戸・美濃産19 世紀末葉以降
30	1E	磁器	染付八 角旬干 形鉢			<3.3>	8. 1	六角の一隅のみ。80 度の角度で直線的に 立ち上がる。	ロクロ整形。内面にロクロ目残る。	優良	内外面とも 5GY8/1灰白 色釉	緻密。黒色 粒子若干含 む。	体部破片	外面呉須描き、 籠目文、「寶」字ヵ 肥前系18世紀末 葉~19世紀中葉 (1780~1860年 代)
31	1W-D5- a	磁器	染付小皿	(15. 4)		<3.0>	11.8	体部全体に丸みが強く、口唇のみ反り返る。	ロクロ整形。	優良	内外面 2.56Y8/1灰 白色の透明 釉	黒色微粒子 を含む。器 肉白色	体部破片	具須(群青色) で 内面竹文、外面 信草文 肥前系17世紀末 葉~18世紀後葉 (1690~1780年 代)
32	1W	瓦	平瓦	長 (10.5)	幅 (11.8)	厚さ 1.7	272. 7	比較的大きな平瓦。	木型1個造りの可能 性あり。	良好	表面5Y3/1オ リーブ黒色	長石・雲母 若干含む。 器肉5Y7/1 灰白色	残片軽量	
33	1W	瓦	栈瓦	縦4.3	横4.6	厚さ 1.2	32. 2	平瓦の一部。	造り方不明。裏面に 滑り止めのスリット あり。	良好	表面N3/0暗 灰黒色	長石・雲母 若干含む。 器肉 7.5Y6/1灰 色	残片	丸に一字の押し型 19世紀以降
34	1-EC5- d一括	石製品	砥石	縦 (6.0)	横4. 15	厚さ 1.3	39. 7	使用面は一面のみ、『 げ砥と思われる。	厚さと幅からみて、提		全面10YR8/3 浅黄色	_	約半 分ヵ	凝灰岩質
35	1W	鉄製品	角釘	長7.5	最太 1.0 (頭頂 部)	先端 0.1	20.6	2寸強の基本的には 8mm角の釘で、頭は 直角に打ち折れてい る。	鍛造品	_	全体に、 5YR2/1黒褐 色		完存	
36	1W	鉄製品	火箸	長21.3	最太 0.7	先端 0.3	46. 6	頭端1.5cmの球形をなし、あまり太さを変えることなく、先端のみ尖る。	鍛造品		全体に、 5YR5/6明褐 色		完存	
37	1W	鉄製品	輪	外径 7.0	内径 5.5	太さ 0.7 厚さ 0.3	20. 1	輪は全周し、切れ目 はない。内側が厚 く、外縁は尖る。	鍛造品	-	全体に、 5YR4/4にぶ い赤褐色	_	ほぼ完 存	
38	1E一括	弥生土器	壺		<6.7>	<1.6>		平らな底部から垂直 に立ち上がる。	粘土紐巻き上げ整 形。外面付加条第1 種縄文。底面木葉 痕。	良好		長石・雲母 粒子含む。	底部破片	後期北関東系

第3節 2区 「第1面]

1区とともに、古絵図から武家屋敷の存在が想定されていた2区の遺構構築時期は、整地面を挟んで上面である1面と下面である2面に大別される。第2面の遺構は2号堀、SD251、竪穴状遺構1基(SX2)で、それ以外は第1面の遺構である。

第1面の遺構には、掘立柱建物跡 4 棟 (SB01 \sim 04)、柵列 4 条 (SA10 \cdot 12 \sim 14)、井戸 6 基 (SE01 \cdot 05 \cdot 06 \cdot 16 \cdot 17 \cdot 18)、池 (SX1)、土坑 6 基 (SK100 \cdot 106 \cdot 115 \cdot 116 \cdot 139 \cdot 652)、溝 1 条 (SD001)、ピット多数が検出されている。

(1) SB(掘立柱建物跡)

SB01 (第 48 ~ 50 図 第 8 · 9 · 28 図版 第 29 ~ 31 表)

①位置・重複: F12-a ~ d、F13-c、G12-a・b、G13-a に位置する。 SE01 に切られる。

②形状・規模・覆土:掘方を伴う掘立柱建物跡である。桁行は 北と南で4間のP14・P40の存在より総柱と判断した。桁行の柱間 は、北がP03~06までの各柱間は1.97 m、P06・07は2.18 mを 測り、合計8.09 mとなっている。北と同様に、南のP11~13 およ びP13・01の柱間も1.97 m。P10・11間は2.18 mを測り、合計8.09 mとなっている。妻側の柱間は西と東で異なり、西が2間で東が3 間の側柱である。妻側は、西でP01・02間およびP02・03間で各2.80 mの合計5.60 m、東はP07~10までの各柱間で各1.87 mを測り、 合計5.61 mとなっている。柱穴の規模は第29表に示す通りである。 柱穴は46~130 cmのものがあり径は60~90 cmが多い。深さは50 ~72 cmのものがあり50~60 cmのものが主体となる。柱の痕跡を 示すピットはP02・03・05・06・11・12 があり、木質が残存するも のはP02・03 である。裏込めは、P03の2~4層、P07の2~5層、 P05の3・4層、P06の2・3層、P11・12 があり、黒色土となっている。

③長軸方向: N-22°-W

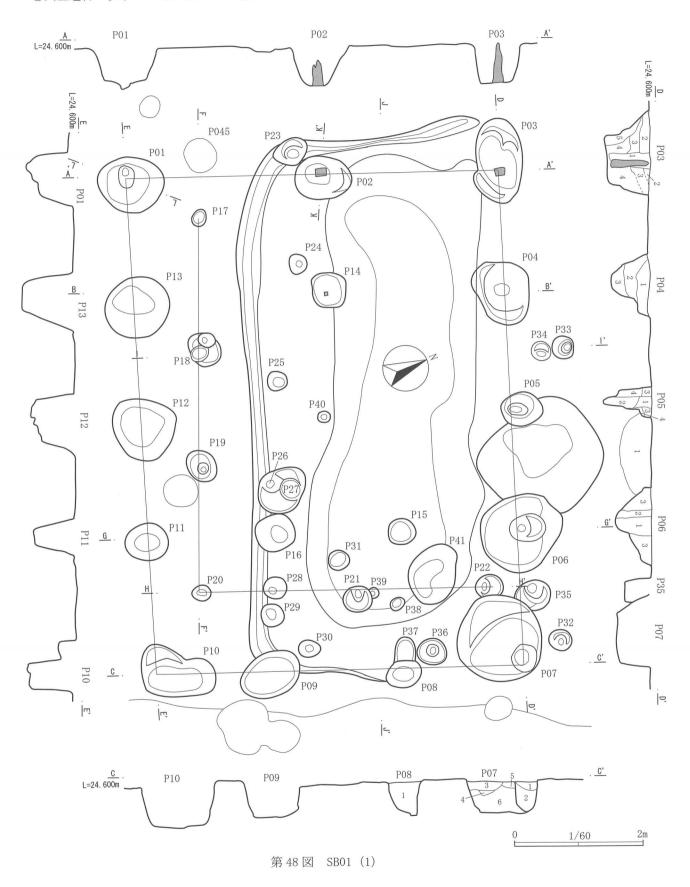
④施設(掘方): 東壁際から南壁際を通り西壁際に抜ける壁周溝は、幅 $10 \sim 35$ cm、深さ最大 12 cmを測る。次に掘立柱建物跡の桁行に沿う形状で 7.75 m× 2.65 mの東西に長い不整楕円形の掘方が存在する。また 185 cm× 165 cm、 130 cm× 115 cmといった土坑状の掘方も存在し、 $P05 \cdot P06$ といった掘立柱に切られている。また側柱のすぐ内側に、 $1.90 \sim 2.10$ mの間隔で並ぶピット $P17 \sim 22$ の7基がある。それは P17 に始まって、掘立柱建物跡の桁行南側の内に沿って東に向かい、P20 で L 字に折れ曲がり、妻側西の内を北に向かって P22 に至る。これらピットは長径 $18 \sim 54$ cmの円~楕円形で、深さは $17 \sim 47$ cmである。底部標高は $23.98 \sim 24.24$ mである。その他のピットは $P23 \sim 41$ があり、大半が周溝の内側に存在し、周溝に沿って並んでいるものもある。長径は $18 \sim 96$ cmで概ね 30 cm前後の円形~楕円形ピットで、深さは $7 \sim 64$ cmで概ね 30 cm前後の円形~楕円形ピットで、深さは $7 \sim 64$ cmで概ね 30 cm前後の円形~楕円形ピットで、深さは $7 \sim 64$ cmで概ね 30 cm前後を測る。

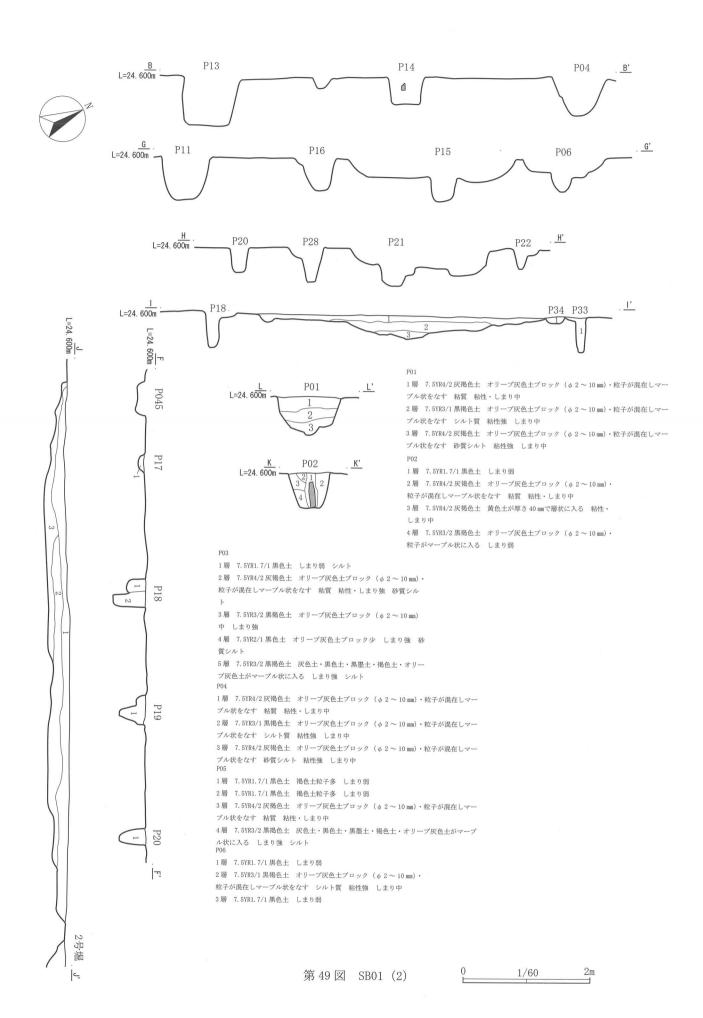
第29表 SB01ピット計測表

P番号 旧番号 長径 短径 深さ 底部標高 備 ³ (cm) (cm) (cm) (cm) (cm) (m) (m)	::
P02 SB01-P02 80 62 60 24.04 木質残存 P03 SB01-P03 127 68 62 23.98 木質残存 P04 SB01-P04 102 90 56 24.05 P05 SB01-P05 65 50 66 24.00 P06 SB01-P06 118 110 52 24.08 P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切 P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	: :を切る
P03 SB01-P03 127 68 62 23.98 木質残存 P04 SB01-P04 102 90 56 24.05 P05 SB01-P05 65 50 66 24.00 P06 SB01-P06 118 110 52 24.08 P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切 P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	: :を切る
P04 SB01-P04 102 90 56 24.05 P05 SB01-P05 65 50 66 24.00 P06 SB01-P06 118 110 52 24.08 P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切り P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	を切る
P05 SB01-P05 65 50 66 24.00 P06 SB01-P06 118 110 52 24.08 P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切 P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	
P06 SB01-P06 118 110 52 24.08 P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切り P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	
P07 SB01-P07 130 130 52 24.10 P22、P38 P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切り P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	
P08 SB01-P08 54 42 53 24.04 P37を切 P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	
P09 SB01-P09 96 66 50 24.01	<u></u> る
P10 SP01-P11 106 80 63 23 88	-
110 3001 111 100 00 03 25.00	
P11 SB01-P12 62 56 55 23.92	
P12 SB01-P13 94 88 62 23.83	
P13 SB01-P14 98 88 76 23.76	
P14 SB01-P15 53 46 44 24.06 木質残布	=
P15 42 42 32 24.03	
P16 66 60 31 24.12	
P17 P047 20 24 21 24.24	
P18 P041 54 42 49 23.98	
P19 P038 54 42 45 24.07	
P20 P031 30 24 37 24.14	
P21 P024 42 42 33 24.16 P39を切	 る
P22 P025 42 36 47 24.04 P07に切	
P23 P049 48 40 40 24.08	
P24 P168 30 24 17 24.00	
P25 30 30 58 23.85	
P26 18 12 36 23.88	
P27 30 24 24 24.20	
P28 36 36 31 24.11	
P29 P167 42 36 48 23.96	
P30 P021 40 40 27 24.16	
P31 P081 30 30 29 24.20	
P32 P027 36 30 29 24.22	
P33 P039 36 30 62 23.89	
2007-17	られス
100 100 100 100 100 100 100 100 100 100	
P36 P112 48 42 47 24.04	ト レッ
P37 P113 42 38 19 24.33 P08に切	りれる
P38 P030 24 18 7 24.41	A 1. "
P39 18 18 40 23.93 P21に切	られる
P40 18 18 7 24.32	
P41 96 72 21 24.10	



⑤出土遺物:以下に12点の図および観察表を示した。





P07

1 層 7.5 YR4/2 灰褐色土 オリープ灰色土プロック(ø 2 ~ 10 mm)・粒子が混在しマーブル 状をなす 粘質 粘性・しまり強

2 層 7.5 VR3/1 黒褐色土 オリープ灰色土プロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子が混在しマーブル 状をなす シルト質 粘性・しまり強

3 層 7.5YR4/2 灰褐色土 オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm) ϕ 粘質 粘性・しまり 確

4 層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性・しまり強

6 層 7.5YR4/3 褐色土 粘性・しまり強

P08

1層 7.5YR2/1 黒色土 (砂質) 黄色土ブロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子少 粘性中 しまり強

P17

1層 7.5YR1.7/1黒色土 黄色土プロック (φ2~10mm)・粒子少 粘性強 しまり弱

P18

1層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ 2~10 mm)・粒子中 粘性・しまり強

2層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子多 粘性・しまり強

P19 · P20

1 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子中 炭化物少

P033

1 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子多 粘性・しまり強

P034

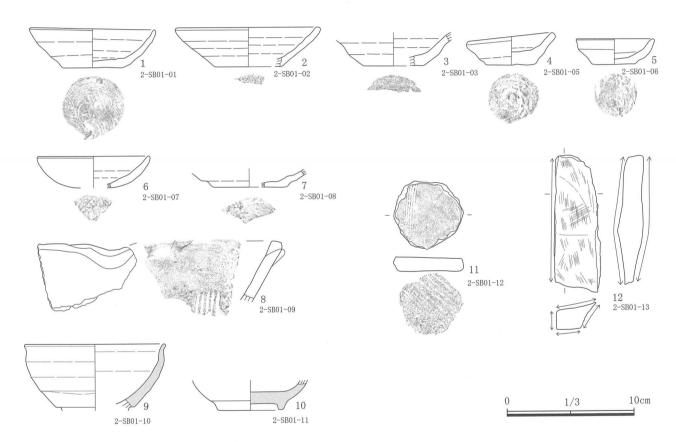
1層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子少 粘性・しまり強

掘り方

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子少 酸化鉄多

2層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子中 炭化物少

3 層 7.5YR3/4 暗褐色土 黄色土ブロック (φ2~10 mm)・粒子多 (マーブル状)

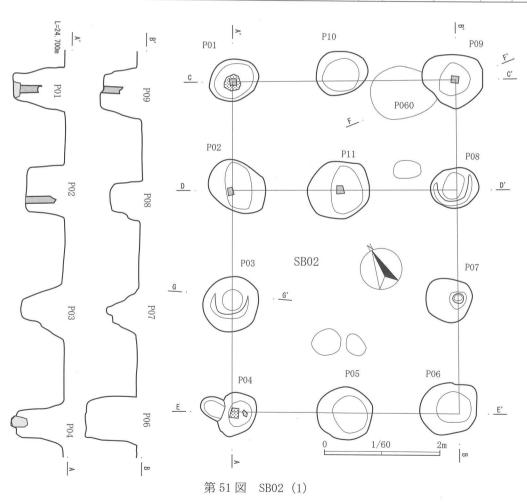


第 50 図 SB01 出土遺物

第3	0 表	SB01 出	土遺物	観察	表 (1)									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2- SB01No 3	かわらけ	A類中 皿	9. 7	4. 7	3. 1	86. 9	突出する底部に35 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 無調整。	優良	全体 2.5YR6/8赤 橙色	雲母微粒子 若干含む。	完存	
2	2-SB- P10	かわらけ	B類小 皿	10.0	(5. 1)	3. 1	19.6	30度ほどの角度で 大きく開く。	ロクロ整形。	良好	全体5YR6/8 橙色	雲母微粒子 若干含む。	口縁部 の1/4	
3	2-SB01 ホリカタ	かわらけ	A類中 皿	-	(4.8)	<2.6>	21.1	平らな底部から40 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。	やや 良	全体 7.5YR7/6橙 色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。	底部の 1/4	
4	2-SB- p6-1	かわらけ	A類小 皿	6.6	3. 9	2. 2	48.6	やや突出した底部 から40度角で緩や かに立ち上がり、 口縁部でさらに開 く。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 手持ちヘラ削り調 整。	優良	全体 10YR8/2灰 白色	緻密。 雲母若干含 む。	全体の 3/4	

第 31 表 SB01 出土遺物観察表 (2)

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
5	2- SB01No 1	かわらけ	A類豆 皿	6. 1	3. 2	2	40. 4	やや突出する底部 から65度角で立ち 上がり、口縁部で 直立する。	ロクロ整形。	良好	全体 7.5YR7/2明 褐灰色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。	完存	灯明油皿に転 用、灯心油痕 1か所確認。
6	2-SB01 ホリカタ	かわらけ	A類小 皿	(8. 9)	(3.0)	2. 4	12. 4	平らな底部から35 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。	良好	全体5Y6/1 灰色外面一 部5Y7/2灰 黄白色	白色大粒若干含む。	口緑部 1/6	坩堝に転用
7	2-SB01 ホリカタ	かわらけ	A類小 皿	_	(5.8)	<1.4>	12. 4	突出する底部から 35度で立ち上が る。	ロクロ整形。	良好	全体5Y6/1 灰色	白色微粒子 若干含む。	底部の 1/4	坩堝に転用
8	2-SB01 ホリカタ	土師質土 器	片口擂 鉢			<4. 7>	53. 5	45度角で直線的に 立ち上がる。	回転台使用。片口 は指頭圧痕。5本 1単位の櫛目。	良好	内外面 10YR5/3に ぶい黄褐色	雲母微粒子 若干含む。 器肉10YR4/6 淡褐色	口縁部破片	
9	2-SB- p6-— 括	陶器	天目茶 碗	(10.0)		5. 5	35. 5	高台から70度角で 丸みを持って立ち 上がり、鼈口から 垂直となり、口唇 は外反する。	ロクロ整形。削り出し高台。体部下端回転へラ削り調整。	優良	7.5YR2/1黒 色と 7.5YR4/4褐 色の鉄釉	黒色微粒子 若干含む。 露胎・器肉 2.5Y8/1灰 白色	口縁部 1/8	瀬戸・美濃産 17世紀前半
10	2- SB01No 2	陶器	丸碗	_	5. 1	<2. 3>	89. 3	内反り高台から半 球状に広がる。	ロクロ整形。高台 内に輪トチ痕あ り。		内外面淡緑 色の灰釉	器肉N8/0灰 白色	底部のみ	瀬戸・美濃産 大窯期ヵ
	2-SB- P13— 括	土製品	加工円盤	縦5.4	横5.4	厚 1.15	36. 1	円形に打ち欠き整形。 外面スダレ状圧痕ヵ。	内面ハケ目あり。	良好	内外面 2.5YR2/3極 暗褐色	白色粒子や や多い。器 肉2.5YR7/6 橙色	完存	土師質土器 (調理具・暖 房具類)の底 部転用か。
12	2-SB- p6-— 括	石製品	砥石	縦 (10.5)	横3.7	厚1.9		長軸断面山形。表裏 左面を主に使用。	右面に鋸目残る。		5GY8/1オ リーブ灰白 色	_		擬灰岩製。鎌砥 石。



SB02 (第 51 ~ 53 図 第 9 · 10 · 28 図版 第 32 · 33 表)

①位置・重複: F11-b・d、F12-a に位置する。ピット P060 を切る。

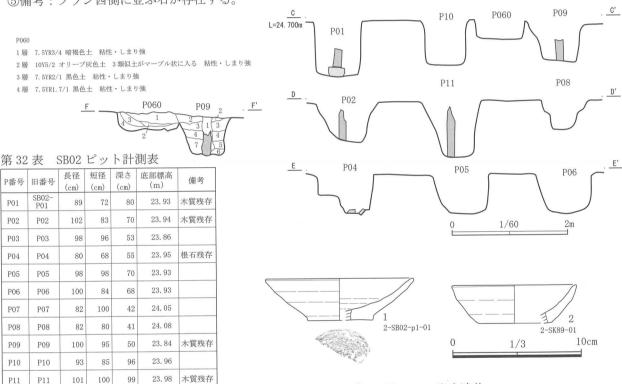
②形状・規模・覆土: 妻側 2 間、桁行 3 間の総柱である。妻側は北の P01・09・10 の各柱穴間で 1.95 m、合計 3.90 m。南側 P04・05・06 の柱穴間も同様の距離を測る。桁行の柱間距離は、西が P01・02 間および P02・03 間で 1.93 m、 P03・04 間で 2.06 m、合計 5.92 m。東側 P06 ~ 09 も同様の距離を測る。柱穴の平面形状と規模は、80 ~ 102 cmの 平面円形~楕円形で、深さは 41 ~ 99 cmを測り 50 ~ 80 cmが多い。

柱穴 P01・02・09 からは角柱が底部に、P11 からは柱材の痕跡を示す木質が覆土中に、P01・04 からは根石が底部で 検出されている。角柱の幅はP01が12.5cmを測る。柱穴の裏込めは、P09でオリーブ灰色土と暗褐色土の互層第2 ~7層で構成される。

③長軸方向:N-65°-E

④出十遺物:以下に図・観察表を示した。

⑤備考:プラン西側に並ぶ石が存在する。



SB02 出十- 書物組 寂実

101

P11

P11

NI O	3 衣	SB02 III					100000000000000000000000000000000000000		the med an electric	14-15	/r. =103	胎土	残存度	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	加工	%行及	加与
1	2- SB002- P1	かわらけ	A類中 皿	(11. 6)	(5. 1)	3. 35	35. 6	突出した底部から 40度角で緩やかに 立ち上がる。	ロクロ整形。回転 糸切り離し後、無 調整カ。	優良	全体 7.5YR8/3浅 黄橙色	白色雲母微 粒子若干含 む。	全体の 1/6	
2	2-SK89	かわらけ	A類小 皿	(9.6)	(5. 6)	<3.0>	8. 1	全体に丸みのある体部。	ロクロ整形。	良好		雲母微粒子 若干含む。	口縁部破片	坩堝に転用

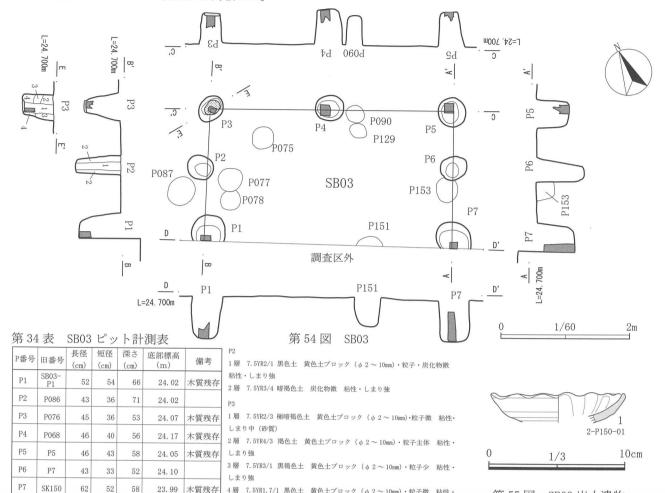
第 53 図 SB02 出土遺物

SB03 (第 54 · 55 図 第 10 · 11 · 28 図版 第 34 · 35 表)

①位置: F11-c・d、G11-bに位置する。プランの南側は調査区外である。

②形状・規模・覆土:現形状から桁行2間、妻側2間で、柱7基のうちP1・3・4・5・7が主柱、P2・6が支柱と 推定される。桁行と判断される西の P1・2 間で 1.00 m、P2・3 間で 1.00 mとなり、東の P5・6 間で 0.98 m、P6・7 間で 1.20 mとなる。他方、妻側と判断される北は、P3・4 間が 1.80 m、P4・5 間が 1.98 mとなる。太さ 12 \sim 18 cm の角柱が P1・3・4・5・7 から検出されている。現形状から南北に長い長方形プランと推定される。裏込めは P2 の暗 褐色土である2層、P4の極暗褐色土~黒色土である2・3層、P7の黒色土である2層からなっている。

- ③長軸方向: N-27°-W
- ④施設:東西にピットが並んだ柵列 SA10 が北側に位置している。
- ⑤出土遺物:以下に図・観察表を掲載した。



第 35 表 SB03 出十遺物観察表

62 52 58

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の形徴	整形の形徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2-P150	陶器	志野菊皿	(9.8)	_	<2.1>	14. 7	口唇に輪弁を粗く 削り込む。	ロクロ整形。内面 丸ノミで花弁を表 現。	良好	全体5Y8/1 灰白色の長 石釉	黒色微粒子 若干含む。	口縁部破片	瀬戸・美濃産大 窯第4段階ヵ16 世紀末葉。

4層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土プロック (φ2~10mm)・粒子微 粘性・

SB04 (第56 図 第11 図版 第36 表)

①位置: G12-a・b に位置する。桁行は調査区 外にあるため詳細不明である。

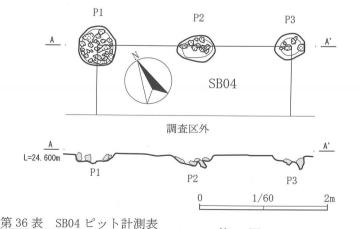
23.99

木質残存

②形状・規模・覆土: 妻側2間である。P1・2 及び P2・3 間は 1.50 mで合計 3 mを測る。各ピッ ト内には、地山上に直接礫を置いた状態の根石が 多量に検出されている。根石のみの検出だが 現形状から礎石建物の可能性が考えられる。P2 から形状不明の柱材が検出されている。

③長軸方向: N-62°-W

④出土遺物:礫のみであった。



第 55 図

SB03 出土遺物

SB04 ピット計測表 長径 短径 深さ 底部標高 P番号 旧番号 (cm) (cm) (cm) (m)

P1 P205 65 24.44 56 15 60 46 14 24. 28 P203 48 42 24. 48

第 56 図 SB04

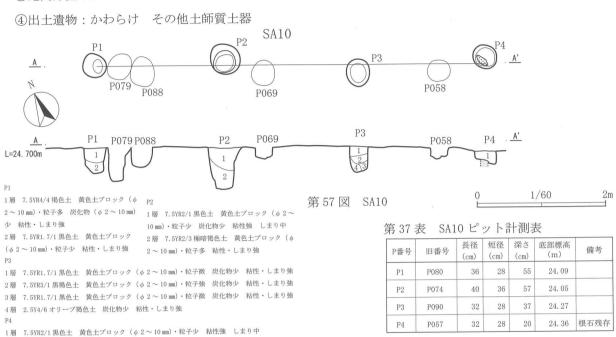
(2) SA (柵列)

SA10 (第 57 図 第 37 表)

①位置・重複: F11-c・d に位置する。

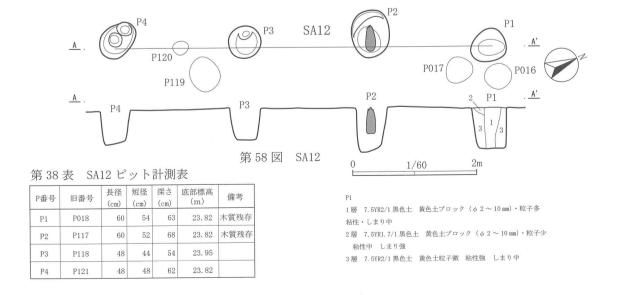
②形状・規模・覆土: 長径 $32~\text{cm}\sim40~\text{cm}$ の平面円形~楕円形ピット $P1\sim4~\text{o}$ 4 基で構成され、深さ $20~\text{cm}\sim57~\text{cm}$ 、底部の標高は $24.05~\text{m}\sim24.36~\text{m}$ を測る。杭の間隔は $P1\cdot2~\text{間が}$ 1.98~m、 $P2\cdot3~\text{間及び}$ $P3\cdot4~\text{間が}$ 2.04~mを測る。 $P4~\text{では底部に根石が設置され、丸杭が残存する。 覆土は黒色土の単層によりなる。$

③ 走向方位: N-68°-W



SA12 (第 58 · 59 図 第 28 図版 第 38 · 39 表)

①位置・重複: F13-b、G13-a に位置する。整地面で埋められた 2 号堀に沿って南北に並んでいる。P122 を切る。②形状・規模: 長径 48~60 cmの平面円形ピット P1~4の4基で構成され、深さは 54~68 cm、底部の標高は 23.82~23.95 mを測る。杭の間隔は P1・2 間 1.92 m、P2・3 間が 1.92 m、P3・4 間が 1.90 mを測る。P2 には径 15 cm、杭基部が出土している。



③走向方位: N─31° ─E

④出土遺物:以下に図および観察表を示した。



第 39 表 SA12 出土遺物観察表

	9 1	SHIZ III		/ 世儿 为下。	18									
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2-P117	かわらけ	A類小 皿	7.8	4. 5	2. 15	60.9	平らな底部から40 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 無調整。	良好	全体 10YR8/3浅 黄色	褐色微粒子若干含む。	完存	3.11
2	2- SK117	かわらけ	C類小皿	6. 2	4.5	1.85	37. 1	わずかに突出気味 の底部から60度角 で直線的に立ち上 がる。歪みあり。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 手持ちヘラ削り調 整。	優良	全体 10YR7/3に ぶい黄橙色	雲母微粒子 若干含む。	完存	
3	2- SK121	陶器	花生		_	<12. 4>	119.6	下半部でわずかに すぼまる胴部に大 きな頭がつく。頭 部に穿孔あり。	回転台使用。内面 にロクロ目の凹凸 顕著。胴部外面削 り、丸ノミ削ぎ、 長石釉流し掛け。	優良	内面・外面 一部5GY8/1 緑白色の灰 釉	黒色粒子若 干含む。 器肉N8/0白 色	胴部の 1/4	頸部穿孔に鉄付着、壁掛け金具 痕跡カ。 美濃伊賀花生 美濃産17世紀初 頭
4	2-SK18	土師質土 器	焙烙	(21. 2)	(17. 9)	4	64. 4	4cm弱と浅く、体 部に丸みある。	手捏ね成形。体部ミガキ調整。		内外面 7.5YR7/3に ぶい灰褐色	白色粒子若 干含む。 器肉7.5Y8/3 浅黄橙色	底部破片	丹波産ヵ
5	2-SK18	焼締陶器	擂鉢	_	_	<5. 5>	43. 3	体部は45度角に開く。	体部横ナデ。6本 1単位の櫛目。	良好	内外面 7.5YR6/4に ぶい橙色	白色大粒多 い。器肉 7.5YR4/1黒 褐色	体部破片	

SA13 (第60·61 図 第28 図版 第40·41 表)

①位置・重複:整地面下に埋めたてられた SX2 (竪穴状遺構) に沿って東西に並んだ形状で検出されている。 $G13-c\cdot d$ に位置する。

②形状・規模・覆土:長径 28 ~ 48 cmの平面円形~楕円形ピット P1 ~ 5 の 5 基で構成され、深さは 26 ~ 56 cm、底部の標高は 23.89 ~ 24.13 m。杭の間隔は、P1・2 で 1.18 m、P2・3 で 0.71 m、P3・4 間で 1.34 m、P4・5 間で 1.20 mを測る。このうち P1・4・5 では杭の木質が残存する。裏込めは P1 で黒色土である。

③走向方位:N-65°-W

④出土遺物:石製品

1層 7.5YR2/1 黒色土 白色粒子φ2 mm微 粘性強 しまり中

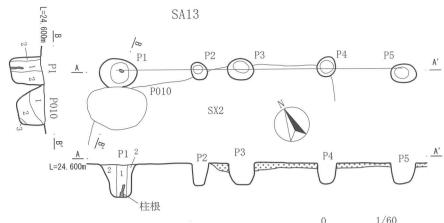
2層 7 5VR1 7/1 里色十 白色粒子 6 2 mm 少粘性・ しまり強

P010

1層 7.5YR3/4 暗褐色十 黄色土粒子・白色粒子 φ 2 mm 中 粘性強 しまり中

2層 7.5YR1.7/1 黒色土 白色粒子φ2mm少 粘性・し まり強

3層 7.5YR2/1 黒色土 褐色粒子φ2 mm微 粘性強しま り中



第 40 表 SA13 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P009	48	40	56	23. 89	木質残存 P010に切られる
P2	P156	28	20	26	24. 11	
P3	P157	36	36	26	24. 13	v
P4	P158	32	28	30	24. 11	木質残存
P5	P159	40	27	35	24. 08	木質残存

1/60 2m第 60 図 SA13 2-SK09-01 10cm 1/3 SA13 出土遺物 第61図

第 41 表 SA13 出土遺物観察表

-	-	34-57	OTTO PL		口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
百	子号	往記	種類	器種	口任	瓜往	位门口	里里	有け//シップ N 13人	E/17*2710 BA	79674		7374	2011	
	1	2-SK09	石製品	火打石	縦5.3	横4.0	厚1.3	50.1	幅4cm、厚さ1.2cmのも ちかかれた痕跡あり。	長方形の石。側面に打	_	7.5GY6/1緑 灰色	-	_	チャート質

SA14 (第62·63 図 第28 図版 第42·43 表)

①位置: F12-a・c に位置する。

②形状・規模・覆土: SB01 と 02 との中間に存在し南北に並んでおり、長径は $40 \sim 72~\text{cm}$ の平面円形~楕円形ピッ ト5基で構成され、深さ20~53 cm、底部の標高24.08~24.25 m。柱間は、P1·2 間が1.20 m、P2·3 間が0.60 m、 P3・4 間が 1.09 m、P4・5 間が 0.90 mを測る。裏込めは P3・4 で認められる。覆土は P3 は黒色土・オリーブ灰色土 の2層、P4は黒色土・褐色土の4層からなる。

③走向方位:N-21°-E

④出土遺物:かわらけ

⑤備考:形状から2棟の仕切りである可

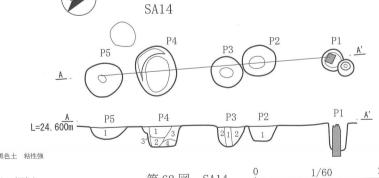
能性が考えられる。

1層 7.5YR1.7/1黒色土 粘性弱 し まり中 1層 7.5YR1.7/1黒色土 黄色土ブ ロック (φ2~10 mm)・粒子中 粘性

強 しまり弱 2層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土ブ ロック (o 2 ~ 10 mm) ・粒子少 粘性 強 しまり弱

3層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土ブ ロック (φ2~10 mm)・粒子多 粘性・ しまり強

4層 7.5YR4/4 褐色土 黄色土ブロッ ク (φ2~10 mm)・粒子微 粘性・し 主り強



第 62 図 SA14

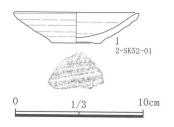
1層 7.5YR2/1 黑色土 粘性強 しまり中 2層 10Y5/2オリーブ灰色土

粘性中 しまり強

1層 10Y5/2 オリーブ灰色土 (φ 2~ 20 mm砂礫) 黄色土ブロック (φ 2~10 mm)・粒子多 粘性なし しまり強

第40表 SA14 ピット計測表

遺構番号	P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
SA14	P1	P161	40	40	50	24. 16	木質残存 P162に切られる
	P2	P050	52	48	53	24. 08	
	Р3	P051	44	40	33	24. 25	
	P4	P052	72	60	38	24. 19	
	P5	P053	52	52	20	24. 32	



第 63 図 SA14 出土遺物

第 43 表 SA14 出十遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2-SK52	かわらけ	B類中	(9. 2)	(3. 8)	2. 4	25. 8	突出気味の底部から30度角で丸みを 持って立ち上が る。	ロクロ整形。切り 離し不明。一方向 ヘラ削り調整。	良好	元々の色 7.5YR5/2灰 褐色	雲母微粒子やや多い。	全体の 1/3	二次被熱

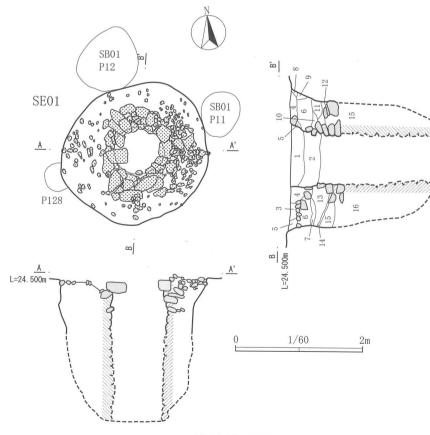
(3)SE (井戸)

SE01 (第64·65 図 第12 図版 第44 表)

①位置・重複: G12 グリッド中央において検出された。

②形状・規模・覆土: SB01 と重複関係にあるものの、直接時期を判断する切り合い部分が無く、新旧関係は判断がつかない。また、小規模な P128 などが近接して穿たれており、覆い屋があった可能性もある。

井戸は円形の石積み井戸である。掘り方の平面形状は直軸 2.35 m、短軸 2.15 mのほぼ円形で、確認面より 2.30m 掘り下げ、U字形を呈する。この穴の底のほぼ中心部分に、直径 80cm の空間を残すように、円形に人頭大前後の扁平な礫を積み上げている。裏込めは上層部で確認できたところによれば、石積みに合わせて徐々に充填されたものと想定されるが、下位は湧水と崩落により図化には至っていない。井戸の内部には粘土質の覆土が充填されていたが、2層下には礫が大量に投げ込まれており、井戸跡を封鎖するために意識的に行われた可能性が高い。



第 64 図 SE01

③長軸方位: N-20°-E

④出土遺物:以下に図及び観察表を 示した。

SEOS

1層 7.5YR3/4暗褐色土 碟 (φ 20 ~ 100 mm) 多 砂礫 (φ

2 mm) 多 粘性強 しまり中

2 層 7.5YR2/1 黒色土 礏 (ϕ 10 \sim 100 mm) 中 砂礫 (ϕ 2 mm)

中 粘性・しまり中

3層 7.5YR2/3 黒褐色土 礫 (φ2~10 mm) 中 砂礫 (φ2 mm)

中 粘性中 しまり強

4層 7.5YR2/1 黒色土 礫(ϕ 2 \sim 10 mm) 少 砂礫(ϕ 2 mm)

少 粘性・しまり強

5層 7.5YR5/6 暗褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)

多 粘性・しまり強

6 層 7.5YR5/6 暗褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)

主体粘性・粘性弱 しまり強

7層 7.5YR2/1 黒色土 礫 (ф 2 ~ 10 mm) 少 砂礫 (ф 2 mm)

少 粘性・しまり強

8 層 7.5YR5/6 暗褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)

主体粘性・粘性弱 しまり強

9層 7.5YR1.7/1 黒色土 砂礫 (φ2 mm) 少 粘性・しまり 強

11層 7.5YR5/1 褐灰色土 粘性なし しまり強

12 層 7.5YR7/2 明褐灰色土 粘性・しまり強

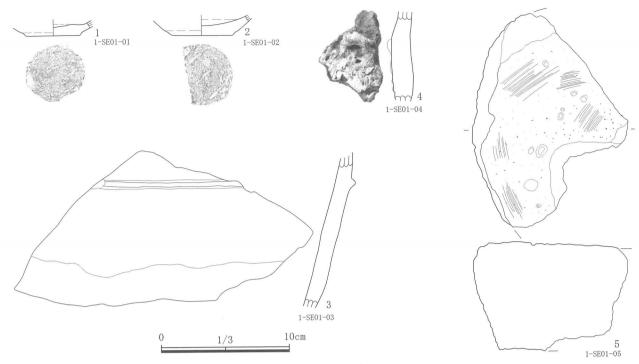
13 層 7.5YR6/1 褐灰色土 碟・砂利の層 粘性なし しま

り強

14 層 7.5YR7/2・6/1 明褐灰・褐灰色土 粘性中 しまり強

15層 7.5GY5/1 オリーブ灰色土 砂粒多 粘性・しまり中

16 層 7.5GY6/1 オリーブ灰色土 砂質・砂利含む 粘性・ しまりなし



第 65 図 SE01 出土遺物

第 44	4 表	SE01	出-	上遺物	7観祭	長
悉号		種類	i	器種	口径	底

男 4		SEUI Щ				and the		PP and - if he did	wide TEV on their Obli-	Jalels	Zz. 6914	8/s .L.	瑞士庄	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	1用 与
1	1ゴウSE 一括	かわらけ	A類中 皿	_	4. 2	<1.3>	34.1	突出した底部から 20度角で開き、中 間で丸みを持つ。	ロクロ整形。回転 糸切り離し後、一方向へラ削り。体部は無調整。	優良	全面 7.5YR6/8橙 色	雲母微粒子 若干含む。	底部のみ	
2	13 [*] ウSE 一括	瓦質土器	碗	-	4.6	<2.1>	42. 3	やや飛び出た平ら な底部から、すぐ に湾曲しはじめ る。	ロクロ整形。摩耗 のため調整不明。	良好	全面 7.5YR2/1黒 色	白色粒・雲 母微粒子多 い。骨針含 む。	底部のみ	
3	1- SE001	瓦質土器	火鉢ヵ	_	_	<12. 4>	575. 2	垂直に立ち上がる 胴部に、1本の突 帯が巡る。	輪積み成形カ。内面に指頭横ナデ痕あり。	良好	内外面 10YR4/1褐 灰色	白色大粒子 が目立つ。 骨針含む。 器肉面 10YR7/1灰 白色、芯 10YR3/1黒 褐色	胴部破片	
4	1- SE001	石製品	鋳造関 連道具	縦7.2	横4.9	厚1.8	54. 8	内面にガラス状(白色風化ヵ)の溶融物付着。外面は曲面を呈する。		良好	外面 10YR5/4暗 黄褐色、内 面10YR8/1 灰白色物質 が溶融	内面側は発 泡顕著。	胴部破 片	ガラス製品鋳型の可能性あり。被熱赤色化。2区9と同一個体ヵ。
5	1- SE001	石製品	石臼	(25. 2)	_	<8. 2>	1092.5	断面台形を呈す下臼。		_	7.5Y7/1暗 灰白色	_	全体の 1/4	安山岩質カ

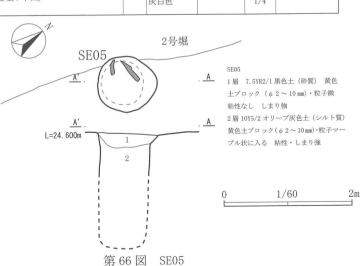
SE05 (第 66 図 第 12 図版)

①位置: G12-b・d に位置した素掘り井戸である。

②形状・規模・覆土: 0.93 m× 0.89 mの平面円 形で、深さは 1.90 m。地山砂礫層となる底部の標 高は22.65 mを測る。覆土は黒色土~オリーブ灰色 土に至る2層を確認した。

③長軸方位:N-35°-W

④出土遺物:掲載遺物なし



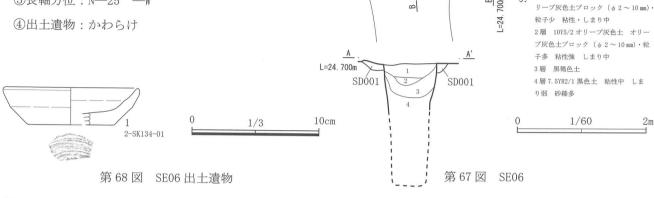
SE06 (第 67 · 68 図 第 12 図版 第 45 表)

①位置・重複: F10-a に位置した素掘り井戸である。

SD001 を切る。

②形状・規模・覆土: 0.78 m× 0.68 mの平面円 形で深さは1.93 m。地山砂礫層となる底部の標高は 22.70 mを測る。覆土はオリーブ灰色土~黒色土の4 層を確認した。

③長軸方位:N-25°-W



A .

SD001

SE06

اھ

SE06

1層 7.5YR2/3極暗褐色土 褐色・オ

_A'

第 45 表 SE06 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2- SK134	かわらけ	A類小 皿	(10. 4)	(6. 7)	2.9	24. 5	平らな底部から45 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。回転 糸切り離し後、無 調整。	優良	全体 7.5YR7/4に ぶい橙色	白色粒子・ 雲母若干含 む。	全体の 1/6	

SE16 (第69·70 図 第16·28 図版 第46 表)

①位置: E9-d に位置する素掘り井戸である。

②形状・規模・覆土: $0.78\,\mathrm{m}\times0.75\,\mathrm{m}$ 、深さは $1.48\,\mathrm{m}$ となり、砂礫層である底部の標高は $23.12\,\mathrm{m}$ を測る。覆土は $3\,\mathrm{m}$ を確認した。

③長軸方向: N-88°-E ④出土遺物:土師質土器・陶器 SE16 2-SE16-追11 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (φ2 _<u>A</u> L=24. 600m ~ 10 mm)・粒子・炭化物・オリーブ灰色土ブロッ ク少 粘性強 しまり中 1 2層 10Y5/2オリーブ灰色土 厚さ50mmの層状 2 をなし、黒褐色土・黒色土類似土と互層をなし ている 粘性強 しまり中 3層 7.5YR1.7/1黒色土 オリーブ灰色土ブロッ ク (φ2 mm~ 10 mm) 少 粘性強 しまり中 2-SE16-追10 1/60 2m10cm 1/3第 69 図 SE16 2-SE16-追12 第70図 SE16 出土遺物

第 46 表 SE16 出土遺物観察表

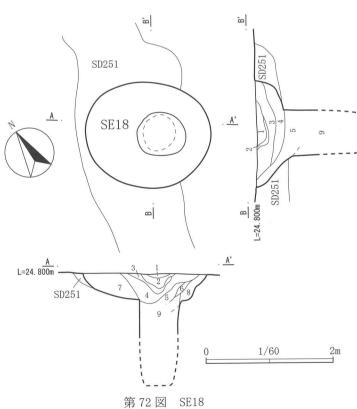
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2-2-16 コ*ウSE 一括	土師質土器	鍋	—	- ANTE	<5. 1>	66. 2	平らな口唇で、ほ ぼ垂直に立ち上が る。	回転台使用。	良好	内外面 7.5YR2/2黒 褐色	白色微粒子やや多い。	口縁部破片	外面煤黒
2	2-2-16 ゴウSE 一括	土師質土器	焙烙	(24. 9)	(23. 6)	<6. 2>	99.9	平らな底部から垂 直に立ち上がる。 口唇は平坦とな る。	回転台使用。	良好	内外面 7.5YR5/4に ぶい褐色	白色粒子・ 雲母微微粒 子やや多い。 骨針含む。	全体の 1/8	外面被熱のため 黒変
3	2-2-16 ョ* ウSE 一括	陶器	志野織部皿	s— :	(5.7)	<2.9>	56.8	内反り高台から30 度ほどの角度で緩 やかに開く。	ロクロ整形。削り出し高台。体下半回転ヘラ削り調整。	優良	内外面 10YR8/2灰 白色の志野 釉露胎 10YR6/3に ぶい黄橙色	白色・赤色 粒子若干含 む。	底部の 1/3	見込みに方形区 画ほか鉄絵 (5YR4/2灰褐色) 美濃産17世紀前 葉

SE17 (第71 図 第16・28 図版)

①位置: E9-c、E10-a に位置する素掘り井戸である。

②形状・規模・覆土: 0.93 m× 0.90 mの平面円形をした 素掘り井戸で、確認面から底部までの深さは2.00 mとなり、 砂礫層である底部の標高は22.80 mを測る。覆土は極暗褐色 土〜黒色土に至る5層を確認している。

③長軸方向:N-0° ④出土遺物:掲載遺物はなし。



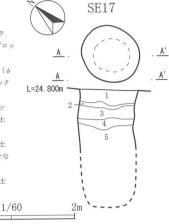
1 層 7.5 % % % 7.5 % % 7.5 %

- 2層 7.5YR2/3極暗褐色土 炭化物少 粘性強 しまり中
- 3層 2.5YR4/6赤褐色(被熱) 炭化物微 粘性強 しまり中
- 4層 7.5YR2/3極暗褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子・炭化物少 粘性強 しまり中
- $5\, \mbox{\em 6} \ \, 7.\,\, \mbox{5 MR2/3} \mbox{\em 6} \mbox{\em 6} \mbox{\em 6} \mbox{\em 1} \mbox{\em 7} \mbox{\em 7}$
- 6 層 7.5 VR2/3 極暗褐色土 黄色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子多 灰オリーブブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)中 粘性 強 しまり中
- $7\, {\rm M}$ 7.5Y6/2 灰オリーブ 極暗褐色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)多 粘性強 しまり中
- 8層 7.5YR3/1 黒褐色土 焼土・炭化粒少 粘性強 しまり中
- 9層 7.5YR2/3極暗褐色土 炭化粒子・灰オリーブブロック (φ2 mm) 少 粘性強 しまり中

CE17

- 1 層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土プロック (ϕ $2 \sim 10$ mm)・粒子・灰オリーブ色土プロック (ϕ $2 \sim 10$ mm) 少
- 2 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブロック (φ 2 ~ 10 mm)・粒子・灰オリーブ色土ブロック (φ2~10 mm) 少
- 3 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 黄色土ブロック (φ2~10 mm)・粒子・灰オリーブ色土ブロック (φ2~10 mm) 中
- 4 層 7.5YR3/1 黒褐色土 灰オリーブ色土 ブロック少 厚さ 50 mmが断続的に層状をな して入る

5層 7.5YR1.7/1 黒色土 灰オリーブ色土 ブロック (φ 10~30 mm) 少



第71図 SE17

SE18 (第72 図 第16 図版)

①位置・重複: E9-d に位置し、SD251 を切る。

②形状・規模・覆土: $1.92 \text{ m} \times 1.64 \text{ m}$ の平 面円形で深さは 1.73 mで砂礫層に至る。底部に 至る途中、40 cm掘り下げたところにステップが あり掘方をなし、生活で使用したプランは $0.78 \text{ m} \times 0.70 \text{ m}$ の平面円形をなして、その断面は漏 斗状となっている。底部の標高は 22.82 mである。

覆土は9層まで確認し、1~6・9層が埋没土、7・8層が掘方である。1~6層はレンズ状堆積に近いが、極暗褐色土~黒褐色土に至り、焼土・黄色・灰色ブロックを混入しており人為堆積の様相がある。

③長軸方向: N-55°-W

④遺物:なし。

(4)SX(池)

SX1 (第73·74 図 第13·29·35 図版 第47 表)

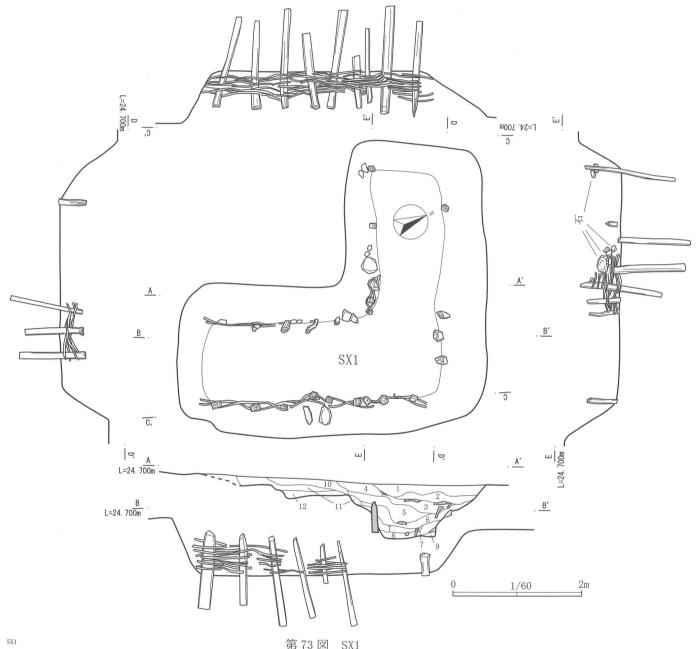
①位置: F10-b、F11-a·c に位置する。

②形状・規模・覆土:南北4.78 m×東西4.60 mの平面L字形で、深さ0.86 mを測る。

③長軸方向:N-23°-E

④施設: 竹材で「柵」(しがらみ)された杭 25 本で側面を土止めし、東西の側面は $11\cdot 12$ 層のように裏込めをし、 礫や木端を混入させていた。黒褐色土~オリーブ灰色土に至る12層の堆積がみられる。

⑤出土遺物:覆土中から、かわらけ及び木製の蓋が出土している。



1層 7.5YR3/1 黒褐色土 酸化鉄多 オリーブ灰色土粒子 粘性強 しまり中

2層 7.5YR2/1 黒色土 炭化ブロック・オリーブ灰色土粒子少 砂質 粘性強 しまり中

3層 7.5YR2/1 黒色土 炭化プロック・オリーブ灰色土粒子少 砂質 粘性強 しまり中

 $4\, \mbox{\em B}$ 7. 5YR2/1 黒色土 炭化ブロック ϕ 2 ~ 10 mm少 オリーブ灰色土ブロック少 砂質シルト 粘性・しまり中

5層 7.5YR2/1 黒色土 炭化ブロック ϕ 2 \sim 10 mm少 オリーブ灰色土ブロック多 粘性強 し まり中

7 層 7.5 YR2/1 黒色土 炭化ブロック ϕ $2\sim10$ mm少 オリーブ灰色土粒子中 砂質シルト 粘性弱 しまり中

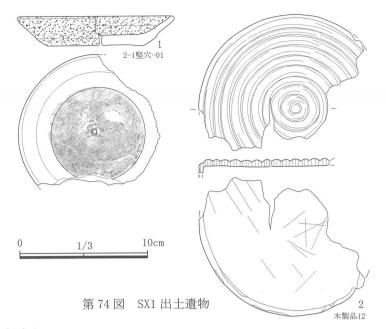
8層 7.5YR2/1 黒色土 炭化ブロック ϕ 2 \sim 10 mm多 オリーブ灰色土粒子中 粘性弱 しまり中

9層 7.5YR2/1 黒色土 炭化ブロック ϕ 2 \sim 10 mm多 オリーブ灰色土粒子少 粘性弱 しまり中

10 層 7.5YR3/1 黒褐色土 炭化ブロック ϕ 2 \sim 10 mm少 オリーブ灰色土粒子多 粘性弱 しまり中

11 層 10Y5/2 オリーブ灰色土 炭化ブロック ϕ $2 \sim 10$ mm多 褐色土ブロック 粘性弱 しまり中

12 層 7.5YR2/1 黒色土 炭化ブロック・オリーブ灰色土粒子少 砂質 粘性強 しまり中



第 47 表 SX1 出土遺物観察表

717 1		COLUMN TO THE PARTY OF THE PART				叩声	毛思.	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	おかり付取	金沙の村以	BEIL	□ (p/r)	/JU _L.	1X IT IX	Vm · · J
1	2-197	かわらけ	C類中 Ⅲ	5.8	7.6	2. 3	93. 2	大きめの底部から 50度角で、直線的 に立ち上がる、浅 い皿。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 横ナデ調整。	優良	全体 2.5Y7/3浅 黄色	雲母微粒子 若干含む。 緻密。	全体の 2/3	内全面に煤付 着。見込み中央 に小孔。燭台に 使用か。
2	2-1号 竪穴 No. 2	木製品	容器蓋	外径 (15.0)	内径 (14. 2)	<1.0>	_	平面円形。平盤な 天井部で、垂直に 垂下する側面が僅 かに残る。	外面にはほぼ正円 の同心円文が刻ま れる。側面にも同 じ間隔の凹凸面が 巡るものとみられ る。	_	酸化のため 2.5Y3/2黒 褐色を呈す る。	_	1/2	分析番号12 合子の可能性が ある。

(5)SK (土坑)

SK100 (第70 図 第14 図版)

①位置: E11-c に位置する。

②形状・規模・覆土:108 cm×78 cmの平面楕円形で深さ21 cmを 測る。覆土は黒褐色土の単層からなり多量の礫を検出している。

③長軸方向: N-22°-W

④出土遺物:なし。

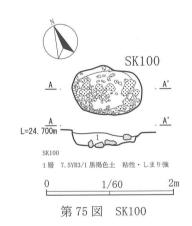
SK106 (第76図)

①位置:F11-a に位置する。

②形状・規模・覆土: 60 cm× 48 cmの平面円形で深さ 42 cmを測る。 覆土は極暗褐色土~オリーブ灰色土の 3 層からなる。

③長軸方向:N-60°-W

④出土遺物:なし。





1層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性・しまり短 2層 7.5YR3/4 暗褐色土

3層 10Y5/2オリーブ灰色土(砂質)

9 1/60 2m 第 76 図 SK106 SK115 (第77·78 図 第48表)

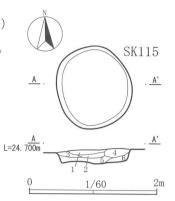
①位置: E10-c・d に位置する。

②形状・規模:135 cm× 120

cmの平面円形で深さ 35 cmを測る。

③長軸方向:N-14°-E

④出土遺物:かわらけ



第77図 SK115

SK115

1 層 7.5 YR2/1 黒色土 黄色土・灰 色土ブロック ϕ $2 \sim 10$ mm ϕ 粘性強 しまり中

2 層 7.5 YR2/1 黒色土 黄色土・灰 色土ブロック ϕ $2 \sim 10$ mm 多 粘性強 しまり中

3 層 7.5YR2/1 黒色土 黄色土ブ ロック ϕ $2 \sim 10$ mm 多 同粒子多 粘 性強 しまり中

4 層 7.5 YR2/1 黒色土 黄色土ブ $\mu \nu \nu \rho \phi \sim 2 \sim 10$ mm 多 同粒子中 粘 性強 しまり中

5層 7.5YR3/4 暗褐色土 黄色土ブロックが厚さ10cmの屑状に入る 粘性軸 1 まり軸

6層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロックが厚さ10cmの屑状に入る 粘性強 しまり中

SK116

1/60

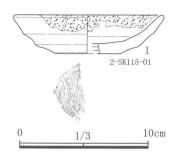
1層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土ブロック (φ SK139

第79図 SK116

2 層 7.5YR1.7/1 黒色土 黄色土ブロック (φ

2~10 mm)・粒子・炭化物少 粘性・しまり強

第81図 SK652



第 78 図 SK115 出土遺物

SK139

A'

_A'

B

1/60

1/60

第80図 SK139

(φ2~10 mm)・粒子・砂粒多 粘性中 しまり強

第 48 表 SK115 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2- SK115	かわらけ	A類中Ⅲ	(11.5)	(5. 0)	3	35. 9	小さな底部から40 度角で緩やかに立 ち上がる。途中の 2箇所に強いロク ロ目あり。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 無調整。	やや良	内外面 7.5YR6/3に ぶい褐色	雲母徽粒子 若干含む。 器肉黒褐色	全体の 1/6	口縁内外に漆付着

L=24. 700m

SK116 (第79図)

①位置: E11-d に位置する。

②形状・規模・覆土: 78 cm× 66 cmの平面円形で深さは 30 cmを測る。覆土は黒色土 2 層からなる。

③長軸方向: N-49°-E

④出土遺物:なし

SK139 (第80図)

①位置: E9-d、F9-b に位置する。

②形状・規模・覆土:108 cm×84 cmの平面楕円形で深さ37 cmを測る。黒褐色土の単層からなる。

③長軸方向:N-78°-E

④出土遺物:掲載遺物はなし。

SK652 (第81·82 図 第14 図版 第49 表)

①位置: D9-d、E9-b に位置し、SD251 を切る。

②形状・規模: 276 cm× 210 cmの平面楕円形で深さ 43 cmを 測る。

③長軸方向: N-29°-E

④出土遺物:かわらけ・土師質土器・陶器

L=25. 000m

2m

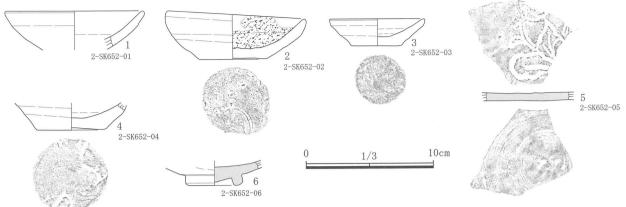
B,

 $2\sim 10$ mm)・粒子・炭化物少 粘性・しまり強 1 層 7.5 YR3/1 黒褐色土 砂質シルト 黄色土ブロック

SK652

1 層 7.5YR4/3 褐色土 黒褐色土 (ϕ 2 \sim 20 mm) マーブル状に入る 粘性・しまり強 2 層 7.5YR3/1 黒褐色土 黄色土ブロック (ϕ 2 \sim 10 mm)・粒子少 粘性強 しまり中 3 層 7.5YR3/1 黒色土ブロック (ϕ 2 \sim 20 mm) マーブル状に少量入る 粘性・

しまり強



第82図 SK652 出土遺物

笠 40 丰 CVCE9 出土 唐伽紐 宛主

	9 表	SK652 E				器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
番号	注記 2- SK652	種類かわらけ	器種 A類大 Ⅲ	口径 (10.9)	底径	(3.0)	34.1	35度ほどの角度で緩やかに立ち上がる。	ロクロ整形。	やや不良	内外面 7.5YR6/6橙 色	黒色・雲母 微粒子若 干。器肉 7.5YR7/3に	口縁部 の1/4	二次被熱による黒変
2	2- SK652	かわらけ	A類中 皿	10.7	5. 2	3.5	172. 5	突出気味の底部から30度角で緩やかに立ち上がり、口唇で垂直となる。	ロクロ整形。切り 離し不明。底部から体下半まで遅い 回転ヘラ削り調 整。	良好	内外面 7.5YR5/3に ぶい褐色。	ぶい橙色 白色・雲母 微粒子若 干含む。	完存	漆液容器に利用
3	2- SK652	かわらけ	B類小皿	7.4	3. 9	2. 1	54. 2	平らな底部から35 度角で直線的に立 ち上がり、口縁部 が分厚い。	ロクロ整形。切り 離し不明。ナデ調 整ヵ。	優良	全体 7.5YR8/3浅 黄橙色	褐色・雲母 微粒子若 干含む。	完存	
4	2- SK652	土師質土器	碗力	_	5. 4	<2.1>	92. 4	窪み気味の底部から50度角で直線的 に立ち上がる。	ロクロ整形。ヘラ 起こし切り離しヵ。	良好	全体 7.5YR7/2明 褐灰色	白色粒・雲 母微粒子若 干含む。	底部のみ	4.
5	2- SK652	陶器	黄瀬戸大皿	_	_	<0.6>	43. 2	平らな底部。	回転台使用。回転へラ削り。	優良	内面5Y6/3 オリーブ黄 色の黄瀬戸 釉外面 7.5YRにぶ い橙色	黒色微粒子 若干含む。 器肉 N8/0灰白色	底部の一部	見込みに画花 文 瀬戸・美濃産 大窯第4段階 カ
6	2- SK652	陶器	碗	_	3. 7	<1.95>	31.6	分厚い高台からほ ぼ水平に開く。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 2.5Y8/1灰 白色の長石 釉に貫入あ り。	黒色微粒子 若干含む。	底部の 3/4	畳付磨滅 美濃産17世紀

(6) 並ぶ石 (第83図 第9・10図版)

①位置:SB02の西側であるF11-a・bに位置し、そこから概ね南西方向に走向する。

②形状・規模・覆土: 径 13 ~ 24 cmの割石・自然石を使用している。各石間の距離は 0.20 ~ 0.50 m、全体で 2.84 mを測る。最も北側の石の下には、 $25~\text{cm} \times 20~\text{cm}$ 、楕円形プランの掘り込みがあり、掘り込みの深さは 12~cm、覆土 は暗褐色土の単層が存在する。

③方向 E-57° -E

④出土遺物:なし

黄色土・灰色土ブロック (φ2~10mm) 粒 子多くマーブル状に入る

並ぶ石

第83図 並ぶ石

(7) SD (溝)

SD001 (第84·85 図 第14 図版 第50 表)

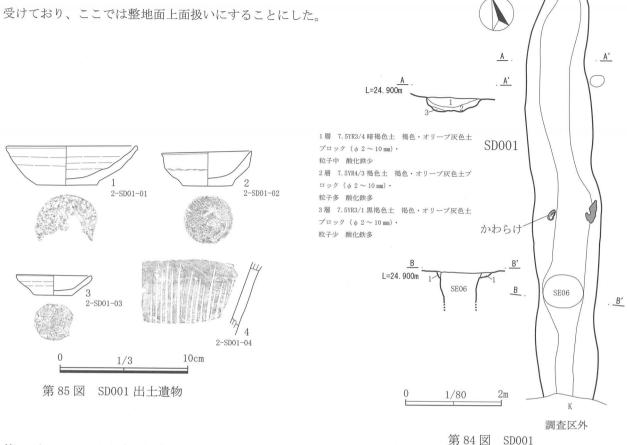
①位置・重複: E10-c・d、F10-a に位置する。SE06 に切られる。

②形状・規模:幅 $1.12\sim1.39$ m、深さ $0.27\sim0.33$ m、底部標高は北で24.31 m、南で24.27 mとなり概ね 24.30 m前後を測る。断面形状は鍋底形を呈している。

③走行方向:N-17° -E

④出土遺物:掲載遺物はなし

⑤備考:他の堀・溝との関係から整地面下の遺構の可能性 も考えられるところだが、遺構上面及び調査区壁際が攪乱を 受けており、ここでは整地面上面扱いにすることにした。



第 50 表 SD001 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2- SD001	かわらけ	A類中 皿	10.2	4.6	3. 1	72.7	突出する底部から 35度角で緩やかに 丸みを持って立ち 上がる。	ロクロ整形。	優良	全体 7.5YR6/8橙 色	褐色・白色 粒子多い。 雲母若干含 む。	全体の 3/4	
2	2- SD001	かわらけ	A類小 皿	7. 1	3. 9	2. 7	69. 5	突出する底部から 35度角で緩やかに 丸みを持って立ち 上がる。	ロクロ整形。右回転糸切り離し後、無調整。	優良	全体 7.5YR7/2明 褐灰色	白色粒子や や多い。 雲 母若干含む。	完存	
3	2- SD001	かわらけ	B類豆 皿	(5. 9)	3. 0	2. 1	15. 3	わずかに突出気味 の底部から30度角 で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。	優良	全体 7.5YR6/6橙 色	褐色・白色 ・雲母微粒 子若干含む。	全体の 1/3	
4	2- SD001	土師質土 器	擂鉢	-	_	<5. 7>	72. 2	ほぼ45度角で直線 的に開く。	全面横ナデ調整。 6本1単位の櫛目 が見込みに施され る。	良好	内外面 7.5YR3/1黒 褐色	緻密。器肉 7.5YR3/2黒 色	体部破片	

(8) ピット (第86図 第29図版 第51~54表)

検出されたピット群は掘立柱建物として組めたもの、柵列と判断されるものなどは同一遺構として捉えた。その他のピットの平面図は全体図に掲載した。尚、断面図は割愛した。各ピットの計測値は以下に示した。

第51表 2区ピット計測一覧表(1)

				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
2区 第1面	P001	G14-b	50	40	44	楕円形	101
	P002	G14-b	45	45	21	円形	
	P003	G14-a	43	35	38	楕円形	

	1.5			規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
2区 第1面	P004	G14-a	28	24	20	円形	
	P005	F14-c	32	28	55	円形	
	P006	G13-d	20	16	12	円形	

第52表 2区ピット計測一覧表(2)

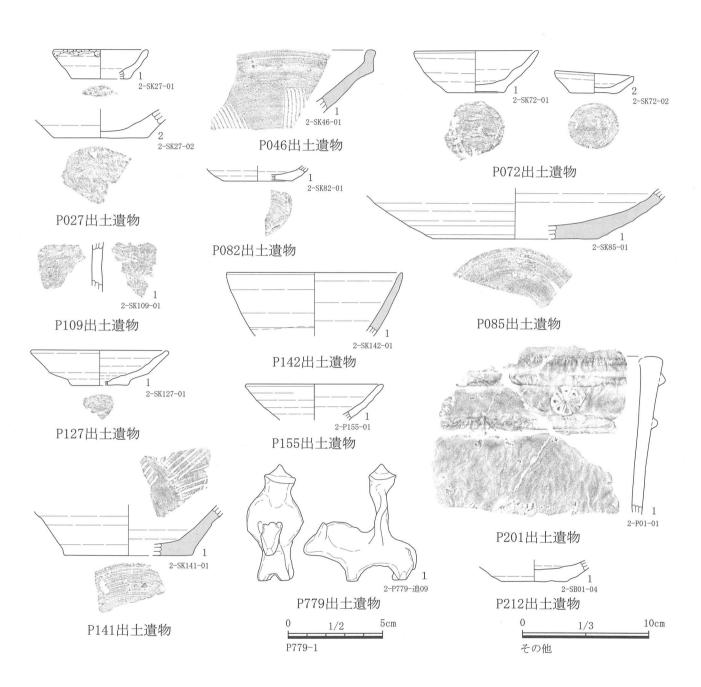
7	04	1 2	<i>P</i>	【ピッ	ト計	侧一	見衣	(2)		
							規模	・形態		****
±	也区	遺構名	1	検出グリ	ッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
		P007	_	F13-c	i	28	28	79	円形	
		P008-	a	G13-a	3	56	16	23	円形	P008-bを切る
		P008-	b	G13-a	1	52	38	16	楕円形	P008-aに切られる
		P008-	С	G13-a	a	26	26	36	円形	
		P011		G13-a	1	36	32	34	円形	P124を切る
		P012		G13-1)	44	40	22	円形	
		P013		G14-a	a	28	24	13	円形	
		P014		G13-l	b	24	20	29	円形	
		P015		F13-	d	28	28	18	円形	
		P016		F13-	d	24	24	57	円形	根石残存
		P017		F13-	d	44	40	55	円形	木質残存
		P019		F13-	c	44	36	58	楕円形	
_		P020		G13-	a	36	20	19	楕円形	
		P028	T	F13-	С	28	24	18	円形	
		P032	+	G12-		20		65	円形	
_		P033		G12-		36			円形	
_		P034-		G12-		60			円形	P034-bを切る
_		P034-	+	G12-		25			円形	P034-aに切られる
		P035-	+	G12-		36			楕円形	1001 01-30 34-0
		P035-	\top	G12-		26			円形	
-		P042		G12-		60			楕円形	
		P042	\pm	G12-		44	-		円形	
_		1	+			-		-		担工账方
		P044	$^{+}$	F12-		32			楕円形	根石残存
		P048	+	F12-		52			楕円形	
_		P048	\dashv	G12-		36			円形	
		P05	-	F12-	***	52			円形	Les are alle de
		P05	+	G11-		32			円形	根石残存
		P056	_	G11-		28		-	円形	
		P06)	F12-	-a	118			格円形	SB02-P09に切られる
_		.P06	3	F11-	-b	48			格円形	
_		P06	5	F11-	-d	48	3 44	1 1	1 円形	
_		P06	3	F11-	-d	32	2 24	1 2	1 楕円形	
		P07	3	F11-	-d	88	3 84	1 5:	2 円形	SB02-P06に切られる
		P07	5	F11-	-c	36	5 28	3 5	楕円形	
		P07	7	F11-	-с	36	5 3:	2 4	1 円形	P078を切る
		P07	8	F11-	-с	35	2 2	3 4	3 円形	P077に切られる
		P08	5	F11-	-a	36	3	2 3	3 円形	
		P08	7	F11-	-с	40) 4) 4	8 円形	
		P09	1	F11-	-a	6-	4 2	4 3	5 楕円形	
_		P09	2	F10-	-b	4	8 4	2	3 円形	P104を切る
_		P09	3	F10	-b	3	2 3	2 5	3 円形	
		P09	4	E11-	-с	2	8 2	4 2	7 円形	
		P09	5	E11	-с	4	4 2	8 2	8 円形	
	,	P09	6	E11:	-с	2	8 2	0 2	2 円形	
		P09	7	E11:	-с	3	2 2	0 2	0 円形	
_		P09	8	F11:	-a	3	2 2	8 3	5 円形	
		P09		F11		3	2 2	8 1	7 円形	
		P10		E11		11	-	+	1 楕円形	
		P10	_	F10		3			6 円形	P092に切られる
		1.10				+	+	+	+	

Life research	Ma Little de	AMILE II		規模	・形態		Falta ziter-
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
2区 第1面	P108	F10-d	28	28	21	円形	
	P109	F10-d	28	24	17	円形	
	P116	E11-d	68	60	51	円形	
	P120	G13-a	24	24	41	円形	
	P124	G13-a	24	20	16	円形	P011に切られる
	P126	F13-d	36	24	29	楕円形	
	P127	F11-b	92	88	26	円形	
	P128	G12-a	40	40	34	円形	SE01に切られる
	P129-a	F11-d	24	20	34	円形	
	P130	E11-c	24	20	20	円形	
	P132	F13-c	80	56	50	楕円形	根石残存
	P133	E10-c	20	20	23	円形	
	P136	E10-a	48	40	38	円形	
	P137	E09-b	40	36	43	円形	
	P138	F09-d	36	32	38	円形	
	P140	F09-d	36	32	27	円形	
	P141	F09-d	48	40	42	円形	
- 4 6 70	P143	F09-d	56	40	39	楕円形	
	P144	F09-d	36	28	36	楕円形	
	P145	F09-d	40	32	37	楕円形	
	P146	F09-d	60	52	27	楕円形	
	P147	F09-c	56	48	38	楕円形	
	P148	E10-c	28	20	23	円形	
	P151	G11-b	52	24	27	楕円形	
	P154	G13-a	48	44	71	円形	
	P161	F11-a	40	40	70	円形	
	P162	F12-a	40	36	38	円形	
	P201	F13-d	44	40	17	円形	根石残存
	P202	G12-b	44	32	30	楕円形	根石残存
	P206	G12-a	44	36	10	円形	根石残存
	P207	G12-d	24	20	43	円形	
	P209	G14-a	20	20		円形	
	P210	G14-a	32	28		円形	
	P211	G14-a	40	36	6	円形	遺物検出
2区 第2面	P703	E10-a	64	60	27	円形	
	P704	E9-d	32	28	41	円形	
	P705	E9-d	48	32	29	楕円形	
	P706	F9-b	36	32	32	円形	
	P708	E9-c	36	5 28	39	楕円形	
	P709	Е9-с	48	36	5 26	精円形	
	P710	Е9-с	36	36	5 29	円形	
	P712	Е9-с	40	32	2 2	精円形	
	P713	Е9-с	32	2 28	3	2 円形	
	P732	E9-b	5:	2 4	0 4	6 楕円形	
	P733	E9-b	4	0 3	6 2	8 円形	
	P734	E9-b	4	0 3:	2 5	0 楕円形	
	P735	F9-b	3	2 2	8 4	3 円形	
	P736	F9-b	3	-	-	9 円形	
	P737	F9-b	2	1	+	3 円形	
	P759	F10-a	3	1		3 円形	

第53表 2区ピット計測一覧表(3)

地区 2区 第2面				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径	短径	深さ	717 222 105	備考
			(cm)	(cm)	(cm)	平面形	
2区 第2面	P778	Е9-а	36	32	27	円形	
	P779	Е9-а	40	28	28	楕円形	





第86図 2区ピット出土遺物

第54表 2区ピット出土遺物観察表

		Z 区 E ツ		[退物				DD TEX. AN TEX ONL	## TIC (7) TIC (416)	btc -45	A, ⊞H	BA-L-	かち中	/
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の形徴	整形の形徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
P022 1	2-SK22	銭貨	一銭銅貨	外径 22.9mm		_	3. 7	and the second s	_	_	_	銅	完存	大正11年鋳造
P027	2-SK27	かわらけ	B類豆 皿	(7. 3)	(4. 6)	2. 3	11. 9	やや丸みのある底 部から60度角で、 緩やかに立ち上が る。	ロクロ水挽き成 形。切り離し不 明。	良好	全体5YR6/6 橙色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	全体の 1/2	灯明油皿に転 用、口縁部に 灯心油痕。
P027 2	2-SK27	かわらけ	B類皿	_	(7.4)	<2. 3>	30. 2	平らな底部から30 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。切り 離し不明。一方向 へラ削り調整。	良好	外面5YR5/8 橙褐色内面 5YR4/1灰褐 色	緻密。雲母 若干含む。	底部破 片	
P046 1	2-SK46	陶器	擂鉢	(28. 0)		<5.0>	69. 3	幅1.6cmの垂直の口 緑帯を持ち、口唇 は膨らむ。	回転台使用。8本 1単位の櫛目。	優良	内外面 7.5R3/1暗 紫灰色の錆 釉	褐色微粒子 若干含む。 器肉5YR8/1 灰白色	口縁部破片	美濃産大窯第 4段階16世紀 末葉
P072 1	2-SK72	かわらけ	A類中 皿	9. 7	4. 5	3. 3	67. 6	突出気味の底部から45度角で丸みを 持って立ち上が る。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 一方向ヘラ削り。	良好	全体 7.5YR8/3浅 黄橙色	褐色微粒子 若干含む。	全体の 3/4	
P072 2	2-SK72	かわらけ	B類小皿	6. 1	3.8	1. 5	30. 3	大きめの底部から 35度角で、直線的 に立ち上がる。	ロクロ整形。回転 糸切り離し後、体 下端とも手持ちナ	優良	全体 7.5YR7/4に ぶい橙色	白色・褐色 粒子やや多 い。雲母若 干含む。	完存	
P082 1	2-SK82	かわらけ	A類小 皿	_	(5. 4)	<1. 2>	11.5	丸みのある底部から25度角で緩やか に立ち上がる。	ロクロ整形。静止 糸切り離し後、無 調整	良好	全体N6/0灰 色	雲母微粒子 若干含む。	底部破 片	坩堝に転用
P085 1	2-SK85	陶器	捏鉢		(13. 0)	<4.0>	192. 5	大型の鉢で、平ら な底部から25度角 で緩やかに立ち上 がる。	ロクロ整形。切り 離し不明。全面へ ラ削り。	良好	外面 2.5YR3/2暗 赤褐色内面 2.5YR4/6赤 褐色の鉄釉	白色粒子若 干含む。 器肉 7.5YR7/6 橙色	底部の 1/4	漆接ぎ。内面 磨滅。
P109 1	2- SK109	縄文土器	深鉢		_	<4. 1>	14. 1	無文部分。	胎土に繊維を混入する。	良好	全体 7.5YR2/1黒 色	白色粒子多 い。	胴部破片	前期中葉
P127 1	2- SK127	かわらけ	A類小 皿	11.7	5. 5	2.75	17.2	突出した底部から 30度角で立ち上が り、途中で強いロ クロ目がある。	ロクロ整形。調整不明。	優良	全体 7.5YR7/4に ぶい橙色	黒色・雲母 微粒子若干 含む。	全体の 1/6	
P141 1	2- SK141	陶器	擂鉢		(10. 1)	<3. 95>	51.3	平らな底部。	回転台使用。回転 糸切り。	良好	内外面 7.5R3/1暗 紫灰色の鉄 釉	白色大粒や や多い。器 肉5YR8/1灰 白色	体部破片	瀬戸・美濃産 大窯期
P142 1	2- SK142	陶器	平碗力	(17. 0)	_	<5.3>	24. 2	口縁部まで直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。	良好	内外面 7.5Y7/3浅 黄色の灰釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉N8/0 灰白色		瀬戸・美濃産 大窯期ヵ
P155 1	2-P155	かわらけ	A類中 皿	(10.8)	_	<2. 85>	22. 5	ロ縁まで40度角で 緩やかに立ち上が る。	ロクロ整形。	良好	全体 7.5YR6/6橙 色	白色・褐色 微粒子若干 含む。	口縁部破片	
P201 1	2-P01	瓦質土器	印花文 火鉢	_		<12. 3>	228. 7	垂直に立つ口縁部 に凸帯2条が巡 る。丸・深鉢形。	回転台使用。	やや良	内外面 10YR4/1褐 灰色	白色粒子や や多い。骨 針含む。	胴部破片	口縁帯に八葉印花文
P212 1	2-SB- P8	かわらけ	A類大 皿		5. 1	<1.7>	47. 2	やや窪んだ底部から丸みを持って立ち上がる。	ロクロ整形。	やや良	内外面 10YR8/2乳 白色	白色粒子や や多い。器 肉10YR5/1 褐灰色	底部のみ	
P779 1	2-2次 面P779	土製品	土人形	長6.3	幅3.0	6. 1	28. 2	傘を被った騎馬人 形。	手捻り成形。指頭 圧痕が人体腕部や 馬の鬣に残る。	良好	全体 10YR7/3に ぶい黄橙色	緻密。雲母 微粒子若干 含む。	完存	

第4節 2区 [第2面]

(1) SX (竪穴状遺構)

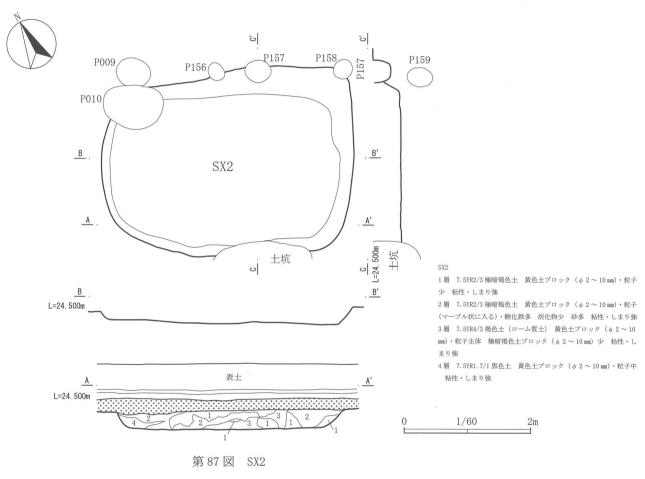
SX2 (第87 図 第14·15 図版)

①位置・重複:G13-c・d に位置し、調査区南壁際の断面図でみるように整地面下の地山から掘り込まれている。また、第1面(整地面)上から、北壁ではSA13、P010に、南壁では現状で径150cm、深さ60cm以上の平面円形の土坑と考えられる遺構に切られている。

②形状・規模・覆土: $3.53 \text{ m} \times 2.80 \text{ m}$ の平面隅丸方形で、深さは 0.30 mを測る。覆土は極暗褐色土~黒色土に至る人為堆積の様相を示す $1\sim 4$ 層が存在する。

③長軸方向: N-82°-E

④出土遺物:なし



(2) 堀

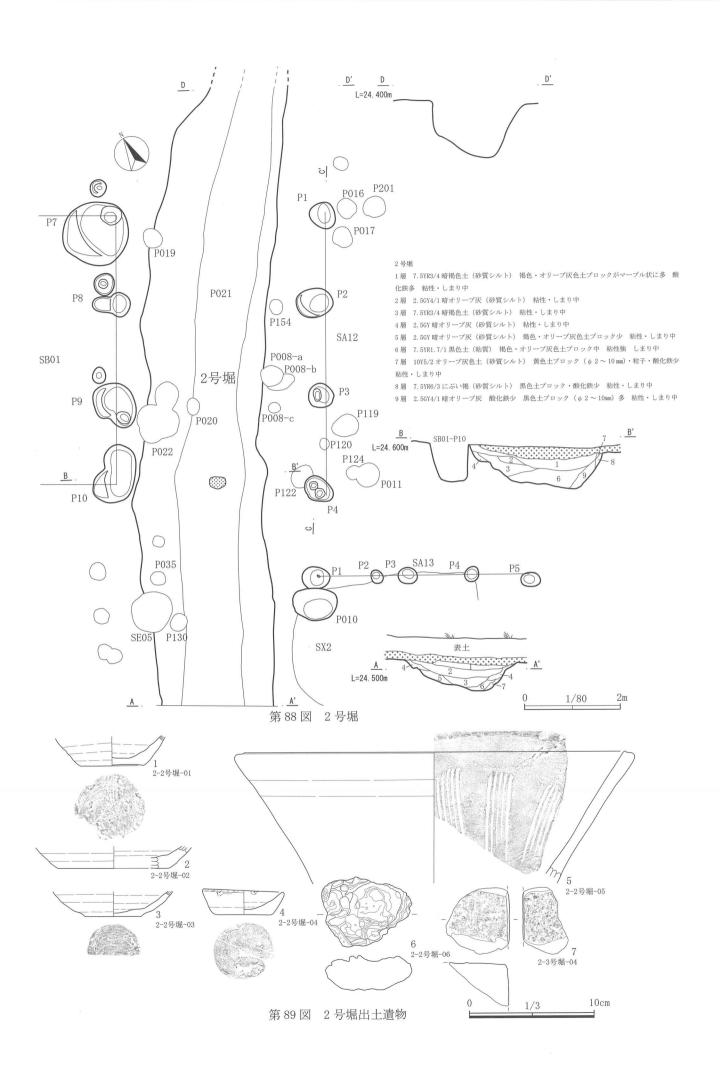
2 号堀 (第 88 · 89 図 第 15 · 35 図版 第 55 表)

①位置・重複:F13-c・d、G12-b・d、G13-a・c に位置し整地面下から検出された。

②形状・規模・覆土:幅 $1.60\sim2.72$ m、深さ $0.54\sim0.95$ mの断面箱薬研形で、底部標高は北が23.76 m、南が23.79 mで概ね平坦となっている。覆土は暗褐色土 \sim にぶい褐色土に至る8 層からなる堆積を示している。

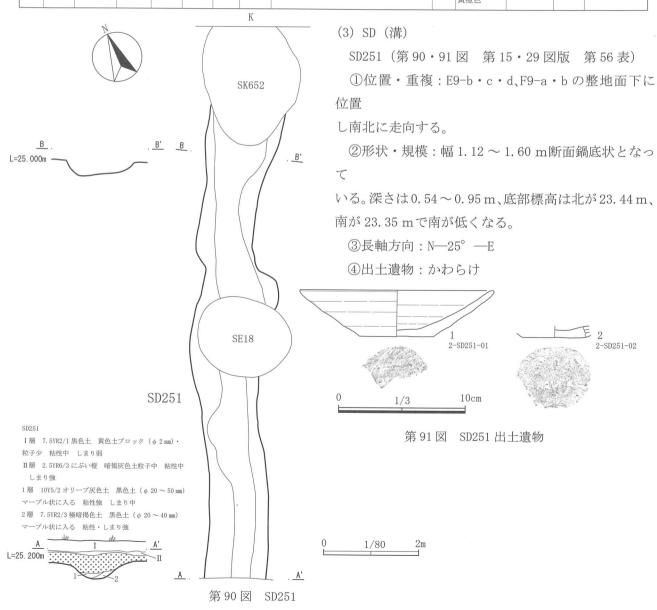
③長軸方向:N-32°-E

④出土遺物:堀側面に打ち込まれ、立位で検出された杭(現地番号 No. 4)は面取りされた角材で、ほぞ穴があった。 遺物は覆土中から出土している。その他の遺物はすべて覆土中から出土したものである。



第55表 2号堀出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	2-2ゴウホリ一括	かわらけ	A類中 皿	<u>;—</u>	5. 2	<2.4>	63. 4	平らな底部から50 度角でやや丸みを 持って立ち上が る。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 無調整。	優良	全体 7.5YR8/6浅 黄橙色	雲母微粒子 若干含む。 緻密。	全体の 1/2	
2	2-23° †	かわらけ	中皿	_	(9.0)	<1.8>	27. 2	45度角で立ち上がる。	ロクロ整形。	優良	全体5YR7/8 橙色	白色・雲母 微粒子若干 含む。	体部破片	類型不明
3	2-2ゴウ ホリ	かわらけ	A類小 皿	·—	(4. 5)	<2.0>	18. 1	やや突出気味の底 部から35度角で緩 やかに立ち上が る。	ロクロ整形。底部 一方向手持ちヘラ 削り調整。	優良	全体 7.5YR8/3浅 黄橙色	白色大粒子 ・雲母若干 含む。	底部の 1/2	
4	2-2ゴウホリ一括	かわらけ	C類豆皿	6. 4	4. 7	1.95	48.8	平らな底部から70 度角で、2段階に 立ち上がる。	ロクロ整形。底 部・体下端手持ち ヘラ削り調整。	やや良	内外面 7.5YR6/4に ぶい橙色	白色粒子や や多い。器 肉7.5YR4/3 褐色	完存	灯明油皿に転 用、灯心油痕 2箇所確認。
5	2-2ポリ No1	瓦質土器	擂鉢	(30. 0)	_	<10. 4>	223. 3	ほぼ40度角でやや 反り気味に開く。	5本1単位の櫛目 が4条残る。	良好	内外面N3/0 暗灰色	雲母微粒子 若干含む。 器肉N7/0灰 色	口縁部 1/6	
6	2-2ゴウ ホリ一括	土製品	鉄滓	縦5.5	横7.4	厚2.8	78. 3	溶けた鉄分が窪みに作	寸着している。	_	表面N6/0灰 色内面 2.5Y8/1灰 白色	_	破片	
7	2-2ゴウ ホリ	土製品	煉瓦か	縦5.3	横5.1	厚3.4	64. 7	煉瓦状の角塊の一部。		良好	全体 7/5YR8/3浅 黄橙色	スサ状の混入あり。	_	

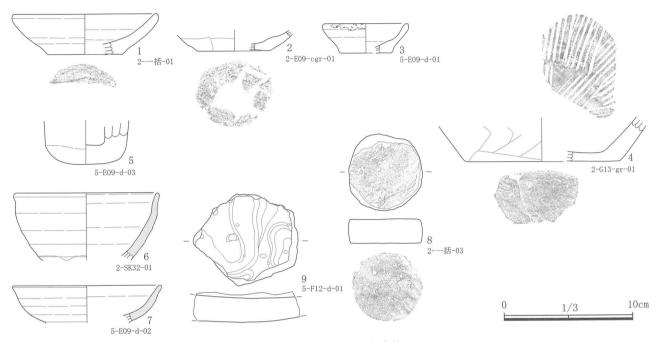


第56表 SD251 出土遺物観察表

NJ O		ODZOI L				nn ÷	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	里里	部形り付取	金//507行以	りむり入	C 1/41	//H _L	人们及	Vm ·· J
1	2-2次 面 251SD	かわらけ	B類大 皿	(16. 2)	(3. 0)	3. 6	48. 2	平らな底部から35 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。	良好	全体 2.5YR5/8明 赤褐色	白色・雲母 粒子若干含 む。	全体の 1/8	内面の剥離顕 著
2	2-2次 面 251SD	かわらけ	中皿	_	4.8	<0.9>	26. 2	底部は平坦。	ロクロ整形。	優良	外面 7.5YR8/4浅 黄橙色内面 5YR6/6橙色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	底部のみ	

(4) 2 区遺構外出土遺物 (第92 図 第30 図版 第57・58 表)

本地区において検出された遺物のうち、遺構に伴わなかった遺物について以下に掲載する。



第92図 2区遺構外出土遺物

第57表 2区遺構外出土遺物観察表(1)

弗 5		乙区退伸						DD TT/ 4th ON/	## T/ の #+ 2#4	John 15	左 . 雲田	胎士	残存度	備考
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調		7文 行 皮	VH ~5
1	2区一 括	かわらけ	A類中 皿	(11. 1)	(5.8)	3.8	32. 1	やや窪んだ底部から35度角で直線的に開き、途中から 丸みを帯びてく る。	ロクロ整形。	良好	外面 7.5YR7/4に ぶい橙色内 面7.5YR5/3 にぶい褐色	褐色微粒子 やや多い。 器肉外面と 同じ。	全体の 1/8	漆液容器とし て使用
2	2-Е9-с	かわらけ	A類中 皿	_	5.8	<1.7>	38. 7	やや突出気味の底 部	ロクロ整形。切り 離し不明。	良好	全面 7.5YR8/2灰 白色	白色粒子や や多い。	底部のみ	
3	E9-d一 括	かわらけ	A類豆 皿	(6. 5)	(4. 1)	<2.35>	11.4	突出する底部から 60度角で緩やかに 立ち上がり、口縁 部に鎬を持つ。	ロクロ水挽き成 形。切り離し不 明。	優良	全体5YR6/8 橙色	白色粒子やや多い。	全体の 1/5	灯明油皿に転 用、口縁部に 灯心油痕。
4	2-G13	土師質土 器	擂鉢	_	(12.0)	⟨3.5⟩	101.5	平らな底部から45 度角で直線的に立 ち上がる。	回転台使用。体部 下端手持ちへラ削 り調整。6本1単位 の櫛目が見込みに 隙間なく施される。	良好	内外面 7.5YR3/2黒 褐色	白色微粒子 若干含む。 器肉 7.5YR3/2 黒褐色	底部の 1/8	
5	E9-d— 括	土師質土器	塩焼壺	_	(5. 0)	<3.5>	86. 3	平らな底部から垂 直に立ち上がる。	手捏ね成形。	良好	外面 7.5YR8/4浅 黄橙色内面 2.5YR6/6橙 色	白色大粒やや多い。	底部のみ	
6	2-SK32	陶器	天目茶碗	(11. 1)	_	<5. 4>	58. 7	60度ほどの角度で 緩やかに立ち上が り、垂直な鼈口と なる。	ロクロ整形。	優良	内外面 5YR5/3にぶ い赤褐色の 鉄釉露胎 10YR8/1灰 白色	緻密器肉露 胎と同じ。		瀬戸・美濃産 17世紀前半

第58表 2区遺構外出土遺物観察表(2)

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
7	E9-d— 括	陶器	丸皿	(11.5)	-	<3.0>	14.8	体部下端から20度 角で開き、上半部 は丸みを持って立 ち上がる。	ロクロ整形。	優良	内外面 7.5Y8/1灰 白色の長石 釉	黒色微粒子 若干。器肉 真白色	口縁部 の1/8	瀬戸·美濃産17 世紀前半
8	2区一括	土製品	加工円盤	縦6.0	横5.8	厚 2.85	77. 1		円形に加工。周縁 の研磨顕著。ある いは使用磨滅か。	良好	内外面N2/0 銀黒色	黒色粒子多 い。器肉 N5/0灰色	完存	平瓦破片を転 用。
9	F12-d	石製品	鋳造関 連道具	縦7.2	横8.3	厚2.3	127. 2	内面にガラス状の 溶融物付着。外面 は曲面を呈する。			内面 7.5GY2/1緑 黒色光沢あ り。外面 N6/0灰色	内面側は発 泡顕著。	一部分のみ	ガラス製品鋳型の可能性あり。SE01_4と同一個体か。

第5節 3区

(1) SB (掘立柱建物跡)

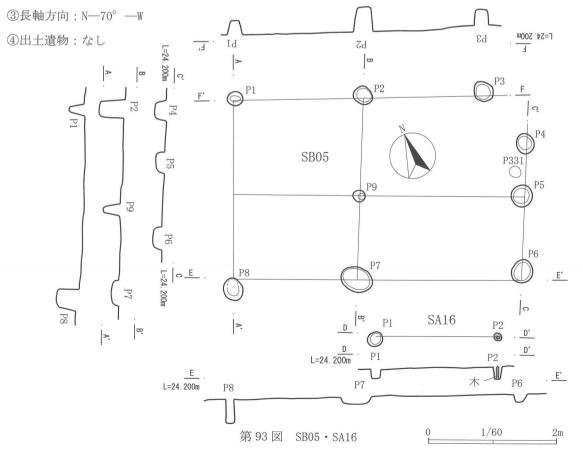
SB05 · SA16 (第 93 図 第 18 図版 第 59 · 60 表)

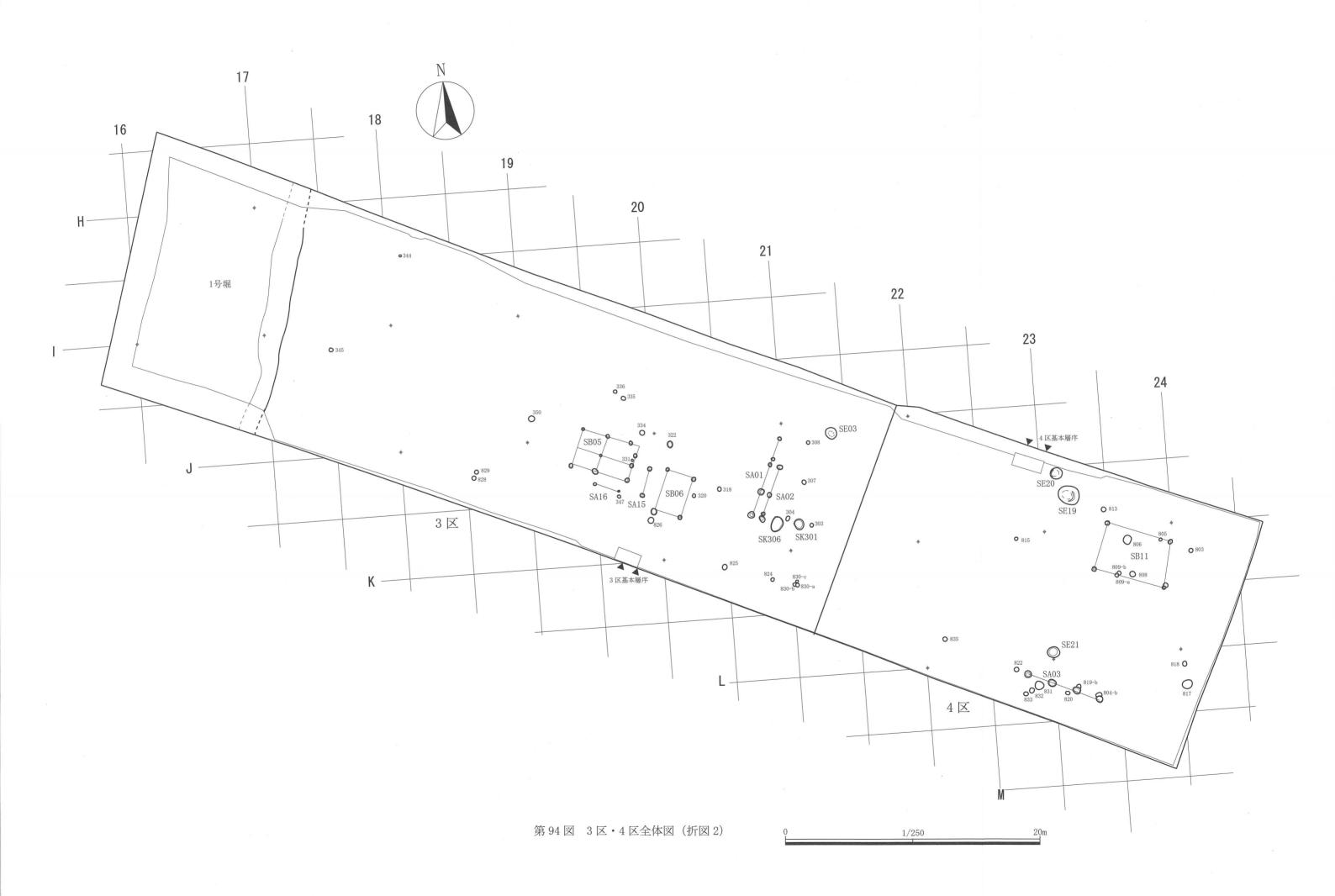
①位置・重複: I19-c、J19-a・b に位置する。SB06 に隣接して検出された。

②形状・規模: $2 \, \mathbb{I} \, 1 \, \text{面}$ と思われる建物跡である。概して東側を構成する $P3 \sim 7 \, \text{は比較的大きな平面円形で浅い のに対して、西側では <math>P1 \cdot 2 \cdot 8 \, \text{が直径} \, 25 \sim 35 \, \text{cm}$ 、深さ $30 \, \text{cm} \, \text{前後としっかりとした感がある}$ 。なお、建物の中央に $P9 \, \text{があり}$ 、束柱と考えられる。

各柱間は、西側の P1・2 間、P7・8 間が 2.0 m前後、P1・8 間が 2.95 mで、これは P2・9・7 間と合致し、規格性がある。これに対し東妻側は P4・5 間が 0.9 m、P5・6 間が 1.2 mと間隔が短く、桁行については P6・7 間が 2.5 mと広く、逆に P2・3 間は 1.9 mと狭いなど規格性に乏しい。全体として、北東隅を欠く長方形を呈し、東側部分には床が貼られていた可能性が高い。

なお、南側の一部にのみ 0.9 m離れて、1.8 mの塀 (SA16) がついていたと思われる。





第 59 表 SB05 ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P01	SK341	23	22	22	23, 86
P02	SK337	30	29	29	23. 63
P03	SK333	43	30	30	23. 67
P04	SK331	30	26	26	23. 90
P05	SK330	35	32	32	23. 93
P06	SK329	38	32	32	23. 88
P07	SK338	49	38	38	23. 85
P08	SK342	35	30	30	23. 50
P09	SK340	20	20	20	23. 70

第60表 SA16ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P339	20	20	19	23. 76	SB05に付属
P2	P346	20	16	12	23. 82	木質残存 SB05に付属

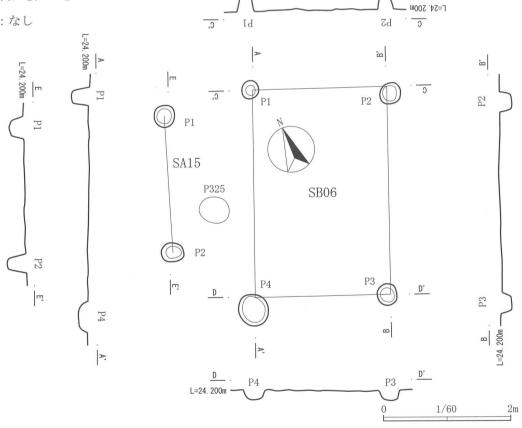
SB06·SA15 (第95図 第18図版 第61·62表)

①位置: J19-b・d、J20-a・c に位置し、SB05 から東へ1.5 m離れる。

②形状・規模:柱穴は概して、直径 35cm 前後、深さは $17\sim30$ cm である。柱間は $P1\cdot2$ 間、 $P3\cdot4$ 間はともに 2.1 mで、桁行の $P1\cdot4$ 間、 $P2\cdot3$ 間が 3.3 mと考えられる。なお、西側には建物から 1.35 m隔たって、長さ 2.1 mの塀(SA15)が取付いていたらしい。

③長軸方向: N-20°-E

④出土遺物:なし



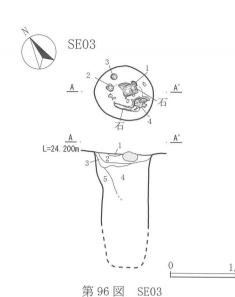
第 95 図 SB06 · SA15

第61表 SB06ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高
P1	SK323	26	26	30	23. 80
P2	SK321	35	33	21	23. 85
Р3	SK319	33	33	17	23. 87
P4	SK326	50	45	19	23.88

第62表 SA15ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P328	28	24	29	23.79	SB06に付属
P2	P327	32	32	31	24. 03	SB06に付属



(2) SE (井戸跡)

SE03 (第 96 · 97 図 第 18 · 30 図版 第 63 表)

①位置: J21-a に位置し、南西に 3.5 mで SA01 の P1 に達する。

②形状・規模・覆土:径0.9 mの円形で、1.1 mまで精査でき、重機による掘削で深さ1.8 mまで確認した。覆土は黒色土が中心で、上面に炭化物がみられる。精査当初から礫石が検出された。

③長軸方位:N-56°-W

④出土遺物:中層に至って、かわらけや瓦質土器、陶器皿など祭祀に関わると思われる遺物がほぼ完全な形で上向きにまとまって出土した。

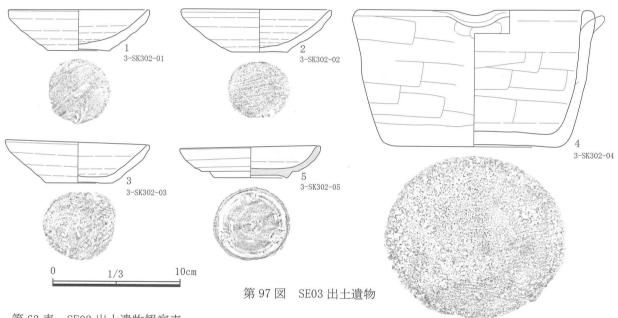
1層 7.5YR1.7/1 黒色土 (粘質) しまり・粘性強 炭化物主体

 $2\, \overline{\rm M}$ 7.5YR2/1 黒色土(粘質) オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm) 少 しまり・粘性強

3層 7.5YR5/2 オリープ灰色土(粘質) 黒色土ブロック多 しまり・粘性強

4 層 7.5 km. 7/1 黒色土 (粘質) オリープ灰色土プロック (ϕ 2 \sim 5 mm) 少 しまり・粘性強

5 層 7.5 YR2/1 黒色土(粘質) オリーブ灰色土ブロック(ϕ 2 \sim 5 mm)少 しまり・粘性強



第 63 表 SE03 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	3N- SK302 o15	かわらけ	B類中 皿	11.0	4. 95	3. 15	106. 3	平らな底部から30 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 一方向手持ちヘラ 削り。	優良	全体 10YR6/3に ぶい黄橙色	雲母微粒子やや多い。	ほぼ完存	
2	3N- SK302 No14	かわらけ	B類中皿	11.6	4. 4	3. 3	123. 9	ほぼ平らな底部から30度角で直線的に立ち上がる。ロ唇部の器肉分厚	ロクロ整形。切り離し不明、一方向手持ちヘラ削りヵ。	優良	全体 7.5YR7/4に ぶい橙色	雲母微粒子やや多い。	ほぼ完存	
3	3N- SK302 No13	かわらけ	A類中 皿	11. 2	5. 3	3. 5	95. 9	ほぼ平らな底部から35度角で緩やか にに立ち上がる。	ロクロ整形。右回 転糸切り離し後、 一方向手持ちヘラ 削りヵ。	優良	全体 10YR7/4に ぶい黄橙色	雲母微粒子多い。	全体の 3/4	
4	3N- SK302 No16	瓦質土器	片口鉢	18. 0	13. 7	10.5	1106. 4	底径と口径がほぼ 同じ枡形の深鉢 で、一か所に小さ な注ぎ口がつく。	回転台使用。全面 に横ミガキをし、 内面では縦にみが きあげる。	良好	内外面真黒色	黒色微粒子 若干含む。 器肉真白色	完存	
5	3- SK302- 3	陶器	丸皿	10.8	5. 7	2. 45	121. 1	低い内反り高台か ら水平に開き、25 度角・60度角で二 段に立ち上がる。	ロクロ整形。削り 出し高台。高台内 に円錐ピン痕、内 面に目痕3か所。	優良	内外面 5GY8/1灰白 色の長石 釉。内面に 貫入わずか。	黒色微粒子若干含む。	完存	瀬戸・美濃産連 房式登窯第1-2 小期17世紀前葉

(3) SA (柵列)

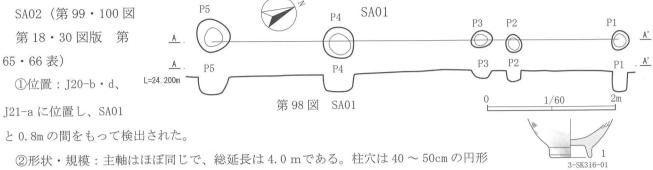
SA01 (第98 図 第18 図版 第64 表)

①位置: J20-b・d、J21-a に位置し、SA02 と並行する。

②形状・規模:総延長 6.3 mである。柱穴は $25\sim50$ cm の円形、深さ 25 cm 前後とばらつきがある。柱間は $P1\cdot3$ 間が 2.1 m、 $P3\cdot4$ 間が 2.2 m、 $P4\cdot5$ 間が 2.0 mとなる。 ③走行方位: $N-25^\circ$ 一E ④出土遺物: なし

第64表 SA01 ピット計測表

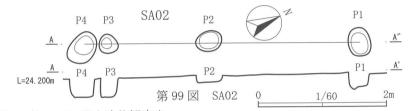
P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P1	P309	24	24	33	23. 79
P2	P311	24	20	23	23.90
Р3	P312	24	20	14	24.00
P4	P314	48	40	32	-
P5	P317	44	48	37	23. 69



②形状・規模:主軸はほぼ同じで、総延長は 4.0 mである。柱穴は 40 ~ 50cm の円形で、深さは最大で 25cm と浅い。柱間は P1・2 間が 2.2 m、P2・4 間が 1.8 mで P3 は添え柱のようである。 ③走行方位: N—23° —E ④出土遺物: 磁器

第 100 図 SA02 出土遺物

10cm



写 65	衣 SF	02 ヒ 長径	短径	計例	底部標高
P番号	旧番号	(cm)	(cm)	(cm)	(m)
P1	P310	40	28	26	23. 89
P2	P313	36	32	10	24. 00
Р3	P315	32	28	35	23. 76
P4	P316	52	32	24	23. 84

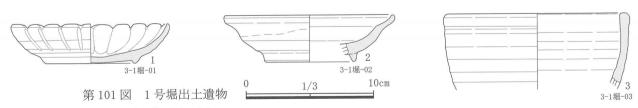
第 66		SAO2 出	工退物器種	J 観祭	文 底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
, 3N	注記 N- K316	磁器	染付小碗	— HE	3.0	〈3.0〉	21.6	高めの高台に半球状の碗がのる。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面白色 の透明釉	緻密。		体部に銅版絵 付の草木文 瀬戸・美濃産19 世紀末葉以降

(4) 堀

1 号堀 (第101・102 図 第18・30 図版 第67・68 表)

①位置:3 区西端で検出された南北に走向する外濠で、G16-a \sim d、H15-d、H16-a \sim d、H17-a \sim c、I15-b、I16-a \sim d、I17-a・c に位置する。

②形状・規模・覆土:幅は現状で 13.44 m、北側で深さ 1.36 mを測る。底部の標高は、北側で 23.20 m、東側で 22.70 mを測る。断面は、底部が平らで立ち上がりが緩やかに開く形状をなし、覆土は褐色土~黒色土の 3層である。③走向方向:N—15°—E ④遺物:覆土中から陶磁器及び獣骨(ウマまたはウシか)が出土している。



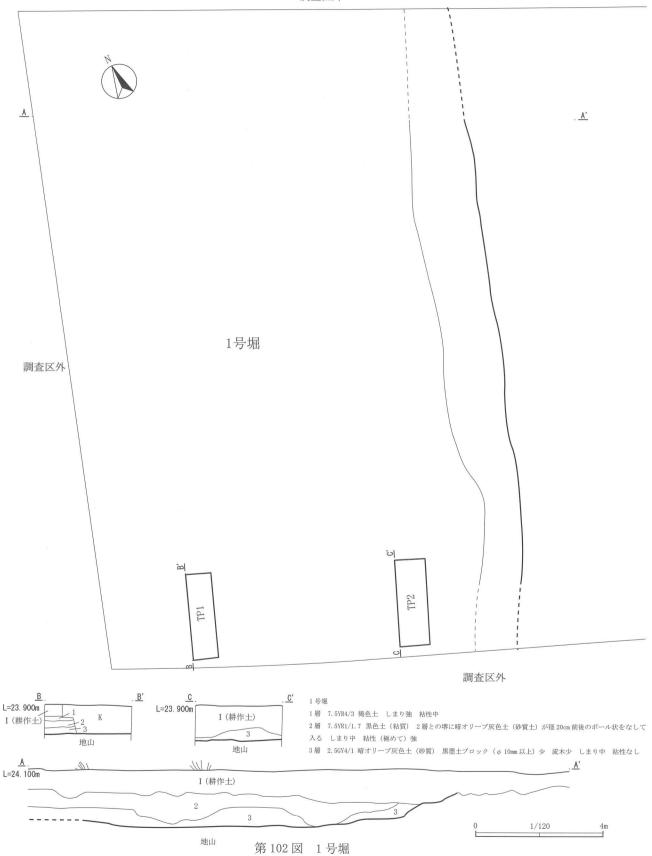
第67表 1号堀出土遺物観察表(1)

番号	注記	1 万畑口	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	3-ホリ 001一 括	陶器	志野菊皿	(12.3)	(6.9)	3. 05	59. 1	内反り高台から 徐々に丸みを持っ て口縁部付近で70 度角となる。口唇 は輪花状をなす。	ロクロ整形。削り 出し高台。外側の 輪花の表現はへ ラ、内面は指頭 圧。	良好	全体N4/0暗 灰色の長石 釉	白色微粒子 若干含む。 器肉黒色。	全体の 1/3	二次被熱 美濃産17世紀 初頭
2	3-ホリ 001- 括	陶器	折縁皿	(13. 1)	(6. 9)	3. 6	55. 7	内反り気味の高台 から30度角で緩や かに立ち上がり、 口縁部で反り返 る。	ロクロ整形。貼付 高台。体下端回転 ヘラ削り調整。	優良	全体5GY8/1 灰白色の長 石釉	白色微粒子 若干含む。	全体の 1/3	瀬戸・美濃産 17世紀ヵ

第68表 1号堀出土遺物観察表 (2)

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
3	3-ホリ 001 括	陶器	片口力	(13. 5)	_	<5.9>	42. 1	丸形。	ロクロ整形。体部 下半回転削り。	良好	内外面 2.5YR5/6黄 褐色の飴釉	白色微粒子 若干含む。		瀬戸・美濃産 17世紀末葉

調査区外



(5) SK (土坑)

SK301 (第 103 · 104 図 第 18 · 30 図版 第 69 表)

①位置: J21-c に位置する。

②形状・規模・覆土:84 cm×82 cm平面円形で深さは31 cm。

覆土は極暗褐色土~黒色土に至る1~4層まで存在する。

③長軸方向:N-0°

④出土遺物:遺物は1層上面にまとまって検出されており、

以下に図及び観察表を示した。

SK306 (第 103 図 第 18 図版)

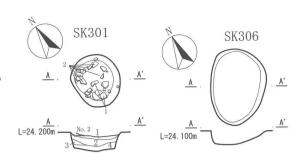
①位置: J20-d、J21-c に位置する。

②形状・規模・覆土:132 cm×90 cmの平面楕円形で覆

土は黒色土1層からなる。

③長軸方向:N-36°-E

④出土遺物:なし



SK301

1 層 7.5YR1.7/1 黒色土 焼土ブロック(ø 2 ~ 10 mm)中 炭化物ブロック(ø 2 ~ 10 mm)

中 粘性強 しまり中

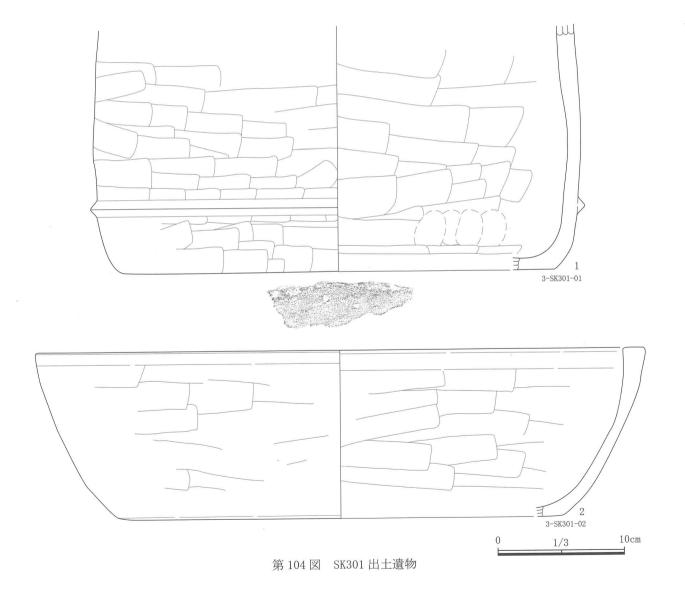
2 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土ブロック(ϕ 2 \sim 10 mm)少 粘性強 しまり中

3 層 7.5YR2/1 黒色土 灰オリーブ色土 (ϕ 2 \sim 10 mm) 中 粘性強 しまり中

4 層 7.5YR2/1 黒色土 灰オリーブ色土(ϕ 2 \sim 10 mm)少 粘性強 しまり中

0 1/60 2m





第69表 SK301 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	3- SK301 No4·6	土師質土器	火鉢ヵ	_	(34. 0)	<19. 2>	746. 5	平らな底部。胴部 下端でやや丸みを 持って立ち上が り、上半は直立す る。下端上部に凸 帯が巡る。	輪積み成形。全面 ナデ調整。	良好	全体 7.5YR4/6褐 色	白色・雲母 微粒子若 干含む。骨 針含む。	胴部破片	VIII J
2	3- SK301 No11・15 他	土師質土 器	火鉢ヵ	(48. 0)	(35. 0)	<12.5>	872. 1	平らに整形された 口唇と、ほぼ半球 状の胴部からなる。	輪積み成形。全面 ナデ調整。	やや不良	全体 7.5YR3/1黒 褐色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。 骨針含む。 器肉 7.5YR6/6 橙色	口縁部破片	

第70表 3区ピット計測表

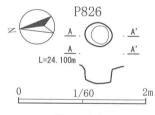
				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
3区	P303	Ј21-с	32	28	24	円形	
	P304	Ј21-с	36	24	20	楕円形	
	P307	J21-a	36	28	26	楕円形	
	P308	J21-a	28	28	16	円形	
	P318	Ј20-Ь	28	28	27	円形	
	P320	Ј20-с	28	20	35	楕円形	
	P322	J20-a	52	40	21	楕円形	
	P331	Ј19-Ь	28	28	13	円形	
	P334	I19-d	40	36	7	円形	
	P335	I19-d	24	20	28	円形	
	P336	I19-d	20	16	20	円形	

				規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
	P344	H18-a	15	15	39	円形	
	P345	J17-b	32	30	14	円形	
	P350	І19-с	44	44	25	円形	
	P824	K20-b	32	28	36	円形	
	P825	K20-a	38	38	40	円形	
	P826	J19-d	52	48	40	円形	
	P828	J18-b	36	32	10	円形	
	P829	J18-b	28	24	34	円形	
	P830-a	K21-a	28	24	27	円形	P830-bを切る
	Р830-ь	K21-a	28	28	17	円形	P830-aに切られる
	Р830-с	K21-a	24	20	13	円形	

(6) ピット (第105 図 第70表)

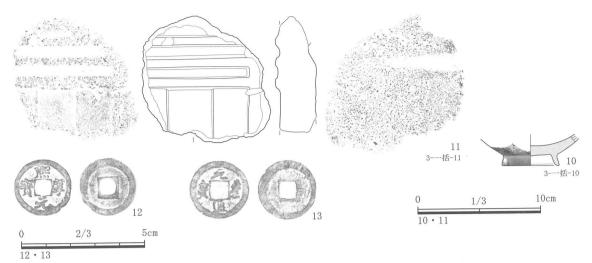
遺構が組めなかったピットについて上記第70表にまとめた。

(7) 3 区遺構外出土遺物 (第 106・107 図 第 30 図版 第 71 表) 0 1/60 1/60 1/60 3 区遺構外から出土した遺物について以下にまとめた。 第 105 図 P826



2 3-括-03 3-括-03 3-括-04 3-括-06 3-括-06 3-括-07 0 1/3 10cm

第106図 3区遺構外出土遺物 (1)



第107図 3区遺構外出土遺物(2)

第71表 3区遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
	3一括	陶器	擂鉢	_	(12.0)	<4.8>	121.5	平らな底部から65 度角で反り返り気 味に立ち上がる。	回転台使用。底 面・体下端へラ削 り調整。6本1単 位の櫛目。	良好	内外面 7.5YR5/2灰 褐色の鉄釉	白色粒子若 干含む。器 肉7.5YR4/1 褐灰色	底部破 片	瀬戸・美濃産17 世紀前葉
2	3一括	陶器	擂鉢	_	_	<1. 15>	37. 8	平らな底部。	回転台使用。底部 回転へラ削り調 整。14本以上1単 位の櫛目。	優良	内外面 7.5YR4/4灰 褐色の鉄釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉 N8/0灰白色	底部破片	瀬戸・美濃産連 房式登窯第6小 期以降18世紀中 葉以降
3	3一括	陶器	片口ヵ		(10.4)	<2.0>	25. 7	幅広の高台。	ロクロ整形。削り出し高台。	良好	内面 10YR7/4に ぶい黄橙色 の飴釉	精良。器肉 10YR8/2乳 白色	底部破片	高台内墨書(文 字不明) 瀬戸・美濃産19 世紀
4	3一括	陶器	志野丸皿	(12. 0)	(8.0)	2. 5	27.9	低い高台から30度 角で丸みを持って 立ち上がるり、口 緑で外反する。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面N8/0 灰白色の長 石釉に貫入 あり。	白色粒子若 干含む。	全体の 1/8	二次被熱瀬戸・ 美濃産17世紀前 半ヵ
5	3一括	磁器	染付丸碗	(9. 5)		<4.7>	29. 1	高めの高台を持ち、半球状の器 形。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 5GY8/1灰白 色の釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉 N8/0灰白色	全体の 1/4	10BG2/1青黒色 の呉須で雪輪草 花文 肥前(波佐見・ 平戸)系18世紀 末葉~19世紀中 葉
6	3一括	磁器	染付小碗	(9. 9)	_	<4. 15>	21.7	半球状の器形。体 部中にロクロ目残 る。	ロクロ整形。	優良	内外面 5GY8/1灰白 色の釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉 N8/0灰白色	体部の 1/4	5BG4/1暗青灰色 の呉須で草木文 肥前系17世紀ヵ
7	3一括	磁器	染付輪 禿皿	_	4. 1	<1.65>	54. 3	内反り高台。体部 は筒形を呈す可能 性あり。	ロクロ整形。削り 出し高台。体下端 回転へラ削り調 整。見込み蛇の目 釉剥ぎ、体下半部 露胎。	優良	内外面N8/0 灰白色の釉	黒色微粒子 若干含む。	底部のみ	肥前 (波佐見・ 平戸) 系
8	3一括	磁器	白磁皿	(11. 2)	(6.6)	2. 25	9. 2	低平な皿で、見込 みに波状の凹凸が ある。	型作りカ。	優良	白磁	緻密	口縁部破片	内面上絵痕跡 瀬戸·美濃産19 世紀後半
9	3一括	磁器	染付平碗	(11. 3)	4. 2	5. 4	72. 6	高めの高台を持つ。半球状となるか。	型押し成形。	優良	内外面N8/0 灰白色の釉	黒色微粒子 若干。	全体の 1/4	明青色の銅版絵 付けの草花文 瀬戸・美濃産19 世紀末葉以降
10	3一括	磁器	染付碗	_	(4. 4)	(2.5)	21.9	高めの高台を持ち、半球状の器 形。	ロクロ整形。削り出し高台。	良好	内外面白色 の釉	黒色微粒子若干含む。	底部の 1/4	内外面明青色の 摺り絵 瀬戸・美濃産19 世紀末葉以降
11	3一括	石製品	板碑	縦10.1	横 10.35	厚3.3	370. 5	板石塔婆の頭部で、	幅1.7cmの凹帯がある。	_	全体 7.5Y7/1灰 白色	_	頭部破片	
12	-	銭貨	北宋銭	外径 23.3mm	FL 6.7mm	_	3. 2	_	-	_	_	銅	完存	「熈寧元寶」真 書(1068~1077)
13	-	銭貨	北宋銭	外径 24.1mm	孔	-	3. 1	_	_		-	銅	完存	「元豊通寶」行書(1078~1086)

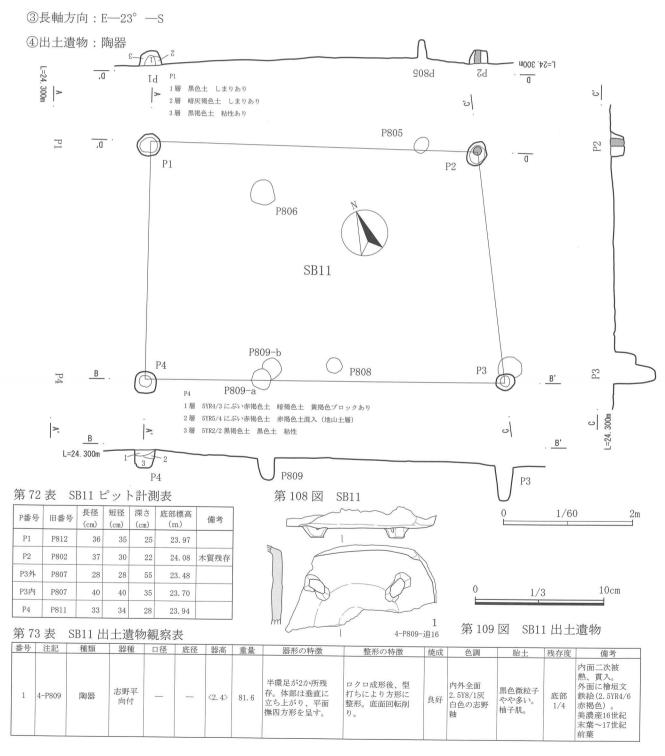
第6節 4区

(1) SB (掘立柱建物跡)

SB11 (第 108 · 109 図 第 31 図版 第 72 · 73 表)

①位置: J23-c、K23-a・b・d に位置する。

②形状・規模:調査時では個々のピットとしていたが、木質の残るもの(P2)を中心に 4 穴からなる建物跡と考えた。各柱穴は別表のとおりであるが、重複している P3 についてはその内側の柱穴を採ると、直径 $35\sim40\,\mathrm{cm}$ 、深さ $22\sim55\,\mathrm{cm}$ の範囲内に収まる。柱穴の間隔は、北で $5.2\,\mathrm{m}$ 、南で $5.5\,\mathrm{m}$ 、東は $3.65\,\mathrm{m}$ 、西は $3.75\,\mathrm{m}$ 。建物内部に相当する部分にもピットがみられるが、いずれも浅く、規則性もないことから張り床などの上部構造が存在したとは思われない。



(2) SE (井戸跡)

SE19 (第 110 図 第 19 図版)

①位置: J23-c、SB05の西約3mに位置する。

②形状・規模・覆土:片側に漏斗状の膨らみを持つ、1.7 m×1.4 mの楕円形の井戸跡である。漏斗状の膨らみは 0.6m にまで及び、その下は 0.9 mの円形となって、垂直に落ち込むが、1 mの深さで、湧水のため精査を断念した。 覆土は、上層にこの調査区特有の暗褐色土に赤褐色土粒子が混じった土層で覆われ、下層は黒色系の互層が続き、一部に灰色粘土塊の崩落がみられるが、自然堆積の様相を示す。調査後、重機による掘削の結果、2.1 mの深さがあることを確認した。 ③出土遺物:なし

SE20 (第 110 · 111 図 第 19 · 31 図版 第 74 表)

①位置: J23-c、SE19 に近接して位置する。

②形状・規模・覆土:径約 $0.9\,\mathrm{m}$ の円形の井戸である。断面では筒状を呈し、 $0.9\,\mathrm{m}$ まで精査できた。それによると上層に特有の土層が埋め込まれたような状態でみられ、下層は黒色系の土層となり、自然堆積か否か判断できなかった。これも重機の掘削結果により、約 $1.8\,\mathrm{m}$ まで掘りこまれていた可能性がある。

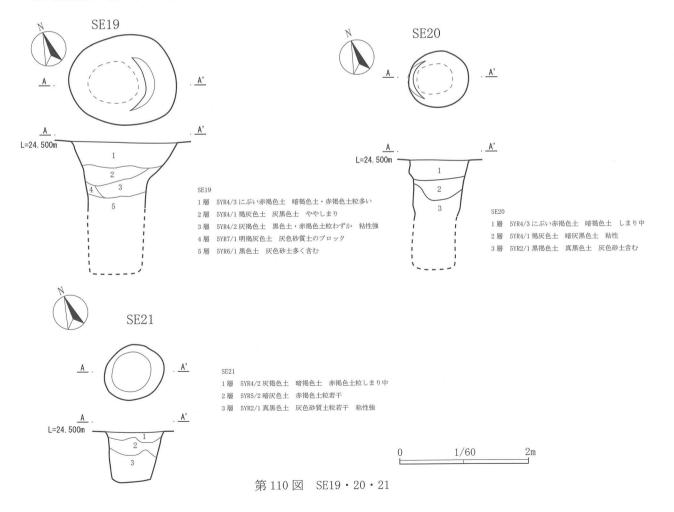
③出土遺物:瓦質土器

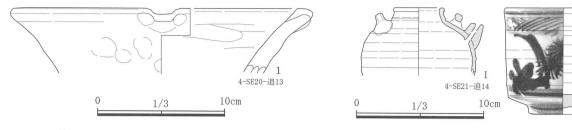
SE21 (第 110・112 図 第 19・31 図版 第 75 表)

①位置: K22-d、K23-c、L22-b、L23-a に位置する。

②形状・規模・覆土:径1m、深さ0.8mの円形の井戸である。断面は筒状で、先に行くに従って、やや細くなり、 底面は0.6mの円形を呈す。覆土は特有の土層の下に暗灰色土と真黒色土が自然堆積を示す。

③出土遺物:精査中から、特に上層から陶器・磁器が出土した。





第 111 図 SE20 出土遺物

第 112 図 SE21 出土遺物

4-SE21-追

第74表 SE20 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
Ī	4-20ゴ ウSE— 括	瓦質土器	片口鉢	(23. 6)	_	<5. 1>	109. 4	50度角で立ち上 がってき、口縁部 でさらに開く。	回転台使用。指頭圧による片口整形。	良好	内外面 N1.5/0黑色	白色微粒子 若干含む。 器肉も同色。	口縁部破片	

第75表 SE21 出土遺物観察表

714 .	0 10	огат ш	1 /54 1/4	EN DIA										
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	4-213° ウSE— 括	陶器	土瓶	(3.7)	_	<5. 2>	22. 7	全体に丸みのある 体部に注口がつ く。円孔1孔。把 手は環状紐貼付。	ロクロ整形。	良好	内外面 5YR5/6明赤 褐色の錆釉	黒色微粒子多い。	体部の 1/4	
2	4-21 ^{3°} ウSE— 括	磁器	染付筒 形碗	(8. 9)	5. 2	8. 2	167. 8	低い高台から大き く開き体下半から 筒状に立ち上が る。	ロクロ整形。削り 出し高台。 畳付に 砂目痕。	優良	内外面N8/0 灰白色の透 明釉	黒色微粒子若干含む。	全体の 3/4	外面に呉須 (5B3/1暗青灰 色)の四方襷 文・松文 肥前系17世紀 前半

(3) SA (柵列)

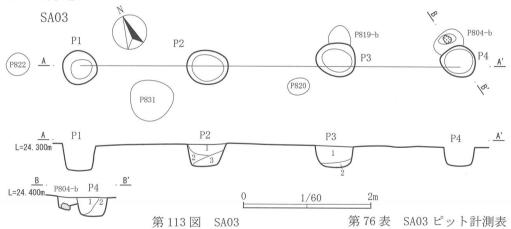
SA03 (第 113 図 第 19 図版 第 76 表)

①位置: L22-b、L23-a に位置する。SB11 とは 10 m離れて並行する。

②形状・規模: 総延長 6.0 mを測り、柱穴は径 $48\sim68$ cm、深さ 30 cmほどである。柱間は P1 から順に 1.9 m、2.0 m、1.9 mとなる。

③走行方位:S-25°-E

④出土遺物:掲載遺物なし



P2

1層 5YR2/2 黒褐色土 黒色土 しまり強 2層 5YR4/3 にぶい赤褐色土 暗褐色土 黄褐色ブロック

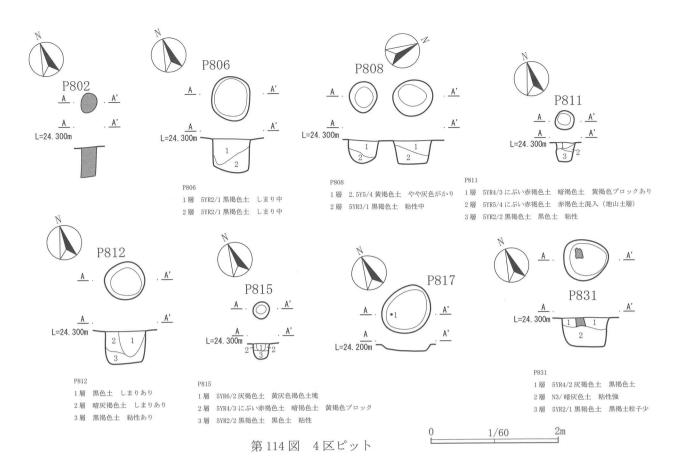
3層 5YR2/2 黒褐色土 黒色土 粘性あり

1届 5YR4/3 にぶい赤褐色土 暗 褐色土 黄褐色ブロック 2層 5YR2/2 黒褐色土 黒色土

粘性強

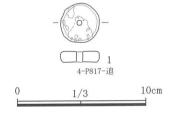
1層 5YR4/3にぶい赤褐色土 暗褐色 土 黄褐色ブロックあり 2層 5YR5/4にぶい赤褐色土 赤褐色 土混入 (地山土層)

長径 短径 深さ 底部標高 P番号 旧番号 備考 (m) (cm) (cm) (cm) P1 P834 56 23.77 P821 P2 48 40 34 23.91 Р3 P819 48 68 23.87 P819-bを切る P804 P804-bを切る



(4) ピット (第114・115 図 第77・78 表)

検出されたピット群は掘立柱建物として組めたもの、柵列と判断されるものなどは同一遺構として捉えた。一部ピットについては第115図に示した。その他ピットの平面図は全体図に掲載し、断面図は割愛した。各ピットの計測値は以下第78表に示した。



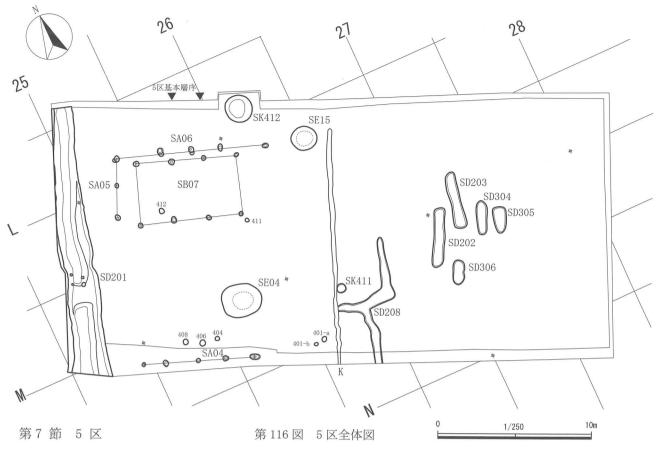
第 115 図 P817 出土遺物

第77表 P817 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	4-P817	金属製品	灯明芯 抑えヵ	径3.0		0.85	61. 1	表裏同形の円形で、あり。	中央に0.45cmの穿孔	_	全体N7/0灰 色	鉛	完存	被熱、酸化ヵ

第 78 表 4 区ピット計測表

				規模	・形態							規模	・形態		
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考	地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
4区	P803	K24-a	28	28	39	円形			P817	L24-a	56	48	10	楕円形	
	P804-b	L23-a	52	40	25	楕円形	根石残存 SB03-P4に切られる		P818	L24-a	32	28	18	円形	
	P805	K23-b	28	24	16	円形			P819-b	L24-a	36	34	27	円形	
	P806	K23-b	32	28	33	円形			P820	L23-a	40	24	46	楕円形	
	P808	K23-b	32	32	20	円形			P822	K22-d	36	32	32	円形	
	P809-a	K23-b	28	28	29	円形	P809-bを切る		P831	L22-b	52	52	41	円形	
	P809-b	K23-b	32	28	21	円形	P809-aに切られる		P832	L22-b	32	28	15	円形	
	P813	J23-d	40	40	36	円形			P833	L22-b	52	48	36	円形	
	P815	K22-b	24	24	28	円形			P835	К22-с	34	34	26	円形	



(1) SB (掘立柱建物跡)

SB07・SA05・SA06 (第 117・119・120 図 第 21・31 図版 第 79 ~ 81・83・84 表)

①位置: K25-c・d、L25-a・b、L26-a に位置する。

②形状・規模・覆土:3間1面の掘立柱建物跡である。個々の柱穴については下表のとおりである。

柱穴は概して $40\text{cm} \times 30\text{cm}$ の楕円形を呈すものが多く、深さは検出面から $20 \sim 35\text{cm}$ (標高では $23.85 \sim 24.00\text{ m}$) となる。柱の痕跡は $P2 \cdot 6 \cdot 7$ などにわずかな木片がみられ、これらの裏込め土は、黒色土に灰色粘土の地山を含む土層である。

妻側の柱間は、西で 4.0 m、東で 3.8 mであり、その間に支柱などの痕跡はない。 北桁行では P1 から順に、2.35 m、2.1 m、2.15 m、南側の P5 から順に 2.1 m、2.25 m、2.25 mを測り、全体としては 6.60 mとなる。

建物の内部には束柱穴らしきものは見られず、全体を土間として使用したものと考えられる。

③長軸方向:E-30°-S ④出土遺物:焼締陶器

(2) SA (柵列)

SA04 (第118 図 第21 図版 第82 表)

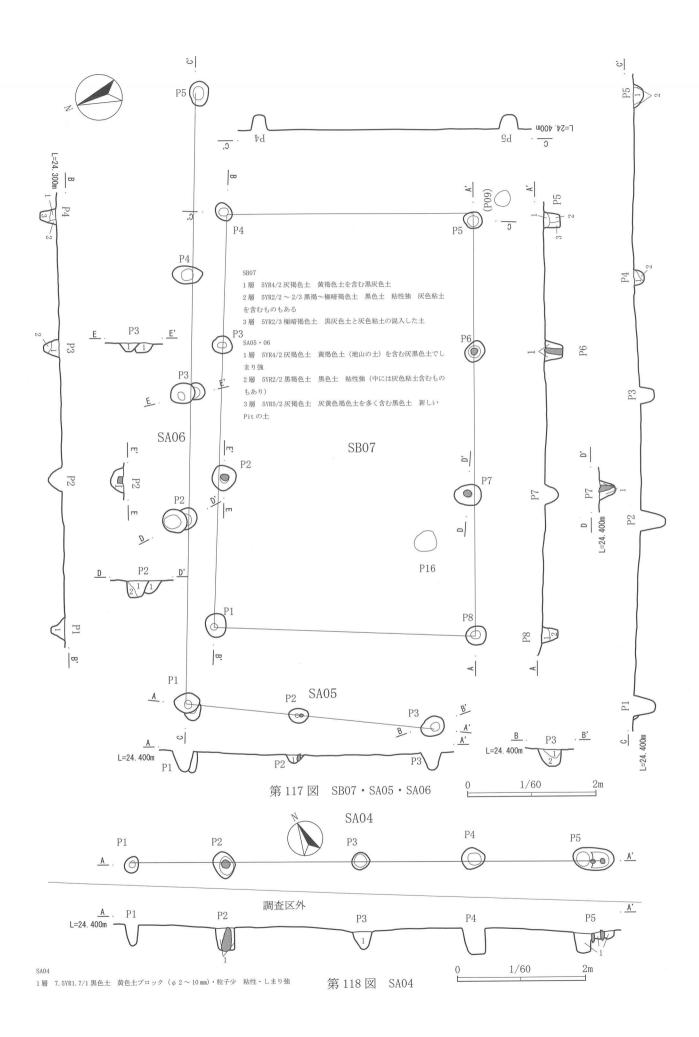
①位置: M24-b、M25-a・b に位置する。

②形状・規模: SB07 から南へ9 m隔たっているが建物跡にほぼ合致する。柱の規模は径 40 cm前後、深さ 40 cm 前後で、P2・5 には木質が残る。柱間は P1 から順に 1.5 m、2.1 m、1.8 m、2.0 mとなる。

③走行方位: E-27°-S

④出土遺物:なし

⑤施設:本跡に付帯する施設と考えられるものに柵列がある。SA05 は西側を囲む 3 本の柱穴からなる柵列で、柱間は 1.7 mと 2.0 mである。SA06 は北側を巡る 5 本からなるもので、柱間は西から、2.9 m、2.0 m、1.9 m、2.9 mと、1.9 m と、1.9 m と、1.9 m と、1.9 m と、1.9 m と、1.9 m と、1.9 m と 1.9 m



第79表 SB07ピット計測表

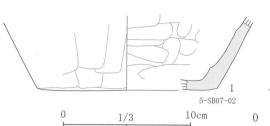
P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P005	38	33	21	24. 02	
P2	P006	36	32	20	24. 01	木質残存
Р3	P007	32	30	24	23. 96	
P4	P008	30	23	23	23. 90	
P5	P001	32	30	25	23. 92	
P6	P002	37	31	28	23. 88	木質残存
P7	P003	43	32	25	23. 95	木質残存
P8	P004	39	32	28	23. 97	

第80表 SA05ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P012外	30	25	35	23. 98	
P2	P011	30	22	14	24. 16	SB07に付属する 可能性がある
Р3	P010	34	30	30	23. 96	円配生かめる

第81表 SA06ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P012内	40	24	33	24.00	
P2	P013	48	40	38	23. 83	
Р3	P014	40	33	20	23. 98	SB07に付属する
P4	P015	46	29	17	24. 13	可能性がある
P5	P017	40	29	16	24. 12	



SB07 出土遺物



5-SB07-01

第82表 SA04ピット計測表

P番号	旧番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P410	20	15	43	23. 90	
P2	P409	44	32	43	23. 78	木質残存
P3	P407	40	36	33	23. 90	
P4	P405	44	36	43	23.74	
P5	P402	64	32	36	23. 70	木質残存

第83表 SB07 出土遺物観察表

第 119 図

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5N- 7SB-P2	焼締陶器	大甕	_	(14. 0)	<5. 5>	102. 6	平らな底部から70 度角で立ち上がる。	回転台使用。	良好	外面 10YR3/4暗 褐色内面 10YR2/2黒 褐色	白色粒子多い。	底部破片	常滑産力

第84表 SA06 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎士	残存度	備考
1	5N- 7SB- P14	かわらけ	A類中皿		(5. 2)	<1.4>	16. 6	平らな底部から20 度角で開く。	ロクロ整形。右回転糸切り離し無調整。		全体 10YR8/4浅 黄橙色	白色粒子若干含む。		州与
2	5N- 7SB- P14	須恵器	坏蓋	つまみ 径 3.9	_	<1.2>		低平な大型の擬宝珠。	ロクロ整形。	良好	全体N6/0灰 色	白色粒子やや多い。	摘みのみ	新治産9世紀

(3) SE (井戸跡)

SE04 (第 121 · 122 図 第 22 · 31 図版 第 85 · 86 表)

①位置:L25-d、M25-b に位置する。

②形状・規模・覆土: $2.6 \text{ m} \times 2.3 \text{ m}$ の平面楕円形を呈す井戸である。検出面から 60 cm ほどは漏斗状にすぼまり、そこから下は直径 1.2 mの円形で垂直に落ち込む。ちょうどその変換点から、井戸枠の一部であろうか木片が出土した。調査は約1 m掘り進んだところで湧水のため中止した。

断面観察によると、西側の上面に黒褐色粘性土の裏込め土(6・7層)が認められ、本来は全体に木枠に対する裏込めがなされていたであろう。井戸の本体は、上面においては黒褐色土主体の自然堆積を示す。

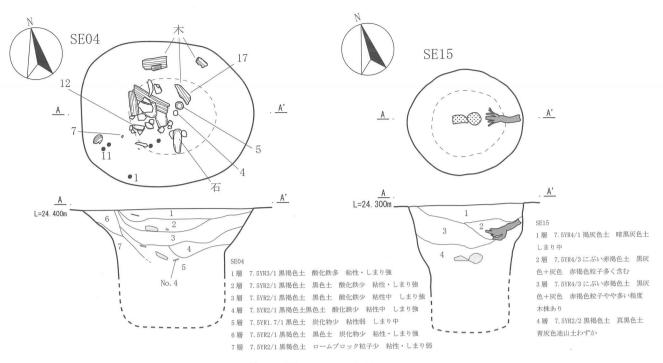
③出土遺物:約1.8 m下から木片多数を得、これらが井戸枠を構成していたものであることが推定される。その他、陶器・土器類も多量に出土している。

SE15 (第 121 · 123 図 第 22 · 31 図版 第 87 表)

①位置: L26-a・b に位置する。

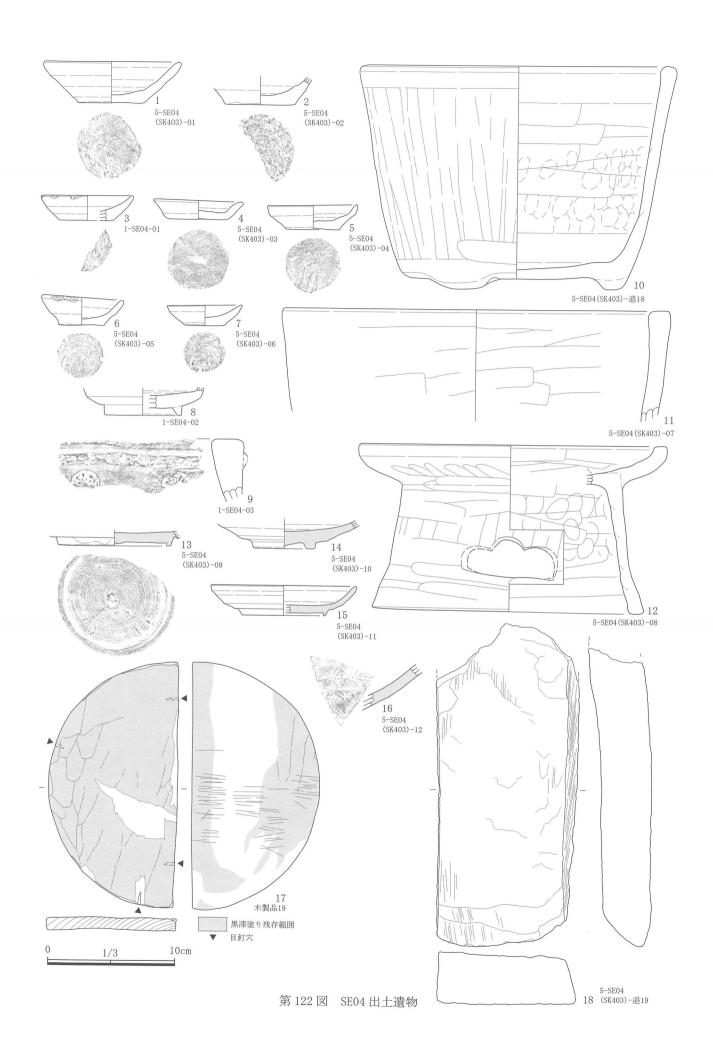
②形状・規模・覆土:直径 1.6 mの平面円形を呈する井戸である。精査の結果、約 1 m下で径 1.1 mの円筒状にすぼまることが確認できたが、湧水のためそれより下は調査できなかった。断面観察によると、上層に黒灰色土が、下層に黒色土と地山の灰色土の混じった層が水平に認められ、自然堆積の様相を示している。

③出土遺物:約1.8mの深さに達しており、瓦質土器・窯道具(匣鉢)が出土している。



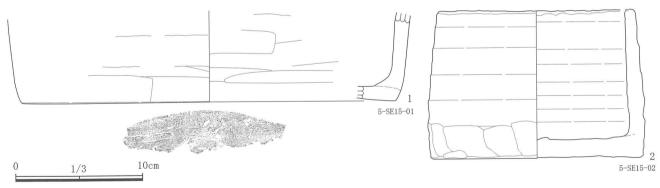
第 121 図 SE04 · SE15

号	5表注記	SE04 出	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5- SK403 No6	かわらけ	B類中	(10.4)	5. 1	3. 2	62. 8	平らな底部から35 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 手持ちヘラ削り調整。	優良	全体5YR6/6 橙色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	全体の 1/3	
2	5- SK403 No4	かわらけ	A類中 皿	_	5. 4	<2.2>	37.8	平らな底部から45 度角でわずかに丸 みを持って立ち上 がる。	ロクロ整形。回転 糸切り離し後、一 方向手持ちヘラ削 り調整。	やや不良	外面5YR5/6 明赤褐色内 面7.5YR6/3 にぶい灰褐 色	褐色微粒子やや多い。	底部 1/2	
3	1E-4ゴ ウSE一 括	かわらけ	B類小皿	(7.1)	(4.0)	<1.9>	22. 7	くぼんだ底部から 40度ほどの角度で 緩やかに立ち上が る。浅い器形。	ロクロ水挽き成形。左回転糸切り 離し後、体下端無調整。	優良	全面 7.5YR6/4に ぶい橙色	乳白色粒やや多い。	全体の 1/2	灯明油皿に転 用、灯心油痕 3箇所確認。
4	5- SK403 No19	かわらけ	C類小皿	7. 0	4.6	1.4	42. 6	平らな底部から55 度角でほぼ直線的 に立ち上がる。	ロクロ整形。切り 離し不明、一方向 手持ちヘラ削り調 整。	優良	全体5YR6/6 明赤褐色	雲母微粒子 若干含む。 骨針ヵ。	完存	
5	5- SK403 No2	かわらけ	C類小皿	7.0	4. 2	1.9	43. 4	やや突出した底部 から45度角で開 き、口縁部で直立 する。	ロクロ整形。切り 離し不明、多方向 手持ちヘラ削り調 整。	優良	10YR7/3に ぶい黄橙色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	完存	
6	5- SK403 No1	かわらけ	A類小 皿	6. 2	3. 5	2. 2	43. 1	突出する底部から 45度角で緩やかに 立ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 手持ちヘラ削り調 整。	良好	全体 10YR5/3に ぶい黄褐色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	完存	灯明油皿に転用、口縁部に 灯心油痕。
7	5- SK403 No5	かわらけ	A類豆 皿	5. 7	3. 2	1.6	28. 1	突出気味の底部から40度角で緩やかに立ち上がる。	ロクロ整形。左回 転糸切り離し後、 無調整。	優良	全体 7.5YR6/6橙 色	白色・雲母 微粒子若 干含む。	完存	
8	1E-4コ* ウSE 括	土師質土器	茶碗	-	(6. 0)	<2.1>	56.6	垂直の高台から平 らに開き、体部は 直立するようであ る。	ロクロ整形。貼付高台。	優良	全面 10YR7/3に ぶい黄灰 色。精良。	褐色粒子若 干含む。	底部の 1/2	
9	1E-43 [*] ウSE 括	瓦質土器	火鉢	-	-	<4.8>	177. 2	分厚な口縁の直下 に突帯が巡り、印 花文帯を構成す る。丸形。	回転台使用。	良好	内外面N4/0 銀灰色	白色粒子多く含む。器 肉N7/0灰白 色	口縁部破片	口縁帯に梅花 印花文。 硬質瓦質
10	5- SK403 下層一 括	瓦質土器	三足深鉢	(24. 8)	17. 5	17. 4		平らな底部に低い 三足が付き、ほぼ 80度角で直線的に 立ち上がる。	回転台使用し、粘 土紐巻き上げ整 形。とくに内底 部・外体部ミガキ 顕著。	良好	内外面N4/0 灰色	雲母微粒子 若干含む。	全体の 2/3	



	- T-		ALL I SHOULD FOR ALL	101
第	86 表	SE04	出土遺物観察表	(2)

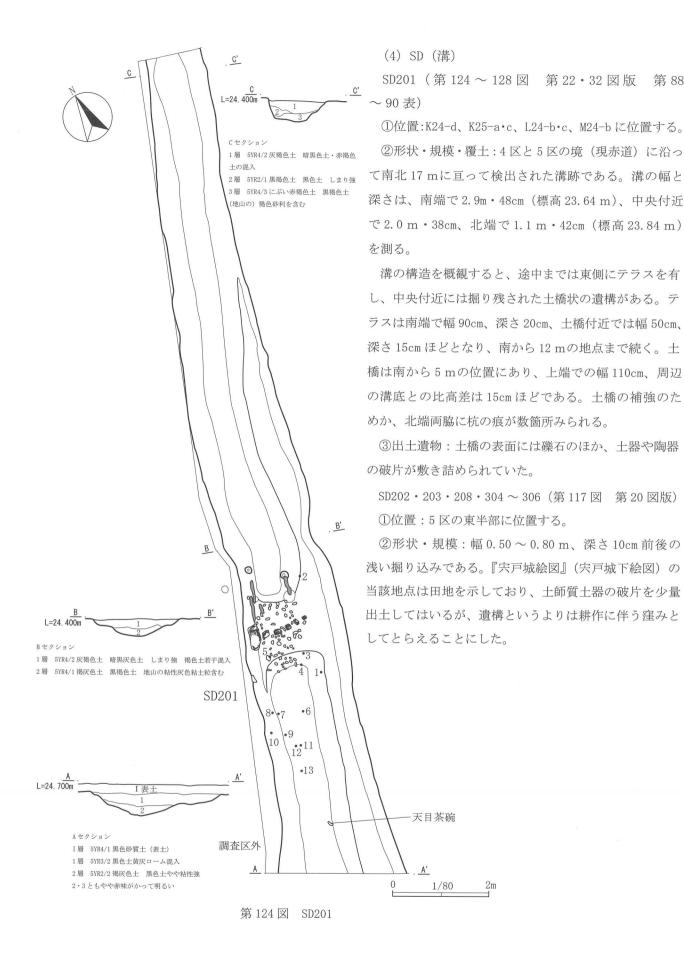
第86	6表	SE04 出	土遺物	観察表	長(2)								on to the l	Mr. de
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
11	5- SK403 No7	瓦質土器	火鉢	(30. 3)	_	<8.5>	178. 1	ほぼ垂直に立ち上 がる。	回転台使用。	やや不良	内外面 10YR10/1褐 灰色	白色粒子や や多い。骨 針含む。 器肉10YR2/1 黒色	口縁部破片	
12	5- SK403 No15· No16	瓦質土器	瓦灯力	(24. 2)	(21. 2)	<12.8>	1118. 2	高台部分は底で 20cm超、高さ10cm の大きな筒形で、 対面して透かし窓 がある。盤の底部 は16cmを測り口縁 部で幅1cmの凸帯と なる。	回転台使用、輪積み成形カ。全体的にナデ調整。	良好	内外面 N1.5/0黒色	白色・雲母 若干含む。 骨針含む。 器肉N7/0灰 白色で芯は N5/0黒灰色		外面部分的に 被熱のため か、炭素が飛 んでいる。
13	5- SK403 一括	陶器	鉢	_	8.9	<1.1>	91.5	内反りする高台。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 5YR8/2灰白 色の灰釉	黒色微粒子 若干含む。	底部の 1/2	瀬戸・美濃産17 世紀
14	5- SK403 No3	陶器	Ш	_	4. 9	<2. 2>	116. 3	幅広の高台から10 度角で開く。	ロクロ整形。付け 高台カ。	優良	内外面 10Y7/2やや 緑灰白色の 透明釉	白色微粒子やや多い。	底部のみ	漆接ぎ痕あり。 美濃産ヵ
15	5- SK403 一括	陶器	丸皿	(11.3)	(6. 5)	2. 4	30. 9	内反り高台から35 度角で緩やかに立 ち上がる。	ロクロ整形。削り 出し高台。体下半 回転へラ削り調 整。内面に緑釉流 し(胆礬カ)。	良好	内外面 7. 5YR7/6浅 黄橙色の灰 釉	黒色微粒子若干含む。	全体の 1/5	美濃産17世紀 中葉
16	5- SK403 一括	陶器	三島手印花文鉢	_		⟨3. 7⟩	26. 6	比較的深い器形。	回転台使用。内面 印刻、白土拭き取 り後施釉	優良	内面5YR7/2 明褐灰色の 透明釉外面 露胎5YR4/2 灰褐色	緻密。器肉 5YR4/6赤褐 色	体部破片	唐津産17世紀
17	5- SK403 No36	木製品	曲物底板	長さ 19.1	幅 10.1	厚さ 0.9	88. 6	現径19cmの底板の 半分で、もう一つ の板を繋ぐ串目が 2箇所あり。また 円周にも2箇所あ り、わっぱ留めの 痕ヵ。	造り鉋仕上げ。		内外面黒色 の黒漆塗 り。	_	完存	細密条痕、俎 転用
18	5- SK403- 最深部 No2	石製品	石碑形	長25.2	幅10.8	厚3.5	2228. 5	表裏面は打割面。両位基部は斜めに加工・積		_	_	_	基部破片カ	雲母片岩質

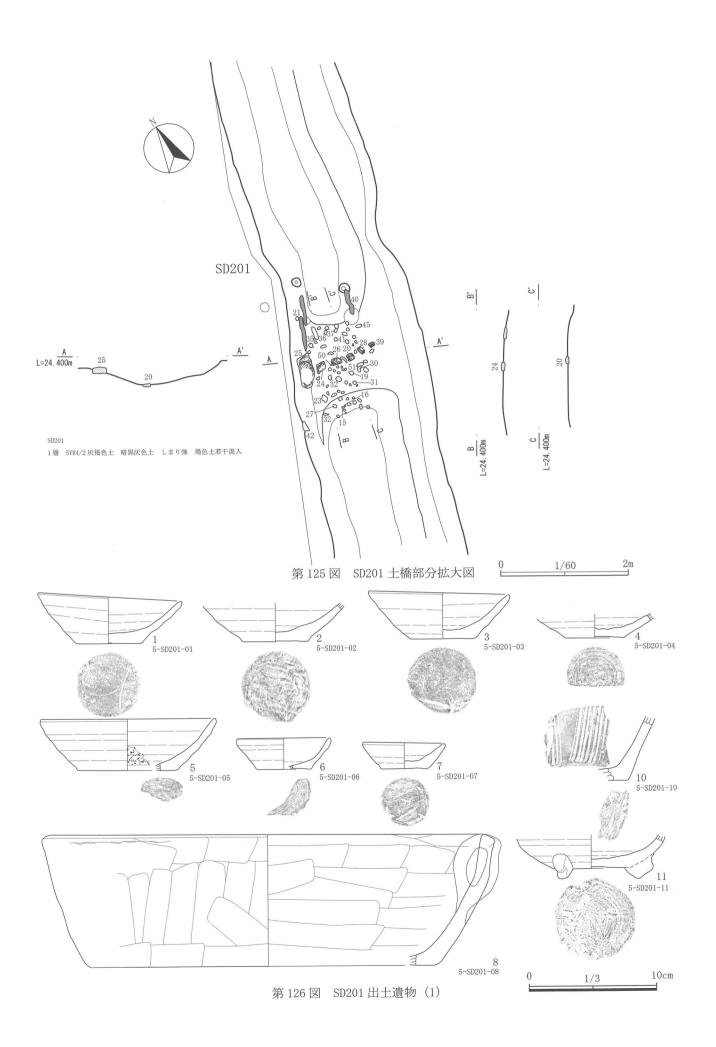


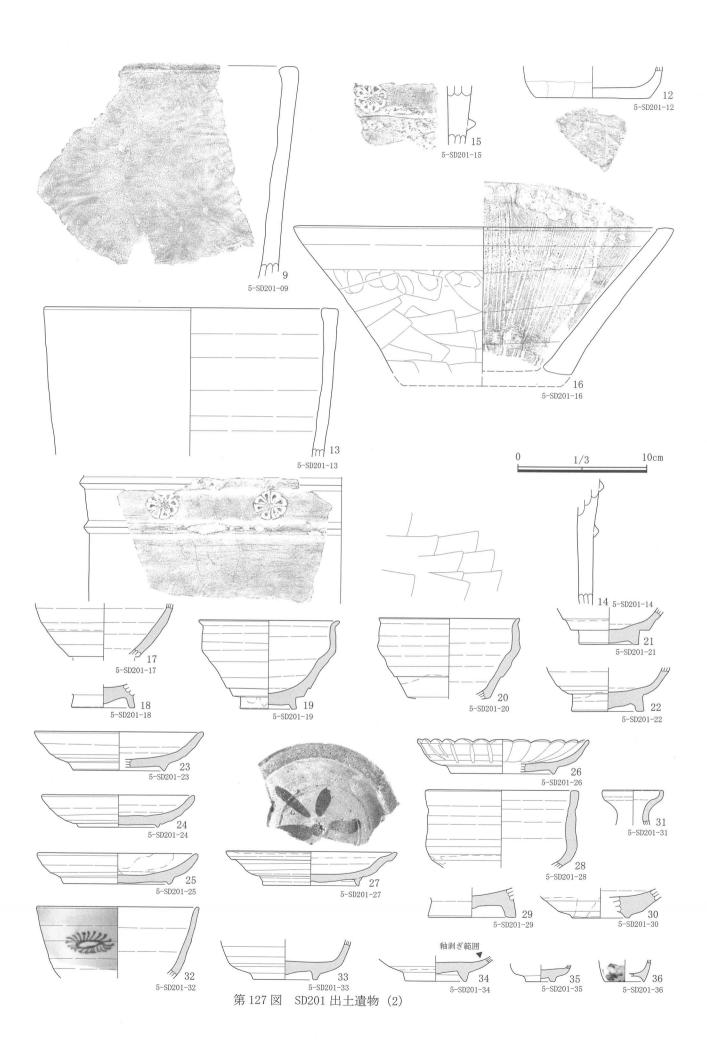
第 123 図 SE15 出土遺物

97 丰 CD15 出土港伽知宛丰

第8	/ 表	SE15 出	土夏物	観祭る						11. 0	6 777	7/-1	mb de rite	/4+: -t-z.
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5N- 15SE下 層	瓦質土器	火鉢ヵ	1	(29. 2)	<6.8>	171.1	平らな底部からわ ずかのふくらみを 持って立ち上が る。	回転台使用。	良好	内外面 10YR7/3に ぶい黄橙色	白色大粒や や多い。器 肉の芯 N1.5/0黒色	底部破片	
2	5N- 15SEキタ ハン下層	窯道具	匣鉢	(15. 2)	16. 6	11.3	761. 2	平らな底部からや やすぼまり気味に 直線的に立ち上が る。	ロクロ使用カ。切り 離し不明。胴部下 端に手持ちへラ削 り調整。	良好	全体5YR4/6 赤褐色	白色・黒色 大粒多い。	全体の 1/3	口縁部上端打ち 欠き調整ヵ。底 面煤付着。























第 128 図 SD201 出土遺物 (3)

0	2/3	5cm
	X-Y-X-Y-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X-X	

第88表 SD201 出土遺物観察表 (1)

NIC	8 衣	20701	11 11 12	122 E202	K-11	1)								
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5- SK201 No1	かわらけ	B類中 皿	11.2	3. 6	5. 2	108. 1	平らな底部から40度 角で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。切り離 し不明。一方向手持 ちヘラ削り調整。	やや 不良	外面5YR8/2 灰白色内面 5YR6/4にぶ い橙色	白色大粒多 い。雲母若 干含む。	全体の 3/4	
2	5N- 201SD 中央一 括	かわらけ	B類中 皿	_	5. 2	<3.0>	88. 1	わずかに突出する高 台から30度角で直線 的に立ち上がる。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、一方 向手持ちヘラ削り。	良好	全体5YR7/6 橙色	雲母若干含 む。器肉 5YR6/4 にぶい橙色	底部のみ	二次被熱で外面 一部10YR6/1褐灰 色
3	5- SD201 No1	かわらけ	B類中	10.9	4. 9	3. 6	130. 6	わずかに突出する高 台から40度角で直線 的に立ち上がる。口 縁部で分厚くなる。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、一方 向手持ちヘラ削り。	優良	全体10YR8/3 浅黄色	白色粒子や や多い。雲 母若干含む。	ほぼ完 存	
4	5- 201SD- No49	かわらけ	B類中	_	4.6	<1.85>	39. 1	窪み気味の底部から 20度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。切り離 し不明。底部は回転 ヘラ削りで調整。	良好	全体 7.5YR7/6橙 色	白色・雲母 微粒子やや 多い。骨針 含む。	底部の 1/2	
5	5N- 201SD 中央一 括	かわらけ	B類中 皿	(13. 5)	(7. 6)	<4.0>	29. 2	平らな底部から35度 角で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。切り離 し不明。底部は手持 ちヘラ削りで調整。	やや不良	内外面 7.5YR7/4に ぶい橙色	白色・雲母 粒子やや多 い。	全体の 1/5	煤付着
6	5N- 201SD- S一括	かわらけ	B類小 皿	(7. 2)	(4. 2)	<2. 45>	13. 6	平らな底部から60度 角で直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。回転糸 切り離し後、無調 整。	良好	全体 7.5YR6/6橙 色	雲母微粒子 若干含む。	全体の 1/4	
7	5N- 201SD- S一括	かわらけ	B類豆皿	6. 3	3. 7	2.0	36. 7	やや盛り上がり気味 の底部から45度角で 直線的に立ち上が る。	ロクロ水挽き成形。 左回転糸切り離し 後、多方向へラ削り 調整。	優良	全体10YR7/3 にぶい黄橙 色	雲母微粒子やや多い。	ほぼ完 存	
8	5N- 201SD- S一括	土師質土 器	内耳焙 烙	33. 4	(27. 2)	10. 1	1512. 5	平らで薄い底部から 65度角で丸みを持っ て緩やかに立ち上が る。口唇は水平で分 厚い。	回転台使用ヵ。口縁 部分などに指頭圧痕 残る。	良好	内外面 7.5YR5/3に ぶい褐色	白色・雲母 微粒子若干 含む。	全体の 1/3	
9	5- SD201 No10	土師質土 器	筒鉢	_	_	<16. 4>	408. 5	内側に分厚くなるロ唇から下は、寸胴型となる。	輪積み成形。全面ナ デ調整。	良好	内外面 10YR5/2灰黄 褐色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。 器肉10YR8/2 灰白色	胴部破片	
10	5N- 201SD- S一括	土師質土 器	擂鉢	_	_	<4.9>	54. 1	平らな底部から70度 角で、やや反り気味 に立ち上がる。	回転台使用ヵ。9本 1単位の櫛目。	やや不良	外面10YR5/3 にぶい黄褐 色内面 10YR4/1褐灰 色	雲母微粒子 若干含む。 器肉10YR8/2 乳白色	体部破片	
11	5- SD201 No12	土師質土器	三足皿	_	5. 4	<2.6>	159. 4	直径6cmの底部の脇 に3箇所足がつく。 体部は半球状に丸く なる。口縁部不明 瞭。	ロクロ整形。左回転 糸切り離し後、無調 整のまま足を貼り付 ける。	やや不良	外面 7.5YR6/2灰 褐色内面 7.5YR3/1黒 褐色	雲母微粒子 若干含む。 器肉真黒色	底部のみ	
12	5N- 201SD- S一括	土師質土器	小皿	-	(8.8)	<2.4>	43. 5	わずかに窪んだ底部 から70度角で立ち上 がり中間から垂直と なる。	ロクロ整形。切り離し不明。	やや不良	内外面黑色	雲母微粒子 若干含む。 器肉 7.5YR5/1 褐灰色	底部の 1/4	
13	5N- 201SD- S一括	瓦質土器	筒鉢	(21.8)	_	<11. 5>	190. 6	口唇は分厚くなり、 その下は80度角の寸 胴型を呈す。	粘土紐巻き上げ成形 カ。	良好	内外面N2/0 黒色	白色粒子や や多い。器 肉真黒色	口縁部破片	
14	5N- SK201 No1	瓦質土器	火鉢	_	_	<9.7>	264. 5	ほぼ75度角に開く胴 部から口縁部にかか る部分に凸帯が2条 巡り、文様帯を構成 する。	輪積み成形。全面ナ デ調整。幅4cmの文 様帯内に八葉印花文 あり。	良好	外面 2,5GY6/1オ リーブ灰色 内面 2.5GY8/1灰 色	白色粒子や や多い。器 肉黒色	胴部破片	
15	5- SD201 一括	瓦質土器	火鉢	_	_	<4.8>	81. 6	胴部上方に凸帯が巡 る。	成形不明。外面ナデ 調整。文様帯内に八 葉印花文あり。	良好	内外面 5GY3/1暗オ リーブ灰色	白色粒子若 干含む。 器肉真黒色	胴部破 片	
16	5- 201SD- No29他	瓦質土器	擂鉢	29. 5	_	<10.8>	1672. 8	底を欠くが、ほぼ45 度角で直線的に立ち 上がる。	成形不明。内外面ナ デ調整。6本1単位 の櫛目が見込み全面 に21条巡る。	良好	内外面N4/0 暗灰色	白色粒子・ 雲母微粒子 若干含む。 器肉 N7/0灰白色	全体の 5/6	
17	5N- 201SD- N一括	陶器	天目茶碗	_	_	<4.3>	44. 9	体部は60度角でわず かに丸みを持ってた ち上がる。	外面体部下半露胎。 露胎部分回転へラ削 り調整。	優良	内外面 7.5YR2/3黒 褐色の鉄釉 露胎N8/0灰 白色	黒色微粒子若干含む。	体部の 1/5	瀬戸・美濃産17† 紀
18	5N- 201SD- N一括	陶器	天目茶碗	_	4.6	<1.85>	42.7	直立する高台。	削り出し高台。外面露胎。	優良	内面 7.5YR1.7/1 黒色の鉄釉 露胎 7.5YR7/1明 褐灰色	黒色微粒子若干含む。	底部のみ	瀬戸・美濃産17世紀

第89表 SD201 出土遺物観察表 (2)

	39 表	SD201		物觀夠	祭表	(2)								
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
19	5N- 201SD No103	陶器	白天目	(10.7)	4. 3	<7. 1>	120. 9	直立する高台から平 らに開き、その後下 端に段を有しながら 60度角で立ち上が る。口縁部は鼈口と なり口唇で反り返 る。	ロクロ整形。削り出 し高台。体下半分回 転へラ削り調整。底 部のみ露胎	優良	内外面 2.5GY8/1灰 白色の長石 釉露胎N8/0 白色	黒色微粒子 若干含む。	全体の 1/2	瀬戸・美濃産17世 紀中葉
20	5N- 201SD- N一括	陶器	白天目	(11.0)		<6.4>	54.9	体部は途中で段を有 しながら60度角で直 練的に立ち上がり、 口縁部は鼈口とな り、口唇で反り返 る。	ロクロ整形。体下端回転ヘラ削り調整。	良好	内外面 2.5GY8/1灰 白色の長石 釉露胎N8/0 白色	黒色微粒子若干含む。	口縁部 の1/4	外面二次被熱 瀬戸·美濃産17世 紀中葉
21	5N- 201SD- N一括	陶器	白天目		4.4	<2.9>	74. 1	直立する高台から平 らに開き、体下端は 60度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ整形。削り出 し高台。体下端回転 へラ削り調整。	良好	内外面 2.5GY7/1灰 白色の長石 釉、貫入あ り。露胎	黒色大粒やや多い。	底部のみ	瀬戸・美濃産17世 紀中葉
22	5- SD201 No6	陶器	丸碗	_	5. 4	<3. 45>	69. 5	高く直立した高台から半球状に開く。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 2.5Y8/2灰白 色の灰釉	黒色微粒子 若干含む。	底部のみ	内面二次被熱の ため赤化・貫 入。 瀬戸・美濃産17世
23	5N- 201SD- S一括	陶器	志野丸皿	(13. 1)	7. 1	3. 1	94. 1	低いV字高台から30 度ほどの角度で緩や かに開く。	ロクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 5YR8/2灰白 色の長石釉	緻密。器肉 5YR8/1乳白 色	全体の 1/2	二次被熱 瀬戸·美濃産17世 紀前半
24	5N- 201SD- S一括	陶器	志野丸皿	(11.8)	6. 1	2.5	58. 2	極端に低い打ち反り 高台から20度角で、 緩やかに開く。	ロクロ整形。削り出し高台。	良好	内外面N8/0 灰白色の長 石釉	黒色微粒子 若干含む。	全体の 1/2	内面二次被熱の ため貫入。 瀬戸・美濃産17世 紀中葉
25	5- SD201 一括	陶器	丸皿	(12. 3)	(8. 1)	2. 4	49. 2	極端に低い打ち反り 高台から20度角で、 緩やかに開く。	ロクロ整形。削り出 し高台。内面に 5G3/1暗緑灰色の緑	良好	内面5Y7/3浅 黄色の灰釉 素地5Y8/1灰	黒色微粒子 若干含む。	全体の 1/4	口縁部・畳付磨 滅。 美濃産17世紀中
26	5- SD201 No13	陶器	志野菊皿	(13. 3)	(8. 0)	2.7	30. 7	低めの高台から一端 平らに開き、緩やか に立ち上がり、口縁 部でやや反りかえ る。口唇は花弁を表 現し、内面は丸ノ で削っている。	和流し。 ロクロ整形。削り出 し高台。	良好	白色 内外面 10YR8/2灰白 色の長石釉	黒色微粒子若干含む。	全体の 1/6	業 二次被熱 美濃産17世紀前 半
27	5- SD201 No003	陶器	青織部 折縁鉄 絵皿	(13. 3)	7. 4	2. 25	79.5	V字高台から35度角で開き、口縁部でさらに大きく反り返る。	ロクロ整形。貼付 高台。体部下半は 回転へラ削り調整。 内面高台重ね焼き 痕。	良好	内面口縁部 5GY6/1オ リーブ灰色 の緑釉+全 面長石釉外 面露胎	黒色微粒子 若干含む。 器肉10YR8/4 黄褐色	全体の 1/2	見込みに花文鉄 絵(7.5YR4/2灰褐 色) 美濃産17世紀
28	5- SD201 No1	陶器	沓形碗	(12. 0)	_	<5. 95>	47. 9	胴中央を絞ったよう な、全体に丸みのあ る器形。	ロクロ整形。下端回 転へラ削り調整。	優良	内外面 5GY8/1灰白 色の長石釉	黒色微粒子 若干含む。	全体の 1/5	美濃産17世紀前
29	5N- 201SD- S一括	陶器	碗	_	6.9	<2.3>	92. 6	幅広の高台。	ロクロ整形。全面施 釉。畳付目跡5箇所。	優良	内外面 5GY7/1明オ リーブ灰色 の灰釉	黒色微粒子 若干含む。 器肉5GY7/0 灰白色	底部のみ	唐津産ヵ
30	5N- 201SD- S一括	陶器	向付		(4. 4)	<2.3>	43. 9	内反り高台から25度 角で開く。	ロクロ整形。高台部 分貼り付けカ。体下 端回転ヘラ削り調整。	優良	内面 7.5YR6/2灰 褐色釉外面 露胎 7.5YR5/4明 褐灰色	白色微粒子やや多い。	底部破片	見込みに鉄絵 (10YR4/3の灰褐 色) 唐津産
31	5- 201SD No102	陶器	青織部徳利	4.3		<2.7>	21. 6	受け口状の口縁部。	ロクロ整形。	優良	内外面 10YR6/1緑灰 色と5BG7/1 淡青色の緑 釉×長石釉	器肉真白色	口縁部のみ	美濃産17世紀前半
32	5- SD201 一括	磁器	染付端 反碗	(12.5)		<5. 5>	42. 6	井戸形の大きな碗	ロクロ整形。	優良	内外面N8/0 灰白色の長 石釉	黒色微粒子 若干含む。	口縁部 の1/3	外面に呉須 (5PB3/1)の菊花 唐草文 肥前系17世紀前 葉ヵ
33	5- SD201 No008	磁器	染付筒 形碗	_	5. 1	<3. 1>	110.7	内反り気味の高台か ら平らに開き、体下 端で垂直に立ち上が る、筒形の碗。	ロクロ整形。畳付無 釉・砂目痕。	優良	内外面やや 青みがかっ た白色	黒色微粒子 若干含む。	底部のみ	内外面に呉須(淡 青色)の圏線文 肥前系17世紀初 頭
	5N- 201SD- S一括	磁器	染付内 禿皿	_	4.8	<1.95>	49. 4	内反り気味の高台から平らに開く。	ロクロ整形。削り出 し高台。見込み・高 台露胎。	優良	内外面5GY 7 /1明オリー ブ灰色の釉 素地5GY5/4 にぶい赤褐 色	黒色微粒子 多い。器肉 N7/0灰白色	底部のみ	内外面呉須 (10GY5/1緑灰色) の圏線文 肥前系(波佐 見・平戸) ヵ
35	5- 201SD No48	磁器	染付小		2. 3	<1.8>	17. 4	低い内反り高台から 平らに開いて、体下 端で70度角で立ち上 がる。	整形不明。	優良	内外面5G7/1 白色の釉	緻密。	底部のみ	外面呉須(淡群青 色)の草花文 瀬戸・美濃産19世 紀
36	5- SD201 No3	磁器	染付蕎 麦猪口	_	(3. 0)	<1.75>	4. 8	上げ底高台で、その まま80度角で直立す る。	整形不明。	優良	内外面真白 色	緻密。	底部 1/2	外面呉須(明青 色)で草花文 瀬戸・美濃産19世 紀

第 90 表 SD201 出土遺物観察表 (3)

5.50	10 11	ODDOI				(-)				Table 18	As more	n/ I	with ofor other	/-Hs -lg.
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
37	5- SD201 No50	銭貨	北宋銭	外径 24.2mm	孔 0.7mm	_	1.9	_	_	-	_	銅	完存	「皇宋通寶」篆書(1039~1040)
38	5- SD201 No2	銭貨	北宋銭	外径 23.5mm	孔 6.6mm	_	2. 3	-	-	_	_	銅	一部欠損	「紹聖元宝」行書(1094~1098)
39	5- SD201 一括	銭貨	南宋銭	外径 22.6mm	孔 6.6mm	-	2. 4	_	-	_	_	銅	完存	「景定元寶」背 四 (1263)
40	5- SD201 中層	銭貨	明銭	外径 22.3mm	孔 5.7mm	_	3. 2	_	_	_	_	銅	完存	「洪武通寶」背 一銭ヵ(1368~ 1398)

(4) SK (土坑)

SK411 (第 129 · 130 図 第 22 · 32 図版 第 91 表)

①位置: M26-a に位置する。

②形状・規模・覆土:62 cm×58 cmの平面円形で深さは6 cmで覆土は黒色土である。

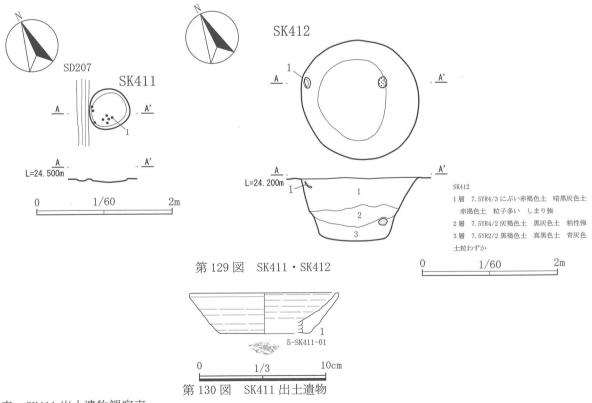
④出土遺物:遺物は覆土~底部にかけて土器破片が検出されている。

SK412 (第 129・131 図 第 22・32 図版 第 92 表)

①位置: K26-c に位置する。

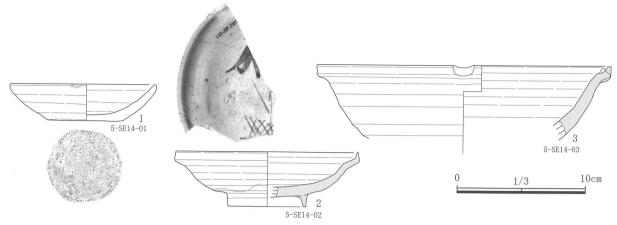
②形状・規模・覆土:直径 1.7m の円形を呈す土坑である。全体として漏斗状に落ち込むようである。断面観察によると、上面では暗黒灰色から黒色土の自然堆積と思われる。覆土内には礫石がいくつか認められる。

③出土遺物:かわらけ・陶器



第 91 表 SK411 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5- SK411 一括	かわらけ	中皿	(11.6)	(7.0)	3. 2		底部から40度角で 直線的に立ち上が る。	ロクロ整形。切り 離し不明。	良好	全体 7.5YR6/4に ぶい橙色	白色微粒子 ・雲母若干 含む。	口縁部 の1/4	



第 131 図 SK412 出土遺物

第92表 SK412 出土遺物観察表

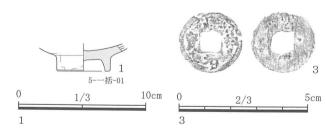
番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	00 m/ as 4+ 464	the and - d to old	1.1. 6	1			
ш -у	LLILL	1里大只	和67里	口注	JEX13E	否向	里里	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5N- 14SENo 1	かわらけ	A類中 皿	11.2	5.9	2.8	118.8	やや窪む底部から 25度角で緩やかに 立ち上がる。	ロクロ整形。切り 離し不明。	良好	外面 7.5YR6/6橙 色内面 7.5YR6/3に ぶい橙色	白色粒子多 い。雲母若 干含む。骨 針含む。	ほぼ完存	煤付着
2	5N- 14SE上 層	陶器	志野折 縁鉄絵 皿	(13. 2)	(6. 0)	<4. 2>	76. 5	直立の高台から20 度角で開き、口縁 部でさらに反り返 る。口唇は摘みあ げられる。	ロクロ整形。貼付 高台。体下端 回転へラ削り調 整。	良好	内外面 2.5Y7/2灰 黄色の長石 釉	黒色微粒子やや多い。	全体の 1/4	見込みに鉄絵 (5YR3/3暗褐 色)草文 美濃産17世紀 前半
3	5N- 14SE上 層一括	陶器	鉄絵鉢	(22.8)	_	<5. 7>	88. 5	40度ほどの角度で 丸みを持って立ち 上がり、口縁部で 帯状を呈す。	ロクロ整形。輪花 は指頭圧。	優良	内外面 7.5Y8/1灰 白色の灰釉	白色粒子若干含む。	口縁部破片	笠原鉢 瀬戸・美濃産 17世紀前半

(5) ピット (第93表)

遺構が組めなかったピットについて第93表にまとめた。

第93表 5区ピット計測表

				規模	・形態	
地区	遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形
5区北	P411	L25-d	28	24	48	円形
	P412	L25-a	36	32	43	円形
5区南	P401-a	M26-a	43	29	43	円形
	P401-b	M26-a	26	20	18	楕円形
	P404	M25-a	32	28	30	円形
	P406	M25-a	10	36	47	円形
	P408	M25-a	36	32	24	円形



第132図 5区遺構外出土遺物

第94表 5区遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
1	5-一括	磁器	染付碗	_	4. 1	<2. 15>	45. 4	内反り気味の高い 高台。	ロクロ整形。削り 出し高台。高台露 胎。	優良	内外面 2.5GY8/1灰 白色の釉	黒色微粒子 若干含む。 緻密。	底部のみ	肥前 (波佐 見・平戸) 系 または17世紀 前半ヵ
2	K24-a	金属製品	鉄砲弾	径 12.6mm	_	_	11. 9	特に変形認められ ない。未使用ヵ。	鋳型の合わせ目と 切り離しのバリが 確認できる。	-	表面N6/0灰 色	鉛	_	第33図版参照
3	1W-ホリ 2-001	銭貨	北宋銭	外径 2.41mm	FL 8.5mm	i—	1.8	_	_	-	_	銅	完存	「嘉祐元 寶ヵ」真書 (1056~ 1063)

第6章 自然科学分析

第1節 宍戸城跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宍戸城跡は、涸沼川左岸の沖積地に位置する。これまでの発掘調査により、17世紀代を中心とした遺構・遺物が 検出されている。

本報告では、近世の木材利用を明らかにするため、出土した木製品の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、角材を中心とした建築・土木材や木製容器(木製容器・底板・漆椀)、板材など 20 点(委託№ 1-20)である。

2. 分析方法

木製品の木取りを観察した後、破損部から木片を採取する。剃刀を用いて木片から木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール(抱水クロラール,アラビアゴム粉末,グリセリン,蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2分類群(マツ属複維管東亜属・アスナロ)と広葉樹4分類群(コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクセイ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管東亜属 (Pinussubgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・アスナロ (ThujopsisdolabrataSieb.etZucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。 樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。 分野壁孔はヒノキ型で、1分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercussubgen. Quercussect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を 有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (CastaneacrenataSieb.etZucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・ケヤキ (Zelkovaserrata (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯

状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん 肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクセイ属 (Osmanthus) モクセイ科

紋様孔材で、道管は多数が複合して斜方向に配列する。道管壁は薄く、横断面では多角形。道管は単穿孔を有する。 放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-20 細胞高。

4. 考察

木製品は、丸太杭、丸太、角材、半角材、木製容器、板材、底板、漆椀であり、合計 6 分類群が認められた。各分類群の材質をみると、針葉樹の複維管東亜属は、軽軟で加工は容易であるが、強度・保存性は比較的高い。アスナロは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。広葉樹のクリとケヤキは、比較的重硬で強度・耐朽性が高く、加工はやや困難である。コナラ節は、重硬で強度が高く、加工はやや困難である。モクセイ属は、重硬・緻密で比較的強度が高い。

器種別に見ると、丸太杭、丸太、角材、半角材では複維管東亜属を中心としてクリやコナラ節が混じる組成となることから、強度や保存性の高い木材を選択したことが推定される。遺構別に見ると、SA07では、芯持丸木の丸太杭がコナラ節、芯除角材が2点とも複維管東亜属であり、角材と丸太杭とで木材利用に違いが認められる。一方、SB02これらの結果から、遺構によって木材利用が異なる可能性がある。

第95表 樹種同定結果

No.	調査区	遺構	旧番号	部種名	木取り	樹種
1	1区	SA07-P2	P752	丸太杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	1区	SA07-0P5	P660	角材	芯除角材	マツ属複維管束亜属
3	1区	SB08-P3		角材	芯持角材	マツ属複維管束亜属
4	1区	SK653		丸太	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
5	2区	SB01-P3		角材	芯除角材	クリ
6	2区	SB02-P2		角材	芯除角材	クリ
7	2区	2号堀-No. 4		角材	芯持角材	マツ属複維管束亜属
8	2区	SB02-P11		角材	芯除角材	クリ
9	2区	SB03-P1		角材	芯除角材	マツ属複維管束亜属
10	2区	SX01-No. 4		半角材	芯持分割材(1/4割材)	マツ属複維管束亜属
11	2区	SX01-No. 5		丸太杭	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
12	2区	SX01-No. 2		木製容器	縦木地	モクセイ属
13	2区	SX01-No. 26		半角材	芯持材	マツ属複維管東亜属
14	1区	SA07-P3	P753	角材	芯除角材	マツ属複維管束亜属
15	2区	SB02-P9		角材	芯持角材	クリ
16	2区	SA13-P4	P158	角材	芯持材	マツ属複維管束亜属
17	2区	SA14-P1	P161	角材	芯除角材	マツ属複維管束亜属
18	5区	SE04-No.9	SK403	板材	板目	マツ属複維管束亜属
19	5区	SE04-No. 36	SK403	底板	柾目	アスナロ
20	1区	3号堀-No. 4		漆椀	横木地	ケヤキ

木製品のうち、底板は曲物の底板と考えられており、分割加工が容易で耐水性の高いアスナロが利用されている。 一方、漆椀は、硬いケヤキが利用されており、曲物と挽物とで木材利用が異なる。木製容器は、形状から合子の蓋な どと考えられ、硬く緻密なモクセイ属が利用されている。

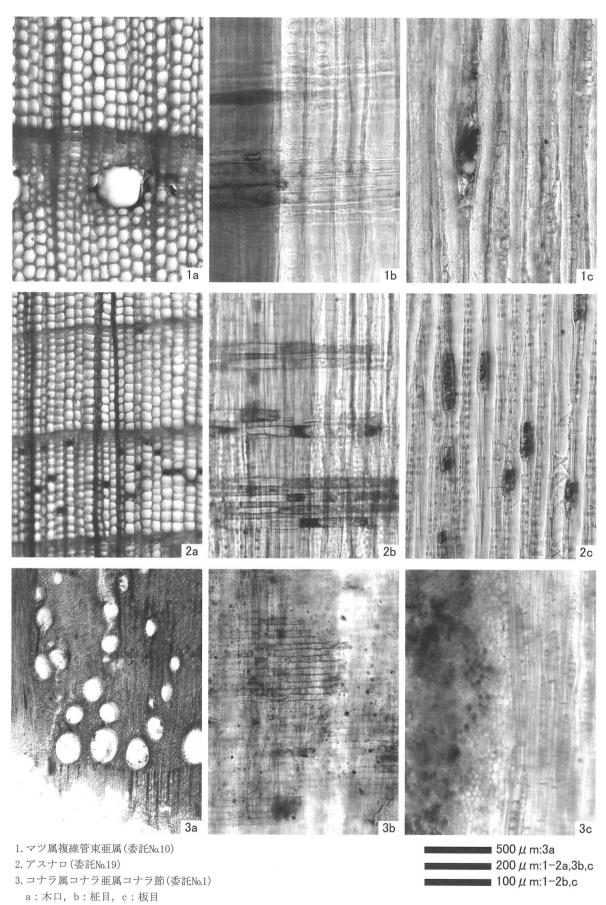
宍戸城跡では、これまでにも出土した建築部材や木製品の樹種同定が実施されている(能城,2006;パリノ・サーヴェイ株式会社,2006)。その結果をみると、柱材にクリやアカマツ(複維管東亜属)が確認されており、今回の丸太、角材、半角材等の同定結果と木材利用が類似する。一方、曲物の底板や蓋?とされる資料にはヒノキが確認されており、今回の結果からアスナロも利用されていたことが推定される。また、漆器椀・蓋では、これまでの調査でケヤキ、ブナ属、トチノキの利用が明らかとなっており、今回の結果も調和的である。

合子については、茨城県内での調査事例が確認できないが、筑土八幡町遺跡(東京都新宿区)から出土した合子の蓋と身がいずれもモクセイ属のヒイラギに同定された例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004)。今回の結果から、本地域でもモクセイ属(ヒイラギ)が利用されていたことが推定される。

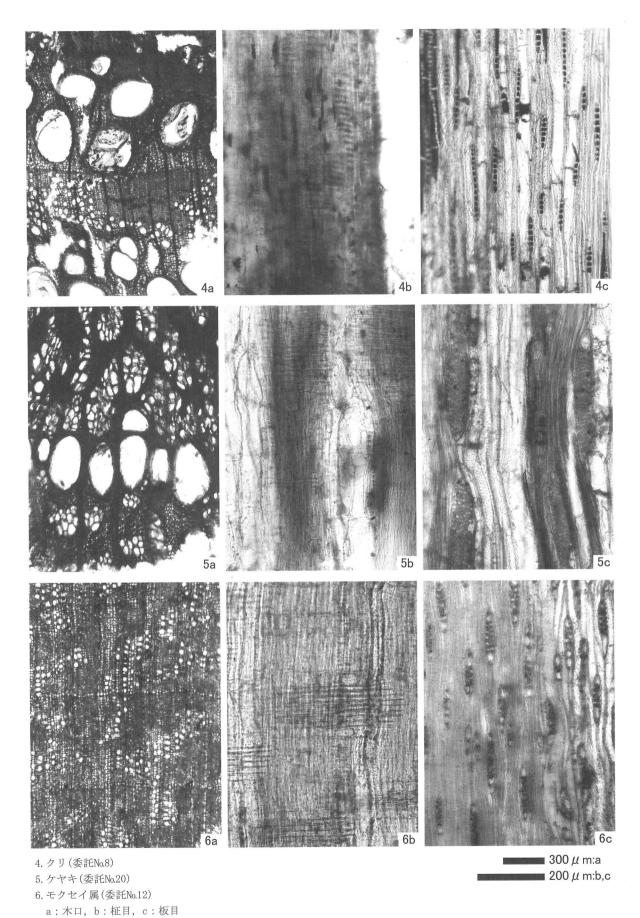
第96表 科学分析対象遺物計測表

* < >内は現状での長さ φは直径

11 00 1	1111/		2 11 1/1-7					
委託No.	調査区	出土遺構	旧番号	部種名	長	幅	厚mm	特徵
1	1区	SA07-P2	P752	丸太杭	<480>		φ 128	先端一面鉈切り
2	1区	SA07-P5	P660	角材	<515>	133	130	
3	1区	SB08-P3		角材	<346>	129	117	
4	1区	SK653		丸太	<532>		φ 144	焦げた痕跡
5	2区	SB01-P3		角材	<565>	124	119	
6	2区	SB02-P2		角材	<570>	120	113	台鉋仕上げ
7	2区	2号堀-No.4		角材	<790>	134	123	表面は手斧で平らに仕上げている。2角を面取り、 横断面6角形となる。両面に8角形と長方形の異な るほぞ穴が穿たれ、下端にはシガラミをかませる ためか、深く削り取られている。
8	2区	SB02-P11		角材	<835>	127	115	
9	2区	SB03-P1		角材	<293>	127	124	
10	2区	SX01-No. 4		半角材	588	81	67	他に同一規格品2個体
11	2区	SX01-No. 5		丸太杭	<1580>		φ 82	片面一部鉋で面取り、先端3面鉈切り
12	2区	SX01-No. 2		木製容器	φ 150		5	ロクロ目鮮やか。
13	2区	SX01-No. 26		半角材	<340>	103	80	両面台鉋で平面に削る。
14	1区	SA07-P3	P753	角材	<422>	138	130	
15	2区	SB02-P9		角材	<305>	110	108	
16	2区	SA13-P4	P158	角材	<260>	160~	160~	
17	2区	SA14-P1	P161	角材	<520>	142	137	
18	5区	SE04-No. 9	SK403	板材	344	240	20	楕円形を呈し、節穴がある。用途不明。
19	5区	SE04-No. 36	SK403	底板	φ 189		8	竹串痕からみて、曲物底であろう。
20	1区	3号堀-No.4		漆椀				



第133 図 木材 (1)



第 134 図 木材 (2)

引用文献

林 昭三,1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I . 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東 隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東 隆夫,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東 隆夫,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV . 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東 隆夫,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

能城 修一,2006, 宍戸城跡出土木製品の樹種.「茨城県教育財団文化財調査報告第256 集 新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部

線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」, 茨城県水戸土木事務所・財団法人茨城県教育財団,159-160.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2004, 木製品の樹種同定.「東京都新宿区 筑土八幡町遺跡Ⅲ (仮称) 新宿区白銀町2 丁目マンション建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館,119-121,写真129-132.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2006, 出土した木製品の樹種.「宍戸城跡 - 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」, 株式会社コメリ・山武考古学研究所,13-14.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙·伊東 隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編),1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第7章 総 括

第1節 検出された遺構について

第1項 過去の調査

宍戸城跡における本格的な発掘調査は、今回の2010年度調査を含め、2004年度から5回に渡る調査が行われている。 2004年度の茨城県教育財団(以下、「財団」と記す)による調査では、掘立柱建物跡17棟、塀跡5条、溝跡5条、井戸跡7基、ピット群4か所、土坑21か所、池跡3か所、柱穴列跡3条が検出され、土師質・瓦質土器・陶磁器類・金属製品・木製品・土製品が出土している。検出された遺構群は、城割の区画に沿って概ね南北方向(N-25°-W) もしくは東西方向(N-75°-E)であることが報告されている。

2006年度の侑山武考古学研究所による調査では、掘立柱建物跡2棟、溝跡12条、井戸跡4基、池跡2基、土坑16基、ピット26基が検出され、土師質・瓦質土器・貿易陶磁・瀬戸美濃・志野・唐津・肥前・常滑が出土している。2008年度の侑毛野考古学研究所による調査では、西側虎口の馬出しの堀跡1条、溝跡4条、井戸跡1基、土坑5基、不明遺構3基、ピット50基が検出されている。2009年度のテイケイトレード株式会社による調査では、本丸および南側腰郭の土塁2本と堀跡2条が検出され、土師質・瀬戸・美濃・笠間・常滑が出土している。2009年度の財団による調査では、井戸跡1基、池跡2基、土坑6基、堀跡2条、溝跡4条、杭列1条、ピット群4か所が検出された。

これらの中で今回の調査と関連する遺構に、掘立柱建物跡・井戸跡・池・堀・溝が挙げられる。

掘立柱建物跡

2004年度調査の成果から、6・7・9尺といった柱間距離が用いられていることが示され、覆土中に砂礫を充填させる側柱の第8号掘立柱建物跡を挙げて、主殿や門である可能性を、丸材を用いた総柱である第9号掘立柱建物跡を挙げて物置施設の可能性を、また柱間距離が妻側・桁行ともに2.1 mを基調とする第14号掘立柱建物跡を挙げて秋田氏入封以前である16世紀の構築としている(稲田2006)。この調査を受けて行われた2006年度調査では、前回を補足し、宍戸城武家屋敷間尺に京尺のものが存在し、柱材が4寸=12cmの栗材を使用していることを指摘している(間宮2006)。

井戸跡

井戸枠を石組で構築するタイプ、板材で構築するタイプ、素掘りタイプの3種があるようである。

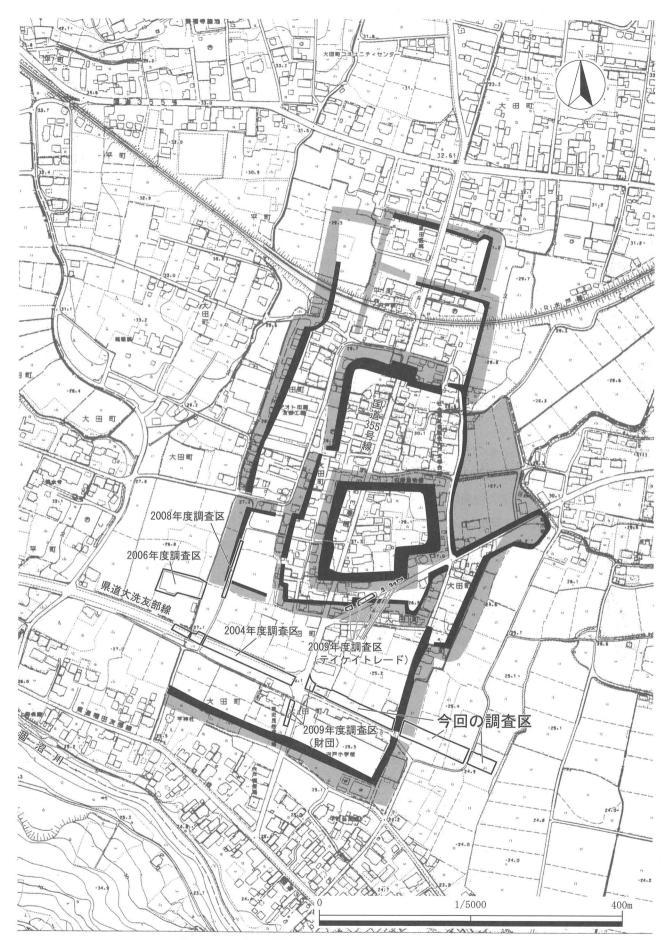
第1の石組井戸は、2006 年度 SE01 が 2.60 m× 2.58 mの平面円形で、上部を粘土で閉塞している。第2の木枠井戸は、2004 年度第7号井戸が 1.60 m× 1.60 mの平面円形に掘り込んで掘方とし、平面円形の枠(径 0.70 m)の外の裏込めは黄色土・青灰色粘土、黒色土を互層状に版築している。第3の素掘り井戸は直径 1.00 m前後の平面円形~楕円形をなしたもので、これまでに検出された井戸の大半がこのタイプである。

池

2004年度調査、2006年度調査、2009年度調査(財団)において、庭園施設である池が検出されている。平面形は不整形のものと方形基調をした L 字形のものとがある。

不整形(楕円形・長楕円形)タイプは、過去の調査事例の大半を占めている。各報告書では、楕円形・長楕円形としているが、不整形というべき形状である。2004年度調査では不整形の池は6基が検出され、そのうちの第1号池は、9.70 m×4.0 mの不整楕円形で、南側には長径3.0 mの楕円形の張り出し部分がある。長軸方向は $N-56^\circ-E$ で、深さは45 cmを測り、底部はやや凹凸がある。覆土は人為堆積。廃絶時に埋め戻されていた。

方形基調で L 字形タイプの池は、2004 年度調査第 3 号池である。南北 8.0 m×東西 4.5 mで深さは 0.70 mを測り、壁は外傾して立ち上がる。長軸方向は N -25° -E である。竹や木材を杭にして、その間を竹や木材を交互に編み込んだ「しがらみ」による護岸対策をしている。自然に湧水する。調査社は廃棄後に埋め戻した人為堆積と判断している。



第135図 宍戸城縄張り図(稲田2006第158図を引用)

堀・溝

 $2004 \cdot 2009$ 年度調査 (財団) で検出された遺構が今回の調査と関連付けられる。2004 年度調査において溝は5 条が検出されている。いずれも『宍戸城絵図(宍戸城下絵図)』に描かれていない溝で、南北($N-25^\circ-E$)に走向する溝と東西($N-65^\circ-W$)に走向する溝とが検出されている。南北($N-25^\circ-E$)に走向する溝は第 $2\sim5$ 号溝の4 条で、幅 $0.60\sim2.4$ m、深さは $0.20\sim0.60$ mを測るものである。これらのうち、第4 号溝は上幅2.4 m、深さ0.50 mを測り、覆土は4 層からなる人為堆積。整地面下から検出されている。第5 号溝は上幅0.7 m、深さ0.2 mの人為堆積である。東西($N-65^\circ-W$)に走向する溝は第1 号溝で、上幅0.6 m、深さ0.30 m。これに沿った北側に第3 号塀が平行して走行するため、武家屋敷の南辺で『宍戸城絵図』に示された当該郭の東西を貫く通りの北縁ではないかと指摘している。

2009 年度調査(財団)では、整地面下から『宍戸城絵図』にはない現状幅 $3.4\,\mathrm{m}$ 、現状深さ $1.23\,\mathrm{m}$ の堀跡が検出されている。II区から北 $(N-12^{\circ}-E)$ に走向し $(1\,\mathrm{5}$ 堀)、北側の I区で東西 $(N-75^{\circ}-W)$ に走向する $2\,\mathrm{5}$ 堀に合流しており、後述する今回調査の $1\,\mathrm{E}$ 区において東西に走向する $3\,\mathrm{5}$ 堀と同一の遺構と考えられる。 $17\,\mathrm{世紀所産の土器・陶磁器・木製品が出土している。}$

このほかに武家屋敷の区画と考えらえる溝が、第 $6\cdot7\cdot8\cdot11$ 号の 4 条が検出されている。南北(N $-5^\circ \sim 20^\circ - E$)に走向する溝は 2 条ある。第 6 号溝跡は、第 2 次整地層下層、第 2 号堀跡を掘り込み、幅 0.54 m、深さ 0.28 mを測り、覆土は細礫を多量に含むことから、2 層からなる人為堆積である。第 7 号溝は、第 4 号池と第 2 号堀を掘り込み、幅 0.58 m、深さ 0.38 mを測る。単一層からなる人為堆積である。東西(N $-56^\circ \sim 65^\circ - E$)に走向する溝は、第 $8\cdot11$ 号溝の 2 条である。第 8 号溝跡は $0.38\sim0.93$ m。断面 V 字形。深さ 8 m。 細礫を含む単一層で埋戻した痕跡がある。第 11 号溝は第 1 次整地面を掘り込んでおり、上幅 $0.91\sim1.14$ m、深さ 0.25 mで 3 層に分層される。

2006年度調査では溝跡 12条が検出されている。このうち屋敷境の区画は SD02・06 が該当するとしている。このうち、SD02 は幅 $1.83\sim1.69$ m、深さ 0.66 mを測り、17 世紀陶磁器が出土している。東西 $(N-70^\circ-W)$ に走向する。SD06 は、幅 0.95 m、深さ 0.33 mを測り、南北 $(N-20^\circ-W)$ に走向する。

2008年度調査では、『宍戸城絵図』にも描かれている堀1条と4条の溝が検出されている。1号溝(堀)跡は、幅8.61 m、深さ1.71 m。東西 $(N-71^{\circ}-W)$ に走向し、断面形は箱形を呈する。上位層と下位層とがあり、上位層は12層からなる人為堆積で、近世陶器など17世紀の遺物が出土している。上幅0.28~1.18 m、深さ0.05 m~0.49 mで南北方向 $(N-16^{\circ}\sim18^{\circ}-E)$ の溝3条。上幅0.45 m、深さ0.45 m、東西方向 $(N-62^{\circ}-W)$ の溝1条が検出されている。

方形周溝状遺構と方形竪穴遺構

前述の遺構のほかに、今回検出された遺構に関連するするものとして方形周溝状遺構と方形竪穴遺構の存在がある。 宍戸城から外れるが、2004年度の宍戸城跡調査に関連した主要地方道大洗友部千道路改良工事に伴う新善光寺跡発 掘調査が行われている。この中で、方形周溝状遺構、方形竪穴遺構についての記載がある。

方形周溝状遺構は、溝幅 $40\sim65~{\rm cm}$ 、深さ $15~{\rm cm}$ の周溝を平面長方形に巡らし、覆土は自然堆積である。長軸は北西方向 $(N-42^{\circ}-W)$ である。遺物は少なく縄文土器・土師器が混入している。

方形竪穴遺構は、2 基が報告されている。第 1 号方形竪穴遺構は $4.80~\text{m} \times 2.50~\text{m}$ の平面長方形をなし、深さ 65~cm、長軸が北方向 $(N-4^\circ-E)$ となっている。第 2 号方形竪穴遺構は $2.1~\text{m} \times 1.9~\text{m}$ の平面正方形をなし、深さ 28~cm。長軸は北方向 $(N-5^\circ-E)$ である。主柱穴と考えられる 40~cmと 56~cmの平面円形ピット 2~基を配置する。遺物は土師質土器が出土している。

2基の方形竪穴遺構のうち第2号竪穴遺構は竪穴式住居跡の系譜をひく建物跡のことで、中世における竪穴建物跡、 竪穴状遺構とも呼ばれるものである。

第2項 今回の調査

今回の調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、池 (SX1)、堀・溝、および「方形に巡らせた溝」、竪穴状遺構 (SX2) が 検出されている。

掘立柱建物跡

11 軒が検出されている。これらの柱間距離を、下記に示す江戸尺基調、京尺基調、両者以外という①~③の観点でまとめてみると、①は皆無で②が少数、③が主体をなすという結果になった。③の規格で比較的多いのは 7 尺= 2.1 mで、2004 年度調査(稲田 2006)において、1 間= 2.1 mの規格は前述したように中世とされていた分類である。

これら掘立柱建物跡には角材と丸材が用いられており、武家屋敷比定地における掘立柱建物跡で検出された SB1・ $2\cdot 3\cdot 8$ では角材が検出されている(第 107・108 表・木製品観察表)。幅が 11.5~ 13.8 cmを測り、概ね 4 寸を示し材質は松と栗を用いている。2006 年度調査同様に角材は 4 寸幅を基準とし、中世以来の東国の間尺と京尺が採用され、江戸尺は採用されていない。SA(塀・柵列)においても同様の傾向を示している。

[掘立柱建物跡の柱間距離]

- ①江戸尺(1間=6尺=1.80m)を基調:該当なし
- ②京尺(1間=6.5尺=1.90 m)を基調:(1区)SB08 (2区)SB02
- ③両者以外: (1区) SB09·10 (2区) SB01·03·04 (3区) SB05·06 (4区) SB11 (5区) SB07

[SA (柵列・塀) の柱間距離]

- ①江戸尺(1間=6尺=1.80m)を基調:該当なし
- ②京尺 (1間=6.5尺=1.90 m) を基調: (1区) SA07 (2区) SA12
- ③両者以外: (1区) SA08 (2区) SA09·10·13·14 (5区) SA04·05·06

井戸跡

18 基の井戸が検出され、このうち石組井戸 2 基、木枠井戸 1 基、素掘り井戸 14 基が検出されおり、下記のようにまとめられる。

①石組井戸

- (1区) SE09: 2.30 m×2.20 mの平面楕円形、深さ2.00 mで底部砂礫層に至る。
- (2区) SE01: 2.33 m×2.05 mの平面円形、深さは2.25 mで底部砂礫層に至る。
- (5 区) SE15: 直径 1.60 mの平面円形で自然堆積の様相。井戸枠組み石が底部に存在。深さ 1.80 mで底部砂礫層に至る。

②木枠井戸

(5 区) SE04: 2.6 m×2.3 mの楕円形、深さ1.80 mで底部の砂礫層に至った。廃絶に伴う祭祀の様相と木枠の 痕跡をなす板材が立位で出土している状況が特筆される。

③素掘り井戸

直径 0.79 \sim 1.93 mで概ね 0.80 m前後の平面円形~楕円形、深さ 1.48 \sim 2.12 mで砂礫層に至り底部となる。

- (1区) SE07·08·10·11
- $(2 \boxtimes) \text{ SE05} \cdot 06 \cdot 16 \sim 18$
- (3区) SE03: 直径 0.9 mの平面円形、廃絶に伴う祭祀の様相を示す遺物出土状況は特筆される。
- (4区) SE19~21

池

不整形タイプはなく、方形基調の平面 L 字形タイプの SX1 (2 区) を検出したのみである。平面形状や護岸対策、

自然に湧水する点などは 2004 年度調査の第 3 号池に類似しているが、規模はこれよりやや小さく、南北 4.78 m×東西 4.60 m、深さ 0.86 mを測る。長軸方向は N -23° -E。かわらけ・瓦質土器・瀬戸美濃擂鉢・木製容器蓋などが出土している。

堀·溝

今回の調査では、堀4条、溝5条を検出した。堀・溝には、整地面及び対応する3~5区確認面(第1面。以下、「整地面」と略す)上の遺構と整地面下の遺構とが存在する。整地面上の堀は1条で溝は5条となり、整地面下の堀は3条で溝は1条となっている。これらの堀や溝は概ね直線的で、東西 $(N-62\sim65^{\circ}-W)$ と、南北 $(N-17^{\circ}\sim25^{\circ}-W)$ に走向している。

1・2 区において検出された整地面上の溝は、武家屋敷の建物に関連した遺構で、このうち SD250・252 は建物に関連した遺構と考えられる。3 区で検出された1 号堀は『宍戸城絵図(宍戸城下絵図)』に示されたものであり、絵図によれば現在の道路が土塁となり、その東側直下が外濠となる様相を示す。町屋側からではあるが、1.35 mの残存深度であることは意外である。また5 区において土橋が検出された SD201 は、城絵図に存在しないものであるが市場的な性格をもった4・5 区に至る「町屋」内を、遺跡の南側を東流する涸沼川から北上するもので、井戸や当該溝出土遺物の様相から、区画や排水以外にも、例えば運河のような機能も想起させられるところである。

整地面下の遺構は、前述したように武家屋敷比定地である $1\cdot 2$ 区にのみ存在する。 $2 \sim 4$ 号堀及び SD251 が存在する。 $2 \sim 6$ 号堀及び SD251 が存在する。 このうち東西に走向する 3 号堀は、前述したとおり、 2009 年度調査(財団)における、南北方向から東西方向に屈曲する第 $1\cdot 2$ 号堀と一連の遺構と考えられる。以下に検出された遺構の概略をまとめてみた。

「 整地面上]

- ①東西 (N-62°~65°-W) に走向する溝
 - (1区) SD101~103・252:幅0.12~0.65 m、深さ0.12~0.20 mで、いずれも水の流れた形跡はない。
- ②南北 (N-17°~25°-W) に走向する溝
 - (1 区) SD250: 幅 0.46 mで深さ 0.37 mを測り、単一層となっている。

SD252:幅は0.22~0.87 m、深さは0.24 mを測る。

- (2 区) SD001: 幅 $1.12 \sim 1.39 \, \text{m}$ 、深さ $0.27 \sim 0.33 \, \text{m}$ を測り、自然堆積の様相をなしている。調査区境の断面が攪乱されていたので整地面上の遺構として扱うことにした。
- (3区) 1号堀:3区西端で検出された南北に走向する外濠で、『宍戸城絵図』にも描かれている。幅は現状で 6.90 m、深さ 1.36 mを測る。断面は、底部が平らで立ち上がりが緩やかに開く形状をなし、覆土は 褐色土〜黒色土の 3層からなる。覆土中から 17~19世紀の陶磁器及び動物遺体が出土している。
- (5 区) SD201:幅は $2.00 \, \mathrm{m}$ で深さ $0.38 \, \mathrm{m}$ を測り、人為堆積の様相をなす。検出された溝の中央付近には土橋が存在する。 $17 \sim 19 \, \mathrm{tm}$ 世紀の土器・陶磁器類・銭貨などが出土している。町屋のあった地区で整地面はないが、廃絶期まで存続していたものと判断し、整地面上として扱うことにした。

[整地面下]

- ①南北方向 (N-25~32°-E) に走向する溝
 - (1区) 4号堀:幅2.16m、深さ0.50mを測る。
 - (2区) 2号堀:幅2.72m、深さ0.95mを測る。
 - (2区) SD251:幅1.60 m、深さ0.50 mを測る。1・2層で半ば自然堆積した後、整地層で完全に埋められる。
- ②東西方向 (N-62° -W) に走向する溝
 - (1区) 3号堀:断面形は現形状から箱薬研であると推定される。現状での最大幅は現状で 5.76 m、深さは 2.30 mを測るが、北岸と底部に達するには至らなかった。

「方形に巡らせた溝」と竪穴状遺構

1 区から検出された「方形に巡らせた溝」は、南北 7.80 m×東西 6.15 m、溝幅 $12\sim24$ cm、深さ $2\sim7$ cmで概ね 5 cm前後。平面方形に巡りつつ、東辺で途切れる。覆土は褐灰色砂礫単層をなしている。長軸方向は北西方向(N—35°—E)である。新善光寺遺跡における方形周溝状遺構に類似している。

SX2 は、2 区の整地面下で検出され、地山から掘り込まれていることが断面図からも判る。 $3.53~\text{m} \times 2.80~\text{m}$ の平面隅丸方形で、深さは0.30~mを測り、覆土は整地面構築の際、埋め戻された様相を示す。長軸方向は $N-82^\circ$ —E である。土師質土器を検出した新善光寺遺跡の第 2 号方形竪穴遺構に類似するが、新善光寺のものは中世とされている。

以上のことから今回の調査で検出された遺構群は、1602年の秋田氏入封により築城、1645年に廃絶した宍戸城の存続期間である 17世紀に限定され、各遺構は概ね、堀・溝に東西 $(N-62^\circ \sim 65^\circ -W)$ と、南北 $(N-17^\circ \sim 25^\circ -W)$ に準拠した主軸をなしている。

第3項 発掘調査で得られた成果と『宍戸城絵図 (宍戸城下絵図)』

第 135 図に示す現況地形図では、水田となっている調査区のある郭周囲に存在していた濠及び土塁は存在せず、南北に伸びた形状をなした連郭式の宍戸城中央部を縦断して、国道 355 号線が走向しおり、郭南東隅部は宍戸小学校造成において大きく旧状が変化している。

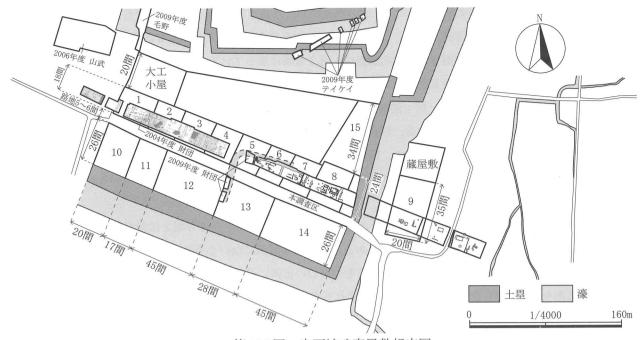
郭の西辺に相当する 2006 年度調査区 (現コメリ) に面した小道、2004・2009 年度調査区及び今回の調査区が占地する大洗友部線に平行して南側を走向する小道は、後述する明治初期に作図された地籍図にも存在が示されている。郭の東辺は南北に走向する道路となっており、東縁は約1 m下がる段差をなし、そこから調査区を東へ向かうと、南側を併走する小道が 4・5 区境目付近で屈曲し北に向きを変え、100 mほど北でクランクして延びる。

巻頭写真 2 に示す地籍図では、東西を貫く小道が現在の宍戸小学校敷地を縦断し、先述した 4·5 区のクランクする 小道に連結している。

第136·137 図に示す想定図及び『宍戸城絵図』では、郭西辺を南北に走向する小道、中央部を東西に貫く小道西部、及び東の郭外にある町屋比定地をクランクして北に縦断する小道は表現されている。また郭東辺にある南北に走向する現在の舗装道路は、絵図に示される土塁に相当すると考えられ、外郭を併走する濠は、道路から一段下がった水田にある畦に痕跡を示している。なお現在、郭内平場の大半を占める水田の畦の区画は、前述した地籍図から判断して武家屋敷区画の名残を示すものである。

今回も、2004・2009 年度に引き続き、通りの北側に軒を連ねる武家屋敷が調査された。第 136 図に示すように、2009 年度に調査された郡司五左衛門邸 (5) の東際、倉 (蔵) 田又兵衛 (6)、加藤□左衛門 (7)、分内名左衛門 (8)、外濠を渡って町屋に隣接するところが脇田金兵衛 (9) の各邸宅までの武家屋敷及び町屋を調査している。調査区の西から東に向かって、1 区が郡司・倉 (蔵) 田邸、2 区が加藤・分内邸、3 区が脇田邸にほぼ該当する。4・5 区は町屋となる。各武家屋敷の間口と奥行きは、郡司邸から加藤邸までは東西 17 間×南北 18 間、分内邸は東西 21 間×南北 24 間、脇田邸は東西 20 間×南北 35 間である。

各武家屋敷に示された人名を「秋田俊季公分限帳」(友部町 1971) 及び「万治二年家中求人知行高扶持切高覚」(松原 1973) に照合させてみる。以下、前者を「分限帳」、後者を「万治覚書」と略すことにする。郡司五左衛門は「分限帳」によると 150 石、「万治覚書」によると 250 石である。倉田又兵衛は、「分限帳」によると 100 石、「万治覚書」によると 200 石である。また両者には「倉」ではなく「蔵」と示されている。加藤□左衛門は、「万治覚書」にある加藤弥五左衛門 200 石であろうか。「分限帳」への記載はない。外濠の外側に邸宅を構える脇田金兵衛は「分限帳」及び「万治覚書」に 200 石と記されている。



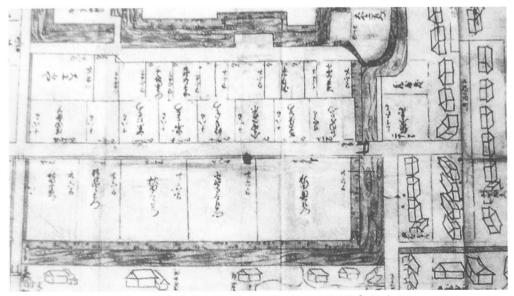
第136 図 宍戸城武家屋敷想定図

1	津田民部	(東西 24 間、南北 18 間)	9	脇田金兵衛	(東西 20 間、南北 35 間)
2	(空)	(東西 17 間カ、南北 18 間)	10	秋田宇右衛門	(東西 20 間カ、26 間)
3	山東仁衛門	(東西 17 間カ、南北 18 間)	11	秋田四郎右衛門	(東17間カ、26間)
4	永井与左衛門	(東西 17 間カ、南北 18 間)	12	秋田三郎右衛門	(東西 45 間カ、南北 36 間)
5	郡司五左衛門	(東西 17 間ヵ、南北 18 間)	13	小野寺三郎左衛門	(東西 38 間ヵ、南北 36 間)
6	倉田又兵衛	(東西 17 間ヵ、南北 18 間)	14	秋田奥左衛門	(東西 45 間カ、南北 26 間カ)
7	加藤弥五左衛門	(東西 17 間ヵ、南北 18 間)	15	小山三郎兵衛	(南北 34 間)
8	分内名左衛門	(東西 21 間、南北 24 間)			

※10~14の東西間口は地籍図をもとにした推定である。

※明治初期の地籍図『平町村』『橋爪村』(笠間市立友部図書館蔵)を合成した。 ※各調査の年度で発行された報告書および機関は巻末に示す。また、2004年および 2009年度財団調査区における全体図は、同調査報告 書からの引用である。

2004 年度 財団 (稲田 2006) 2006 年度 山武 (間宮 2006) 2009 年度 毛野 (宮田 2009) 2009 年度 テイケイ (森本・大角 2009) 2009 年度 財団 (前島 2011)



第137 図 『宍戸城絵図 (宍戸城下絵図)』拡大図

前述した 2004・2009 年度の財団調査同様に、今回の調査における武家屋敷比定地 1・2 区でも屋敷区画付近は極端に遺構が少なく土塁等があった可能性がある。また前述した 2009 年度調査における第 II 区第 1 号堀は北進した後、第 I 区で屈曲し第 2 号堀となって東進し、今回の調査区 1 区 3 号堀に至っている。屋敷割でいえば、小野寺三郎左衛門邸の西辺から、通りをまたいだ郡司五左衛門邸中央付近で向きを東に転じ、倉(蔵)田又兵衛、加藤弥五左衛門邸の屋敷中央部を貫く様相となっている。同一遺構と考えられるこの堀の土層は人為堆積の様相を示し、上層に 17 世紀の遺物を混入していることがわかっている。形状と規模は対岸と底部が各調査区の外側に位置しており、今回の調査においても全容は未解明のままである。また、整地面下から検出された堀・溝で南北に走向するものは、今回の調査における 2 ~ 4 号堀、SD251 が存在し、2004 年度調査における第 4 号溝も同様の傾向を示している。これらの底部標高は南が低くなる。

3号堀は、秋田氏の宍戸城築城にあたって埋め戻された遺構である。土層から4号堀とは新旧関係は認められず同一期に機能し、時を同じくして埋め戻された様相がある。また重複関係にない2号堀・SD251についても同様の状況である。2号堀は分内名左衛門邸に少しずれるが同邸宅の東辺の区画に近い位置にある。SD251は加藤弥五左衛門邸と分内邸の境にあり、4号堀も倉田又兵衛邸側に少しずれるのではあるが、概ね屋敷割を意識して穿たれたものと判断される。

以上より、南端にある武家屋敷の郭内の整地面下に存在する17世紀初頭の溝は、位置的に多少のずれはあるものの、1645年(正保2年)の秋田氏三春転封直前の区画と同一方向に指向していることが判る。このことから整地面下の遺構は、「湿地である当該地を乾燥させる必要から堀・溝を穿ち、乾燥を終えた後、土盛りして整地面を構築し、武家屋敷を構築した可能性がある」旨、調査の指導に当たられた川崎純徳氏が現地においてご助言くださり、大いに納得するところがあった。

ただ、3号堀に至っては、南北に走向する部分が小野寺三郎左衛門邸と秋田三郎右衛門邸の境をなしていつつも、 屈曲して東進するに及んで、郡司五左衛門・倉田又兵衛・加藤弥五左衛門邸宅の中央を巡っており、武家屋敷の町割りと整合していないことから、中世城館の一部である可能性も捨てきれない。

今回の調査から、文献資料とも連動して武家屋敷の町割りの一端を解明するに至ることができたと信ずるところである。一方、整地面下の3号堀といった未解明の問題を残すところもあり、今後の調査成果を待ちたい。

なお、引用した『宍戸城絵図』は現在所蔵している東北大学附属図書館の呼称で、『友部町史』では『宍戸城下絵図』の呼称であるため、本書では両者を併記することにした。

第2節 検出された土器・陶磁器類について

今回の発掘調査による出土遺物には、近世宍戸城下武家屋敷(武家地)と町屋(町人地)に伴うものと、前代のものとがあった。後者は遺構覆土あるいは包含層(遺構外)から採取された縄文土器(前期中葉)1点と、弥生土器(後期)3点、須恵器(9世紀)1点がある。縄文・弥生・平安時代の遺構・包含層は確認されなかったので、当時の状況を窺い知ることはできないが、周辺に生活域が存在していたことが推察される(注1)。

城下武家地・町人地からは土器・陶磁器類のほかに、屋根瓦、土製品、石製品(石臼・捏鉢・砥石など)、金属製品・ 鍛冶関連遺物、窯道具(匣鉢)、銭貨(北宋銭・南宋銭・明銭)、木製品(漆器・容器・建築材・杭など)、種実遺体(モ モ核・ヒメグルミ核)が検出された。個別の資料については、前章までの事実記載、あるいは巻末の出土遺物集計表・ 木製品観察表を参照されたい。

第1項 土器・陶磁器類の組成

さて、出土遺物の主体となる土器(土師質・瓦質)・陶器・磁器・焼締陶器は、総数 1,223 点・総重量 47,454.4 g に及ぶ (第 97 表)。帰属時期については、近世宍戸城の存立期間に相当する 16 世紀末葉~ 17 世紀中葉以外に、廃城後の 17 世紀後葉~ 19 世紀がある。両者は帰属する遺跡(遺構)の性格が異なってくるので、それぞれに伴う遺物も分別して検討すべきであるが、土器類の時期別分類が不分明であることと、後者の陶磁器類の比率が低く見積もられること等から、一括して集計した。

第 07 表		レの十哭。	陶磁器類組成
F 91 7	11111.1.1	1////	

211	31 4 地区				*> HH >>	KUTT/V					79.4 FT	7				
	出土位置			1 世界		瓦質士	上器	陶岩	2	11	磁岩		o III ATI	焼締降	9器	合計
	ロエに同	かわ	らけ	その	他	20,70		1.51		17世	上紀	18 • 1	9世紀			
	1区	200	45.0	136	39. 7	26	25. 2	106	44.7	10	35.7	9	25.7	14	42.4	501
	2区	143	32. 2	103	30.0	18	17.5	41	17.3	0	0.0	5	14.3	4	12.1	314
1	3区	12	2. 7	11	3. 2	1	1.0	20	8.4	9	32. 1	14	40.0	3	9.1	70
Ner	4区	9	2.0	9	2.6	4	3. 9	11	4.6	3	10.7	1	2.9	2	6.1	39
数量	5区	80		83		44		55		6		6		10		284
重	ex. SD201	44	9.9	45	13. 1	27	26. 2	21	8. 9	4	14.3	0	0.0	6	18.2	147
	SD201	36	8.1	38	11. 1	17	16.5	34	14.3	2	7. 1	6	17. 1	4	12.1	137
	不明	0		1		10		4		0		0		0		15
	合計	444	36.3	343	28.0	103	8.4	237	19.4	28	2.3	35	2.9	33	2.7	1223
F-	1区	2939. 1	42.0	4342.4	27. 6	3690.9	27.8	3737.7	47.5	` 78. 9	13. 4	127.1	20.2	1069.3	45.2	15985.4
	2区	2140.3	30.6	2553.0	16. 2	1617.4	12. 2	1126. 2	14.3	0.0	0.0	36. 7	5.8	133. 2	5.6	7606.8
	3区	391.0	5. 6	2414.6	15.4	1106.4	8.3	656.4	8.3	87.3	14.8	329.6	52. 5	86.5	3.7	5071.8
_	4区	85. 3	1.2	271.6	1.7	324. 1	2.4	375.4	4.8	210.3	35. 7	20.8	3.3	352. 2	14.9	1639.7
重量	5区	1448.5		6101.3		5352. 3		1890.0		212. 1		114.0		724. 4		15842.6
重	ex. SD201	705.0	10.1	1322. 9	8. 4	2350.9	17.7	646. 4	8.2	58.8	10.0	0.0	0.0	321.0	13.6	5405.0
	SD201	743.5	10.6	4778.4	30. 4	3001.4	22.6	1243.6	15.8	153.3	26.0	114.0	18. 1	403.4	17. 1	10437.6
	不明	0.0		40.8		1176.8		90.5		0.0		0.0		0.0		1308. 1
	合計	7004.2	14.8	15723.7	33. 1	13267. 9	28.0	7876. 2	16.6	588.6	1.2	628. 2	51.4	2365.6	5.0	47454.4
	1					1							-C. III	337.71.		Ind v t o /

*数量:基本的に接合後破片数、重量:単位 g、右側は%。

種別ごとの組成は、かわらけ以外の土師質土器や瓦質土器、焼締陶器の大甕のように、1個体の重量が著しく大きいものがあるので、数量比で見ていくことにする。かわらけ36.3%、その他土師質土器28.0%、瓦質土器8.4%、陶器19.4%、磁器5.2%、焼締陶器2.7%となる。土器類だけで7割以上を占めている。

ところで、今回の調査区はひと括りに「宍戸城下」と言うものの、前節で検討したように、西側(1~3区)は武家地、東側(4・5区)は町人地、と「場」の性格を異にしている。また、5区(町人地)の西端を南北に走る溝: SD201出土遺物については、瀬戸・美濃産の茶陶(喫茶具)・織部製品や唐津産の向付などの陶器類が、いわゆる町人地の遺物相として異彩を放っているように感じる(巻頭写真4)。これらのことを踏まえて、武家地と町人地、SD201に分けて、それぞれの種別組成と相互の比較をしてみよう(第98表)。

武家地 $(1 \sim 3 \, \boxtimes)$ ではかわらけが 40.1%と他を圧倒しており、次いで、その他土師質土器・陶器・瓦質土器となる。町人地 $(4 \cdot 5 \, \boxtimes)$ においても組成順位はほぼ同じと見てよいだろうが、かわらけは 28.5%と低くなり、瓦質土器は 16.7%と高くなる。SD201 は前記したとおり、茶陶・織部製品が目を引く。種別組成も町人地に比べ、土器類の割合が低くなる。ただ、SD201 以外でも、 $4 \, \boxtimes$ SB11 の志野向付や、 $5 \, \boxtimes$ SK412 の志野折縁鉄絵皿のように志野織部製品が出土しているので、SD201 出土遺物がことさら特異であるとは言えないようだ。

第98表 武家地・町人地・SD201 ごとの土器・陶磁器類組成

_																
1	出土位置		土師	質土器		瓦質	1.88	1760	0,0		fii			Inter Antonia	- nn	A 151
	1417171	かわ	らけ	その	他	凡貝	上初	陶	66°	17世	紀	18 • 19	9世紀	燒締附	可給	合計
	1~3区	355	40.1	250	28. 2	45	5.1	167	18. 9	19	2. 1	28	3. 2	21	2.4	885
数	4 · 5 ⊠ (ex. SD201)		28. 5	54	29.0	31	16.7	32	17. 2	7	3.8	1	0.5	8	4.3	186
量	SD201	36	26. 3	38	27.7	17	12.4	34	24. 8	2	1.5	6	4.4	4	2.9	137
	合計	444	36.8	342	28. 3	93	7.7	233	19.3	28	2. 3	35	2.9	33	2.7	1208
١.	1~3区	5470.4	19. 1	9310.0	32.5	6414.7	22.4	5520.3	19.3	166. 2	0.6	493.4	1.7	1289.0	4.5	28664.0
重	4 · 5区 (ex. SD201)	790.3	11.2	1594.5	22.6	2675.0	38.0	1021.8	14.5	269. 1	3.8	20.8	0.3	673. 2	9.6	7044.7
量	SD201	743.5	7.1	4778.4	45.8	3001.4	28.8	1243.6	11.9	153. 3	1.5	114.0	1.1	403.4	3. 9	10437.6
	合計	7004.2	15. 2	15682. 9	34.0	12091.1	26. 2	7785.7	16.9	588. 6	1.3	628. 2	1.4	2365.6	5. 1	46146.3

*数量:基本的に接合後破片数、重量:単位g、右側は%。

第2項 かわらけについて

形態による分類

- ・A 類(坏形) この分類の基本はロクロの上に置いた粘土塊であり、回転させて絞って円柱状にし、その上に粘土紐を巻き上げて整形したものが A 類で、体全体に丸みがある。また口縁部に近づくに従って器肉が薄くなり、口唇が反り返るものが多い。一般的に高速回転糸切り離しのまま、底部も体下端も無調整であるため底部が突き出たような感じとなる。口径:底径:器高の比率は、口径 1 に対しその最小から最大までと()内に平均値を入れた。その比率は A 類では $1:0.43\sim(0.52)\sim0.64:0.26\sim(0.31)\sim0.38$ である。
- ・B 類(皿形) A 類と同じようにして整形したのち体中間で粘土紐を継ぎ足ししたものと思われ、体部は直線的に開き、往々にして口縁部が分厚くなる傾向がある。切り離しの技法は同じだが、開いた器形を維持するためか、回転速度がやや遅い。対口径比率は $1:0.32\sim(0.43)\sim0.50:0.25\sim(0.28)\sim0.35$ とやや幅がある。
- ・C 類(盤状) 粘土円柱の上に粘土板を載せロクロ整形したもので、体部は浅く、垂直に近く立ち上がる。低速回転の状態で糸切り離すため、糸抜き痕は底部のなかに残る。対口径比率は $1:0.56\sim(0.64)\sim0.73:0.20\sim(0.26)\sim0.35$ である。

大きさによる分類

1寸=3.03cmを基準として、口径を基に以下のとおり分類した。

- ・大皿(4寸以上) 12.3cmを超えるグループで、ほとんどが復元実測である。
- ・中皿(4 寸以下 3 寸以上) 11.7cm ~ 9.2cm 内に入るグループで、平均すると 10.0cm(3.3 寸)となる。復元・完形品半ばである。
- ・小皿(3 寸以下) 7.8cm \sim 5.7cm 内のグループで、平均すると 6.7cm(2.2 寸)になる。比較的完形品が多い。また、6cm 前後のものは粘土塊から直接引き出す、所謂水挽き技法で作られたと考えられる

第99表 かわらけ分類

	A類(坏形)	B類(皿形)	C類(盤状)	合計	%
大型(4寸以上)	1	2	0	3	4.9
中型(4寸以下)	17	16	1	34	55. 7
小型(3寸以下)	10	4	10	24	39. 4
合計	28	22	11	61	100
%	45. 9	36. 1	18. 0	100	

*実測図で口径のわかる資料のみ抽出した。

胎土からみた分類

図示した86点のかわらけのうち、雲母の混入しているものが70点(全体の81%)もあり、そのほとんどが、微量の粉末であることが特徴的である。つぎに白色針状物質と呼ばれる海綿骨針についても観察してみたが、これが確認できたのは7点(8%)だけである。そのうち雲母の混入が認められるものが6点、認められないのはわずか1点である。このように胎土の成分をもとに分類すると4大別が可能である。一番多いのは雲母粒のみ混入するもので全体の

75%を占め、ついで雲母も骨針もみられないものが17%である。古代より筑波山麓で生産された須恵器などに雲母が見られる例が知られており、かわらけの産地としても、この一帯が有力であることの証明ともいえよう。

第 100 表 胎十組成表

7,7 100 20 11	7	いわらじ	ł I	+	師質土	哭	7.	瓦質土器	<u></u>
	/~	1-47 D 1/	,		HI M T				
骨針	あり	なし	計	あり	なし	計	あり	なし	計
雲母あり	6	64	70	3	11	14	3	6	9
雲母なし	1	15	16	3	8	11	6	8	14
計	7	79	86	6	19	25	9	14	23

*遺物観察表を基に作成した。

他の分類との比較

浅野晴樹氏は、第VI期(16世紀 $2/4 \sim 4/4$ 期)の土師質土器皿を埼玉の事例を用いて 2 類に分けている(浅野 1986)。

1類は「底径が小さく、やや深めで、体部が直線的に外反する。・・・加えて薄づくりなもの、・・・水挽き成形で器壁の厚いもの」、2類は「底径が広く、厚めのつくりで、器高の低いもの」としている。各類例に挙げたなかから、その特徴と、今回の形態分類の特徴を当てはめるなら、1類の薄づくりのなかにB類に似た要素を、器壁の厚いもの(成形に関しては検討を要すが)で体部にやや丸みのある例がA類に、「各県とも極めて類似性が認められる。」とした2類がC類と直接的に結び付けることができよう。

『宍戸城 2』のまとめで、前島直人氏は土師質土器の皿の寸法を大・小 2 種類に分けている。口径だけ捉えると $5.1 \sim 7.1 \, \mathrm{cm}$ が小に、 $7.9 \sim 12.0 \, \mathrm{cm}$ を大としている。今回の分類では小皿が小の、中皿が大の範疇に相当すると思われる。

本遺跡のかわらけの特性

土師質土器のなかでも"かわらけ"は使い捨てのうつわとも形容され、大量に生産され、宴や儀式において大量に消費されたのち、一括廃棄される例が多くみられ、中世期を代表する遺物である。ついで江戸時代の供膳具を材質別にみると陶磁器と木製品がほとんどを占める。ことに磁器が一般に普及するようになったことは、かわらけなど素焼き土器の食卓における比率を激減させる大きな要因となった。

そんななかにあって今回の調査では、一括して投棄された例はないものの、遺物の総量の約35%までをかわらけが 占めることは、中世的な「ハレ」の用具としての意味とは別に、「ケ(日常)」の食器として使用されていたことを窺 わせる。ここに磁器の普及以前、「中世的な様相を残す」江戸時代初期の「東国武士の生活」(間宮2006)の一端を みることができる。

第3項 土師質土器と瓦質土器

ここで取り上げる土師質土器は前項のかわらけ以外の酸化焔焼成の土器類であり、還元焔焼成である瓦質土器と対峙して語られることが一般的である。第101表は実測されたものの器種ごとの数量を示したが、両者が相半ばすることが分かる。

そのなかからいくつかの特徴を記してまとめとしたい。

碗・皿類は、かわらけの画一的な形状からは遠く、焼きぶれが著しい点で、とても大量生産されたものとは思われない一群である。焼塩壺は、内面に内子の芯とした粗布の痕跡の残る手捏ね品である。おそらく堺産の初期のものであろう。鍋や焙烙には内耳がみられ、焙烙の中には瓦質の優品もある。SE03 出土の片口鉢は完形品で、その形状から秤量用と思われる。

印花文のついた火鉢は4点あるが、うち1点は雲母の多量に入った土師 質土器である。おそらくは"奈良火鉢"を模倣して地元(桜川市真壁町あ

第 101 表 器種別総量表

器 種	土師質	瓦質	計
碗・皿類	5	1	6
焼塩壺	2		2
鍋	4		4
焙烙	3	3	6
擂鉢類	4	3	7
片口鉢		2	2
筒形鉢	1	2	3
火鉢	3	8	11
角火鉢	1	2	3
火消壺ヵ		1	1
十能	2		2
瓦灯カ		1	1
計	25	23	48

たりの可能性もある)で作られたものと思われる。十能は2つとも還元が不完全なため土師質に含めた。このように本報告では本来瓦質土器をめざしたものでも、断面の観察から器肉が茶色のままなので、土師質土器と判断したものもあることをご承知おきいただきたい。

第4項 陶磁器類について

組成

陶磁器類の 7・8 割は陶器である (第 102 表)。集計に当たっては、18・19 世紀の磁器は除いてある。陶器については、本書非掲載資料の分類に不分明な部分を残すため、掲載資料を基にすると、その 8 割以上を瀬戸・美濃産が占めている。 唐津産は約 1 割である。少数の磁器は肥前系(平戸・波佐見含む)で、中国・景徳鎮窯系の青花は碗 1 点(1 区 4 号堀 -10)を見出したのみである。また、焼締陶器には産地同定が不十分なものを残すが、常滑産の甕・壺や丹波産と思われる擂鉢、図示していないが、堺・明石系擂鉢を確認することができた。

16世紀末葉~17世紀前半における他の調査事例と比べても、瀬戸・美濃産陶磁器が主体を占めることは同調している。2004年度調査では中国青花が一定量検出されているが、今回は僅少で、肥前系磁器が目立つのは、17世紀半ば近くの遺物相が重複してくることと、何よりも出土遺構・状態に恵まれなかったことも要因の一つと考えてよいのではないだろうか(注 2)。 第 102 表 陶磁器・土器内訳(掲載分)

年 代

最も資料の多い瀬戸・美濃産陶器から言えば、大部分は大窯第4段階・16世紀末葉から連房式登窯第1段階・17世紀中葉に比定され、正しく、秋田氏の在城期間と一致してくる。ただ、2区P142の

種別	生産地等	点数	%	重量	%		点数	重量
	瀬戸・美濃	64	83. 1	4760, 7	84, 8	大窯	12	1369. 5
陶器	1007 X 100	01	00.1	4100.1	04.0	近世	52	3391. 2
Pro titi	唐津	8	10.4	516. 4	9. 2			
	不明	5	6. 5	337. 7	6.0			
磁器	肥前	6	85. 7	425. 0	97. 2			
1422-010-	中国・景徳鎮	1	14. 3	12. 1	2.8			
焼締陶器	常滑	2	66. 7	751.0	94.5			
A9世中日 中日 4日	丹波力	1	33. 3	43. 3	5. 5			
土師質土器	かわらけ	86	77. 5	4379.3	43.8			
工即具工器	その他	25	22. 5	5626. 3	56. 2			

灰釉碗(平碗か)は大窯第3段階・16世紀後葉以前に遡る可能性がある。2004年度調査でも同様に付高台の鉄釉丸碗が検出されており(第30号土坑、稲田2006)、出土遺構や出土状況から、これらは近世宍戸城の前身(中世宍戸城)に由来するものと考えるよりも、宍戸入封に伴って持ち込まれたものと思われる。

一方、17世紀後葉以降のものとして、5区遺構外の擂鉢(17世紀後葉)、3区1号堀の片口(17世紀末葉)、3区遺構外の擂鉢(18世紀中葉以降)、1区SE02の腰錆茶碗(19世紀前半)、3区遺構外の片口(同)、5区SD201の甕類(同)などの瀬戸・美濃産陶器や唐津産銅緑釉蛇の目碗(1区遺構外)・三島手大鉢(5区SE04)、肥前系、瀬戸・美濃産磁器(5区SD201等)があり、廃城後の遺物を見ることができる。

武家地と町人地の陶磁器類

次に、16世紀末葉~17世紀中葉の陶磁器類の内容を確認する。武家地内の陶器には、供膳具として美濃産丸皿・ 黄瀬戸折縁皿・鉄絵皿・黄瀬戸大皿、瀬戸・美濃産丸碗・志野丸皿・志野菊皿・黄瀬戸鉢・徳利、喫茶具として美濃 産志野茶碗(織部)・総織部折縁鉢・美濃伊賀花生の織部製品、瀬戸・美濃産天目茶碗・茶入、唐津産向付・茶壺、 調理具として瀬戸・美濃産擂鉢がある。磁器には供膳具あるいは喫茶具としての中国青花碗、肥前系染付筒形碗があ り、焼締陶器には調理具の丹波産?擂鉢、貯蔵具(あるいは喫茶具?)の常滑産壺がある。

町人地内では、陶器に供膳具として美濃産丸皿・志野菊皿・青織部折縁鉄絵皿・青織部徳利、瀬戸・美濃産丸碗・志野丸皿・折縁皿・鉄絵鉢、喫茶具として美濃産沓形碗・志野向付、瀬戸・美濃産天目茶碗・白天目、唐津産向付、調理具の瀬戸・美濃産擂鉢、神仏具の瀬戸・美濃産香炉がある。磁器には供膳具の肥前系染付筒形碗・小碗、焼締陶器には貯蔵具の常滑産?大甕がある。

ともに、出土量の差と、中国青花や一部、武家地で卓越する織部製品を除けば、町人地においても一定量の喫茶具が見られ、器種・用途的にはほとんど違いがないと言ってもよいだろう。

陶磁器類以外の什器

では、陶磁器類以外に視点を移してみよう。武家地では、土器に供膳具の皿・焼塩壺、調理具の擂鉢・鍋・焙烙、住用具の十能・火鉢が、木製品に供膳具の漆器碗、貯蔵具の合子?、石製品に調理具の捏鉢・石臼が見られる。町人地では、土器に供膳具の皿、調理具の擂鉢・焙烙・片口・片口鉢、住用具の火鉢・深鉢、神仏具の香炉、灯火具の瓦灯?、木製品に貯蔵具の曲物・桶?がある。武家地における焼塩壺や漆器碗の存在を指摘したとしても、これらも陶磁器同様、相互に大きな差を見出せる状況ではない。

また、陶磁器類とそれ以外の什器の用途を比較してみる。陶磁器類は碗・皿・鉢類の供膳具と喫茶具を中心として調理具の擂鉢、貯蔵具の壺が加わる。土器は供膳具の皿と調理鉢・鍋類の調理具、十能・火鉢の住用具、木製品は供膳具の漆器碗と貯蔵具の曲物・桶、石製品は調理具の捏鉢・石臼となる。つまり、用途別に什器の材質が選択されていることが理解できる。供膳具は土器・陶磁器と漆器、喫茶具は陶磁器、調理具は陶器擂鉢と土器・石製品、貯蔵具は焼締陶器と木製桶、住用具は土器、と言った具合であろうか。

以上、今回の調査成果から、宍戸城下の武家地と町人地の陶磁器類を見てきたが、その他の土器や木製・石製の什器も合わせて、用途別に見られる種別・器種の構成はほとんど同じであった。江戸初期という時代性を表しているのであろう。厳密には、遺構種別や埋没事情ごとの分析や単位面積当たりの量比等を考慮すべきであろうが、今回の出土状況はそれを行うほど恵まれていない。また、本節第1項で見たように、かわらけは町人地に比べて武家地において高率であったり、町人地では瓦質土器の比率が高くなるといった種別組成の違いがあった。ただ、材質(種別)と用途が相関していることからすると、廃棄の事情の違いが反映しているのか、検出されなかった材質のもの(例えば金属製品など)で補完されているのか、ということが想像される。

あくまでも、こうした分析の対象は、当時の人々が何らかの事情で廃棄・遺棄していったものを対象としているのであり、おのずと限界はある。宍戸の地を去った秋田家臣団が移った先、陸奥・三春城下では今回見られたものと同種の美濃桃山陶が出土しているという(平田 2003)。引越しに際して荷造りされた、日常使い慣れたものやお気に入りの仕器類も多かったのではないだろうか。

注

- 1 これまでの本遺跡の調査において、古墳時代前期の土器と古代の須恵器が報告されており(宮田 2009)、西方に所在する新善光寺跡における縄文時代中期、古墳時代前期の集落・墓域(稲田 2006)との関連が考慮される。
- 2 2004 年度調査 (稲田 2006) における中国青花の出土は、廃棄土坑とされる第 29 号土坑に集中している (32 点)。 出土遺物も瀬戸・美濃産陶器では大窯第 4 段階末・17 世紀初頭を中心として、擂鉢と鉄釉耳付水注の登窯第 1 小期・ 17 世紀前葉を新相とするようである。

第103表 出土遺物集計表 (1)

			師質 :器			碰	:器							
地区	遺構名	かわらけ	そ の 他	瓦質土器	隔 器	17 世 紀	18 世 紀 以 降	焼締陶器	瓦	土製品	石製品	金属関連	その他	主要遺物
X.	SB08	6.8	1 48. 3		1 15. 8									瀬戸美濃擂鉢
	SA07	17.2												
	SA08	3 101. 6	4 67. 8		~~									土器鍋・焙烙
	SE02	21. 1	4 79. 7		20. 1			1		1				土器焙烙、瀬戸美濃腰錆碗 焼締擂鉢、煉瓦
	SE07	51.1	10.7		20.1			7. 3		547. 6	1 333.8			磨石
	SE08		363. 1											- 土器十能
	SE09	18 120. 5	7 107. 6		3 82. 4					1	1			土器小壺・火鉢、瀬戸美濃 鉢、唐津皿、土製丸玉、石
	SE10	5	107.0		4					4. 8	3600. 0		種実 遺体1	捏鉢 瀬戸美濃碗・志野丸皿・鉄 皿・志野織部向付、モモ核
	SE11	47. 9 3 48. 9			26. 5 2 122. 2								3. 6	瀬戸美濃擂鉢
	SK501		2 25. 1		1 12. 2	6. 7								土器擂鉢、瀬戸美濃天目、 前染付碗
	SK507	4 28. 8	30.1	1 55. 9	15. 5	0.1		1 13. 1						- 丹波?擂鉢
	SK650	1 49. 5		1 606. 5	305. 0									瓦質火鉢、唐津向付、美濃 瀬戸皿
	SK653		2 114. 9	000.0	000.0									
	SD101	6	98. 1	1 88. 2	7									土器十能・擂鉢、瓦質火消 壺?、瀬戸美濃擂鉢・志野 碗・菊皿
	SD102	83.3	7		6	3			1		1		窯道 具I	土器鍋、瀬戸美濃緑釉碗・ - 入、肥前染付碗、匣鉢、砥
	SD250	3 42. 9	38. 1		54. 4 1 296. 2	8. 2			46. 2		14. 9		23. 5	土器鍋、瀬戸美濃擂鉢
	SD252	71. 2												
	P503	11.2			1									瀬戸美濃志野皿
	P504		1		11.5		1							土器鍋、瀬戸美濃擂鉢・染化
Ī	P508	3 5. 9	43. 1 3 58. 6		33. 5 4 11. 7		10. 9						*	硫 土器鍋、瀬戸美濃天目・徳和
	P511		20. 4											
	P512	5 12. 1	3 199. 3		2 130. 2									土器焙烙・鍋、瀬戸美濃擂 鉢・碗
	P513			1 34. 4	2 83. 6									瓦質鉢、瀬戸美濃擂鉢・皿
L	P514							79.5						須恵器系甕
_	P655		12. 1		3. 4									美濃志野折縁皿
-	P659							40. 4						須恵器系甕
	P667								86. 7					
-	P668		24. 5											土器鍋
	P669	9 87. 5	6 67. 9	274.1	3 16. 6									土器鍋、瓦質鉢、瀬戸美濃措 鉢・緑釉皿
-	P672	C			1 46. 4				1 1279. 6					瀬戸美濃擂鉢
L	P679 —	6 24. 7												
	P682		1 12.3											
L	P692				17.3									賴戸美濃擂鉢
	P742	10.1	26. 6						84. 7					土器鍋

第104表 出土遺物集計表 (2)

第 10	4 衣		Т	計表(2	<u> </u>									
		土的土土				磁	묾							
地区	遺構名	かわらけ	そ の 他	瓦質 土器	陶 器	17 世 紀	18 世紀以降	焼締陶器	瓦	土製品	石製品	金属関連	その他	主要遺物
1区	P793	3												
	P796	12.5	1	1										瓦質擂鉢
	1100		24. 2	38. 7										土器大皿・鍋、瓦質焙烙・火
	3号堀	21	10	7				3	5					鉢、瀬戸美濃産擂鉢・菊皿・ 折縁皿、肥前系染付、丹波? 擂鉢、須恵器系甕・捏鉢
		534. 1	560.8	1080.7	779. 4	2.5		67. 2	185. 7					土器片口鉢・火鉢・皿、瓦質
	4号堀	33	16	3	6			4	2				外生 土器1	火鉢、瀬戸美濃擂鉢・大鉢・ 志野丸皿・鉄絵皿・天目、唐 津茶壺、青花碗、常滑壺、焼 締捏鉢
		610.9	411.1	125. 8	519. 1	12. 1		829. 9	221. 6				13. 4	土器鍋・焙烙・火鉢・焼塩
	一括	61	59	9	38	5	7	2	7		1	鉄製 品3	土器1	壺、瓦質火鉢、瀬戸美濃志野 丸皿・天目・鉄絵皿・描鉢・ 徳利、唐津皿、肥前染付碗、 瀬戸美濃染付碗、砥石、鉄 釘、鉄火箸
2区		899. 9	1821.0	1386. 6	1032.5	61.5	116. 2	31. 9	765. 3		39. 7	87. 3	19. 3	
212	SB01	32	27		2					3 83. 0		鉄滓1 5.2		土器火鉢・擂鉢、瓦質皿、瀬 戸美濃天目・碗、加工円盤、 砥石、ヒメグルミ核
	SB02	402.6	267. 0	7. 8	124.8					83.0	100.4	5. 4	1.0	
		43. 7			1									還元かわらけ、瀬戸美濃志野
	SB03	3. 1			14.7									菊皿
	SB04							36. 1						須恵器系魙
	SA10	6.3	7.5											
	SA11		2		1									土器焙烙
	SA12	8			9, 5									美濃伊賀花生、還元かわらけ、 土器焙烙、瀬戸美濃志野皿、 焼締擂鉢
		135. 9			131.0			1	200		1			瀬戸美濃擂鉢、火打石
	SA13	8.6	,		9.1			43. 3			50. 1			NOO SCHOOL STATE
	SA14	25.8			3. 4									
	SE01	34. 1	398. 2								1147. 3			土器火鉢、瓦質碗、石臼
	SE06	2												
	SE16	31. 3	2		1									土器鍋・焙烙、瀬戸美濃志野皿
		1	166. 1	2	568									- 瓦質火鉢
	SE17	8. 7		128. 1									弥生	
	SX01	1		2									土器1 19.9	瀬戸美濃擂鉢・皿
	SK115	93. 2		102. 4	16. 3								13.3	
		35. 9	62. 9		1									瀬戸美濃擂鉢
	SK119		-		35. 1									NG) XIRIHPP
	SK139		11.2											
	SK143		11.1											
	SK652	3 260. 8	4		90.0		5. 2							土器碗、瀬戸美濃黄瀬戸大 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	2号堀	0	2	2 4	2			28.3		2 192. 4		鉄滓1 78.3		土器鍋、瓦質火鉢・擂鉢、瀬 戸美濃志野菊皿・碗
	SD001	13	3	3 1						2				土器擂鉢、瓦質火鉢、羽口
	SD002	200. 3		39. 5						11.5				
		3.6	2	2										
	SD003		31. 6											

第105表 出土遺物集計表 (3)

第 105	(文)	T		計表(3							T	1	_	
		±1	・ 新質 : 器			磁	注 器							
地区	遺 構 名	かわらけ	そ の 他	瓦 質 土 器	陶器	17 世 紀	18 世紀以降	焼締陶器	耳	土製品	石製品	金属関連	その他	主要遺物
2区	P012	2 22. 5		-										
	P015	2	1	1										
	P020	4.8	3. 7	9. 1										
	P022		19.9										銭貨1	
		1	63.8										3.7	土器擂鉢・鍋、一銭銅貨
	P024	3. 4	3											
	P027	47.0	62. 9											土器鍋
	P028	4.6	2 12. 1											
	P033				1 4. 4									
	P034	3 14. 6	2 46.3											土器鍋
	P046				1 69. 3									
	P047	1	1		U9. J									
	P049	2.3	19.7											
			20.8									金属		
	P061											達1 14.6		
	P062 -		1 16. 2									11.0		
	P064 -	2 3. 5	10.2	1 74 7										還元かわらけ、瓦質火鉢
	P072 -	2		74. 7										277.
	P080	97. 9		27. 5										
	P082 -	11.9	1						1					
		16.3	7.7		1				31. 7					
	P085 -	1			192. 5		***							
-	P092 -	2. 9												
-	P093		14.2					1 25. 5						土器鍋、堺・明石系?擂鉢
	P109	2											縄文 土器1	
-	P113	5. 2			1								14. 1	Not - Ma Mile - my ma
-	P121 -				7.7									瀬戸美濃志野皿
-		1	1		16. 5									
	P127 -	17. 2	22. 9											土器焙烙
-	P130 -		175.6											土器焙烙
	P135 -		15. 4											
	P137 -		21. 4		5. 5									土器鍋、瀬戸美濃天目
	P141	9.7			51.3									
	P142				24. 2								i	賴戸美濃碗
	P151 -	0.9												
	P155 -	1 22.5												
	P201 -	22.0		1	1									瓦質火鉢、瀬戸美濃鉄絵皿
	P202 -	1		228. 7	8. 2									順戸美濃志野皿
-	P212	7.3			29. 4									
-	P711 -	47. 2 1												
		6.3												

第 106 表 出土遺物集計表(4)

25	第 10	6表	出土遺	動集調	計表 (4)									
## 25							磁岩	뭄							
18 1979	地区	構	わら	の	質土		世	世紀以	締陶	瓦	製	製	属関	の	主要遺物
Signature 1965 74.4 74.3 1	2区	P779 -													土人形
日本 1		SD251													
Section Sec		一括			2	12		4		2	1				擂鉢・天目・志野丸皿・染付
Single 13.3 21.6 1 1 1 1 1 1 1 1 1	3区	CAOO	234. 1	519. 1	16. 7					37. 1	77. 1	127. 2			瀬戸美濃染付碗
SEC 1 1 1 1 1 1 2 1 2 2		3802						21.6							万質片口鉢 瀬戸美濃志野丸
SESO		SE03													
1号報		SK301	1	3	1100. 1	151. 1									土器火鉢
日本報			3. 1	2173. 5		4									瀬戸美濃志野菊皿・折縁皿・
A		1号堀				160. 2		2. 9							
SET SET		一括	4	7			6		2	5		1		銭貨2	染付碗、肥前染付碗、常滑
Secondary Sec	457		30.6	207. 3			67.3	209. 0	70. 2	341.5		370.5		6.3	
Secondary Sec	4区	SB11				81.6									
SE20		SA03			15.8										
SE21		SE20													瓦質片口鉢
P817		SE21													碗、常滑甕(漆継ぎ、SD201
Table Tab			67. 2	22. 1	42.5	52. 2	167.8	20.8	304. 4						
Fig.		P817													
SBO7 11 2 1 2 五百次終、瀬戸美濃香炉、常滑甕、堺・明石系描針 SA06 1 43.1 38.4 162.0 1 15.1 新治須恵器坏蓋 SE04 22 21 12 9 2 1 土器鍋、火鉢・碗、瓦質火鉢・鉢・豆丸、瀬戸美濃万美濃 SE15 2 223.8 223.8 761.2 五質火鉢・瀬戸美濃万緑血・紫紋・田鉢 SK411 1 5 2 1 五質火鉢・瀬戸美濃万緑血・紫紋・原・野木町・新加・坑緑血・紫紋・水鉢・増減・新加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤瓜・海加・赤紅・海加・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・赤紅・海加・海加・赤紅・海加・		一括													瓦質擂鉢、瀬戸美濃擂鉢・黄 瀬戸大皿、肥前染付香炉、白 磁皿
SB07	5区			249. 5				42.5	2						万億ル妹 瀬戸羊濃赤炉 堂
SA06 1 16.6 1 15.1 1 15.1 新治須應器坏蓋 SE04 22 21 12 9 2 1 上器陽・火体・碗、瓦質火体・蜂・足灯、瀬戸美濃天目・蜂・畑、店産学、常滑量 SE15 2 1 23.8 2 2 五質火蜂、原子 五質火蜂、原子 SK411 1 5 2 2 1 五質火蜂、瀬戸美濃折縁皿・鉄絵皿、焼締捏蜂 SK412 1 2 2 1 五質火蜂、瀬戸美濃折縁皿・鉄絵皿、焼締捏蜂 118.8 92.1 165.0 57.5 57.5 SD201 36 38 17 34 2 6 4 4 数貨4 土器烙烙・火蜂・擂蜂、海戸美濃天目・白天目・志野丸皿・奈原・青龍病患剤、染付碗、常滑速(添維・水子の流・青龍病患剤、染付碗、常滑速(添維・水子の流・大野・上間・水子の流・大野・上間・水子の流・大野・上間・水子の流・大野・上間・水子の流・大野・上間・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・大野・		SB07													
SE04 22 21 12 9 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2		SA06	1		40.1	00. 1			20210					15.1	新治須恵器坏蓋
SE15		SE04	22		12	9			2			1		10.1	土器鍋・火鉢・碗、瓦質火 鉢・鉢・瓦灯、瀬戸美濃天
SE15			422. 2	422.0		315. 1			41.1			2228.5		室道	H M MH M M M M M M M M M M M M M M M M
SK411 1 5 20.9 313.3 313.3 2 118.8 92.1 165.0 57.5 20.2 36 36 38 17 34 2 6 4 4 4 4 4 4 4 4 5 5 5 6 4 4		SE15												具1	
SK412 1 2 2 1 五質火鉢、瀬戸美濃折縁皿・鉄絵皿、焼締捏鉢 SD201 36 38 17 34 2 6 4 4 銭貨4 表達力・直質火鉢・擂鉢・香炉・直質火鉢・擂鉢・瀬戸・漁天目・白天目・志野丸皿・海皿・治形碗・青漆塔口、肥前染付碗、蕎麦猪口、肥前染付碗、蕎麦猪口、肥前染付碗、煮滑甕(漆維ぎ、SE21と同一か)、北宋銭、南宋銭、明銭 SD203 3 1 45.9 20.9 P401 1		SK411													
SK412 118.8 92.1 165.0 57.5 SD201 36 38 17 34 2 6 4 4 4 銀貨4 業長十 戶天日 之野丸皿・菊皿・折縁皿・沓形碗・青絲部徳利・染付碗・常麦猪口、肥前染付碗・常青蓮碗・清蓮碗・洗砂碗・常清甕(添練・淡、SE21と同一か)、北宋銭、南宋銭、明銭 SD203 3 1 403.4 80.5 9.8 SD203 45.9 20.9 20.9 P401 1 1 403.4 80.5 9.8			1	313.3		9			1						瓦質火鉢、瀬戸美濃折縁皿・
SD201 36 38 17 34 2 6 4 4 数貨4 世報体・不好・瓦質火体・描鉢・香炉・瓦質火体・描鉢・瀬戸身濃天目・白天目・志野丸皿・		SK412	4												鉄絵皿、焼締捏鉢
SD203 3 1		SD20	1 36	38	3 17	34	2								炉・五質 (大・
P401 1 1		SD203			3 1	-	100.0								
18.6		P401			1										

第107表 出土遺物集計表 (5)

714 20				M124 (/									
			新質 ∴器			磁	:器							
地区	遺 構 名	かわらけ	そ の 他	瓦 質 土 器	陶 器	17 世 紀	18 世 紀 以降	焼締陶器	Ę	土製品	石製品	金属関連	そ の 他	主要遺物
5区	一括	8	15	8	9	4		1	2			金属製品1	銭貨1	土器火鉢、瓦質片口鉢、瀬戸 美濃天目・大鉢・碗、肥前染 付碗、須恵器系捏鉢、鉄砲 弾、北宋銭
		61.4	523. 1	279. 3	127. 9	58.8		60.4	186. 1			11.9	1.8	
不	明			10	4									瓦質火鉢、瀬戸美濃擂鉢
				1176.8	90. 5									

*上段:数量、下段:重量。「数量」基本的に接合後破片数。「重量」単位: g

第108表 木製品観察表(1)

77 1	18 衣	个裂面的	助宗衣	(1)	-	-					
地区	遺構名	付属遺 構・取上 げ	旧遺構名	分 析 No.	種別	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徴
1区	SB08	P3	P684	3	柱材	角材	<346>	129	117	マツ	
1区	SA07	P2	P652	1	柱材	丸太材	<480>	φ 128		コナラ	下端一面のみ鉈切り
1区	SA07	P3	P753	14	柱材	角材	<422>	138	130	マツ	
1区	SA07	P5	P660	2	柱材	角材	<515>	133	130	マツ	
1区	SE08	No. 2	-		杭		<407>	φ 55			下端鉈乱切り
1区	SK653	-	-	4	部材ヵ	丸太	<532>	φ 144		マツ	二次被熱・焦げ
1区	P604	-	SK604		部材	丸太材	<240>	φ 100			四角形 (56×38×18mm) の臍穴
1区	P652	-	-		丸太		<254>	φ74			裏材ヵ
1区	P652	No. 1	-		丸太		<252>	φ 92			
1区	P652	No. 2	_		枝		<228>	φ 40			部材か否か不明
1区	P663	-	-		柱材	角材	<210>	132	118		丸太を角材に転用
1区	P666	-	_		柱材ヵ		<127>	φ 102			
1区	P668	-	_		柱材	丸材	<260>	φ 155			下端鉈で2面取り
1区	P686	1000	_		丸太		<162>	φ 89			
1区	P729	none	-		杭		<687>	φ 110			下端のみ二次被熱・焦げ
1区	P731	-	-		枝						計測不能
1区	P754	No. 1	-		杭ヵ		<218>	φ 37		マツ	使用痕なし
1区	P754	No. 2	-		杭		<265>	φ 105			下端鉈で乱切り
1区	P758	No. 1	-		柱材	丸材	<510>	φ 205			下端鉈で乱切り
1区	P758	No. 2	_		部材	梁材カ	<272>	φ 75			一面に四角形 (70×42mm) の穿孔、さらに斜めに角釘 (2 寸) が打ち込まれる
1区	P795	-	-		枝		<460>	φ 60			使用痕なし
1区	3号堀	No. 4	-	20	漆器	椀	口径(16.	0) 器高<3	. 75>	ケヤキ	実測図3号堀-17
1区	3号堀	-	-		部材	丸太杭	<430>	φ 132			途中に幅130mmの鉈による切り込みあり、先端鉈で乱切り
1区	4号堀		-		木屑		<100>	ф 28 ?			
1区	遺構外	No. 1	-		杭		<700>	φ 114		マツ	下端鉈切り、二次被熱・焦げ
2区	SB01	P2	-		柱材	角材	<382>	115	110		下端は斜めに切られる
2区	SB01	P3	-	5	柱材	角材	<565>	124	119	クリ	
2区	SB01	P6	-		部材	丸太杭	<345>	φ 48			下端錠で乱切り
2区	SB02	P1	-		柱材	角材	<400>	125	122		

第109表 木製品観察表(2)

A7 1	09 表	小表吅	観祭表	(4)							
地区	遺構名	付属遺 構・取上 げ	旧遺構名	分 析 No.	種別	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徵
2区	SB02	P2	-	6	柱材	角材	<570>	120	113	クリ	台鉋仕上げ
2区	SB02	P9	-	15	柱材	角材	<305>	110	108	クリ	
2区	SB02	P11.	-	8	柱材	角材	<835>	127	115	クリ	
2区	SB03	P1	-	9	柱材	角材	<293>	127	124	マツ	
2区	SB03	P4	SK74		部材	丸太杭	<360>	φ 145			下端鉈で大きく4面切り
2区	SB03	P5	SB03 P4		柱材	角材	<113>	130	?		
2区	SB04	P2	_		柱材	不明	<215>				計測不能
2区	SA12	P2	SK117		柱材	丸材	<396>	φ 150			
2区	SA13	P4	P158	16	柱材	角材	<260>	160~	160~	マツ	
2区	SA13	P5	P159		柱材	丸材	<155>	φ 115			根元のみ
2区	SA14	P1	P161	17	柱材	角材	<520>	142	137	マツ	
2区	SE05	No. 1	SK36		丸太		<258>				計測不能
2区	SE16		_		部材	貫板	<215>	44	26		他に枝・真竹など
2区	SX1	No. 1	_		丸太		<1500>	φ 100			
2区	SX1	No. 2	_	12	容器	蓋		0) 内径(14. 2)	モクセイ	合子蓋か。実測図SX1-2
2区	SX1	No. 2-2	_		部材	半角材	器高〈1. 〈1340〉	ф 93	58		丸太の片面のみ面取り、鉋かけ
2区	SX1	No. 3-1	_		丸太	17414	1220	ф 72		マツ	
2区	SX1	No. 3-2	_		部材	半角材	<418>	φ 70			丸太の片面のみ面取り、鉋かけ
2区	SX1	No. 4	_	10	部材	半角材	588	81	67	マツ	両端切断、丸太を4分割し面取り、鉋かけ。他に同一規格品
2区	SX1	No. 5	_	11	部材	丸太杭	1580	φ 82		マツ	2個体 「方面一部鉋で面取り、先端3面鉈切り
2区	SX1	No. 6	_	111	部材	丸太杭	<802>	φ 58			下端鉈で乱切り
2区		No. 7	_		丸太	70,000	<750>	ф 70			
2区	SX1	No. 8			部材	丸太杭	1670			マツ	片面一部鉋で面取り、下端鉈で4面切り
2区	SX1				杭ヵ	76.2010	<1370>			サクラ	片面一部鉋で面取り
	SX1	No. 9	_				<1110>	φ 105		,,,,	ALIM RING CHINA
2区	SX1	No. 10			丸太			φ103 ?			計測不能
2区	SX1	No. 11	-		丸太	4.4.4-	(470)				下端蛇で2面切り
2区	SX1	No. 12	-		部材	丸太杭	<1560>	φ 50	-		
2区	SX1	No. 13	_		部材	丸太杭	<1275>	φ 55	-		下端鉈で面切り
2区	SX1	No. 14	_		部材	貫板	(590)	48			全面鉋がけ
2区	SX1	No. 15	-	-	部材	丸太杭	<1340>	φ 76			先端鉈で面切り
2区	SX1	No. 16	-	-	杭力		<755>	φ80			片面一部鉋で面取り
2区	SX1	No. 17	-	-	部材	丸太杭	<345>	φ98			下端蛇で5面切り
2区	SX1	No. 19	-		部材	丸太杭	<1140>	φ90			片面一部鉋で面取り、先端鉈で1面切り
2区	SX1	No. 21	-		部材	丸太杭	<745>	φ 78			先端鉈で2面切り
2区	SX1	No. 22	_		杭ヵ		<700>	φ78	-		加工痕なし
2区	SX1	No. 23	_		部材	丸太杭	<1120>	ф 92			下端鉈で2面切り
2区	SX1	No. 24	_		部材	丸太杭	<40>	φ 110			先端鉈で面切り
2区	SX1	No. 25			部材	半角材	252	98	65		完存、丸太の片面のみ面取り

第110表 木製品観察表(3)

Total To	7/2 11	0 20	/ 1 4 2 1 1 1	シュカマン マー	(0)							
2K No. 26-2 一	地区	遺構名	構・取上	旧遺構名	析	種別	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徵
2日 100	2区	SX1	No. 26	-	13	部材	半角材	<340>	103	80	マツ	丸太の両面を台鉋で面取り
Record	2区	SX1	No. 26-2	_		部材	丸太杭	<955>	φ 75			先端鉈で2面切り
2日 PO22 - SK22 九太 (447) (415)	2区	SX1	No. 27	-		部材	貫板	<532>	100	43	3	全面鉋がけ
2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2区	P017	-	SK17		丸太		<475>	φ 138		マツ	
2区 P037 - SK37 柱材 角材	2区	P022	_	SK22		丸太		<447>	φ 130			
2区 P042 - SK42	2区	P034	-	SK34		丸太		<415>	φ 82			
2区 P091 - SK91 柱材 丸材 く310) ゆ96 下端蛇で大きく5面切り 2区 P095 - SK94 部材 丸太杭 く273) ゆ56 下端蛇で大きく5面切り 2区 P127 - SK127 杭 く280> 計測不能 2区 2号堀 No. 1 - 校カ (444) ゆ52 全面触がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No. 2 - 節材 丸太杭 く250> ゆ170 先端蛇で乱切り 2区 2号堀 No. 3 - 節材 丸太杭 く250> ゆ170 先端蛇で乱切り 3区 P829 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 病田と身方形の膚穴穿孔、下端に刳り込みあの原穴穿孔、下端に刳り込みあのまた。 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 楕円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No. 13 SK403 根 上板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 東側の金町で仕上げ 5区 SE04 No. 18 SK403 部材 板材 4600 80 7 箱の側板か 他に	2区	P037	-	SK37		柱材	角材	<308>	121	110		
2区 P095 - SK94 部材 丸太杭 〈273〉 φ55 下端蛇で大きく5面切り 2区 P127 - SK127 杭 〈280〉 計測不能 2区 2号堀 No.1 - 校カ 〈444〉 φ52 全面館がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No.2 - 部材 角材 〈556〉 φ118 全面館がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No.3 - 部材 丸太杭 〈250〉 φ170 先端蛇で乱切り 2区 2号堀 No.4 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 商に八角形と長万形の顔穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 (700) φ90 丸太を分割し、絶がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 精円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No.13 SK403 根 計測不能 5区 SE04 No.18 SK403 様あ 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No.9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板カ 他に同一個体あり 5区 SE04 中層 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 板材 〈477〉 φ60 下端蛇で5面切り 5区 SD201 No.43 - 校カ 人太杭 〈477〉 φ60 下端蛇で5面切り 5区 SD201 No.45 - 部材 丸太杭 〈477〉 φ60 下端蛇で5面切り	2区	P042	-	SK42		丸太		<470>	φ 158			下端鉈で乱切り
2区 P127 - SK127 抗 〈280〉 計測不能 2区 2号堀 No. 1 - 核カ 〈444〉 ゆ52 全面範がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No. 2 - 部材 角材 〈556〉 ф170 先端蛇で乱切り 2区 2号堀 No. 3 - 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 表面は手斧仕上げ。2角を面散り、横断面六角形と/ 部形と長方形の順穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 - - 〈700〉 ゆ90 丸太を分割し、絶がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 精円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No. 13 SK403 根 ・計測不能 ・計測不能 5区 SE04 No. 18 SK403 橋カ 底板カ 〈275〉 〈95〉 12 円周を鉋で仕上げ 5区 SE04 No. 36 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板力 他に同一個体あり 5区 SE04 Res SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板力 他に同一個体あり 5区 SE04 中層 S	2区	P091	_	SK91		柱材	丸材	<310>	φ 96			
2区 2号堀 No.1 - 枝カ 〈444〉 652 2区 2号堀 No.2 - 部材 角材 〈556〉 6118 全面飽がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No.3 - 部材 丸太杭 〈250〉 6170 先端館で乱切り 2区 2号堀 No.4 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 恵面は手斧仕上げ。2角を面取り、横断面六角形と力面に人角形と長分形の耐穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 - - 〈700〉 690 丸太を分割し、絶がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 楕円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No.13 SK403 根 樹 財訓不能 5区 SE04 No.8 SK403 19 曲物 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No.9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板カ 他に同一個体あり 5区 SE04 中層 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 板材 〈335〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SE01 No.40 - 部材 丸太杭 〈477〉 660 下端館で5面切り 5区 SD201 No.45 - 部材 丸太杭 〈310〉 638 下端館で5面切り	2区	P095	_	SK94		部材	丸太杭	<273>	φ 55			下端鉈で大きく5面切り
2区 2号堀 No.2 - 部材 角材 〈556〉 ø118 全面飽がけして、9面体を呈す 2区 2号堀 No.3 - 部材 丸太杭 〈250〉 ø170 先端館で乱切り 2区 2号堀 No.4 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 表面は手斧仕上げ。2角を面取り、横断面六角形とり面に八角形と長方形の臍穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 - - 〈700〉 ø90 丸太を分割し、飽がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 精円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No.13 SK403 根 開力 底板力 〈275〉 〈95〉 12 円周を飽で仕上げ 5区 SE04 No.18 SK403 相力 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No.9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板力 他に同一個体あり 5区 SE04 中層 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 核材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 放材 〈336〉 60 下端館で5面切り 5区 SD201 No.40 - 節材 丸太杭 〈477〉 660 下端館で5面切り 5区 SD201 No.45 - 節材 丸太杭 〈310〉 638 下端館で乱切り	2区	P127	-	SK127		杭		<280>				計測不能
2区 2号堀 No.3 - 部材 丸太杭 〈250〉 φ170 先端蛇で乱切り 2区 2号堀 No.4 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 表面は手斧住上げ。2角を面取り、横断面六角形と方面に八角形と長方形の臍穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 - - 〈700〉 φ90 丸太を分割し、艶がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 楕円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No.13 SK403 様 上調不能 計測不能 5区 SE04 No.18 SK403 橋カ 底板カ 〈275〉 〈95〉 12 円周を鉋で仕上げ 5区 SE04 No.9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 第の側板カ 他に同一個体あり 5区 SE04 股際部 Sk403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 Sk403 部材 障子の桟カ 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No.40 - 部材 丸太杭 〈477〉 φ60 下端蛇で5面切り 5区 SD201 No.43 - 校カ 〈320〉 φ47 下端蛇で5乱切り	2区	2号堀	No. 1	-		枝ヵ		<444>	φ 52			
2区 2号堀 No. 4 - 7 部材 角材 〈790〉 134 123 マツ 表面は手斧仕上げ。2角を面取り、横断而大角形と月 面に八角形と見方形の臍穴穿孔、下端に刳り込みある 3区 P829 - - 〈700〉 690 丸太を分割し、鉋がけ 5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 楕円形を呈し、節穴がある 用途不明 5区 SE04 No. 13 SK403 根 計測不能 5区 SE04 No. 18 SK403 桶カ 底板力 〈275〉 〈95〉 12 円周を範で仕上げ 5区 SE04 No. 36 SK403 19 曲物 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No. 9-2 SK403 部材 板材 〈660〉 80 7 箱の側板力 他に同一個体あり 5区 SE04 中層 SK403 部材 様材 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 今60 下端蛇でも面切り 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈320〉 今47	2区	2号堀	No. 2	_		部材	角材	<556>	φ 118			全面鉋がけして、9面体を呈す
Total To	2区	2号堀	No. 3			部材	丸太杭	<250>	φ 170			先端錠で乱切り
5区 SE04 - SK403 18 部材 板材 344 240 20 マツ 楕円形を呈し、節穴がある 用途不明 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	2区	2号堀	No. 4	-	7	部材	角材	<790>	134	123	マツ	表面は手斧仕上げ。2角を面取り、横断面六角形となる。両面に八角形と長方形の臍穴穿孔、下端に刳り込みあり
SEO No. 13 SK403 根 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 計測不能 SEO No. 18 SK403 桶力 底板力 く275 く95 12 円周を範で仕上げ 下端館で5面切り 下端館で乱切り 下端館で11切り 下端館を11切り 下端館で11切り 下端を11切り 下端館で11切り 下端館で11切り 下端館で11切り 下端館で11切り	3区	P829	-	-				<700>	φ 90			丸太を分割し、鉋がけ
5区 SE04 No. 18 SK403 桶カ 底板カ 〈275〉 〈95〉 12 円周を鉋で仕上げ 5区 SE04 No. 36 SK403 19 曲物 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No. 9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板カ 他に同一個体あり 5区 SE04 最深部 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 障子の枝カ 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 夕60 下端鉈で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 校カ 〈320〉 夕47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 夕38 下端鉈で乱切り	5区	SE04	-	SK403	18	部材	板材	344	240	20	マツ	楕円形を呈し、節穴がある 用途不明
5区 SE04 No. 36 SK403 19 曲物 底板 19.1 10.1 0.9 アスナロ 実測図SE04-17 5区 SE04 No. 9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板ヵ 他に同一個体あり 5区 SE04 最深部 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 障子の棲ヵ 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 夕60 下端鉈で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 枝ヵ 〈320〉 夕47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 夕38 下端鉈で乱切り	5区	SE04	No. 13	SK403		根						計測不能
5区 SE04 No. 9-2 SK403 部材 板材 〈600〉 80 7 箱の側板カ 他に同一個体あり 5区 SE04 最深部 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 障子の桟カ 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 夕60 下端蛇で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 枝カ 〈320〉 夕47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 夕38 下端蛇で乱切り	5区	SE04	No. 18	SK403		桶ヵ	底板ヵ	<275>	<95>	12		円周を鉋で仕上げ
5区 SE04 最深部 SK403 部材 板材 〈335〉 153 90 同一個体多数 5区 SE04 中層 SK403 部材 障子の枝ヵ 〈248〉 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 夕60 下端蛇で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 枝ヵ 〈320〉 夕47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 夕38 下端蛇で乱切り	5区	SE04	No. 36	SK403	19	曲物	底板	19. 1	10. 1	0.9	アスナロ	実測図SE04-17
5区 SE04 中層 SK403 部材 障子の桟カ <248> 15 11 4面とも丁寧な面取り 5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 <477> φ60 下端鉈で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 枝カ <320> φ47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 <310> φ38 下端鉈で乱切り	5区	SE04	No. 9-2	SK403		部材	板材	<600>	80	7		箱の側板カ 他に同一個体あり
5区 SD201 No. 40 - 部材 丸太杭 〈477〉 φ60 下端鉈で5面切り 5区 SD201 No. 43 - 枝カ 〈320〉 φ47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 φ38 下端鉈で乱切り	5⊠	SE04	最深部	SK403		部材	板材	<335>	153	90		同一個体多数
5区 SD201 No. 43 - 枝カ 〈320〉 φ47 5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 φ38 下端蛇で乱切り	5区	SE04	中層	SK403		部材	障子の桟ヵ	<248>	15	11		4面とも丁寧な面取り
5区 SD201 No. 45 - 部材 丸太杭 〈310〉 φ38 下端蛇で乱切り	5区	SD201	No. 40	-		部材	丸太杭	<477>	φ 60			下端鉈で5面切り
Tames Calgary	5区	SD201	No. 43	-		枝ヵ		<320>	φ 47			
	5区	SD201	No. 45	-		部材	丸太杭	<310>	φ 38			下端鉈で乱切り
5区 P402 - SK402 柱材 丸材	5区	P402	-	SK402		柱材	丸材	<97>	φ 117			下端平坦
5区 P409 - SK409 丸太 <452> φ160	5区	P409	-	SK409		丸太		<452>	φ 160			

引用・参考文献

宍戸城跡発掘調查報告書

稲田義弘 2006『新善光寺跡 宍戸城跡』主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 茨城県教育財団文化財調査報告 第 256 集 (財) 茨城県教育財団

間宮正光 2006『宍戸城跡』- 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (株)コメリ・山武考古学研究所

宮田忠洋 2009『宍戸城跡』- 市道 (友) 2026 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (有) 毛野考古学研究所編・笠間市 教育委員会

森本 崇・大角謙一 2009『宍戸城跡』- 市道 (友) 1級13号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 笠間市教育委員会・ティケイトレード (株)

前島直人 2011 『宍戸城跡 2 』主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 茨城県教育財団文化財調査報告第 342 集 (財) 茨城県教育財団

友部町商工会・友部町百年史編集委員会編 1971『友部町百年史』 友部町役場・友部町商工会

松原 武 1973「万治二年家中求人知行高扶持切高覚」『三春町史』第8巻近世資料編 三春町(268頁)

平井 聖 1979『日本城郭大系第4巻-茨城・栃木・群馬-』 新人物往来社

浅野晴樹 1986「北関東における中世土器様相」『神奈川考古』第 21 号 - 古代末期~中世における在地系土器の諸問題 - 神奈川考古同 人会

糸賀茂男 1990「鎌倉時代の友部地方」友部町史編さん委員会編『友部町史』 友部町

小谷清治・関 周一・今井雅晴 1990「友部地方の中世的諸相」友部町史編さん委員会編『友部町史』 友部町

小谷清治 1990「秋田氏の入封と移封」「宍戸陣屋の設置と宍戸物語」友部町史編さん委員会編『友部町史』 友部町

須藤久男 1990「友部町の位置・地勢」友部町史編さん委員会編『友部町史』 友部町

西連地信男 1990「友部町の地質・地形」友部町史編さん委員会編『友部町史』 友部町

大橋康二 1994『古伊万里の文様』 理工学社

藤澤良祐・金子健一 1998「近世瀬戸焼の生産と流通」瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史』陶磁史篇6 愛知県瀬戸市

藤澤良祐 1998「近世瀬戸磁器編年の再検討 - 磁器端反碗を中心に - 」『楢崎彰一先生古希記念論文集』 真陽社

桃崎祐輔 1999「常総地域の中世陶磁器と土器 - 中世びとのくらしとうつわ - 」比毛君男編『焼き物にみる中世の世界 - 県内出土の土器・ 陶磁器を中心にして - 』第4回特別展展示図録 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』- 九州近世陶磁学会 10 周年記念 -

江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書店

小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』(財)東京大学出版会

青木 修・藤澤良祐編 2001『瀬戸大窯とその時代』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター設立 10 周年記念特別展展示解説図録 (財) 瀬戸市 埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 輯 (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 竹内 誠監修 2002『ビジュアル・ワイド 江戸時代館』 小学館

加藤真司編 2002『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』 土岐市教育委員会・(財) 土岐市埋蔵文化財センター

西田宏子編 2002『知られざる唐津 - 二彩・単色釉・三島手』特別展図録 根津美術館

土岐市美濃陶磁歴史館 2002『摺絵と銅版‐近代の美濃焼‐』企画展リーフレット

青木 修・金子健一ほか編 2003『江戸時代の美濃窯』平成 15 年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 (財)瀬戸市埋蔵文化財 センター

加藤真司・高橋健太郎編 2003『織部の流通圏を探る 東日本』第 15 回土岐市織部の日特別展 土岐市美濃陶磁歴史館

高橋與衛門 2003「中世の建物跡」『戦国時代の考古学』高志書院

平田禎文 2003「三春城下町出土の織部」加藤・高橋編 2003『織部の流通圏を探る 東日本』第 15 回土岐市織部の日特別展 土岐市美 濃陶磁歴史館

中野晴久 2005「産地別による生産技術の展開からの編年 - 常滑・渥美」『中世窯業の諸相〜生産技術の展開と編年〜』 発表要旨集 全国シンポジウム実行委員会

稲田義弘 2007「宍戸城跡出土の近世陶磁器」『菟玖波』- 川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集 - 同記念事業実行委員会

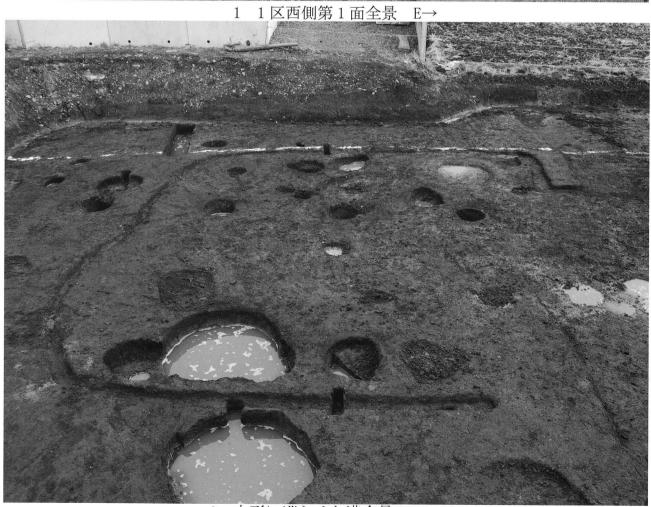
- 118 -

写真図版

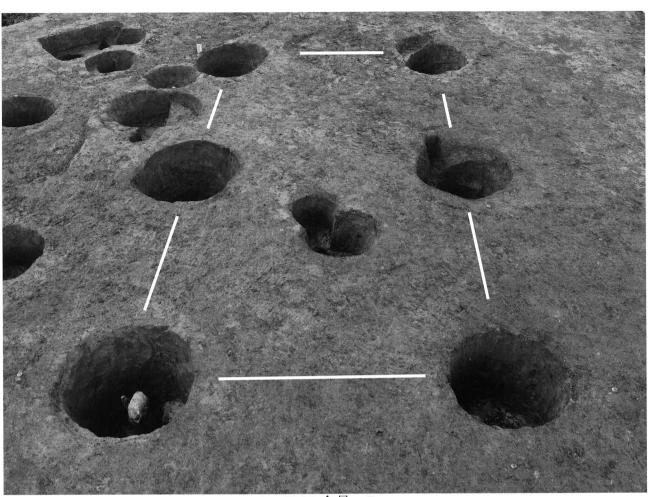


1 1区空撮全景

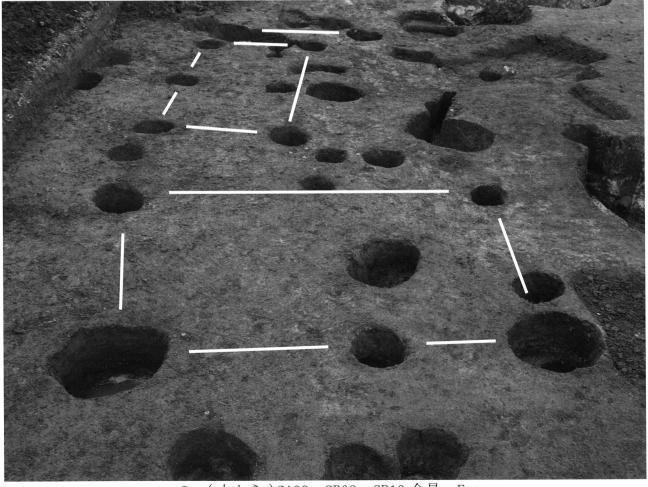




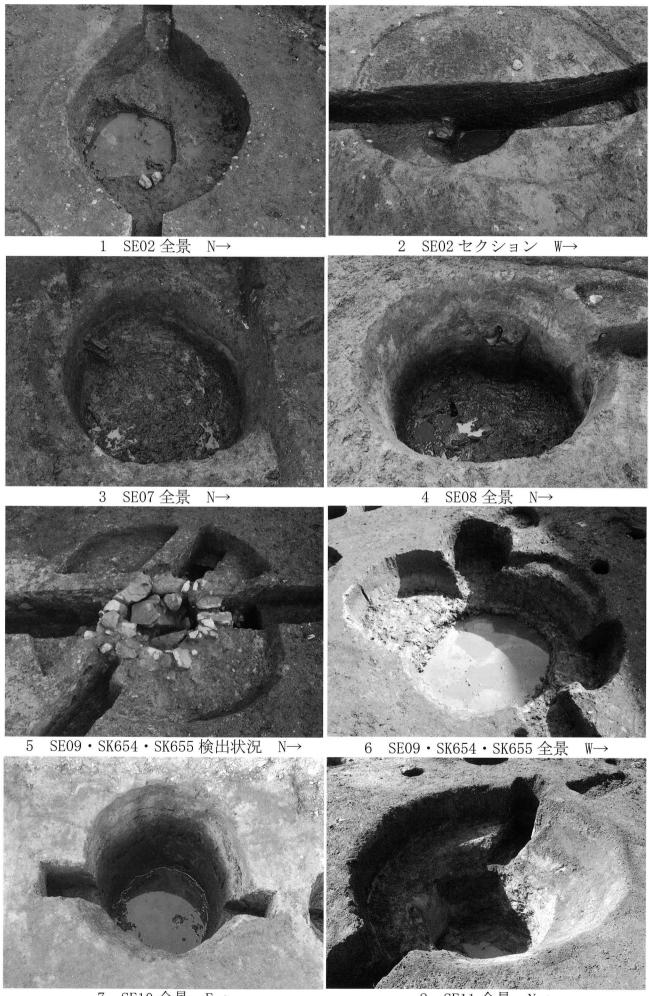
2 方形に巡らせた溝全景 S→



1 SB08 全景 E→

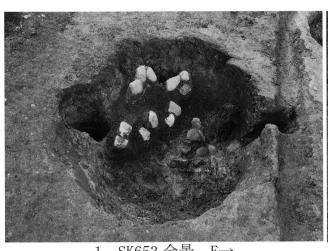


2 (上から)SA09・SB09・SB10 全景 E→

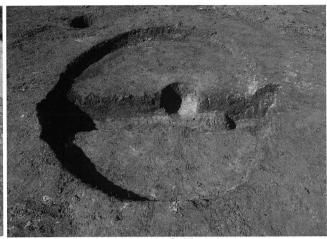


7 SE10 全景 E→

8 SE11 全景 N→







SK650 全景



1 区西側第 2 面全景 E→



4 3号堀西端セクション W→



5 3 号堀中央セクション E→



1 3 号堀全景 W→



2 3・4 号堀セクション SW→



3 3 号堀東セクション E→



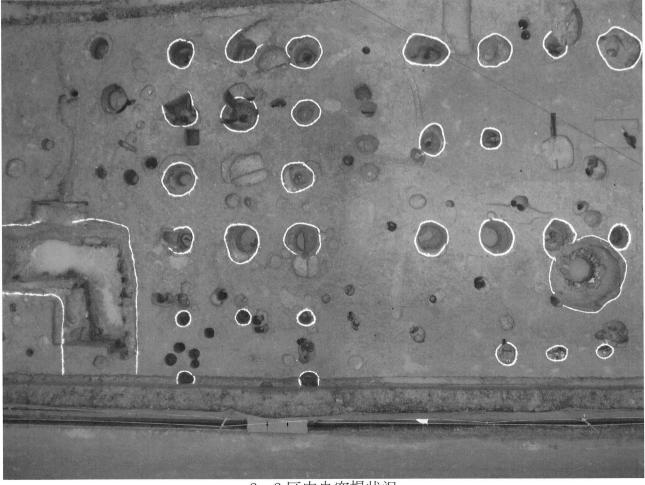
4 4号堀南端セクション N→



5 4 号堀中央セクション N→



1 4 号堀全景 N→



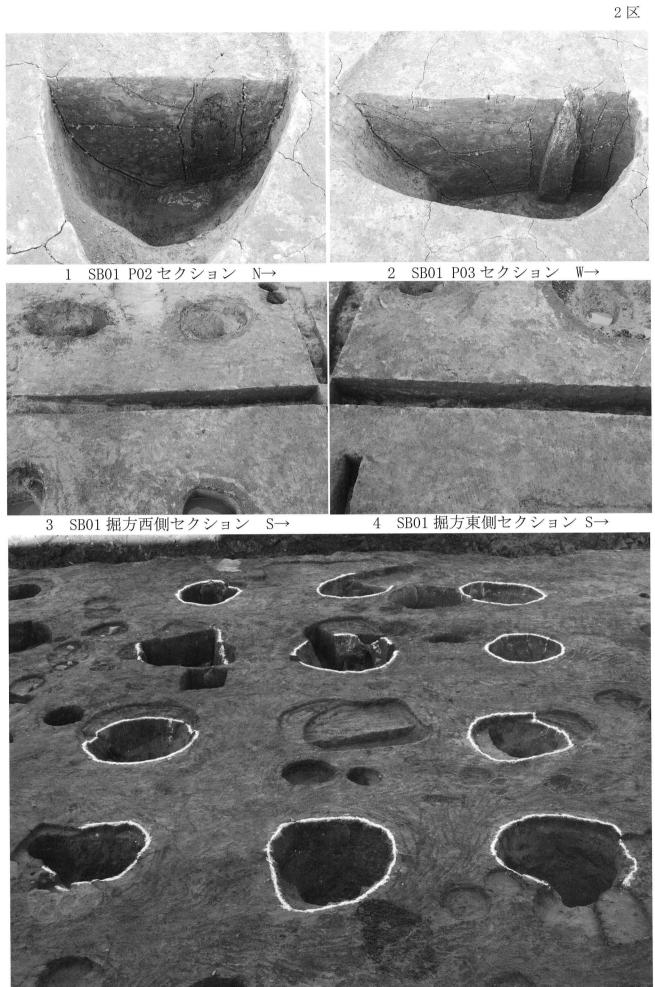
2 2 区中央空撮状况



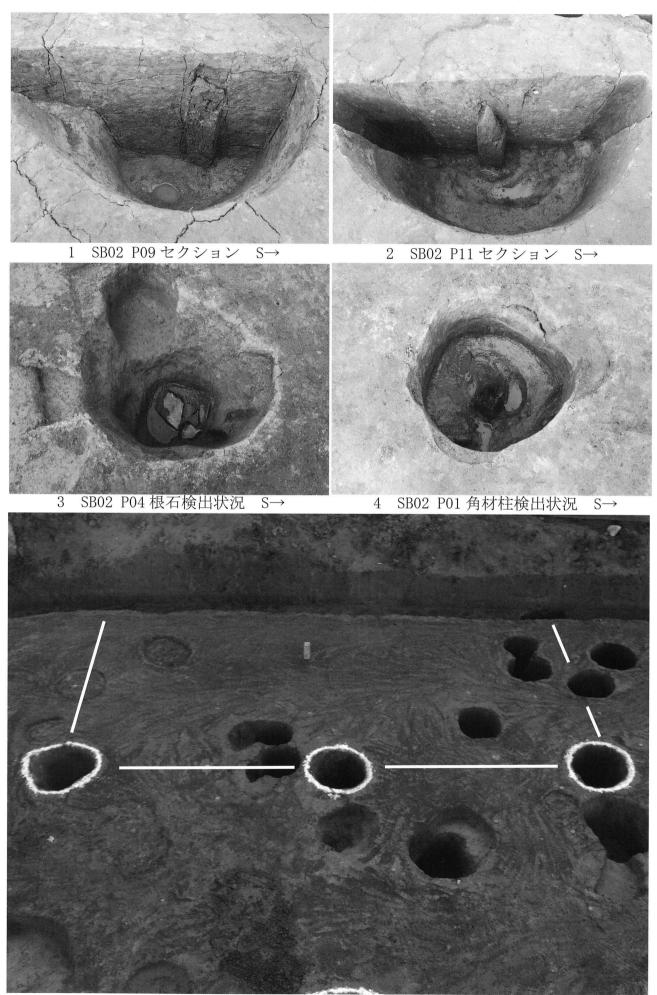
1 SB01 全景 E→



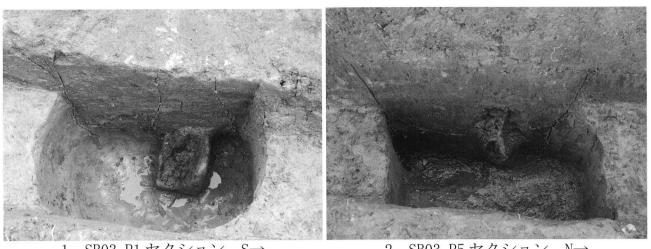
2 SB01 掘方全景 E→



5 SB02 全景 S→



5 SB03 全景 N→



SB03 P1 セクション $S \rightarrow$

SB03 P5 セクション N→



3 SB04 全景 N→



SB04 P1 検出状況 S→



5 SB04 P2 セクション

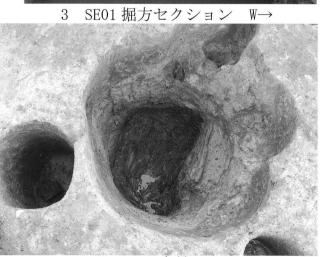


2 SE01 セクション





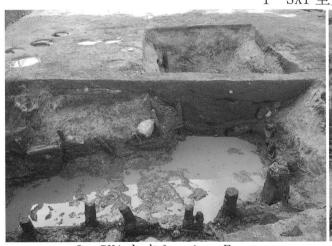
SE06 全景 S→



SE05 全景 E→ 5



1 SX1 全景 W-



2 SX1 セクション E→



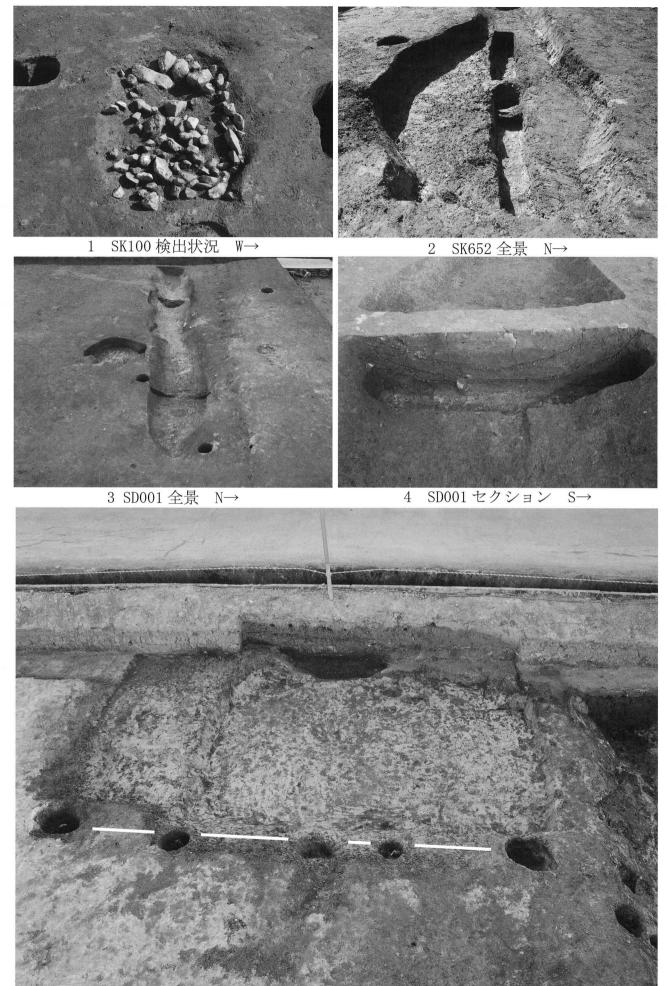
3 SX1 柵検出状況 W→



4 SX1 遺物出土状況 N→



5 SX1 完堀全景 N→



5 SX2·SA13 全景 N→

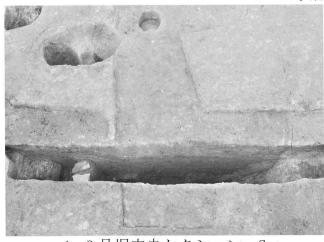


1 SX2 セクション N→

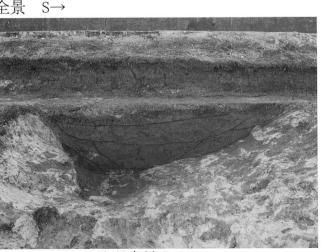
2 SD251 全景 S→



3 2 号堀全景 S→



4 2号堀中央セクション S→



5 2 号堀南端セクション N→



1 SE16 全景 S→



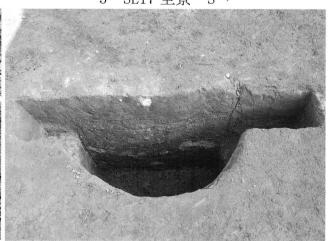
2 SE16 セクション S→



3 SE17 全景 S→



4 SE18 全景 N→



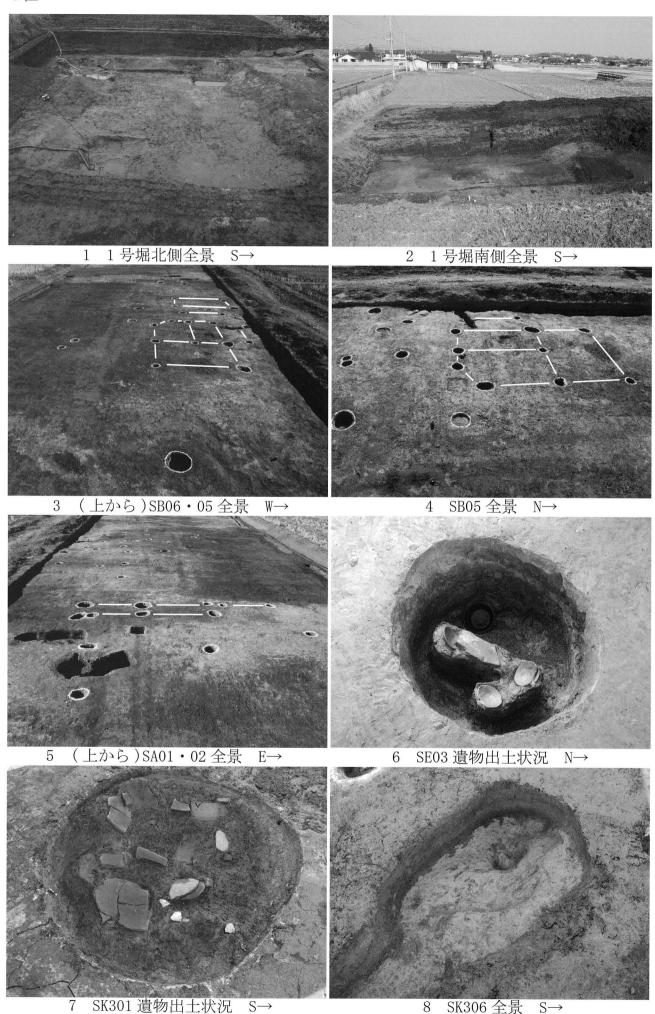
5 SE17 セクション SW→



1 3 区空撮全景



2 3 区南側全景 E→





1 4区全景 E→



2 SA03 全景



3 SE19 全景 S→



SE20 全景 S→

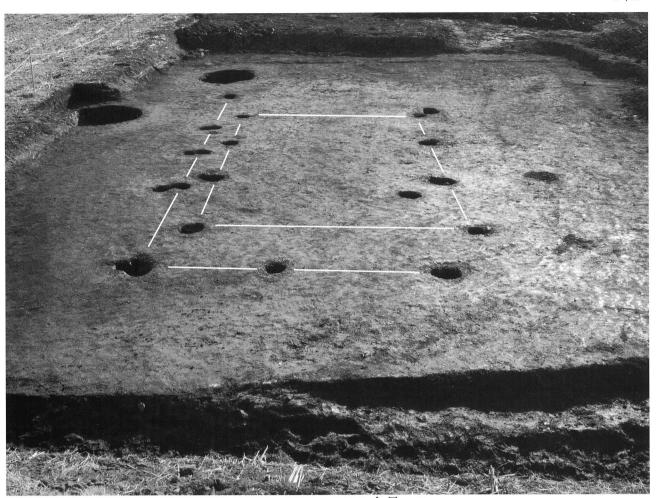




1 5 区北側全景 E→

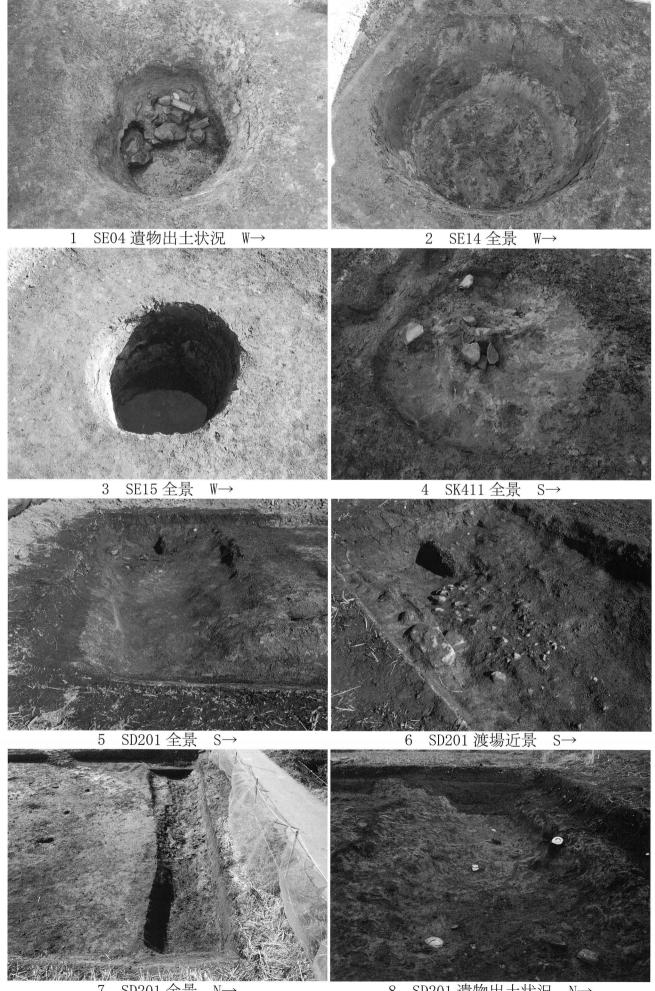


2 5 区南側全景 E→



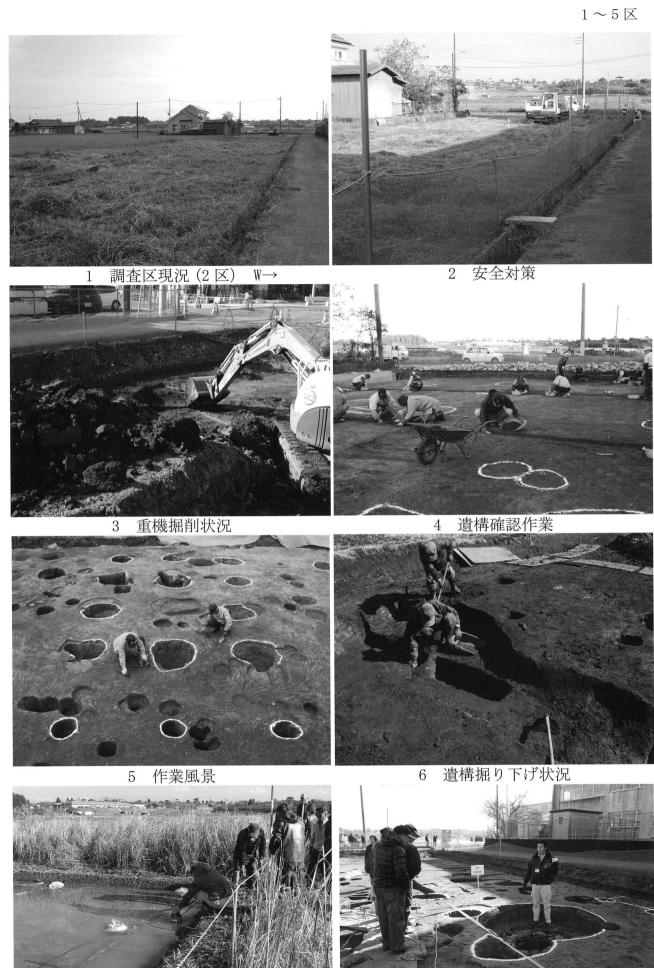


2 SA04 全景 E→



SD201 全景 N→

SD201 遺物出土状況 N→



7 水中ポンプ使用状況

現地説明会 8



1 実測状況



2 空撮状況



3 終了確認状況



4 埋め戻し完了状況



発掘調査参加者



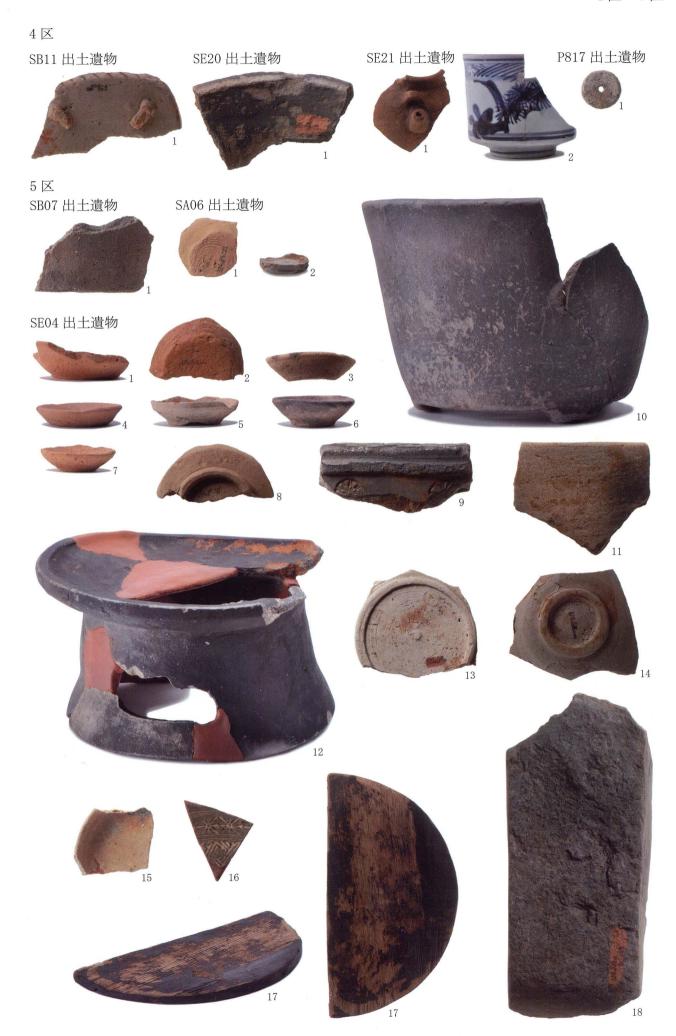
















1 区出土木製品



SB08 P3 柱根 (分析 3)



SA07 P2 柱根 (分析 1)



SA07 P3 柱根 (分析 14)



SA07 P5 柱根 (分析 2)



SK653 丸太 (分析 4)

2 区出土木製品



SB01 P3 柱根 (分析 5)



SB02 P2 柱根 (分析 6)



SB02 P9 柱根 (分析 15)



SB02 P11 柱根 (分析 8)



SB03 P1 柱根 (分析 9)





SA13 P4 柱根 (分析 16)



SA14 P1 柱根 (分析 17)



(分析 10)



SX01 No. 4 部材 SX01 No. 26 部材 (分析 13)



2 号堀 No. 4 部材 (分析 7)





SE04 部材 (分析 18)



抄 録

19 🛒								
ふりがな 書名	ししどじょうあと 宍戸城跡							
副書名	市道改良工事に伴う発掘調査報告書							
編著著名	大越直樹 塩澤佑介 谷 旬 鈴木 徹							
編集機関	有限会社勾玉工房Mogi							
所在地	〒286-0211 千葉県富里市久能238-100 12:0476-92-0658							
発行年月日	西暦2011年(平成23年)6月15日							
ふりがな 所収遺跡名	^{ふりがな} 所在地	コード		.11.444.	古奴	調査期間	==+	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経	调宜期	調査面積	神 鱼床囚
ししどじょうあと 宍戸城跡	いばらぎけんかさまし 茨城県笠間市 はしづめ71ばんち2ほか 橋爪71番地2他	08321	042	36° 20′ 23″	140° 17′ 19″	2010. 10. 18	4, 657 m²	笠間市橋爪・ 平町地内に おける市道 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
宍戸城跡	城館跡	中・近世		掘立柱建物跡 井戸跡 土坑 ピット 池 堀 溝		中世末〜近世初頭 陶磁器 瓦質土器 かわらけ 漆椀 木製品(柱材) 近世以降 陶磁器 一銭銅貨		武に整在用性穴掘跡る下城ら検い屋い面角、あ穿柱存整らとるさ。敷でが材規るっ建在地は考堀れのを立が。かり出る。

宍 戸 城 跡

平成 23 年 6 月 15 日

発 行 笠間市教育委員会 〒 309-1698 茨城県笠間市石井 717 Ta 0296 (72) 1111

編 集 有限会社勾玉工房 Mogi 〒 286-0203 千葉県富里市久能 238-100 ℡ 0476 (92) 0658

印 刷 株式会社エイティー 〒 289-1115 千葉県八街市八街ほ 211 Tm 043 (444) 2024

